福 岡 市

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ

博 多

— 高速鉄道関係調査(1) —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集

1 9 8 4

福 岡 市 教 育 委 員 会

福 岡 市

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ

博　多

— 高速鉄道関係調査(1) —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集

1 9 8 4

福 岡 市 教 育 委 員 会

巻頭写真1　出入口2・3区　1号土坑出土遺物(1)

1．青　磁　類

2．青白磁、天目

巻頭写真2　出入口2・3区　1号土坑出土遺物(2)

3．陶　器　類

4．白磁壺・陶器類

序　　文

福岡市教育委員会では、交通局の委託を受け昭和51年以来地下鉄路線内の埋蔵文化財の調査と出土資料の整理に携わり現在もつづけています。

本書は昭和52年12月から調査を実施した博多関係の遺跡について報告するものです。

旧博多部は中世における大陸文化流入の門戸として栄えたところとして知られ、夥しい輸入陶磁器の出土量がそれを裏付けるものとして注目されています。

この報告書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、研究資料としても活用いただければ幸いです。

発掘調査から資料整理に至るまで、交通局をはじめ指導委員の先生方など多くの人々の御協力に対し深甚の敬意を表するものであります。

昭和59年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　西津　茂美

例　　言

1．本報告書は福岡市交通局（旧高速鉄道建設局）が福岡市教育委員会に委託した、高速鉄道（地下鉄）建設地内における発掘調査の報告書であり、博多遺跡群内で行なった発掘調査の第１集にあたる。本書を「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ」とする。

2．本書に用いた全体遺構配置図は、福岡市教育委員会が、東洋航空株式会社に委託した写真測量の成果をもとに再編集したものであって、座標は第Ⅱ系を用いている。

3．本書の遺物整理にあたって各方面の多くの方々の御指導があった。一々氏名を掲げる余裕はないが、心から感謝の意を表したい。

4．本報告書の遺物実測図中に示したグラフは、土師皿類の計測値であり、土師皿の良好な出土状態をもった遺構を主に掲げた。実線が糸切底、点線がヘラ切り底を示す。また、横軸が底径・口径を半径で示し、縦軸が器高を示す。銅銭の縮尺は、すべて⅔である。

5．発掘調査は、A・B区を折尾学、山崎龍雄、浜石哲也、池崎譲二、出入口２・３区を飛高憲雄、折尾、力武卓治、池崎が担当した。

6．本書の執筆は、折尾、池崎、小畑弘己、森本朝子が行ない、分担は、本文目次に記す。

7．遺構の実測は、A・B区を浜石、山崎、池崎、長沼孝、富田逸郎、村野隆男、杉野悦郎、坂本章一、柴田喜瑞、青木郁夫、嶋田誠二、松本美枝子が行ない、出入口２・３を折尾、飛高、力武、池崎、日野孝司が行なった。それ以外は、航空写真測量の成果から、小畑、木村幾多郎、池崎が起こしたものである。

8．遺物の実測は、森本、木村、小畑、池崎があたり、遺構、遺物のトレースは、溝口美津代、小畑、木村、池崎があたった。

9．写真撮影は、A・B区現場関係を折尾、浜石、山崎、池崎、白石公高、宮島成昭が、出入口２・３現場関係を力武、白石があたり、遺物写真は全て白石が担当した。

10．博多遺跡群地形図の作成には、田崎博之の協力があった。

11．英文要旨、中文要旨の訳文は、それぞれ林田憲三、竹下ひろみが行なった。

12．遺物数量表作成、復元をはじめとする遺物整理は、以下の方々によるところが大である。木村厚子、溝口美津代、里村寿子、山田由美子、江藤百合子、有島美江、伊藤裕子、楢崎多佳子、田尻寿麻子、今村淳子、田子森牧子、豆田陽子、下尾美成子、撫養久美子、近藤聡子、秋山順子、的場由利子、能美須賀子、竹下ひろみ、佐々木智子、西原年枝。

13．本書の編集は、折尾、力武、浜石、山崎と協議の上、森本、木村、白石の全面的な協力を得て、小畑と池崎が行なった。また、付編の博多出土貿易陶磁器分類表は、有島の助力を得て、森本が作成、編集した。題字は故筑紫豊先生の揮毫による。

本　文　目　次

Ⅰ．高速鉄道関係埋蔵文化財調査概要……1
第１章　調査に至る経緯……折尾　学……3
第２章　組織の構成……折尾……4
第３章　路線内遺跡の調査概要　２号線関係調査区……小畑弘己・池崎譲二……6
Ⅱ．博多　一地下鉄路線内の調査（１）……9
第１章　遺跡の自然環境と歴史的環境……11
１．遺跡の立地と自然環境……池崎……11
２．遺跡の歴史的環境と調査研究……池崎……14
第２章　本体部Ａ・Ｂ区の調査……18
１．調査の経過……池崎……18
２．調査の概要……池崎……22
１）遺構と遺構出土の遺物……池崎……22
２）遺構外出土の遺物……森本朝子……96
３）甕棺墓……小畑……108
３．小結……池崎……115
第３章　祇園駅出入口２・３の調査……117
１．調査の経過……池崎……117
２．調査の概要……118
１）遺構と遺構出土の遺物……池崎……118
２）遺構外出土の遺物……森本……154
３）甕棺墓……小畑……161
３．小結……森本・池崎……165
第４章　結語……池崎……167
英文要旨……168
中文要旨……170

付編（付冊）　博多出土貿易陶磁分類表

挿　図　目　次

Fig.　1　高速鉄道路線内遺跡地図（縮尺１／75,000）……2
Fig.　2　筥崎宮楼門……6
Fig.　3　地下鉄路線と筥崎・馬出遺跡（縮尺約1／3,000）……7
Fig.　4　馬出西工区調査風景……8
Fig.　5　馬出西工区木棺墓出土の青磁碗（縮尺１／３）……8
Fig.　6　博多周辺航空写真……10
Fig.　7　博多古図……11
Fig.　8　博多遺跡群付近ボーリング図……12
Fig.　9　博多遺跡群地形図（縮尺1／7,500）……折込み
Fig.　10　博多港沖引揚げの天目碗（縮尺１／３）……16
Fig.　11　東長寺付近古絵図……18
Fig.　12　博多遺跡群地下鉄１号線関係調査区全体図（縮尺1／400）……折込み
Fig.　13　Ａ・Ｂ区グリッド設定図（縮尺1／200）……19
Fig.　14　Ａ・Ｂ区土層断面図（縮尺１／40）……折込み
Fig.　15　Ａ－２区調査風景……21
Fig.　16　１・３号土坑実測図（縮尺１／30）……23
Fig.　17　２号土坑実測図（縮尺１／30）……24
Fig.　18　２・３号土坑出土遺物（縮尺１／３）……25
Fig.　19　４号土坑実測図（縮尺１／30）……27
Fig.　20　４・７号土坑出土遺物（縮尺１／３）……28
Fig.　21　８・10・13・26号土坑実測図（縮尺１／30、１／60）……29
Fig.　22　５号土坑出土遺物（縮尺１／３）……30
Fig.　23　８・10号土坑出土遺物（縮尺１／３）……31
Fig.　24　12号土坑出土遺物（縮尺１／３）……32
Fig.　25　14・15・18・19号土坑実測図（縮尺１／30）……34
Fig.　26　14号土坑出土遺物（縮尺１／３）……36
Fig.　27　15号土坑出土遺物（縮尺１／３）……37
Fig.　28　16号土坑出土遺物（縮尺１／３）……38
Fig.　29　17・18号土坑出土遺物（縮尺１／３）……39
Fig.　30　19号土坑出土遺物（縮尺１／３）……40

Fig. 31　20・21・23・25・27号土坑実測図（縮尺1／30、1／60）……42
Fig. 32　20号土坑出土遺物（縮尺1／3）……43
Fig. 33　21号土坑出土遺物（1）（縮尺1／3）……44
Fig. 34　21号土坑出土遺物（2）（縮尺1／3、1／6）……45
Fig. 35　22・23・25号土坑出土遺物（縮尺1／3）……47
Fig. 36　27号土坑出土遺物（縮尺1／3）……48
Fig. 37　29・30・31号土坑実測図（縮尺1／30）……50
Fig. 38　29号土坑出土遺物（縮尺1／3）……51
Fig. 39　31号土坑出土遺物（縮尺1／3）……52
Fig. 40　32・34号土坑実測図（縮尺1／30）……53
Fig. 41　32号土坑出土遺物（1）（縮尺1／3）……54
Fig. 42　32号土坑出土遺物（2）（縮尺1／3）……55
Fig. 43　32号土坑出土遺物（3）（縮尺1／3）……56
Fig. 44　34号土坑出土遺物（縮尺1／3）……58
Fig. 45　35・36・41・63号土坑実測図（縮尺1／30）……59
Fig. 46　41・42・43・47号土坑出土遺物（縮尺1／3）……60
Fig. 47　44・48号土坑出土遺物（縮尺1／3）と45号土坑出土土師皿類計測グラフ…61
Fig. 48　52号土坑出土遺物（縮尺2／3）と59号土坑出土土師皿類計測グラフ……62
Fig. 49　64・65・73・74号土坑出土遺物（縮尺1／3）……65
Fig. 50　66・67・74号土坑実測図（縮尺1／30）……66
Fig. 51　76・79号土坑出土遺物（縮尺1／3）と78号土坑出土土師皿類計測グラフ…67
Fig. 52　78・79・80号土坑実測図（縮尺1／30）……68
Fig. 53　80号土坑出土遺物（縮尺1／3）……69
Fig. 54　81・82号土坑実測図（縮尺1／60、1／30）と82・84号土坑出土遺物
（縮尺1／3）……70
Fig. 55　81号土坑出土遺物（縮尺1／3）と83号土坑出土土師皿類計測表……71
Fig. 56　85・86・89・93号土坑実測図（縮尺1／30）……72
Fig. 57　94・95号土坑実測図（縮尺1／30）と95号土坑出土遺物（縮尺1／3）……73
Fig. 58　A－1－Ⅲ区検出の礎石列実測図（縮尺1／60）……76
Fig. 59　1号溝出土遺物（1）（縮尺1／3）……77
Fig. 60　1号溝出土遺物（2）（縮尺1／3）……78
Fig. 61　2号溝（5号溝）土層断面図（縮尺1／40）……79

Fig. 62　2号溝（5号溝）出土遺物（1）（縮尺1／3）……80
Fig. 63　2号溝（5号溝）出土遺物（2）（縮尺1／3）……81
Fig. 64　2号溝（5号溝）出土遺物（3）（縮尺1／3）……82
Fig. 65　2号溝（5号溝）出土遺物（4）（縮尺1／3）……83
Fig. 66　2号溝（5号溝）出土遺物（5）（縮尺1／3）……84
Fig. 67　2号溝（5号溝）出土遺物（6）（縮尺1／3・2／3）……85
Fig. 68　3号溝（谷状落ち込み）実測図（縮尺1／40）……88
Fig. 69　3号溝出土遺物（1）（縮尺1／3）……89
Fig. 70　3号溝出土遺物（2）（縮尺1／3）……90
Fig. 71　3号溝出土遺物（3）（縮尺1／3）……91
Fig. 72　3号溝出土遺物（4）（縮尺1／3）……92
Fig. 73　3号溝出土遺物（5）（縮尺1／3、2／3）……93
Fig. 74　6号溝出土遺物（縮尺1／3）……95
Fig. 75　A区遺構外出土遺物（1）（縮尺1／3）……97
Fig. 76　A区遺構外出土遺物（2）（縮尺1／3）……98
Fig. 77　A区遺構外出土遺物（3）（縮尺1／3）……99
Fig. 78　A区遺構外出土遺物（4）（縮尺1／3）……100
Fig. 79　A区遺構外出土遺物（5）（縮尺1／3、2／3）……101
Fig. 80　B区遺構外出土遺物（1）（縮尺1／3、1／6）……102
Fig. 81　B区遺構外出土遺物（2）（縮尺1／3）……103
Fig. 82　B区遺構外出土遺物（3）（縮尺1／3）……104
Fig. 83　B区遺構外出土遺物（4）（縮尺1／3）……105
Fig. 84　B区遺構外出土遺物（5）（縮尺1／3、2／3）……106
Fig. 85　甕棺墓出土状況実測図（縮尺1／30）……110
Fig. 86　甕棺実測図（1）（縮尺1／12）……111
Fig. 87　甕棺実測図（2）（縮尺1／12）……112
Fig. 88　甕棺実測図（3）（縮尺1／6）……113
Fig. 89　甕棺実測図（4）（縮尺1／6）……114
Fig. 90　1・3号土坑実測図（縮尺1／60）……118
Fig. 91　祇園駅舎出入口2・3調査区遺構全体図（1／100）……折込み
Fig. 92　1号土坑（井戸）出土遺物（1）（縮尺1／3）……119
Fig. 93　1号土坑（井戸）出土遺物（2）（縮尺1／3）……120

Fig.. 94　1号土坑（井戸）出土遺物（3）（縮尺1／3）…… 121
Fig. 95　1号土坑（井戸）出土遺物（4）（縮尺1／3）…… 122
Fig. 96　1号土坑（井戸）出土遺物（5）（縮尺1／3）…… 123
Fig. 97　1号土坑（井戸）出土遺物（6）（縮尺1／3）…… 124
Fig. 98　1号土坑（井戸）出土遺物（7）（縮尺1／3）…… 125
Fig. 99　1号土坑（井戸）出土遺物（8）（縮尺1／3）…… 126
Fig. 100　1号土坑（井戸）出土遺物（9）（縮尺1／3）…… 127
Fig. 101　1号土坑（井戸）出土遺物（10）（縮尺1／3）…… 128
Fig. 102　1号土坑（井戸）出土遺物（11）（縮尺1／3）…… 129
Fig. 103　1号土坑（井戸）出土遺物（12）（縮尺1／3）…… 130
Fig. 104　1号土坑（井戸）出土遺物（13）（縮尺1／6）…… 131
Fig. 105　1号土坑（井戸）出土遺物（14）（縮尺1／6）…… 132
Fig. 106　1号土坑（井戸）出土遺物（15）（縮尺1／6）…… 133
Fig. 107　2号土坑（1号溝）出土遺物（縮尺1／3）…… 136
Fig. 108　3号土坑出土遺物（縮尺1／3）…… 137
Fig. 109　7号土坑実測図（縮尺1／30）と出土遺物（縮尺1／3）…… 138
Fig. 110　10・15・16・21・23・27・30・32号土坑出土遺物（縮尺1／3）…… 139
Fig. 111　35号土坑（井戸）実測図（縮尺1／60）と出土遺物（縮尺1／3）…… 140
Fig. 112　41・43・44号土坑実測図（縮尺1／30、1／60）…… 141
Fig. 113　36・41号土坑出土遺物（縮尺1／3）…… 142
Fig. 114　43・44号土坑出土遺物（縮尺1／3）…… 143
Fig. 115　45・53・67号土坑実測図（縮尺1／30、1／60）…… 145
Fig. 116　45号土坑出土遺物（縮尺1／3）…… 146
Fig. 117　48・50・53号土坑出土遺物（縮尺1／3）…… 147
Fig. 118　54・55・56・61・64・67号土坑（井戸）実測図（縮尺1／60）…… 150
Fig. 119　54・56・63・64号土坑出土遺物（縮尺1／3）…… 151
Fig. 120　67・71号土坑出土遺物（縮尺1／3）…… 152
Fig. 121　遺構外出土遺物（1）（縮尺1／3）…… 155
Fig. 122　遺構外出土遺物（2）（縮尺1／3）…… 156
Fig. 123　遺構外出土遺物（3）（縮尺1／3）…… 157
Fig. 124　遺構外出土遺物（4）（縮尺1／3）…… 158
Fig. 125　遺構外出土遺物（5）（縮尺1／3）…… 159

Fig. 126　甕棺墓出土状況実測図（縮尺１／30）…… 162
Fig. 127　甕棺実測図（１）（縮尺１／12）…… 163
Fig. 128　甕棺実測図（２）（縮尺１／６）…… 164
付　図　Ａ・Ｂ区遺構全体図（縮尺1／100）

表　目　次

Tab. 1　地下鉄路線内遺跡調査一覧表…… 3
2　博多遺跡群調査一覧表……17
3　地下鉄祇園駅２・３号出入口　１号土坑（井戸）出土遺物観察表…… 134
付表　Ａ・Ｂ区および２・３号出入口の出土遺物遺構別数量表

写真図版目次

巻頭写真１　出入口２・３区　１号土坑（井戸）出土遺物（１）
２　出入口２・３区　１号土坑（井戸）出土遺物（２）
PL. 1　博多眺望　博多駅上空より
PL. 2　(1) 調査区遠景　(2) 路線内試掘調査風景
PL. 3　(1) 中間杭試掘調査風景（店屋町工区）　(2) Ａ－２区調査風景
PL. 4　(1) Ｂ－Ⅰ区調査風景　(2) Ｂ－Ⅲ区調査風景
PL. 5　(1) Ａ－１区北側土層断面　(2) Ａ－Ⅰ区東側土層断面（３号溝落込み部）
PL. 6　(1) Ａ－１区遺構全景（東より）　(2) Ａ－２区遺構全景（東より）
PL. 7　(1) Ｂ－Ⅱ・Ⅲ区土層断面（東より）　(2) Ｂ－Ⅱ区上部遺構全景（南より）
PL. 8　(1) Ｂ－Ⅱ・Ⅲ区下部遺構全景（南より）　(2) Ｂ－Ⅲ区下部遺構（東より）
PL. 9　(1) ２・３号土坑上部石組（東より）　(2) ２・３号土坑下部遺構（北東より）
PL. 10　(1) ２号土坑遺物出土状態　(2) 21号土坑（火葬墓）遺物出土状態（西より）
PL. 11　(1) 22号土坑（火葬墓）土層断面　(2) 23号土坑（井戸掘方・北より）
PL. 12　(1) 25号土坑遺物出土状態　(2) 27号土坑遺物出土状態
PL. 13　(1) 29号土坑上部石組　(2) 30号土坑遺物出土状態
PL. 14　(1) 31号土坑遺物出土状態　(2) 32・34号土坑、４号溝（西より）

PL．15　(1)　32・34号土坑（北西より）　(2)　32号土坑遺物出土状態
PL．16　(1)　76・77号土坑（南東より）　(2)　76号土坑
PL．17　(1)　77号土坑　(2)　78号土坑遺物出土状態
PL．18　(1)　84号土坑（井戸）遺物出土状態　(2)　84号土坑（井戸）主体部
PL．19　(1)　82号土坑　(2)　86号土坑
PL．20　(1)　A-2区2号溝遺物出土状態(東より)　(2)　A-2区1･2号溝(完掘後･東より)
PL．21　(1)　A-2区2号溝上面遺物出土状態(北西より)　(2)　A-2区2号溝遺物出土状態(北西より)
PL．22　(1)　B区2号溝（5号溝）調査風景（西より）　(2)　2号溝（5号溝）調査風景
PL．23　(1)　2号溝（5号溝）全景（東より）　(2)　2号溝（5号溝）全景（西より）
PL．24　(1)　2号溝（5号溝）土層断面1と上部遺物出土状態
　　(2)　2号溝（5号溝）土層断面1（下部掘下げ後）
PL．25　(1)　2号溝（5号溝）土層断面2と上部遺物出土状態
　　(2)　2号溝（5号溝）土層断面2（下部掘下げ後）
PL．26　(1)　2号溝（5号溝）遺物出土状態　(2)　2号溝（5号溝）遺物出土状態
　　(3)　3号溝遺物出土状態　(4)　3号溝遺物出土状態　(5)　3号溝遺物出土状態
　　(6)　3号溝牛歯（上顎骨L．1）出土状態
PL．27　(1)　4号溝（南より）　(2)　A－1区礎石列（東より）
PL．28　(1)　2号甕棺墓と6号溝（北東より）　(2)　1号甕棺墓
PL．29　(1)　8号甕棺墓　(2)　9号甕棺墓
PL．30　(1)　10・11号甕棺墓　(2)　11号甕棺墓　(3)　12・13号甕棺墓
PL．31　(1)　出入口2・3区夜間調査風景　(2)　出入口2・3区夜間調査風景
PL．32　(1)　出入口2・3区35号土坑（石組井戸）
　　(2)　出入口2・3区35号土坑（石組井戸内面）
PL．33　A区　遺構出土遺物
PL．34　A・B区　遺構出土遺物
PL．35　A・B区　遺構出土遺物
PL．36　A・B区　遺構及び遺構外出土遺物
PL．37　出入口2・3区　遺構出土遺物
PL．38　出入口2・3区　遺構外出土遺物
PL．39　出入口2・3区　1号土坑（井戸）出土遺物　(1)
PL．40　出入口2・3区　1号土坑（井戸）出土遺物　(2)
PL．41　出入口2・3区　1号土坑（井戸）出土遺物　(3)

PL．42　出入口２・３区　１号土坑（井戸）出土遺物 (4)
PL．43　出入口２・３区　１号土坑（井戸）出土遺物 (5)
PL．44　出入口２・３区　１号土坑（井戸）出土遺物 (6)
PL．45　A・B区　墨書集成 (1)
PL．46　A・B区　墨書集成 (2)
PL．47　出入口２・３区　墨書集成
PL．48　A・B区出土甕棺
PL．49　出入口２・３区出土甕棺

Ⅰ．高速鉄道関係埋蔵文化財調査概要

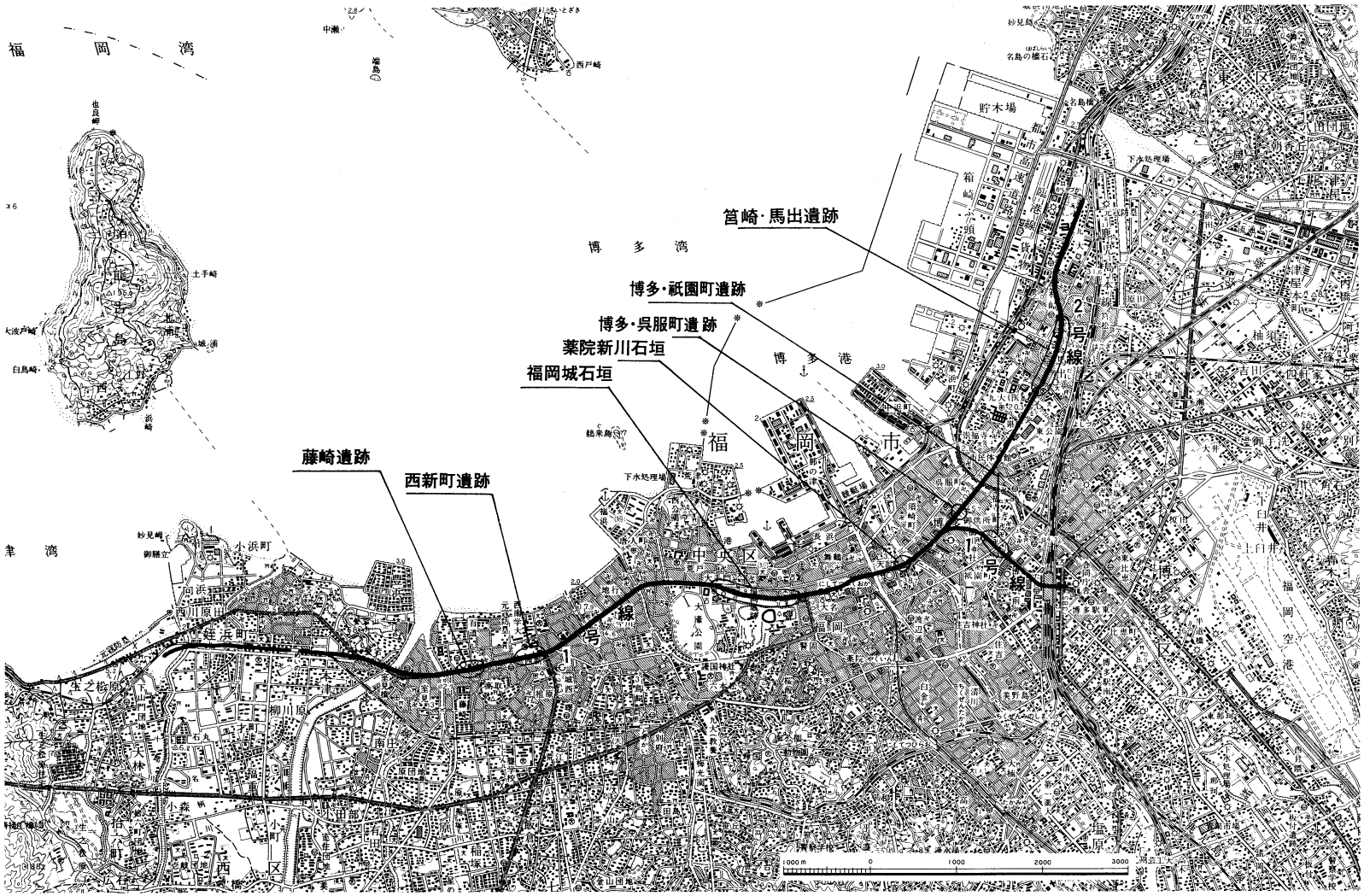


Fig. 1　高速鉄道路線内遺跡地図（1/75,000）　原図：国土地理院５万分の１地形図「福岡」

第１章　調査に至る経過

昭和58（1983）年３月22日、福岡市高速鉄道１号線は開通した。福岡市にとって記念すべき１日である事を思い、又関係各位の御苦労に対し労いの拍手を、まず贈りたいと思う。

本路線内遺跡の調査を昭和51年８月に始めてこの方７年有余の歳月が流れた。福岡市の海岸線は、古来人々の海の彼方に対する想いをつのらせ、実際その想いを現実のものにして来た。古くは邪馬台国論争の象徴的存在である「漢委奴国王」の金印、西の都「大宰府」の迎賓館であった大宰府鴻臚館、そして中世の港町であった博多袖ノ湊等々は、大多数の市民に親しまれる歴史事象である。

このような意味において、地下鉄が海岸線に沿い走り抜ける事は文化財サイドにとっては恐怖でもあり、又千載一遇の好機でもあった。隧道建設担当の交通局、文化財担当の教育委員会双方が自己の立場を主張し協議する事、数十回、実際調査にとりかかるまで２年有余の月日が流れ、安堵の境地に至ったのは昭和51（1976）年６月であった。そして同年８月調査はゆっくりではあるが確実な足取りで始動したのである。昭和58年12月には、地下鉄２号線箱崎、馬出工区の調査が完了し、想定した路線内遺跡調査の99％を消化し、残すところ祇園駅Ｐ２出入口のみとなった。調査した遺跡の調査工程は下表を参照されたい。下表に記述できない調査始動までの道のりは次のとおりである。

昭和49、50年、調査について協議。昭和51年５月、工事で福岡城石垣発見。昭和51年６月、路線内の文化財の調査について協議成立。昭和51年８月、西新町遺跡の調査開始。

Table　1.　地下鉄路線内遺跡調査一覧表

遺跡名＼項		所在地	時代	性格	調査期間	調査面積	労働日数（）は夜勤日数	備考
藤崎遺跡		西区藤崎西区役所前	弥生時代	共同墓地	昭和52年４月～同53年６月	4,925㎡	240 (96)	
（防墨工区）		西区防墨前	弥生時代～古墳時代	生活址群	昭和52年12月～同53年４月	920㎡	40 (12)	藤崎と西新町に入る
西新町遺跡		西区修猷館高校前	〃	共同墓地・生活址群	昭和51年８月～同53年４月	6,230㎡	234 (37)	
福岡城内堀・石垣		中央区荒戸・大手門・平和台・赤坂	江戸時代	堀・石垣	昭和51年12月～同52年９月	14,900㎡	205 (10)	
福岡城薬院新川石垣		中央区天神（旧県庁前）	〃	武家の町と博多町人街とを分けた石垣	昭和53年３月～同53年６月	500㎡	18 (2)	
博多遺跡群	呉服町工区	博多区・土居町・呉服町・蓮池（旧電車通り）	鎌倉～室町時代	中世の港町	昭和53年11月～同54年５月	200㎡	54 (1)	
	店屋町工区	博多区御供所町東長寺前	〃	中世の博多の街	昭和52年12月～同56年12月	1,832㎡	216 (57)	
	祇園町工区	博多区馬場新町	〃	〃	昭和52年２月～同54年12月	4,500㎡	207 (94)	
	博多駅前工区	博多区博多駅前	鎌倉～室町時代	〃	昭和54年12月～同55年８月	4,500㎡	122 (10)	
博多駅遺跡		博多区博多駅南	弥生時代～古墳時代	包蔵地	昭和55年12月～同56年３月	約 4,000㎡	30	河川のハンラン原
筥崎宮周辺遺跡		東区筥崎宮参道・馬出	鎌倉～室町時代	筥崎宮・門前街	昭和57年４月～同58年12月	約 5,000㎡		
					計	47,534㎡	1,366 (319)	

第２章　組織の構成

調査指導委員

考　古　学　鏡山　　猛（前九州歴史資料館長）　森　貞次郎（九州産業大学教授）
杉原　荘介（前明治大学教授・故人）　乙益　重隆（国学院大学教授）
岡崎　　敬（九州大学教授）　賀川　光夫（別府大学教授）
横山　浩一（九州大学教授）　大塚　初重（明治大学教授）
藤田　　等（静岡大学教授）　白木原和美（熊本大学教授）
田中　　琢（奈良国立埋蔵文化財センター長）
西谷　　正（九州大学助教授）　三島　　格（前福岡市歴史資料館長）
藤井　　功（福岡県教育庁文化課長）

日　本　史　筑紫　　豊（前福岡県文化財保護専門委員・故人）
三宅安太郎（前福岡県文化財保護専門委員・故人）
田村　圓澄（九州歴史資料館長・前熊本大学教授）
川添　昭二（九州大学教授）

人　類　学　永井　昌文（九州大学教授）

岩　石　学　種子田定勝（前九州大学教授）

水工土木学　山内　豊聡（九州大学教授）

地　質　学　浦田　英夫（九州大学教授）

建　築　学　土田　充義（九州大学助教授）

歴史地理学　日野　尚志（佐賀大学助教授）

福岡市交通局 ― 調査委託

交通事業管理者　大石　秀雄

理　　事　岩佐　辰生　松原　弘和

総　務　部　長　石橋　秀敏　総務課長　岡部　隆浩
経理課長　行友　雅浩

工　事　部　長　米澤　福徳　工事課長　川原　隆幸
第１工事事務所長　川口　広恭
第２工事事務所長　田中　和敏

技　術　部　長　理事兼務　設計課長　表　　友広
計画課長　静　　純一　計画第１係長　吉田　豊治
中村　俊喜　　樗木　正明

教育委員会 ― 調査主体

教　育　長　西津茂美

文化部長　中田　宏　　**文化課長**　生田征生

埋蔵文化財第１係長　柳田純孝

事務担当　岡島洋一・古藤国生

調査担当　折尾　学・塩屋勝利・浜石哲也・山崎龍雄・池崎譲二・小畑弘己

調査協力　山崎純男・井沢洋一・力武卓治・飛高憲雄

調査協力団体

藤崎遺跡　佐藤工業（株）福岡支店　取締役支店長　梅木正二

西新町遺跡　青木建設（株）福岡支店　取締役支店長　前田三男

戸田建設（株）九州支店　支店長　粟飯原延胤

福岡城石垣　清水建設（株）九州支店　取締役支店長　森井哲也

鴻池組（株）　福岡支店　五十嵐章

日本国土開発（株）九州支店　支店長　伊藤幸郎

大成建設（株）福岡支店　取締役支店長　里見泰男

梅林建設（株）福岡支店　取締役支店長　平岡義孝

薬院新川石垣　間組（株）福岡支店　常務取締役支店長　西村重信

呉服町遺跡　大日本土木（株）九州支店　取締役支店長　越山萬作

祇園町遺跡　熊谷組（株）福岡支店　常務取締役支店長　勝元　元

三井建設（株）福岡支店　取締役支店長　龍岡一巳

博多駅前周辺　竹中土木（株）九州支店　支店長　長野和郎

博多駅東周辺　日産建設（株）福岡支店　支店長　今津孝二

筥崎宮周辺　西松建設（株）九州支店　支店長　甲斐栄一

（株）地崎工業福岡支店　支店長　大和田国彦

大成・梅林共同企業体代表者　大成建設（株）九州支店長　横内利治

その他の協力者

交通局関係　末藤洋（前理事）・原一夫（前工事部長）・本多修一（前技術部長）野田養一（前総務課長）・平山幸生（前工事課長）・永松正典（前第１工事事務所所長）・津高正高（第２工事事務所所長）

教育委員会関係　古村澄一・戸田成一（以上前教育長）・清水義彦・井上剛紀・甲能貞行（以上前文化課長）・三宅安吉（前埋蔵文化財第１係長）

第３章　路線内遺跡の調査概要

地下鉄路線内における遺跡の調査は、昭和59年４月に予定されている１号線、祇園駅舎Ｐ２出入口の調査を以て完了することになる。それまでに手がけた遺跡は、Fig.１及びTab.1に記したとおりであるが、藤崎遺跡、西新町遺跡、福岡城址については、それぞれ下記の報告書において既に報告している。

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ　『藤崎遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集　1981　（藤崎駅舎本体部の調査）

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ　『西新町遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集　1982　（西新工区隧道一般部の調査）

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ　『福岡城址－内堀外壁石積の調査－』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集　1983　（福岡城址堀石垣および薬院新川石垣の調査）

『藤崎遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集　1982　（藤崎駅舎出入口部の調査）

また、博多については、本報告において触れるので重複を避け、ここでは、２号線筥崎宮、馬出（まいだし）周辺遺跡に関して、その概要を紹介することにしたい。

筥崎宮周辺における遺跡については、一帯が既に密集した市街地となっており、分布調査等一般調査でその実体を知ることは困難であり、福岡市教育委員会が昭和56（1981）年度発行した「福岡市文化財分布地図（東部Ⅰ）」においては、わずかに元寇防塁の推定線のみが記載されているにすぎない。しかしながら、筥崎宮（Fig.２）が、博多と同様に対外貿易の重要な拠点の一つであったことは明確で、『筑前国続風土記　巻之十八』によれば、茅元儀によって記された明代の兵法書『武備志、二百三十一・日本考』にこの近辺に関して、「……法哥熬機と名付く。すなはち廟先なり。一街あり。大唐街と名付く。唐人かしこに留りて相傳れり、今盡く倭となる」とあり、また筥崎宮宝物館に、境内から出土したと伝えられる中国製白磁碗が収蔵されていることなどからも、遺跡の存在することは当然のことと思われた。

Fig. 2　筥崎宮楼門

福岡市教育委員会では、遺跡の範囲を工事発注後の側壁

柱布掘の立会調査によって決定し、遺跡の存在が確認された時点で、本調査へと移行することにした。なお、千代町～九大病院間は、県庁舎新築前の試掘調査で遺跡の存在が認められていないことや、筥崎宮参道以北は路線が江戸時代の汀線部を通過するため遺跡の所在が考えられないことから、布掘の立会は、馬出東、馬出西、筥崎宮参道の三工区約900ｍについて行なった。

筥崎宮参道工区の立会は、昭和57（1982）年４月から９月まで断続的に行なった。この工区では、元寇防塁の推定線が路線内を斜断しており、その存在も当然考えられた。しかし、路線全区に立会したにも拘らず、石塊の存在すら認められなかった。この事実は、元寇防塁推定線の再検討を要するのか、それとも、後世の石材抜取によるものか、再考を必要とする。この工区では、地表下約50cmで黄白色地山砂層に達し、また、１ｍ強の深さで湧水が見られるなど、遺物包含層は、全く見られなかった。

馬出東・西工区は、昭和58（1983）年３月から６月にかけて立会調査を行なった。この工区は、古砂丘上を南北に走る大学通りを境に、東西の工区に分かれる。馬出西工区では、現馬出電報電話局付近に、「お綱池」と呼ばれる池があって、この池の西方は東公園に続く松原であったと言われている。立会調査の結果でも、この池の東側から遺物が出土しはじめ、

（縮尺＝約1/3000）

Fig.　3　　地下鉄路線と筥崎・馬出遺跡

Fig. 4　馬出西工区調査風景

遺跡の西端が、ここに求められることが明白になった。東工区においては、西鉄バス路線の南側で包含層がはじめて現れ、中世の遺物包含層が、南側に延びることが明らかにされた。こうして、筥崎・馬出遺跡範囲の一部は、Fig. 3のように推定された。

馬出東・西工区における遺跡推定地内の発掘調査（Fig. 4）は、同年7月4日から開始し、12月18日をもって完了した。遺跡北側では、バス路線の南に、地下鉄路線を斜断する現町筋平行の室町期の溝3本が検出され、この溝を境に、海側では遺構、遺物が見られず、この溝が中世集落の西端を区画したものと思われる。また、この溝は、字図に残された集落部と畑との字名の変換線と驚く程一致している。大学通りを挟んだ両側では、道路に面して間口3間から3間半程の細長い掘立柱建物が並び、何回もの建替えが看取された。これらの柱穴の中には、礎石を置くものも見られた。建物の年代は、15・16世紀頃に位置づけられ、おそらく道路沿いに発達した商家であると思われる。遺構には、これ以外多くの木桶組井戸が検出されており、水位が浅く、桶の遺存状態は良好であった。また、13世紀頃の木棺墓も点々と有り、うち一基には、同安窯系の櫛描文青磁碗（Fig. 5）が副葬されていた。出土遺物は、11世紀後半から16世紀にかけてのものが、殆んどを占め、博多と同様の中世集落址であるが、その密度は比較的低く、調査区は遺跡の西端にあたっていると思われ、その中心部はやはり筥崎宮の近辺にあると考えられる。

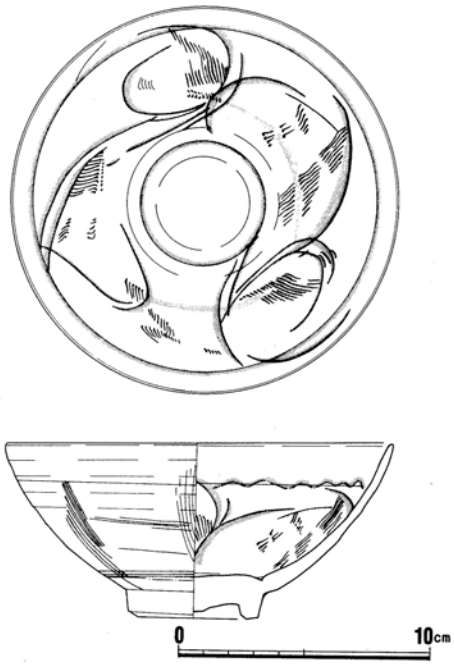


Fig. 5　馬出西工区　木棺墓出土青磁碗

Ⅱ. 博　　多

— 地下鉄路線内の調査(1) —

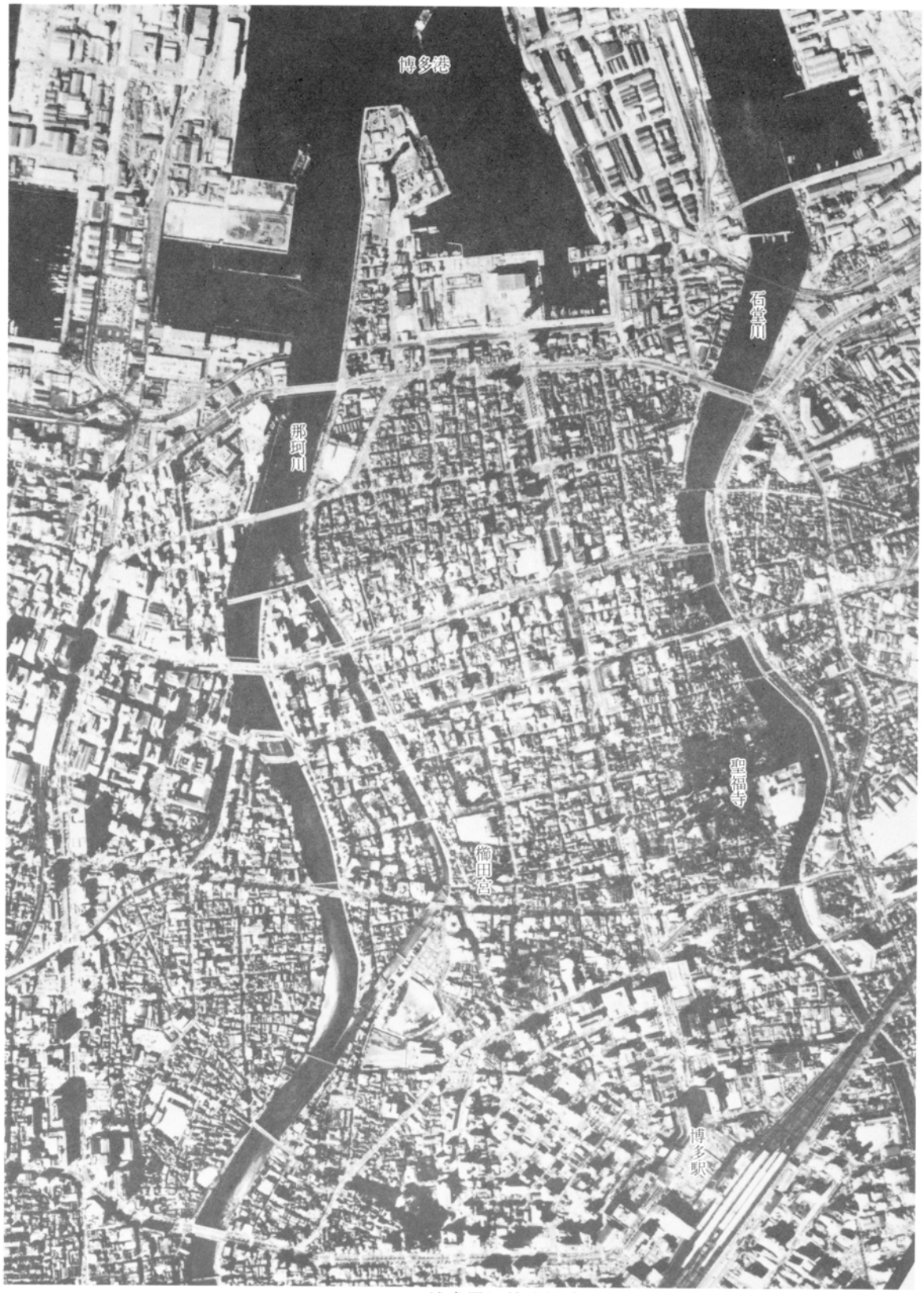


Fig. 6　　博多周辺航空写真

第１章　遺跡の自然環境と歴史的環境

１．遺跡の立地と自然環境

まず初めに、本書で一般的に用いている「博多」について、その地域を明確に規定しておく必要があろう。「博多」の認識のされ方には、それぞれの時代の実態に即して、①博多湾をとりまく地域という広義の理解と、②大宰府鴻臚館を控えた現福岡城近辺という古代における認識と、③黒田入城時以来の城下町「福岡」に対する商業都市「博多」(中世における「博多」が、基礎になっている）と、更には、④現在の福岡市行政区における「博多区」など様々なものがある。本書で通例用いる「博多」は、③の中近世における「博多」であり、福岡市教育委員会が、文化財保護の立場からその範囲を推定したところの「博多遺跡群」(Fig. 9) を表わすものと理解していただきたい。

福岡市は、西南部を背振山（1055ｍ）を主峰とする背振山地によって佐賀県と区画され、東部を三郡山地の支塊、立花山塊によって、東南部を同じく四王寺山塊によって画されており、北面を博多湾を経て玄海灘に面している。福岡市域の大半は、これら東部および南部の上部白

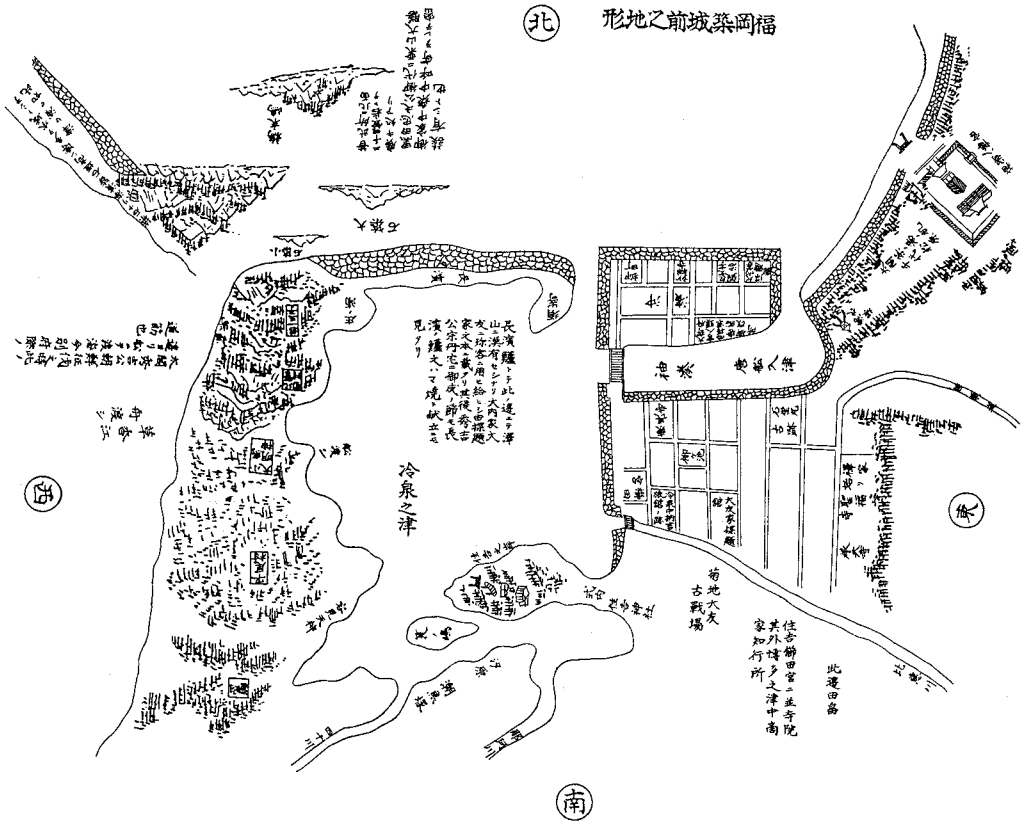


Fig.　7　　博多古図

亜紀の花崗岩などからなる山地を除いて、頁岩、砂岩などからなる古第三期層によって基盤が構成されている。この古第三期層中には、姪浜炭田、宇美炭田などに見られるように、石炭層も発達している。また、この基盤には、北西方向へ延びる大きな断層が多く見られ、地点によりその浅深の差は極端である。市街地は、これらの山地の北側に形成された福岡平野や早良平野などの沖積平野や、それぞれの山塊から断層に沿って海側に延びる低支丘、およびその周辺の洪積層から成る低丘陵などに営まれている。

海岸部に目を転じてみよう。博多湾は、北辺に志賀島に繋がる海の中道、西に糸島半島があり、更に湾頭には玄界島、能古島があって、玄界灘の荒波を遮るこれら自然の防波堤によって抱かれた波静かな良港である。博多湾岸には、湾内を左転する海流と、瑞梅寺川、室見川、那珂川、多々良川など花崗岩山地に源を発する諸河川の砂の搬出とによって、砂丘の発達が著しい。この砂丘は、既に弥生時代には形成されており、今宿横浜遺跡、姪浜新町遺跡、藤崎遺跡、西新町遺跡などの甕棺墓地をはじめとする遺跡が残されている。また、沿岸には、毘沙門山、愛宕山、荒戸（津）山など島嶼状の独立丘陵があって、これらの丘陵は、湾に向って右方向に延び砂嘴として発達した砂丘と接し、陸繋島を形成している。これらの砂嘴、および陸繋島の背

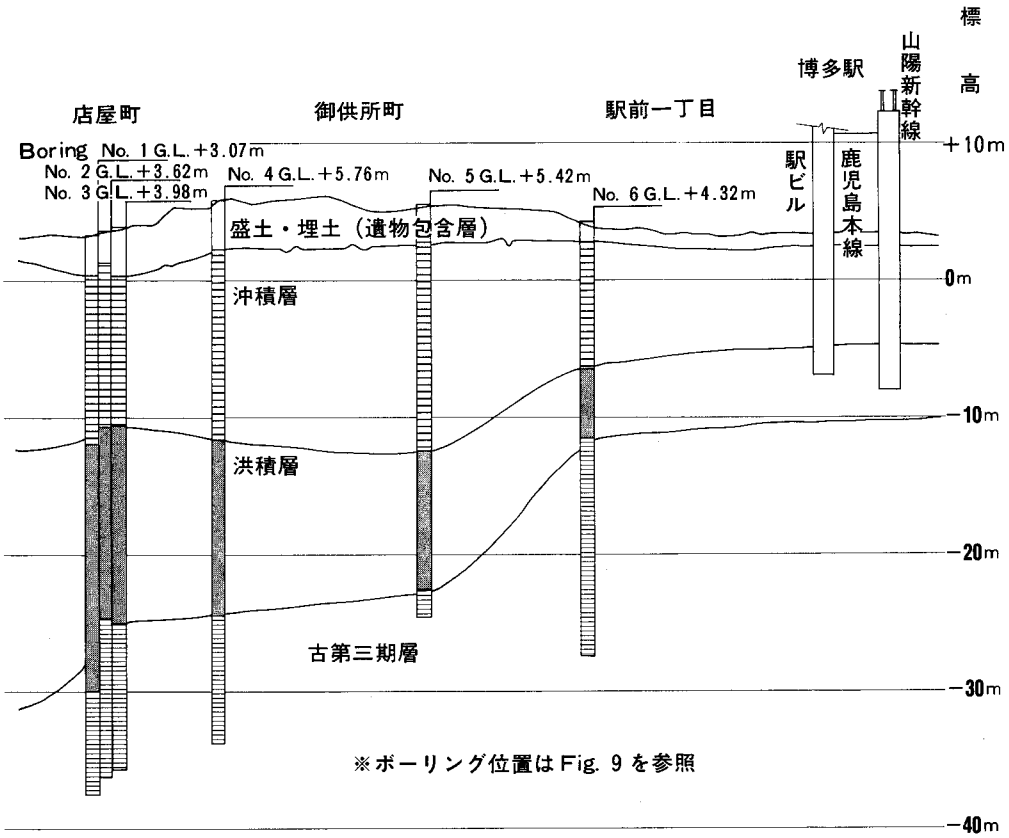


Fig. 8　博多遺跡群付近土層ボーリング図

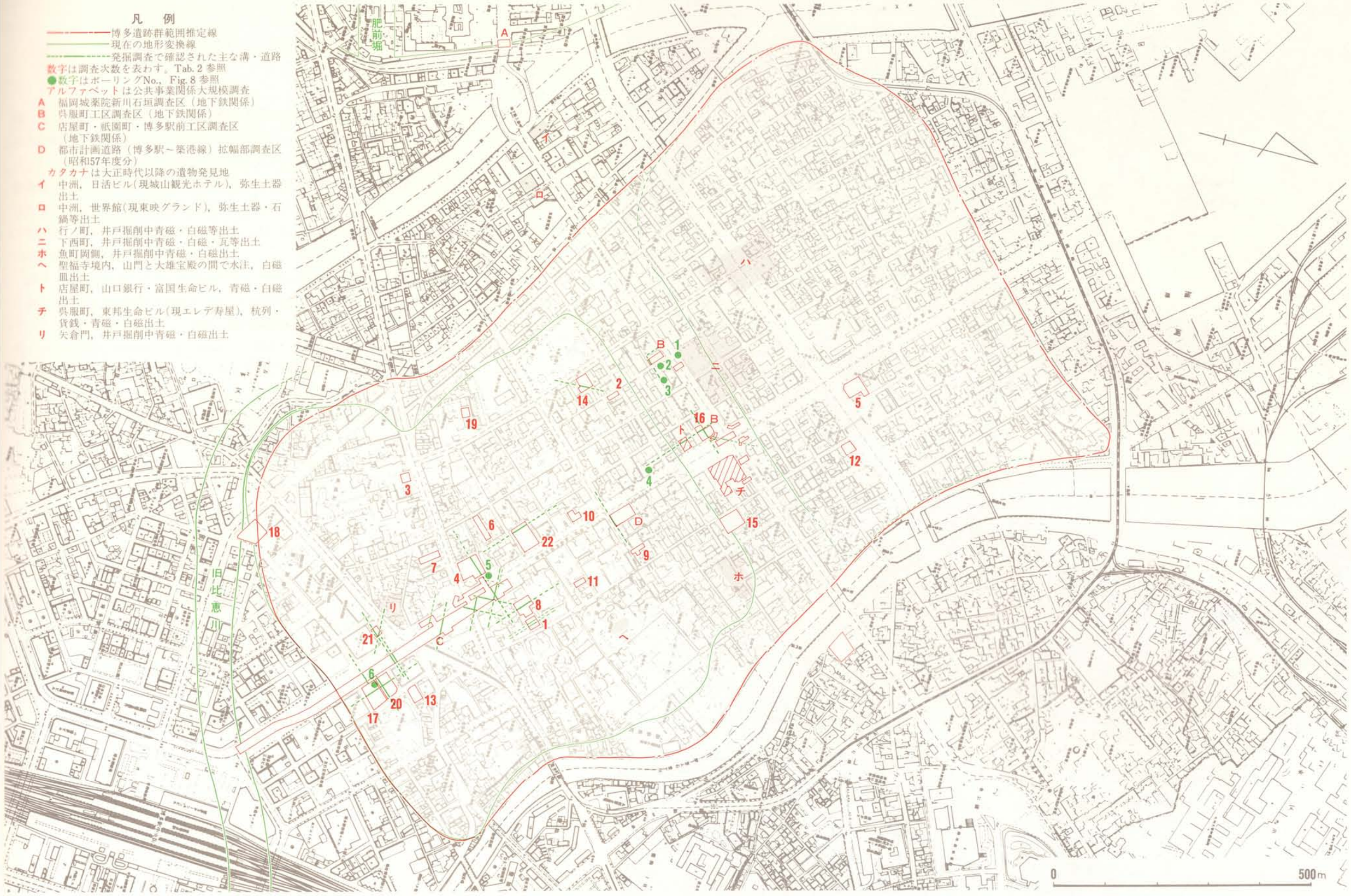


Fig. 9　博多遺跡群地形図

面には、入江もしくはラグーン状の低湿地を形成している。Fig. 7 は住吉神社に奉納された絵馬の模写である(註１)。この絵図は江戸時代に以前の地形を想像して描かれたもので、各方面でのデータと細かな部分で異なる部分も多く、全面的に信用できるものではないが、陸繋島、砂嘴と入江の存在が看取できる。柳田純孝の中世博多湾の地形復元（註２）によると、これらの入海は、港として古代、中世にかけて貿易の重要な拠点となっていたのは明らかで、今津湾と誓願寺、荒津と大宰府鴻臚館、冷泉津・袖の湊と博多、筥崎の湊と筥崎宮および顕孝寺などの関係がその好例として挙げられよう。

博多（遺跡群）は、これら古砂丘のうち、那珂川の右岸に形成された「博多浜（櫛田浜・袖の浜)」「沖（息）の浜」と通称される二つの砂丘上に立地している。この地域は、江戸時代においては筑前国那珂郡に属し、現在は福岡市博多区の北端に位置しており、福岡市都心部の一角を占めている。博多は、Fig. 9 のように西を、那珂川および中洲をともに形成するその支流博多川によって区画され、東を江戸時代初頭に開削されたと伝えられる石堂川によって画されている。永禄６(1563)年以前に描かれたと伝えられる「聖福寺古絵図」(註３)によると、承天寺から、聖福寺の裏手に堀割が存在しており、石堂川の開削もこの堀割を大改修したものであろう。また、その東には松原が描かれており、博多の砂丘も本来は、千代松原、箱崎松原と続く一連の砂丘であったものと思われる。南は、石堂川開削以前は那珂川に合流し遺跡南側を流れていた旧比恵川およびその氾濫原によって画される。北側の中世海岸線については、現在のところ資料不足で明確な判断はできないため、江戸時代宝暦頃の古地図による海岸線を仮にあてている。

博多の地質に関しても、先述した福岡市域内の例と同様である。Fig. 8 は地下鉄工事関係のボーリング調査結果をもとに、博多について再編したものである。古第三期層の岩盤に従って洪積層がそれを覆い、その上に砂、礫、砂質シルトなどからなる沖積層が堆積している。この沖積層の最上面は砂からなる。ボーリング№.１～３は現呉服町交差点付近に位置し、ここで地山砂層の落ち込みが明確に観察される。この落ち込みによって先に述べたように、「沖の浜」「博多浜」の二つの砂丘に区別される。このうち「博多浜」部は甕棺墓の出土から弥生時代以前に形成された古砂丘であるが、「沖の浜」部は地山砂層から碇石が発見され、より新しい砂丘であることが知られる。また、最上部の盛土、埋土層は遺物包含層と考えても差支えなく、その厚さは遺跡群内で厚く、それよりはずれる駅前一丁目付近では薄いことがわかる。

註１．金子堅太郎「黒田如水傳」　文献出版　より

註２．柳田純孝「中世の博多湾の地形と貿易港」　Museum　Kyushu　10号　1983年

註３．鏡山猛　「中世町割と条坊遺制（上・下)」　史淵105･6号、 109号　1971、72年　に紹介されている。

2．遺跡の歴史的環境と調査研究

北部九州一帯は、大陸と一衣帯水を隔てるのみという位置的優位性から、稲作文化をはじめとする大陸先進文化を受け入れる窓口として、日本史上特異な立場を保持していた。中でも、福岡平野を中心とする博多湾沿岸は、宣化元（536）年に那の津の官家（みやけ）がそのほとりに設置されることによって、以後の発展の基本的な方向が決定づけられることになった。すなわち、「大宰博多津」として、大宰府の外港に位置づけられ、古代日本における対外交渉の極めて重要な公的港湾となったのである。持統天皇２（688）年には、筑紫館（つくしのむろつみ）（後の大宰府鴻臚館の前身）が、外国使節接待のための迎賓館として、既に設けられ、大宰府の職掌のうち蕃客・帰化・饗讌を司る大宰府鴻臚館の名も、承和９（842）年には史料に見える。鴻臚館の位置は、中山平次郎博士によって、現福岡城址内に比定されて以来、定説となった。寛平６（894）年の遣唐使の廃止を以て、鴻臚館の性格が、対公人から対私人（商客）応接機関と変化してゆき、ここが唐宋商人の交易の場となった。大宰府や鴻臚館址を中心に各地で出土している越州窯系青磁をはじめとする初期貿易陶磁は、そのほとんどがこうした中国商人によってもたらされたものである。律令制の衰退とともに、各地に多くの荘園が発生した。時は11世紀の後半、貿易奢侈品の需要が高まる院政期にあたり、鴻臚館における管理貿易から、不輸不入の特権を持つ荘園に宋商人が目を向け始めたのは当然のことであった。

本書で扱う博多遺跡群は、まさにこの頃萌芽を見るが、博多も大宰府天満宮の神宮寺安楽寺の領有する荘園であった。鴻臚館とは目と鼻の先にある博多に商船を引き込んで貿易が行なわれるようになったのである。これら権門と結びついた宋商が博多に多数居留したことは、聖福寺を創建した栄西の申し状に「宋人百堂」が、また『武備志』日本考に「大唐街」の語が見えることからも充分に推量される。博多の発掘調査の結果からも、11世紀後半から12世紀前半代にかけての遺物が特に多く、当時の繁栄ぶりの一端を窺うことができる。のち仁平元（1151）年の大宰府官人による筥崎・博多の大追捕によって、その繁栄は一時影をおとすものの、保元３（1158）年平清盛が、大宰大弐となり、再び隆盛を迎えることになる。中山平次郎博士の説によると、それは日宋貿易に積極的であった清盛によって、貿易港としての「袖の湊」が築かれたからである。また「袖の湊」は後の大輪田泊築港の基本になったという。

鎌倉時代になると鎮西探題が博多に置かれ、名実ともに九州支配の中心が大宰府から博多へと移る。それとともに、博多には多くの社寺が建立され、対外貿易もこれらを拠点に行なわれるようになる。文永11（1274）年、弘安４（1281）年には、二度にわたる蒙古の襲来もあり、博多も戦場となったが、これも一重に博多の政治的経済的重要性によるものである。

鎌倉時代末から南北朝期になると、博多も他地域以上に争乱の渦に巻き込まれたが、室町幕府が成立すると九州探題が設置された。しかし、室町幕府の支配力は弱く、博多は九州探題を

はじめ、小弐氏、大内氏、大友氏らによって争奪戦の対象となっていった。以後、断続的ながら戦国時代の末まで争乱は打ち続き、ついに、天正14（1586）年の島津氏の焼打ちによって博多の街はことごとく灰燼に帰した。天正15（1587）年、九州平定をとげた豊臣秀吉により博多の再興がなされ、再び都市としての機能を取り戻したものの、徳川幕府の鎖国政策で、外交の窓口は長崎へと移り、往時の貿易都市としての繁栄を再び見ることはなかったのである。

以上、博多をめぐる歴史を簡単に紹介したが、対外貿易の拠点としての博多の優位性は、それ自体を戦国大名の争奪の対象とせしめ、後の博多研究の重要な史料の多くを焼失するという皮肉な結果をも生み出した。但し、幸いなことに、博多の地中には今なお多くの遺構・遺物が残されており、博多研究への考古学的方面からのアプローチを可能としているのである。

博多における本格的な発掘調査の歴史は、わずかに８年足らずのことであるが、地下鉄、都市計画道路関係を除いてもすでに22次に及んでいる（Tab.２）。しかし、それ以前に遺物の発見や、それらに対する先覚諸先生方の考古学的な研究もある。今、それらを考古学的分野に限って簡単に振り返ってみよう。

博多の遺物発見の歴史は、聖福寺境内を中心に江戸時代にさかのぼる。

1．元禄11（1698）年　聖福寺子院瑞応庵の墓地で壺が出土し、中に金器、花銀、金花銀、金銭、銀銭、団金、金で作った禽獣蟲魚などあり、これらを改鋳して二百三十四両を得る。（文献１・２・７・８）

2．宝永（1704～1710）年間　聖福寺子院虚白院の地より朱椀五十具が出土。毎具四個からなり、二つの甕に入っていた。いずれも散逸して現存しない。（文献７・８）

3．享保元（1716）年　瑞応庵の墓地石塔修補中、多量の金銀器が入った壺を発見。元禄11年と同様の遺物で、金二貫八百七十匁、銀五貫三百二十匁一分を得て、修葺の資となした。出土した法馬の一つには、「径歴郭徳潤　行宣政院福建分院　提調官副使側失監」裏面に、「客商謝福　花銀肆拾捌両重　辨験銀匠彭禎」と刻字されていた。（文献１・２・７・８）現存しない。

4．享保８（1723）年　瑞応庵の墓地が盗掘され、遺留した銀器一個の中に、白銀九貫六百六十匁、銀製珍器量四百貫、法馬七十三個が出土。法馬の大なる物は五百匁もあり、正面に「客商謝福　辨験銀匠彭禎　華銀五拾両重」裏面に「金花銀」などの刻字が残されていた。（文献１・２・８）

5．宝暦８（1758）年　天得庵の竹林開墾の際、南京窯の瓷器大小27個が出土。現存しない。（文献１・２・７・８）

6．明治40（1907）年　上奥堂町の佐藤半次郎氏宅の井戸掘削中、地下約16尺より碇石が出土。櫛田神社に奉納されている。（文献５・12）

7．大正（1912～1925）年間　魚町、西町下、行ノ町、矢倉門など博多各地で、井戸掘削時に青磁、白磁、瓦などが出土。天神近辺でも西鉄電車駅、平岡氏宅から青磁、白磁が出土。（文献３）これらは中山平次郎博士の確認である。また、中洲玉屋デパート西側で、弥生式土器、蛸壺などとともに石鍋、塩壺が出土。（文献11）

8．大正4（1915）年　中山平次郎博士が福岡城内で奈良時代古瓦の大量散布地を発見し、大宰府鴻臚館址であるとの確認を得る。(文献3)

9．昭和7（1932）年頃　博多港沖浚渫中、碇石とともに「張綱」銘墨書のある天目碗（Fig.10）や中国銭多数が発見される。(文献4・5・7・8・10) 九州大学蔵。

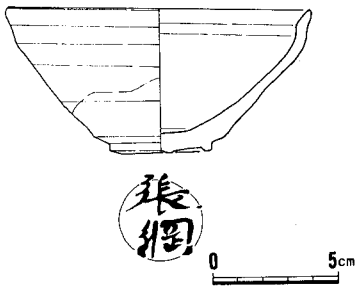


Fig. 10　博多港沖引揚げの天目碗

10．昭和24（1949）年　福岡城内の平和台野球場造成のため、鴻臚館址と思われる地点を破壊。この前後、高野孤鹿、大場憲郎氏らによって古瓦、陶磁器が多数採集され、のちに、越州窯青磁が含まれていることを小山富士夫氏が確認。(文献8・9・10・13) 福岡市立歴史資料館、出光美術館、九州歴史資料館蔵。

11．昭和27（1952）年　呉服町交差点の東邦生命ビル（旧大丸百貨店、現エレデ寿屋）の建設工事中、陶磁器、蛸壺、弥生式土器片、銅銭（五銖銭を含む）など多量の遺物が出土。後に周辺の山口銀行福岡支店、富岡生命ビル等の建設工事でも同様の発見があった。(文献6・8)

12．昭和20年代（1945～1955）聖福寺境内の山門と大宝殿との間の工事中に地下2m付近で、水注一個と皿一枚をそれぞれ発見。(文献8・10) 九州大学蔵。

13．昭和33（1958）年　今津勝福寺西の砂丘より、約二百体の埋葬人骨が発見された。百九点の陶磁器や鉄鍋、鉄鎌などが二宮八郎氏によって採集された。人骨は体部と頭部が別々に、埋葬され、異様な埋葬形態であることが注目された。(文献10) 九州歴史資料館蔵。

14．昭和48（1973）年、天神フタタビル建設工事中地下5mから碇石が出土。福岡市埋蔵文化財センター蔵。

15．発見年代は未確認であるが、筥崎宮境内より白磁碗の完形品一点が出土し、宝物館に所蔵。

博多遺物発見史関係文献目録

(1)　貝原益軒「筑前国続風土記」

(2)　津田元顧・元貫「石城志」明和2（1765）年・大正10（1921）年刊

(3)　中山平次郎「古代の博多」　昭和59（1984）年　九州大学出版会

(4)　山本博「博多湾出土遺物と元寇役への新資料」『都久志三号』昭和（1932）年

(5)　川上市太郎「蒙古軍船碇石」（『元寇史蹟(地之巻)』福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第14輯）所収　昭和16（1941）年

(6)　奥村武「博多袖の湊遺跡出土文化財について」『うわさ25－9～12』所収、昭和34（1959）年・『博多袖之湊址発掘文化財目録』昭和28（1953）年　報告、福岡県教育庁蔵書

(7)　小畠文鼎「聖福寺史」昭和39（1964）年三宅安太郎訂、聖福寺文庫刊行会

(8)　岡崎敬「福岡市（博多）聖福寺発見の遺物について」『九州文化史研究所紀要13』昭和43

(1968) 年所収

(9) 高野孤鹿「平和台の考古史料」(プリント) 昭和47 (1972) 年

(10) 亀井明徳「博多の中国陶磁地図 (上)・(中)・(下)」日本美術工芸447～449　昭和50～1 (1975～6)

(11) 咲山恭三「博多中洲ものがたり　一前編一」昭和54 (1979) 年

(12) 松岡史「碇石の研究」『松浦党研究』昭和56年 (1981) 所収、松浦党研究連合会

(13) 池崎譲二・森本朝子「福岡市立歴史資料館収蔵の高野コレクション」　弓場知紀「出光美術館の高野コレクション」『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ福岡城址一内堀外壁石積の調査』所収、昭和58年 (1983) 福岡市教育委員会

地下鉄、都市計画道路等の大規模開発を除いた調査地点は以下のようである。

Table. 2　博多遺跡群調査地点一覧表　　1984年2月現在

次	調査期日	所在地 (博多区)	対象面積(㎡) (調査面積)	調査原因	備考
1	78.11～79.1	御供所町　東長寺境内	(360)	納骨堂建設	本調査
2	79.4	店屋町99	約100	ビル建設 (店舗・共同住宅)	立会、土層図作成
3	79.11	祇園町　萬行寺境内	(240)	納骨堂建設	本調査
4	79.12～80.3	冷泉町7-1	1982.9 (1,100)	ビル建設 (マンション)	本調査「博多Ⅰ」1981 「博多Ⅱ図版編」1982
5	79.12	下呉服町346	1177.6	ビル建設	試掘調査　地表下4.5mより碇石出土
6	80.3～4	冷泉町155他	1035.14 (640)	ビル建設 (マンション	本調査
7	80.6～8	祇園町130	(210)	ビル建設 (マンション)	本調査
8	80.8～10	御供所町　東長寺境内	(600)	本堂建設	本調査
9	80.9	下呉服町75	197.78	ビル建設	試掘調査　狭少のため本調査不能
10	80.12	冷泉町474-9	353.4 (54)	ビル建設 (店舗・共同住宅)	本調査「博多Ⅰ」1981
11	80.12	御供所町3-30	244.06	ビル建設	試掘調査　狭少のため本調査不能
12	81.6	中呉服町152,153	463.59	ビル建設	試掘調査、島井宗室屋敷跡
13	81.7	駅前1丁目121～127	1639,443	ビル建設	トレンチ調査
14	81.8	店屋町4-15	810.8	ビル建設	本調査
15	81.8	上呉服町569	2275.02	駐車場建設	試掘調査
16	81.9	店屋町246～248	77,511	ビル建設	本調査
17	81.11	駅前1丁目98	810.8	ビル建設	本調査
18	82.1	駅前2丁目8-14		ビル建設	試掘調査
19	83.4	櫛田神社境内	(約380)	社務所建設	本調査
20	83.4	駅前1丁目99	1400	ビル建設	本調査
21	83.5	駅前1丁目18-1	220	ビル建設	本調査
22	83.9	冷泉町189他	1566 (800)	ビル建設	本調査

第２章　本体部Ａ・Ｂ区の調査

１．調査の経過

昭和51（1976）年夏、地下鉄工事にともなう埋蔵文化財の発掘調査が開始されるにあたり、福岡市教育委員会では、それまでの研究成果をもとに、路線内にかかる遺跡の確認を行なった。１号線路線内で想定された遺跡は、西から藤崎遺跡、西新町遺跡、福岡城址、それに祇園町遺跡であった(Fig. 1)。祇園町遺跡については、それまで本格的な発掘調査は行われておらず、その実体は明確でなかったが、第１章で述べた如く過去に多くの遺物発見の記録は残されていた。西新町遺跡、福岡城址の調査と併行しながら、過去の事実を裏付けるため、同年12月祇園町遺跡における路線予定地の試掘調査を行なった(PL. 2―(2))。その結果、青磁、白磁をはじめとする多くの遺物や遺構が検出され、中世を中心とする遺跡として再確認された。以後、周辺の調査の進展とともに、遺跡はかなり広大な範囲にわたることが明らかになり、従来の祇園町遺跡という呼称も、必ずしも適当とは言えなくなり、現在、福岡市教育委員会では、祇園町遺跡を含む旧博多部を「博多遺跡群」と総称している。

博多遺跡群における１号線路線内の調査区は、店屋町工区と祇園町工区とにわたり、巾10～24ｍ、総延長384ｍに及ぶ。これらは、調査の便宜上、20ｍを原則として海側から順に区分けして、それぞれＡ～Ｓの符合をつけた(Fig.12)。中洲川端駅から祇園駅にかけての店屋町工区

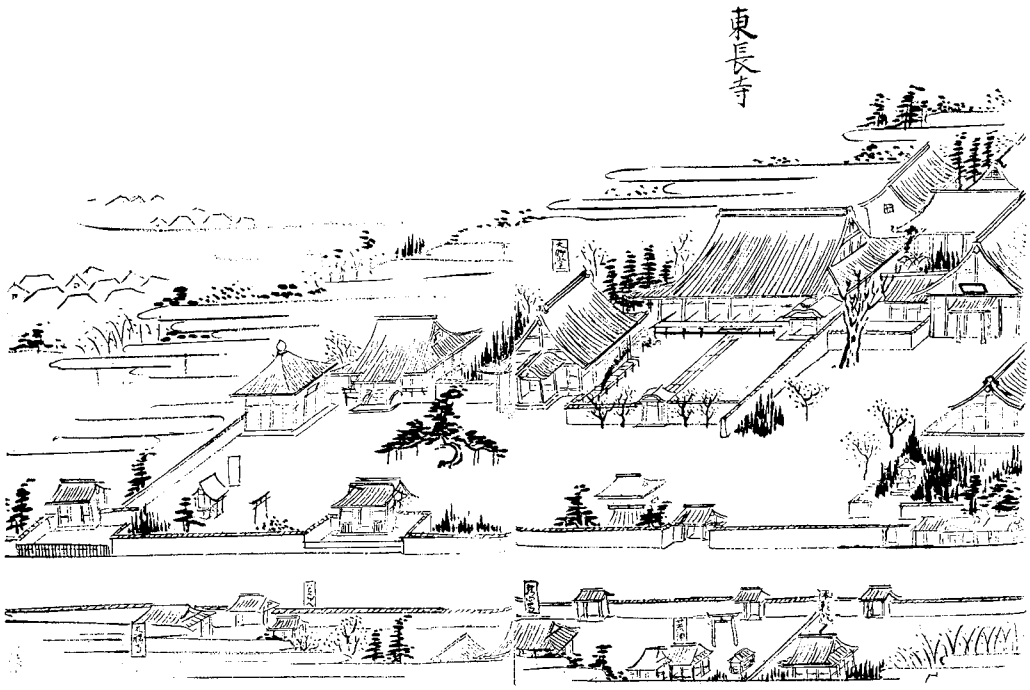
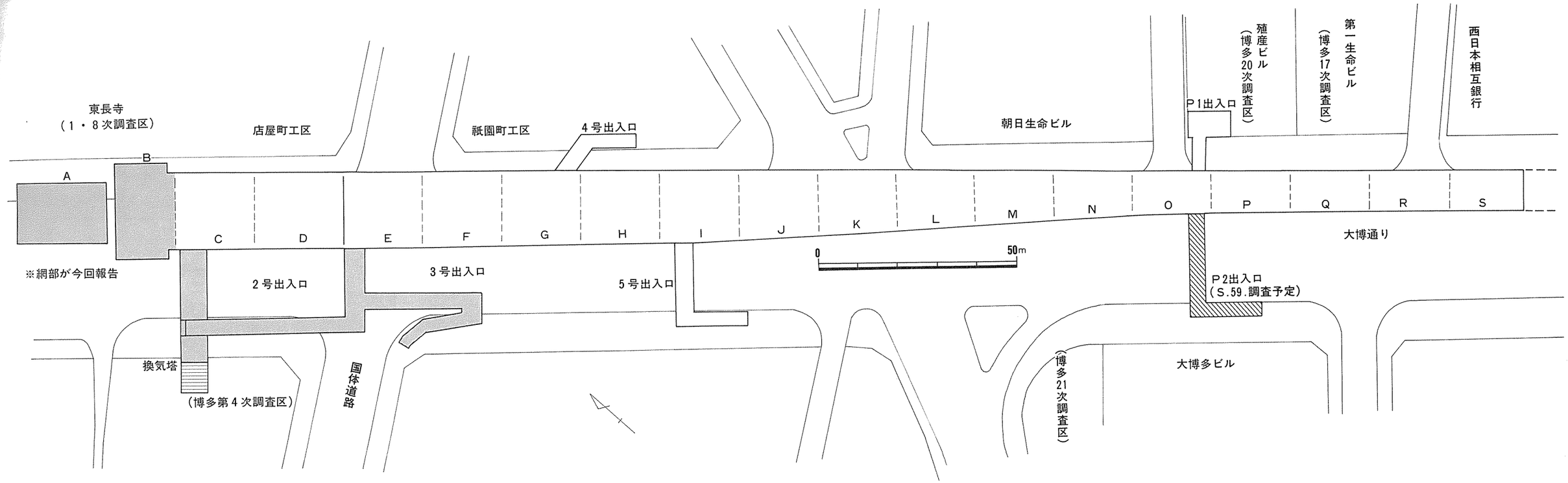


Fig. 11　東長寺付近古絵図『筑前名所図会 巻の二』奥村玉蘭　文政4(1821)年

Fig. 12　博多遺跡群地下鉄１号線関係調査区（店屋町・祇園町工区）全体図（1/1000）



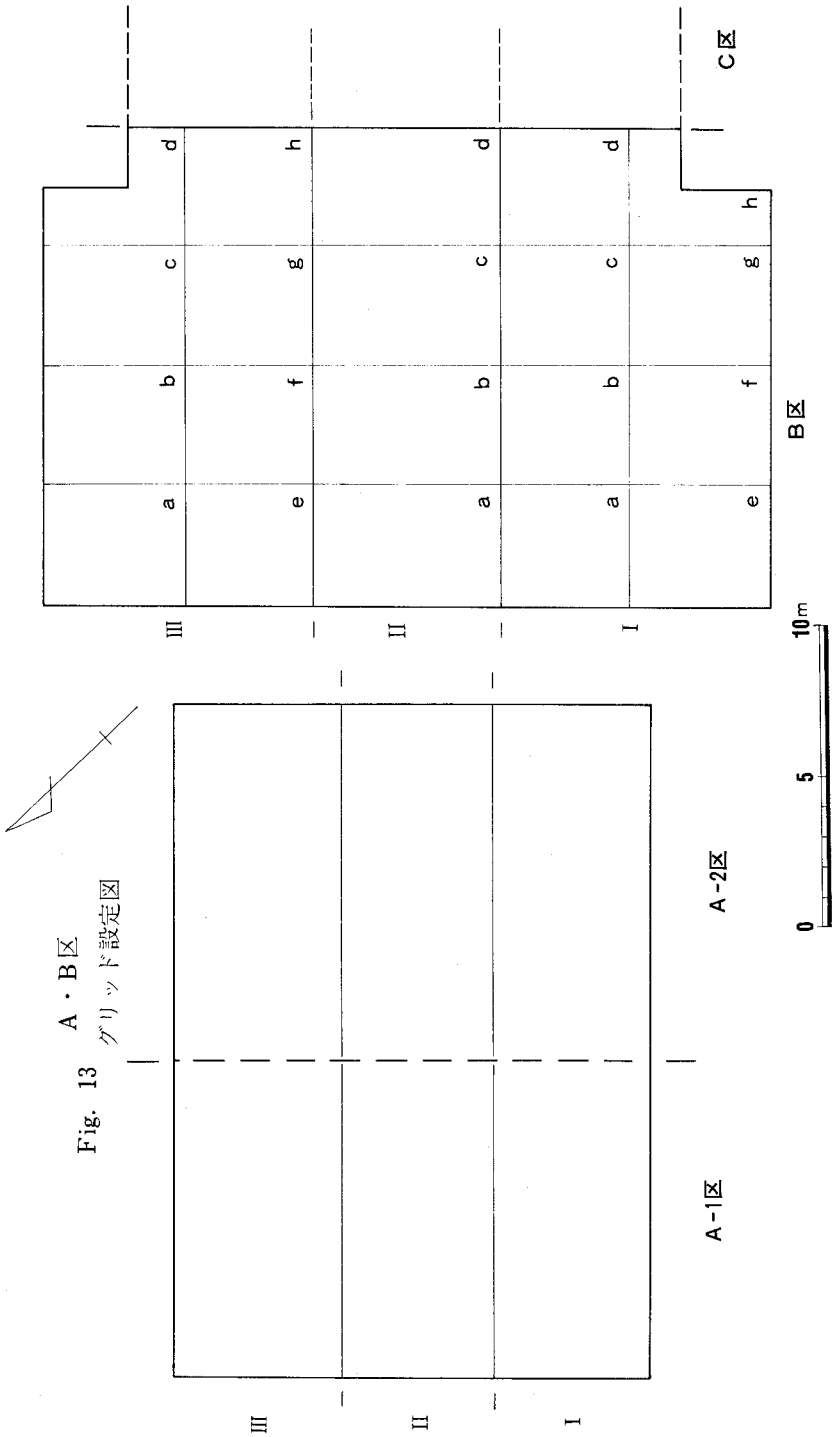


Fig. 13　A・B区 グリッド設定図

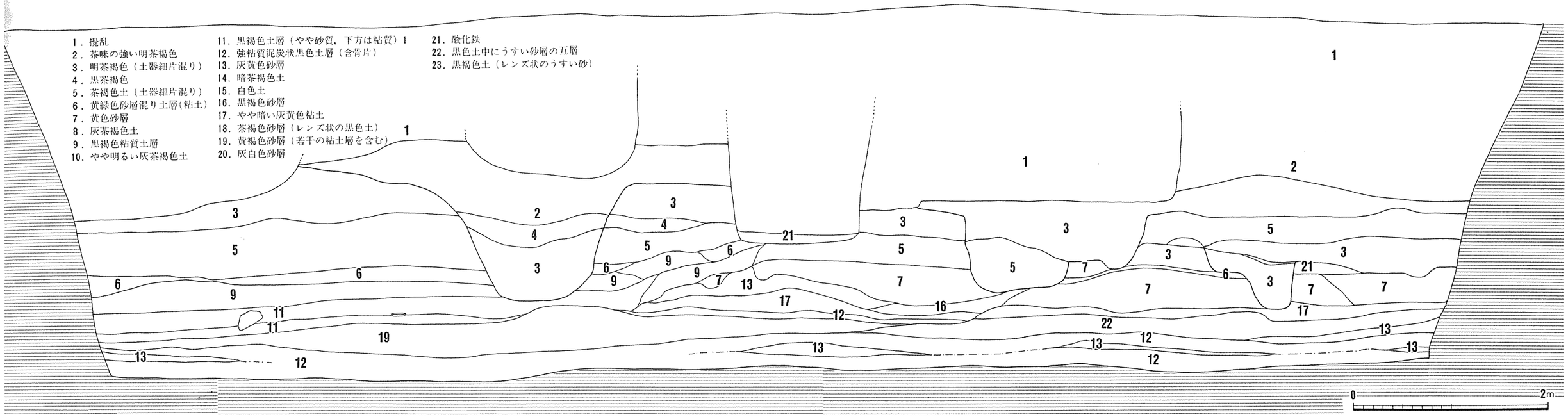
は、大きなカーブを描いてビル街の下を通過するため、工区の大半をシールド工法によった。そのため、当工区下の要調査部分は、地表面に影響を及ぼす竪坑部（B区）、薬液注入部（A区）と、オープンカット工法による駅舎部（C・D区）であった。祇園町工区は、全面オープンカット工法によるため、その全面が調査対象となった。

試掘調査の結果を受けて、福岡市教育委員会と福岡市高速鉄道建設局は、本調査に向けて、協議を重ね、本調査は、店屋町工区工事発注のあと、昭和52年12月７日より開始し、その事前調査として、46カ所に及ぶ中間杭部の坪掘調査(11月１～11日、PL.３ー(1))、下水管移設の夜間立会（11月19日～12月５日）等を行ない、土層、遺構、遺物などの基礎的なデータの収集につとめることとした。その結果、地表1.2～1.5m程度は近・現代の建物基礎等の攪乱で、その下に1.2～３mの厚さで包含層のあることがわかった。また、各坪掘の地山白砂層のレベルにかなりのバラつきがあり、極めて濃密な遺構の分布が考えられ、更に甕棺破片の出土から、下層に弥生時代甕棺墓群の存在も推察された。

本章では、A・B区について述べるが、この地点は、東長寺の旧境内にあたる(Fig.11)。東長寺は、大同元（806）年、弘法大師によって創建されたと伝えられる真言密教の名刹で、現在、その別格本山として広く知られている。また、同寺蔵の木造千手観音立像は、重要文化財に指定され、福岡藩二・三代藩主黒田忠之、光之公の墓も境内に営まれている。但し、東長寺は、当初、博多行ノ町にあったといわれ、現地へは、江戸時代初期黒田忠之公の時に移転したものである。出土する遺構、遺物の大半は、直接東長寺とは結びつかない。

薬液注入部にあたるA区の調査（Fig.15）は、その性格上、本体部の調査に先行し、昭和52（1977）年12月７日から開始し、翌年２月24日に終了した。調査面積は294㎡で、排土処理の問題から二分割して調査を行ない、北側部分をA－１区、南側部分をA－２区とした。また、それぞれを５m幅に小分割し、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと呼んだ(Fig.13)。調査は、A－２区を先行し、終了後A－１区へと移った。この調査区が、事実上、博多における目的意識的な発掘調査の第一歩を踏み入れたところである。しかし当区は、同様の色調、土質をもつ包含層が厚く、しかも複雑に堆積しており、福岡市域内の他の遺跡とほとんど違う土質のため、土層の判別が極めて困難で、調査員自体このような土質に慣れるまでにしばらくの時間を要した。また、試掘及び中間杭坪掘調査での知見をもとに、地表面から１～1.5m程の近･現代建物基礎等を含む攪乱層は、機械力を以て除去し、以下を手掘りで精査した。調査区が、市街地内で通行人の多い幹線道路に面していることや、工事用機械が近い位置で稼動しているという条件から、工事関係者とともに安全管理については格別の配慮をしたものの、残念なことに、フェンスを乗り越えて現場に侵入し出土遺物を盗みさるという事件が数回起きた。直接人身事故につながらなかったのは、幸いとせねばなるまいが、今後に活かさねばならぬ反省点の一つである。

A-1区北側土層断面図（上），B-II・III区土層断面図（下）



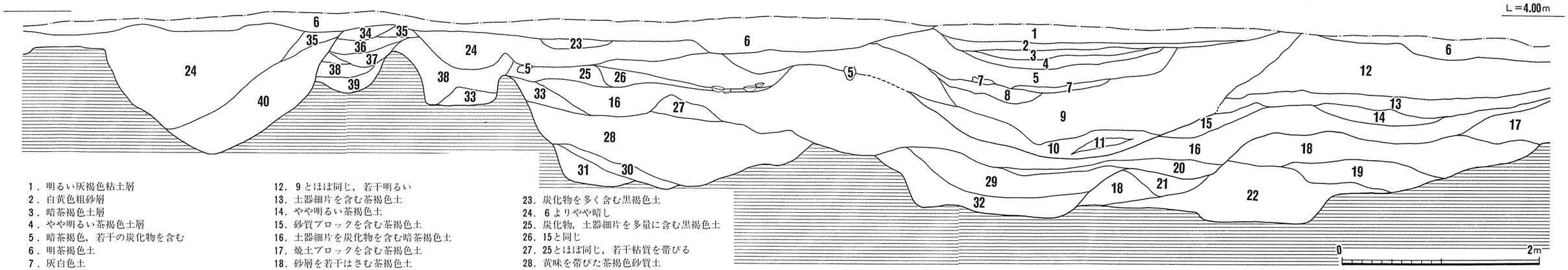


Fig. 14　A・B区土層断面図（1/40）

Fig. 15　　A－２区調査風景

Ｂ区は、祇園駅～中洲川端駅間のシールド工法による工事の竪坑部にあたる。発掘調査の開始はＡ区の調査が終了し、側壁ガイドウォール工事、側壁柱及び中間杭の打ち込み等が完了してからの昭和53（1978）年６月１日からであった。調査面積は350㎡である。この調査区では、中間杭を基準に、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区と分け、更にそれぞれを４ｍを基準にａ～ｈに細分した(Fig.13)。この区は、工区幅が広く、一部が歩道にかかる。それを確保するため、Ⅰ区については、Ⅱ・Ⅲ区調査終了後、覆鋼桁を架けた状態で調査することになった(PL．４－１)。また、Ｂ区の調査を行なっている頃、福岡市では記録的な水飢饉に見舞われ、上部の粘質のある土は固く締まり、最下面の砂層に掘り込まれた遺構は、すぐに崩れてしまうという悪条件下での調査となった。最下面の白色砂の照り返しや、鉄鋼材の放熱で、現場内の温度が50℃近くにも達する日が連日続いた。こうして、Ｂ区の調査は７月３日に終了し、順次、Ｃ、Ｄ区の調査へと移っていった。

猛暑、極寒の中での調査であったが、そのような悪条件の中で現場作業に参加していただいた方々は次のとおりである。記して感謝の意を表したい。

調査補助員

長沼孝(九州大学)、富田逸郎、村野隆男（以上筑波大学）

白石公高、宮島成昭（以上カメラマン）

調査参加者

永田恭子、河辺チサエ、大歯みつ子、黒木順子、八尋義光、安部国恵、黒木沢子、柴田スマ子、角順治、荒岡慶志、余語健、斉藤経行、有元泰祥、坂本章市、小谷一夫、井上繁信、志磨大二郎、富岡真一、青木郁夫、小田伸子、柴田喜瑞、杉野悦郎、松本美枝子、横山裕平、撫養義則、山下博子、亀山美智子、阿部京子、海津静江、真鍋秀子、真鍋政江、清水文代、緒方チヨエ、高宮ノブエ、高宮久子、海津和子、杉村文子、能美須賀子、西原年枝、藤タケ、高田ヒサノ、塩手真吾、嶋田誠二

2．調査の概要

発掘調査によって検出された遺構及び出土した遺物は、多種多様である。紙面の都合上、それらのデータを遺漏なく報告することは困難であり、主要な遺構を中心に述べてゆくことにしたい。遺構出土及び遺構外出土の遺物についても、細大もらさず報告せねばならないのかもしれないが、膨大な遺物の山に面してはそれも不可能である。遺物の実測図等は、良好な遺存状態を示した遺構を主に紙面を費し、その他特殊な遺物などについて実測の可能な限り掲載するようにつとめた。なお、遺物の各遺構毎の出土量については、別冊の「博多出土貿易陶磁分類表」などを基準に付表としてまとめているので、参照していただきたい。加えて、挿図中に示したグラフは、土師皿・杯類の計測値であり、それらの良好な出土状態をもつ遺構を主に掲げた。実線が糸切り底、点線がヘラ切り底を示し、横軸に底径及び口径を半径として、また、縦軸に器高を表している。以上をあらかじめ断っておきたい。

1）遺構と遺構出土の遺物

1号土坑（Fig.16）　A－2－Ⅲ区で検出された。上部に人頭大から拳大の礫を配し、下部に長軸1.1m、短軸0.8mの不整円形の平面形をもった掘り方をもつ。土坑断面は、逆台形をなし、深い。土坑内は、黒褐色土によって満たされていたが、周囲の土との識別が困難で、壁の立ち上りの検出が遅れたため、土坑上の配石は、やや浮上った状態になっている。若干の炭化物が含まれていたが、遺物はほとんど検出されていない。配石のレベルが、2・3号土坑と同様に3.50m前後にあり、それらと同様の上部に配石をもつ土坑墓であると考えておきたい。

2号土坑（Fig.17・18、PL.9・10）　A－2－Ⅲ区で検出された。上部に人頭大の角礫又は亜角礫を3.3×0.9mのほぼ長方形におき、その間隙に拳大の小礫をぎっしり詰めている石積を配している。下部には、2.3×1.0mの隅丸長方形の平面形を呈し、深さ0.5m程の皿状になだらかに落み込む壁をもった土坑をもっている。この下部土坑の長軸東端には大きな角礫が置かれている。上部配石の主軸は、N－89°－Wをとり、下部土坑の主軸は、N－78°－Wで、若干のずれはあるが、1・3号のように2号土坑と同一レベルの配石直下にはいずれも土坑をもっていることから、2号土坑についても上部に配石をもつ土坑墓であると見做せる。この土坑床面からは、比較的集中して遺物が出土しているが、そのうち確実に副葬品であると判断できるのは1・6の土師皿・杯と12の匙状滑石製品だけであり、他はいずれも破片であって埋葬時の混入であろう。また、上部石組からは、11などの褐釉四耳壺の破片が出土している。また、土坑内からは、鉄釘2点が出土しているが、原位置をとどめておらず、木棺墓であるとは考えられない。また、現場写真撮影後に青磁破片数点が盗難にあった。これは付表に含まれていない。

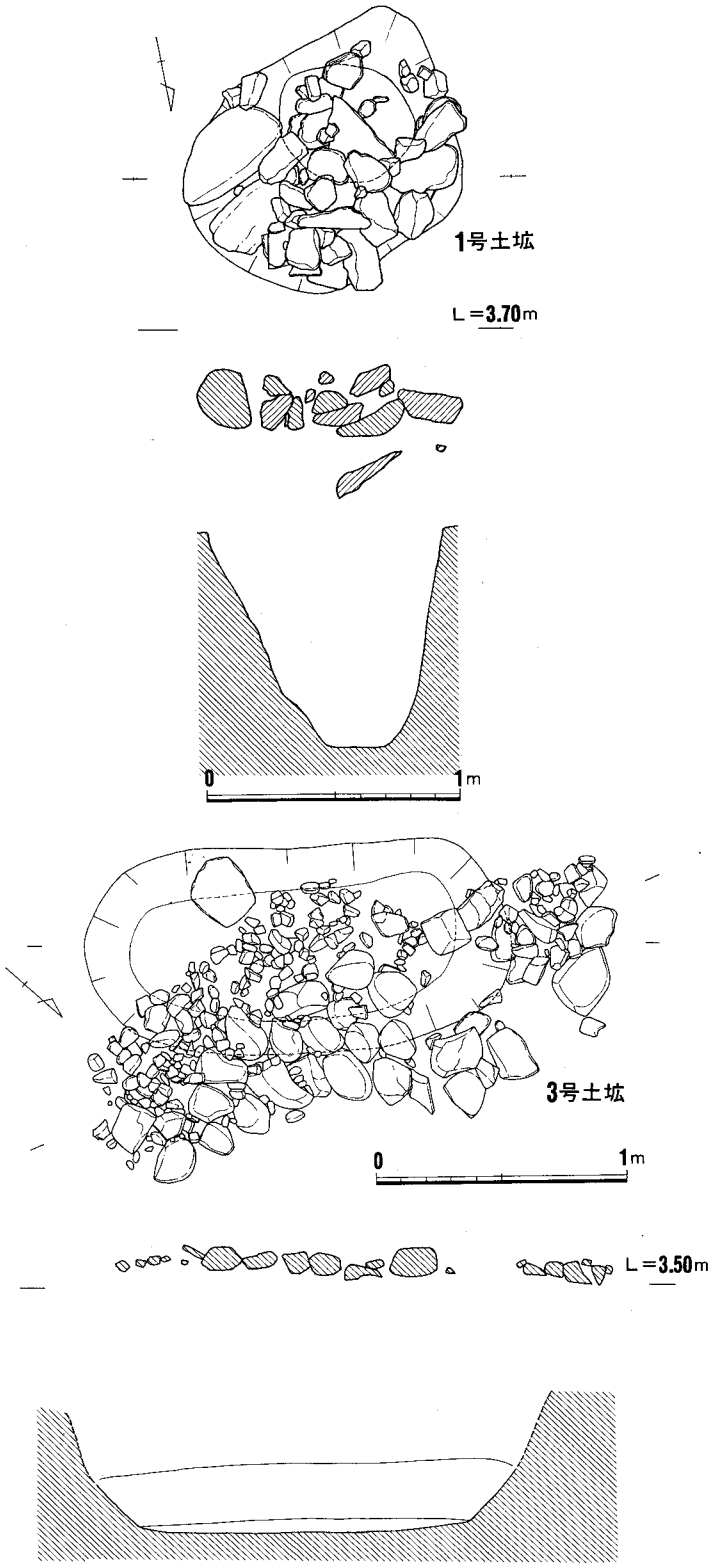


Fig. 16　　1・3号土坑実測図

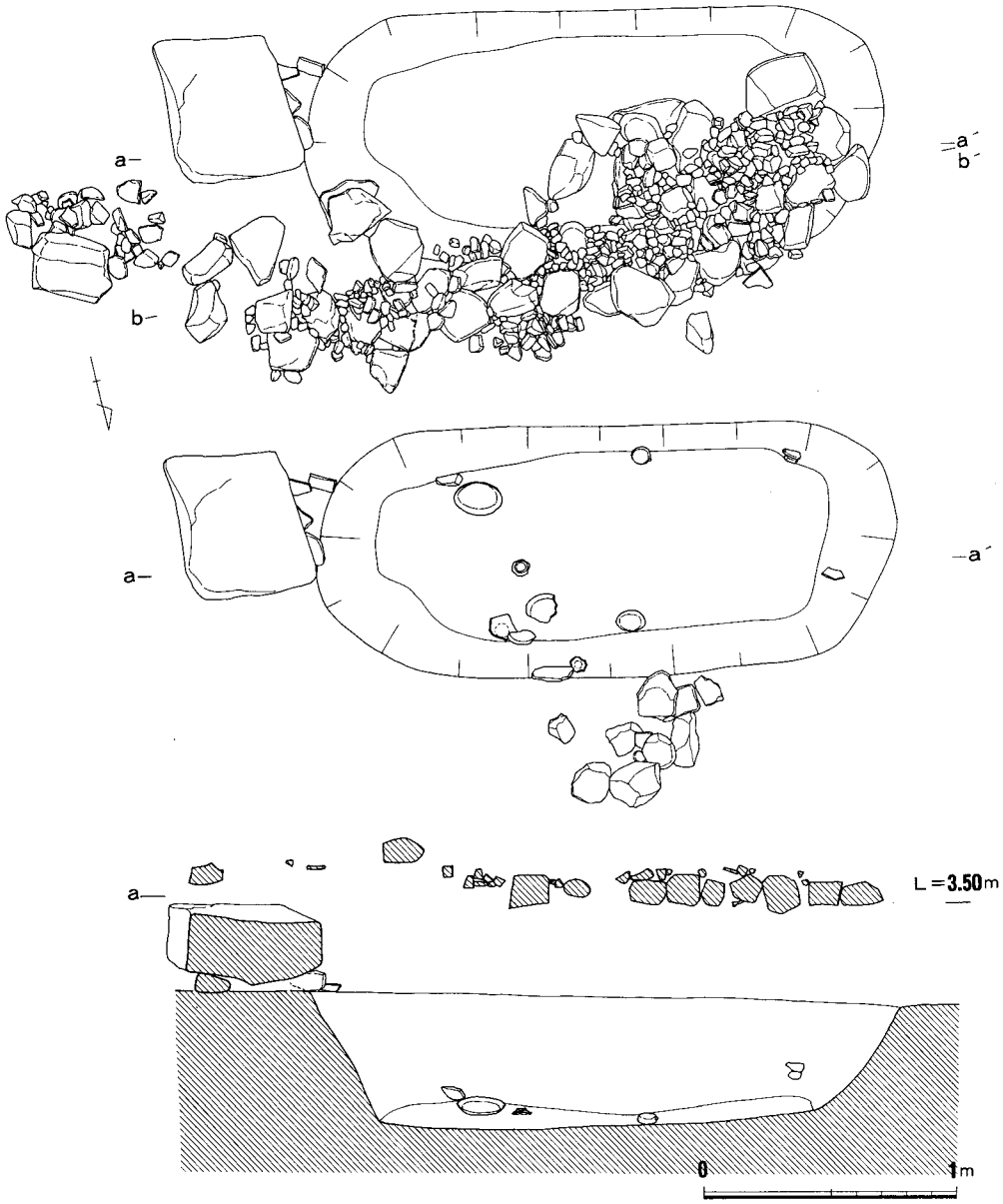


Fig. 17　　2号土坑実測図

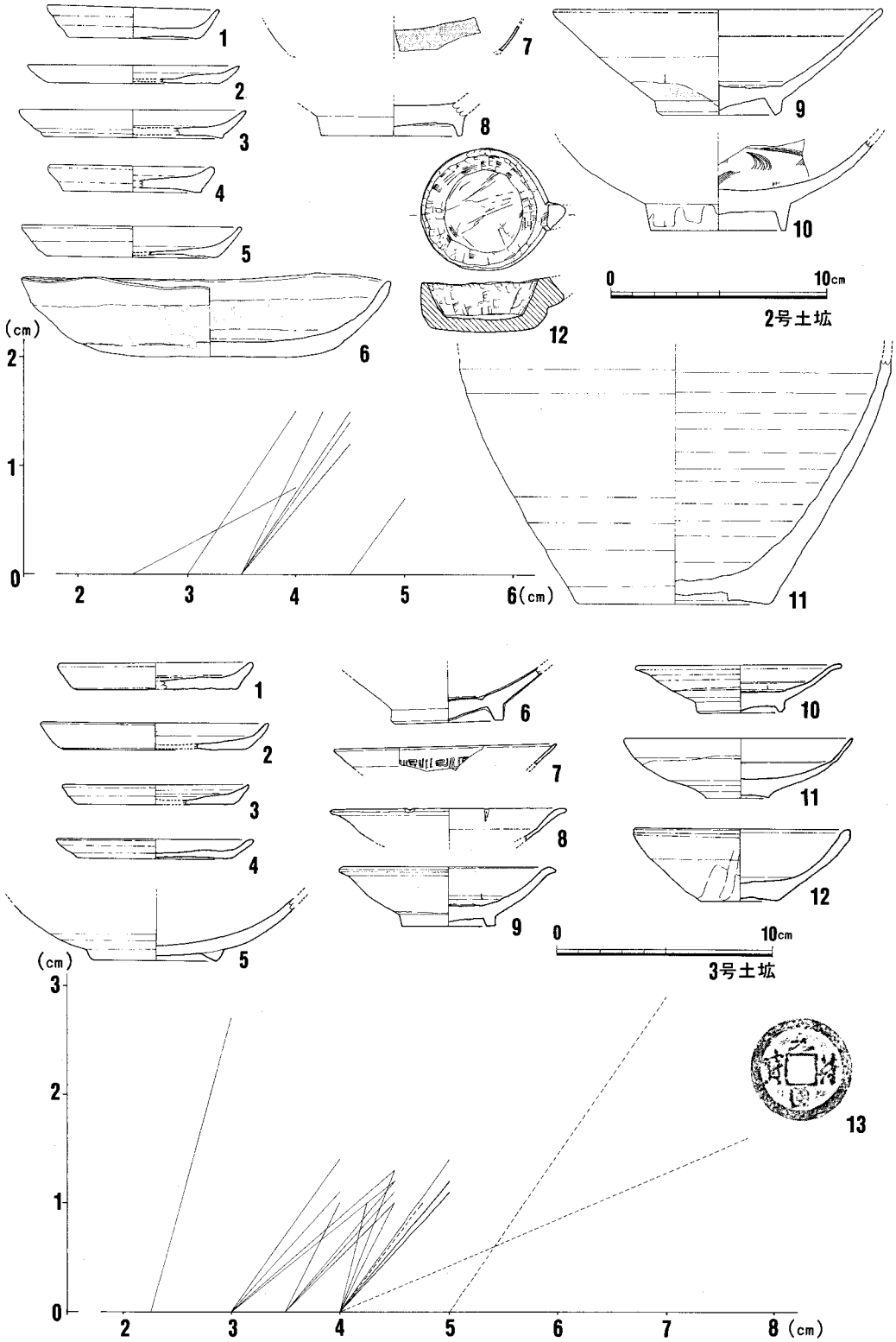


Fig. 18　　２・３号土坑出土遺物

1～6は土師皿・杯、7は青白磁印花文皿、8～10は白磁碗である。

3号土坑（Fig.16・18、PL.9）　A－2－Ⅲ区で検出された。上部では標高3.50mの辺りに水平に人頭大の礫を置き、その間隙に小礫を詰めている配石をもつ。配石は2.3×1.2mの長方形を呈し、その主軸はN－65°－Wの方向をとる。この中の石材は一部焼けているものがあり、配石下面では木炭粒が比較的多く目についた。この配石直下には、隅丸長方形の土坑（1.8×0.8m）があり、内部の覆土は茶褐色砂質土である。その主軸は、N－42°－Wの方向をとるが、上部配石の方向とは若干のくい違いを見せ、また、土坑確認面と配石間にレベル差が見られる。これらは、2号土坑の場合と同様であり、それぞれ配石と下部土坑とは一対の施設である。3点の鉄釘が出土しているが、いずれも原位置をとどめておらず、覆土からの出土で、木棺墓でなく土坑墓と考えるのが適当であろう。図示した遺物は1～4が土師皿、5が瓦器碗、6・7が青白磁碗・皿、8～11が白磁皿、12が陶器皿である。この他、付図に示すように白磁碗0－Ⅲ類、Ⅳ類、龍泉青磁碗Ⅰ類陶器なども見られるが、いずれも破片である上に覆土、配石中からの出土であり、明確に副葬品と判断しうるものはない。13は配石直下出土の元符通宝である。

これら1～3号土坑は近接しており、また同一レベル上に上部配石が営まれていることから、ほぼ同一時期に属するものと思われる。それらの所属時期を明確にする副葬遺物は乏しいものの2号土坑の土師皿・杯から見ると14世紀頃におよそ位置づけられよう。

4号土坑（Fig.19・20）　A－2－Ⅲ区で検出された。平面形2.5×1.9mの長円形を呈し、1.08mの深さをもつ土坑である。この土坑面には径40cm、厚さ9cmの平坦な板石が置かれていた。土坑内は炭化物層、砂層などが皿状に互層をなして堆積しており、その中に下位の14、16層で完形に近い遺物が出土し、上位では細片が多く出土している。この土坑では、その覆土の状態からすると、中で数回火を焚かれたように考えられるが、炭化物層に焼骨等は検出されていないので、火葬施設とは考えられない。図示した遺物は1・2が土師皿で、3・4が高く細い高台をもち内面に櫛描文を施す白磁碗、6～8が白磁皿である。うち3の高台内露胎部には「王綱(？)」かと思われる墨書が残されている。この他、付表に記したように瓦器碗、陶器類も出土しているが、青磁は小破片が2点と少ない。またこの遺構では土師皿は糸切り底とヘラ切り底と近い数量を示している。12世紀前半から半ば頃に位置づけられよう。

5号土坑（Fig.22）　A－2－Ⅰ・Ⅱ区で検出された。調査区の南側に接し、また西端を2号溝によって切られており全体形は明確ではないが、おそらく不整形を呈していたと思われる。深さ0.5mでなだらかな壁をなす。土坑内は茶褐色砂によって満たされていた。出土遺物のうち図示したものは、1～19が土師皿類で、20～24が白磁碗、25～28が白磁皿、29が白磁四耳壺、30が青磁の壺底部である。13の土師皿の体部外面には、判読できないが仮名文字風の墨書が残されている。このほか、付表に示したように、白磁碗三角玉縁をもつⅣ類、口縁端を水平に引

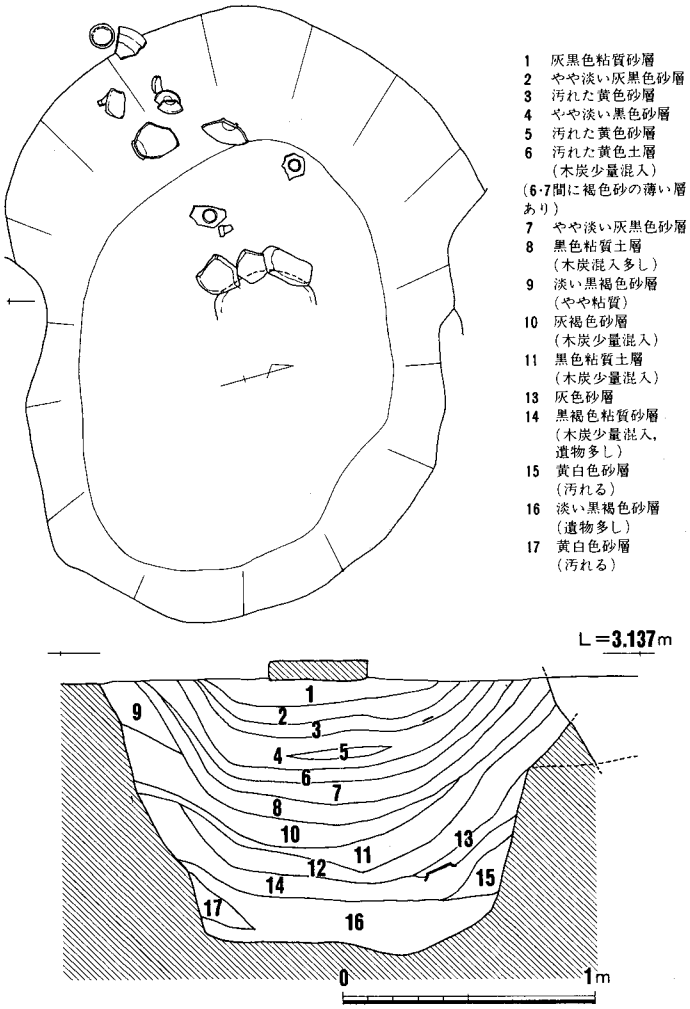


Fig. 19　　4号土坑実測図

き出すⅥ類、内面底の釉を輪状に掻きとるⅨ類が多く見られるが、龍泉青磁碗Ⅲ類なども存在しており、輸入陶磁から見るとかなり時間幅のある遺物が混在しているようである。土師皿のうち小皿にはヘラ切り底が若干含まれるものの杯にはヘラ切りは認められない。全体的には12世紀前半代の遺物が大半を占める。土坑の性格は明確にしえない。

6号土坑　Ａ－２－Ⅱ区で検出された。その大半は調査区外に延びており、全体形は不明である。５号土坑、14号土坑に接しているが、切合い関係は不明。２号溝の一部であることも考えられる。出土遺物は少なく、白磁碗、龍泉青磁碗、陶器の破片が各１点、国産品では、土師質土器破片３点のほか、糸切り底の杯および小皿が各２点とそれらの細片17点が出土したにすぎない。特殊なものとしては窯道具のハマ１点も見られた。

7号土坑（Fig.20）　Ａ－２－Ⅰ区で検出された。２号溝によって切られており、またその大半は調査区外にかかり、詳細は不明である。土坑内には炭化物が多量に含まれており、火葬墓の可能性がある。遺物は調査面積に比べ多く、付表に示した通りである。図示した遺物は１～３が土師杯で、１が糸切り底、２・３がヘラ切り底である。４は腰の折れた青白磁碗で、外面体部を交差する斜めのヘラ削りで作り出した幾重もの先の尖った蓮弁文で飾っている。外面体部下半まで青白釉が施釉されている。また、外底面露胎部には仮名文字もしくは花押状の墨書が残されているが判読できない。５は濁った茶褐釉のかかった陶器で四耳壺の肩部から頸部にかけての破片である。内面は頸部上半まで施釉される。頸部と胴との接ぎ目が明瞭である。

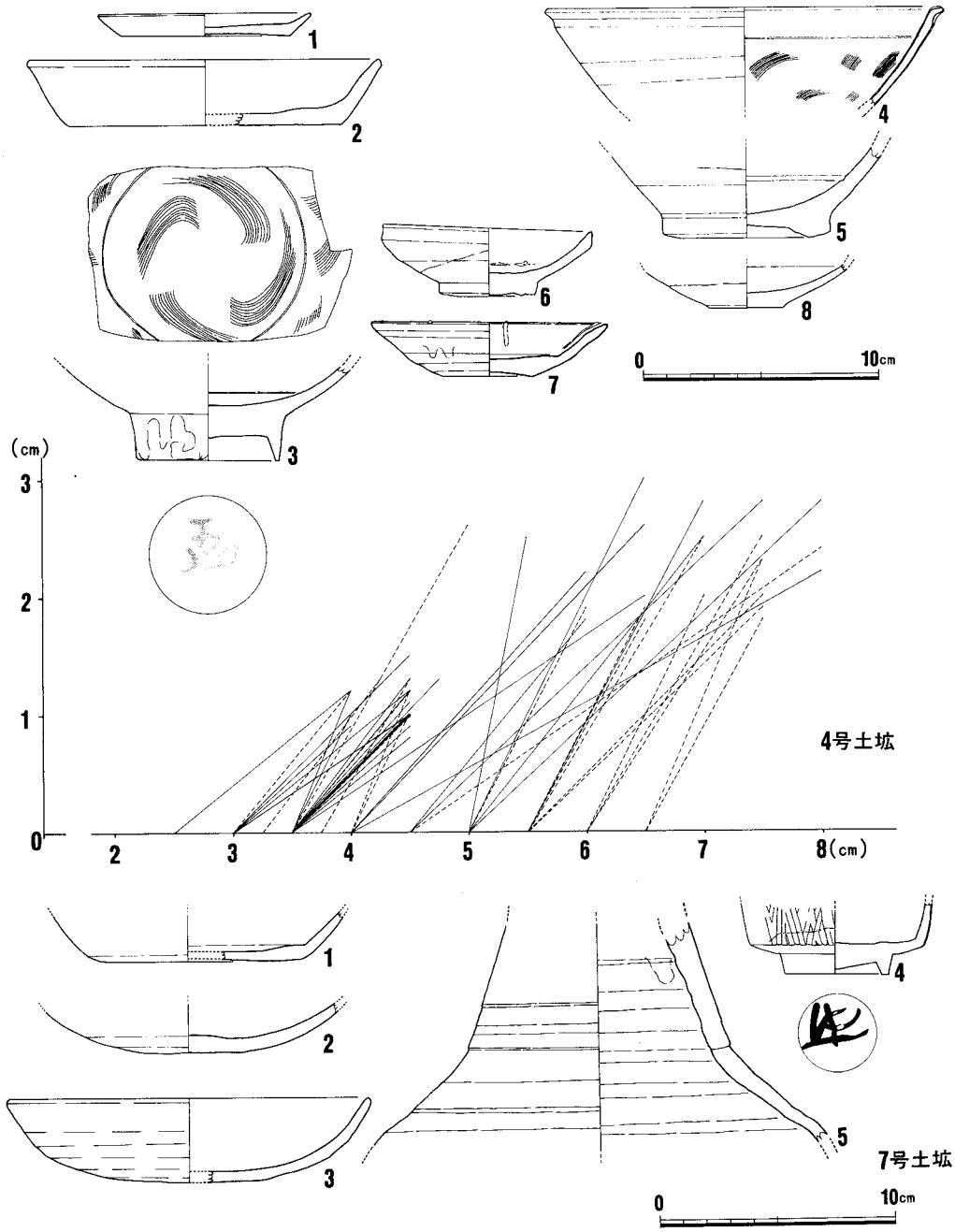


Fig. 20　　4・7号土坑出土遺物

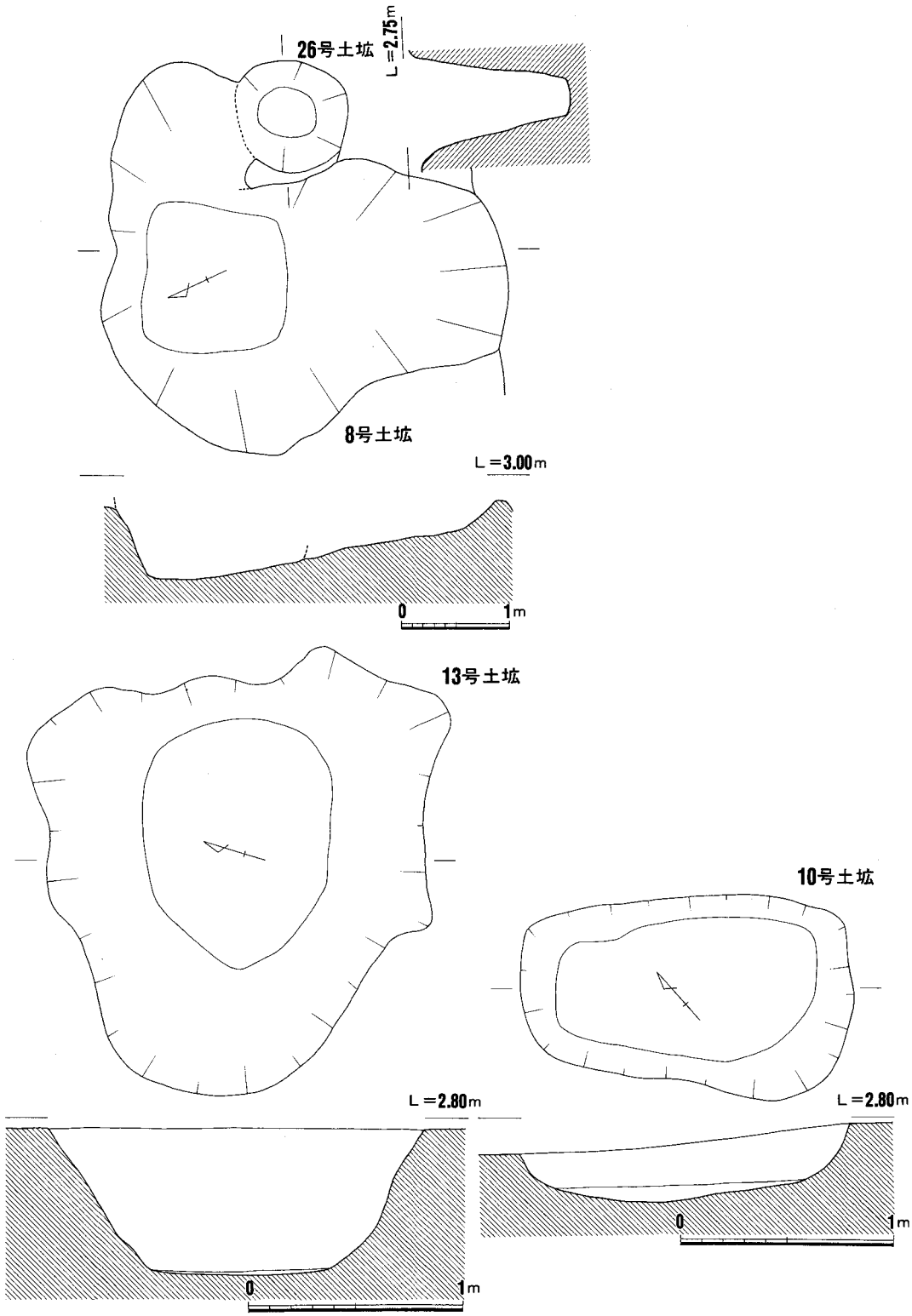


Fig. 21　　8・10・13・26号土坑実測図

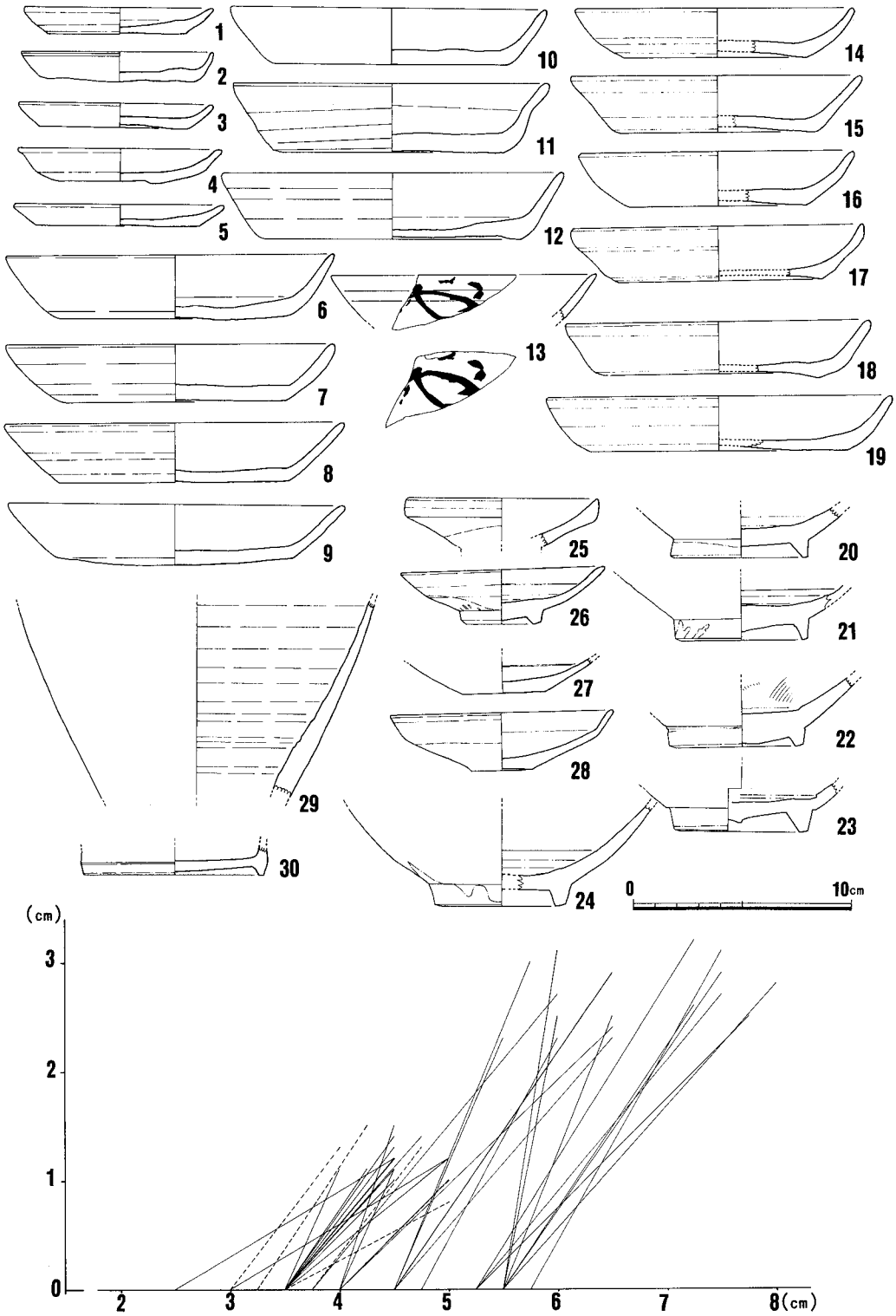


Fig. 22　　5号土坑出土遺物

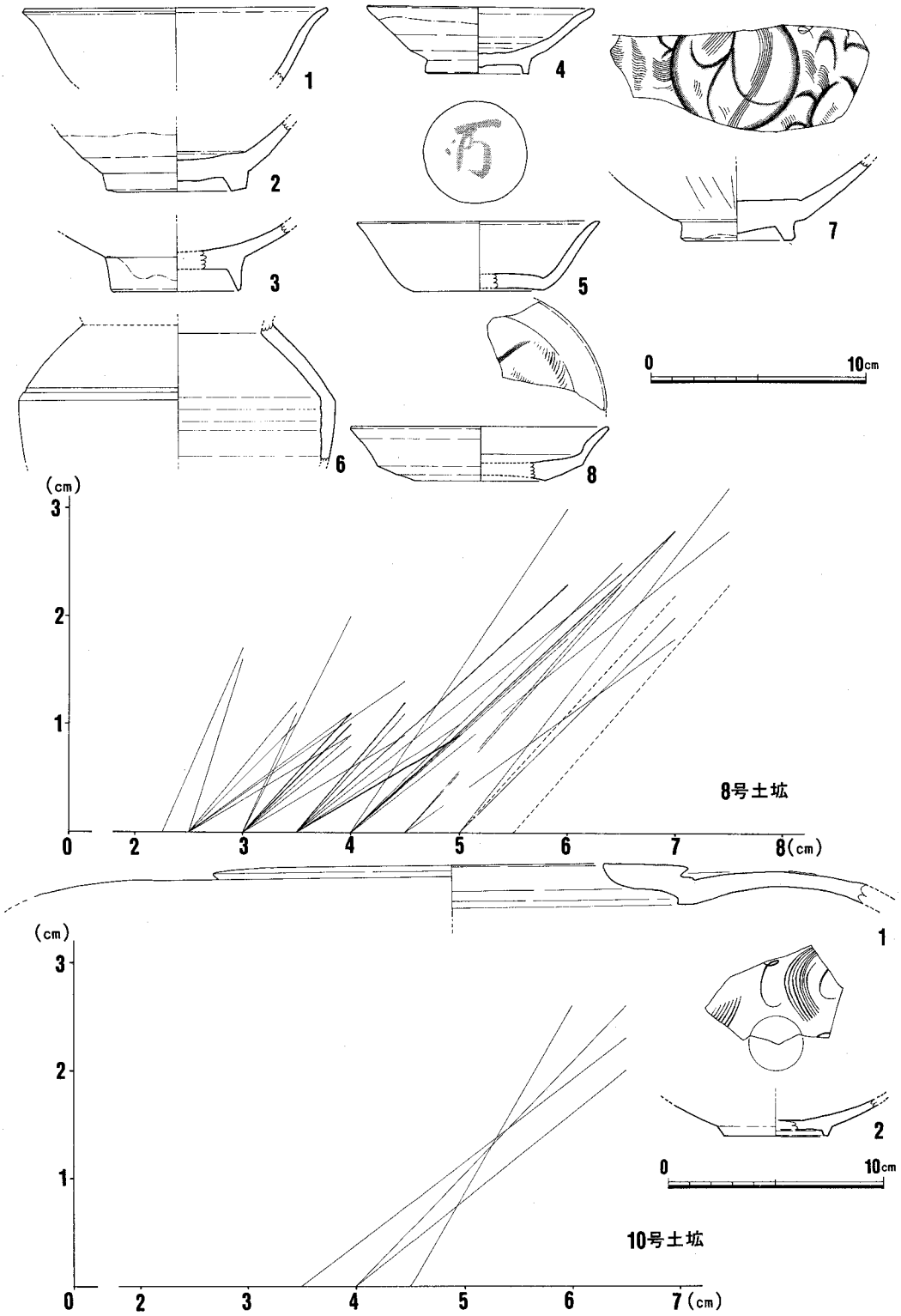


Fig. 23　　8・10号土坑出土遺物

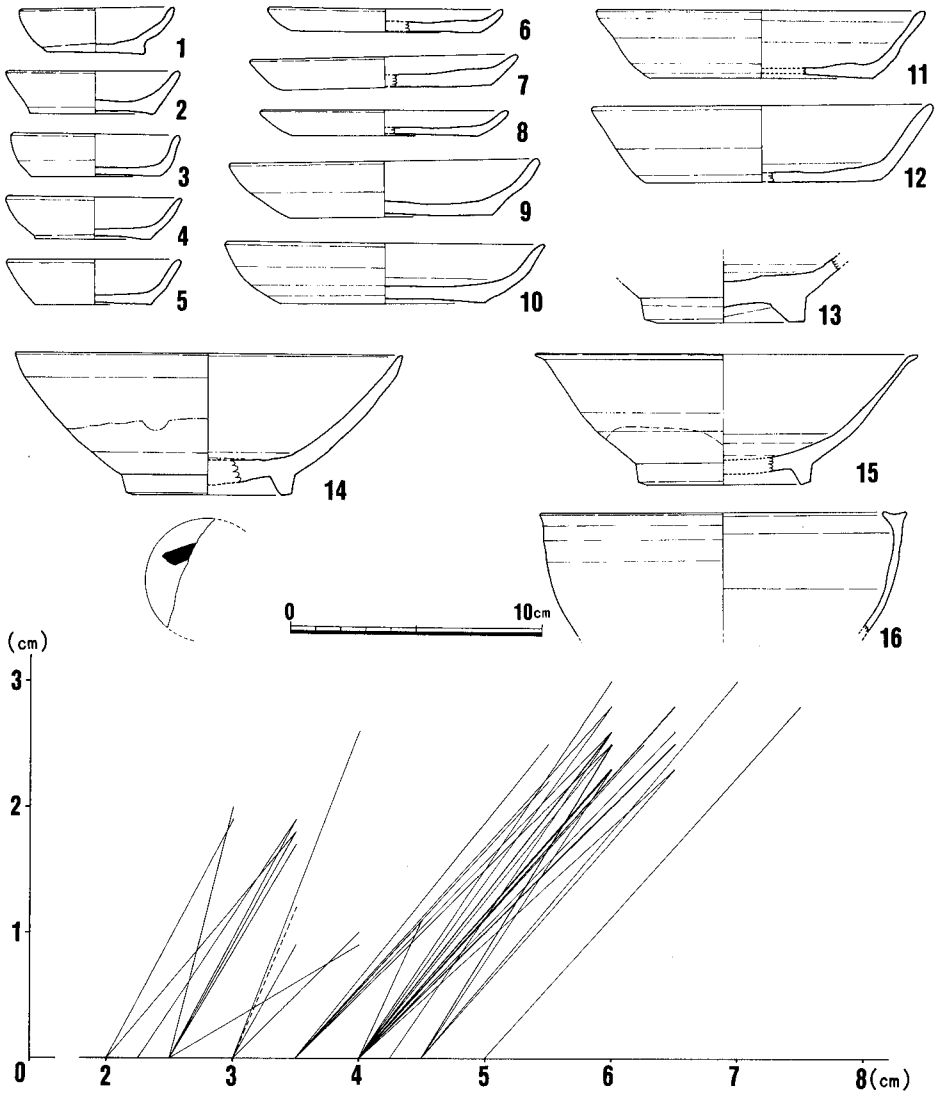


Fig. 24　　12号土坑出土遺物

8号土坑（Fig.21・23）　A－2－Ⅱ区で検出された。26号土坑と接しているが、8号土坑が新しい。不定形の土坑で3.7×3.5mを計り大きいが、深さ0.7mで壁は全体になだらかに傾斜する。出土遺物は付表に示すとおりで、図示した遺物は、1～3が白磁碗、4・5が白磁皿、6が白磁四耳壺、7が内面をヘラ及び櫛状施文具で花文を施し、外面に櫛描文を施した古相の龍泉青磁碗、8が内面見込に櫛描文を施した同安窯系青磁皿である。これらの遺物のうち、1及び5のロハゲの白磁碗・皿が最も新しいもので、この土坑の性格は明確ではないものの、営まれた時期は、13世紀後半から14世期前半に求められよう。

9号土坑　A－2－Ⅱ区だが、自然地形の浅い凹みで土坑とは認め難く、欠番としておく。

10号土坑（Fig.21・23）　Ａ－２－Ⅲ区で検出された。遺構北東部を土留壁柱によって切られている。残存する一辺の長さは1.3ｍで深さ0.3ｍ、方形もしくは長方形を呈するものと思われる。出土遺物は、ほとんど無頸に近く、肩部が水平に内側にすぼまり、平坦な口縁を辛うじて作り出す陶器四耳壺（１）や、内面をヘラ及び櫛状施文具による水波文を施した青白磁碗（２）など図示したもののほかに、白磁碗では見込の釉を輪状に削り取るⅨ類２点を含め計４点、瓦、須恵器、滑石製石鍋など各１点が破片として出土している。土師杯４点もあった。遺構の性格は明らかではない。塵芥等の処理用であろうか。

11号土坑　Ａ－２－Ⅲ区で検出された。その大半は土留壁柱によって切られており、全体形、その性格等は不明である。遺物もほとんど検出されてない。

12号土坑（Fig.24）　Ａ－２－Ⅲ区で検出された。13号土坑と接しているが、その前後関係は明確でない。長軸2.5ｍ、底辺2.5ｍの不整三角形を呈している。深さ40～60cmで浅く、壁は、なだらかな傾斜をもっている。土坑内の覆土は黄褐色の砂質土である。出土遺物は付表に呈示したとおりである。図に掲げたものは１～12が土師皿・杯で、13～15が白磁碗、16が陶器である。土師皿類では、実測図及び土師皿計測表からも看取されるように、底径４～６ｍで器高２cm前後の器高の高い土師小皿の多いのが特徴的である。そのほとんどが糸切り底である。13・14は見込の釉を輪状に掻きとる白磁碗Ⅸ類のもので、14の高台内側露胎部に墨書が残されているが、破片であるため内容は不明である。15はⅣ－１類に属し、口縁端が水平に外に開く。16は赤茶っぽく焼締まり、黒褐色の光沢のある釉を施した鉢形の陶器である。胎は薄く緻密である。口縁に受けがつき、恐らく蓋が付くものと思われる。通例この形態のものは取手や注口がつくが、これも恐らく行平形のものであろう。13世紀頃と思われるものの性格は明確ではない。廃棄物処理用の土坑であろうか。

13号土坑（Fig.21）　Ａ－２－Ⅲ区で検出された。12号土坑に接するが、その前後関係は明確ではない。1.9×1.8ｍの不整円形を呈し、深さ約80cmを計る。土坑内には薄く汚れた茶褐色砂が充たされていた。この中には若干の炭化物が含まれていた。遺物は、ほとんど含まれておらず、その性格は不明である。

14号土坑（Fig.25・26）　Ａ－２－Ⅱ区で検出された。4.2×4.0ｍ程の不整円形の平面形をなすと思われるが、一部壁にかかり全体形は不明である。深さ1.25ｍ程で、地山黄白色砂層に皿状に掘り込まれている。井戸の掘り方と考えられるが、井戸枠、井筒等の施設は認められなかった。地山が砂層であるために崩壊したものであろう。遺物はほとんどが破片である。恐らく、井戸掘削時と、その崩壊した時点での遺物が混在しているものと思われる。図示した遺物は、１～11が土師皿、12が青白磁碗、13･14が白磁皿、15～17が白磁碗、18が龍泉青磁碗、19が土錘である。土師皿類は、５点の杯と28点の小皿に分れる。うちヘラ切り底の小皿１点を除いて、い

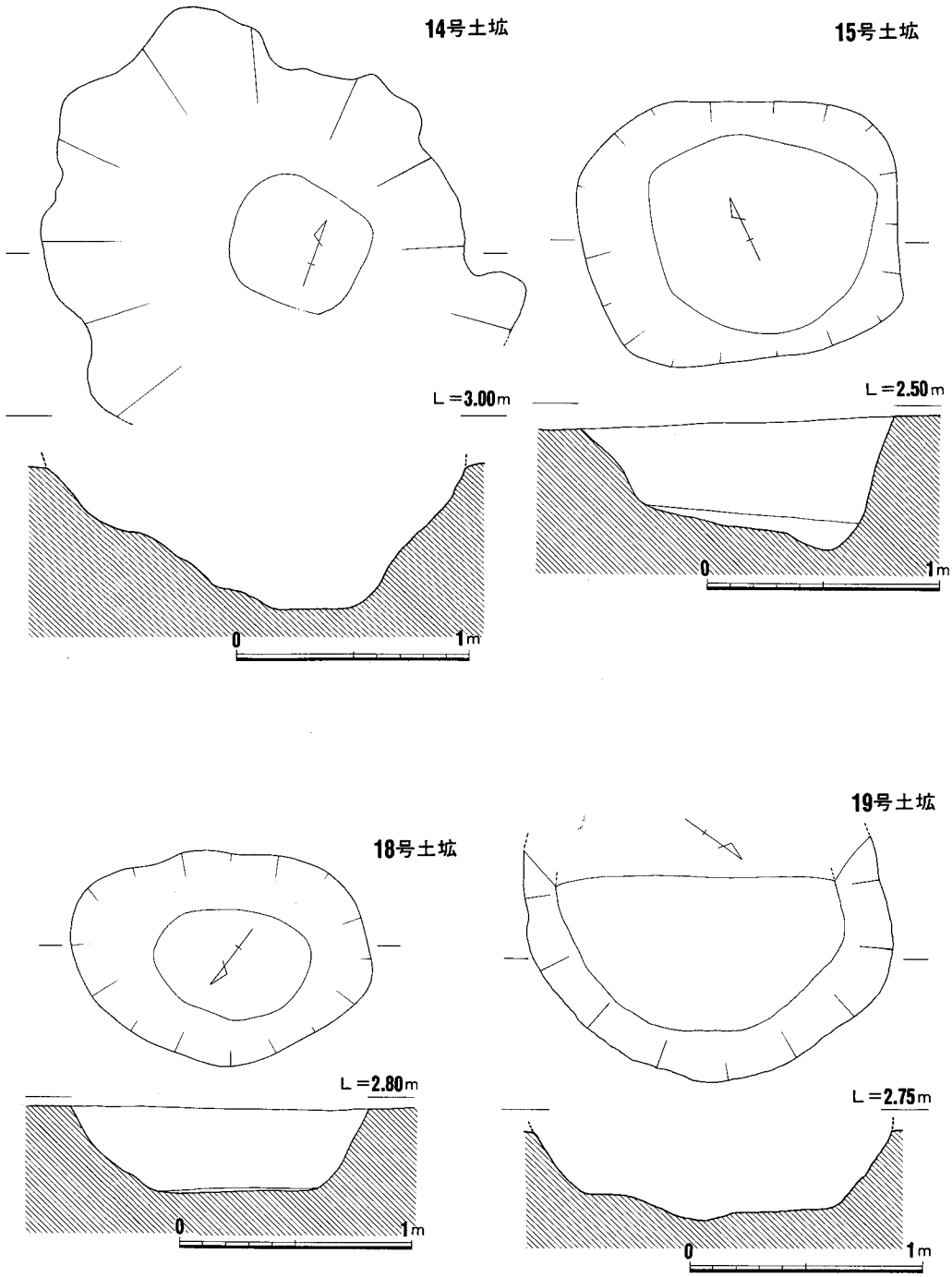


Fig. 25　14・15・18・19号土坑実測図

ずれも糸切り底である。これらの小破片は134点であった。12の青白磁碗は口縁部を外反させるもので器壁がやや厚くシャープさに欠ける。青味の薄い透明釉がかかる。13は高台をもつⅡ類の白磁皿、14は白磁の平底皿Ⅲ類である。15はⅨ類の白磁碗、16がⅥ類の白磁碗、17が三角玉縁のⅣ類白磁碗である。18は外面をヘラ切りによって陽刻した蓮弁文で飾る龍泉青磁碗で、内面は無文である。これら図示したのを含めて、それ以外に白磁碗Ⅳ類12類、Ⅵ類17点、Ⅸ類６点、白磁の高台付皿Ⅱ類３点、平底皿Ⅲ類３点、その他２点、青磁龍泉碗１点、同安系碗１点、陶器Ａ群２点、Ｂ群10点、Ｃ群四耳壺２点、こね鉢２点、口縁内折れの大甕２点が出土しているものの、いずれも破片である。

15号土坑（Fig.25・27）　Ａ－２－Ⅱ区で検出された。1.4×1.2mの隅丸長方形の平面形をもつ土坑である。深さは55cmを計り、壁は長軸の一辺がなだらかで他辺はやや急になっている。地山黄白色砂層まで掘り込まれている。出土遺物は破片が多く、廃棄物処理用の土坑と思われるが、土師小皿の中には完形が多い。出土遺物の数量は、付表に示すとおりであるが、白磁碗ではⅣ・Ⅸ類が目立ち、口ハゲ碗がはいっているのが特徴的である。龍泉青磁碗では、鎬蓮弁およびヘラ描蓮弁をもつ類（Ⅱ－１・２）にⅠ－５・６類の古相をもつものも多く混在する。計測グラフに示したように土師皿類はいづれも糸切り底で、うち小皿は底径６～８cm、口径８～９cmに集中し、器高は低く１cm前後のものが多い。これらの土師皿類は胎土には挾雑物が少なく比較的滑らかで焼成もよい。図示した遺物は1～7が土師皿、8～12が土師杯、22は土師質土鍋である。13・14は白磁碗であるが、13は口縁端をやや外に引き出した口縁無釉の口ハゲ碗で、14は三角玉縁をもつⅣ類碗の底部破片である。15～19は龍泉青磁碗で、15が外面無文で内面口縁直下に一条の圏線をめぐらすもの、16が外面にヘラ描きの蓮弁文を施すⅡ－2類、17が外面にやや幅広の鎬蓮弁文を配すⅡ－１類である。16・17ともに茶味の強いオリーブ色透明釉がかかる。18は内外面無文で底部破片、19は見込の沈圏線内にヘラの片切り彫による飛雲文を施している。20・21は青磁皿で20は同安窯系、21は龍泉系である。23は口縁がすぼまり外側に三角に突出するＢ群に属する鉢である。これら出土遺物は、各期の遺物が混在しているが、それらのうちで最も新相のものは口ハゲの白磁碗、龍泉青磁蓮弁文碗の一群でこの遺構の営まれた年代も13世紀末から14世紀前半頃と考えられる。

16号土坑（Fig.28）　Ａ－２－Ⅲ区で検出された。調査区の東隅にかかり、その全体形は不明である。おそらく長方形に近い形状をなすものであろう。この土坑内部は炭化物を多量に含む灰層で満たされており、火葬墓もしくは火を焚く施設等の性格が考えられる。この土坑の出土遺物は土師皿類が中心で杯15点、小皿27点であり、いずれも糸切り底である。また、それぞれの小破片は126点、54点を数え、どちらに属するか明確でない細片は126点になる。土師皿類では、径が小さく器高の高い特小皿が特徴的である。この他国産品には古窯系の陶器２点、

須恵器、瓦器各１点、土師質土器３点、瓦質土器２点、瓦が３点、土錘１点が出土しているがいずれも小破片である。白磁碗はⅣ類の５点を中心に13点があり、龍泉窯系碗はⅠ類３点、Ⅱ類２点その他１点がある。皿には龍泉、同安ともに1 点づつがある。同安系碗はⅡ類が４点ある。陶器にはA群のものが11点、B群が８点、C群５点があり、その他群不明の大型容器が４点ある。これら輸入陶磁のほとんどが小破片であって、混入したものと考えられる。

17号土坑（Fig.29）　A－２－Ⅲ区で検出された。A－２区では半分が壁にかかっていたがA－１－Ⅲ区で検出された40号土坑と同一遺構である。井戸掘り方である。平面形はほぼ円形で径2.3ｍ、深さ1.2ｍを計る。内部には赤味を帯びた茶褐色土がブロック状に雑然と堆積しており、ある時期に井戸本体が崩壊したものと思われる。井戸枠は検出されなかったが、掘り方最下面に人頭大礫が円形に数個並んでおり、これが井戸枠の痕跡を辛うじてとどめているにすぎない。出土遺物のうち図示したものは、１～４が土師小皿、５が土師杯で、６は印花文の青白磁合子蓋で、上面に相対する二羽の鳳凰を配し、その間に草花文を置く。外面体部下半以

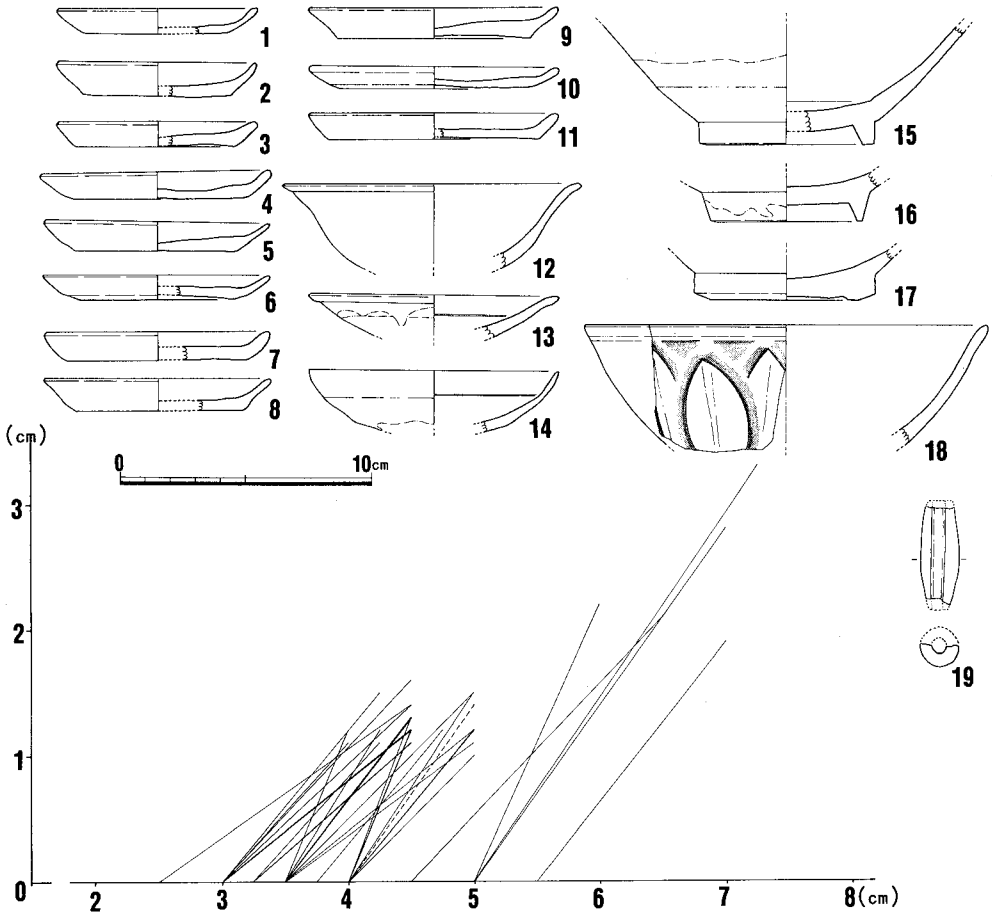


Fig. 26　14号土坑出土遺物

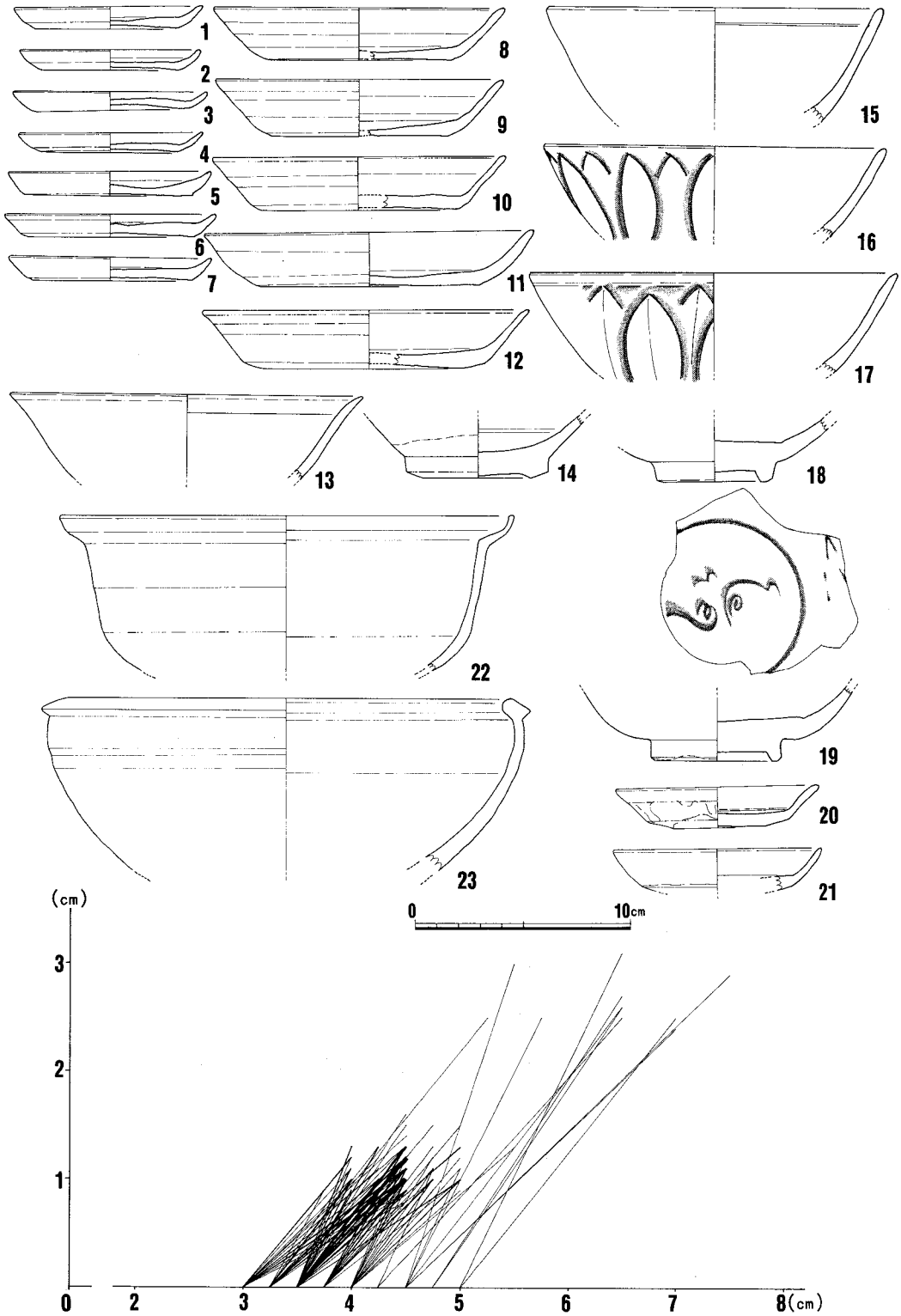


Fig. 27　15号土坑出土遺物

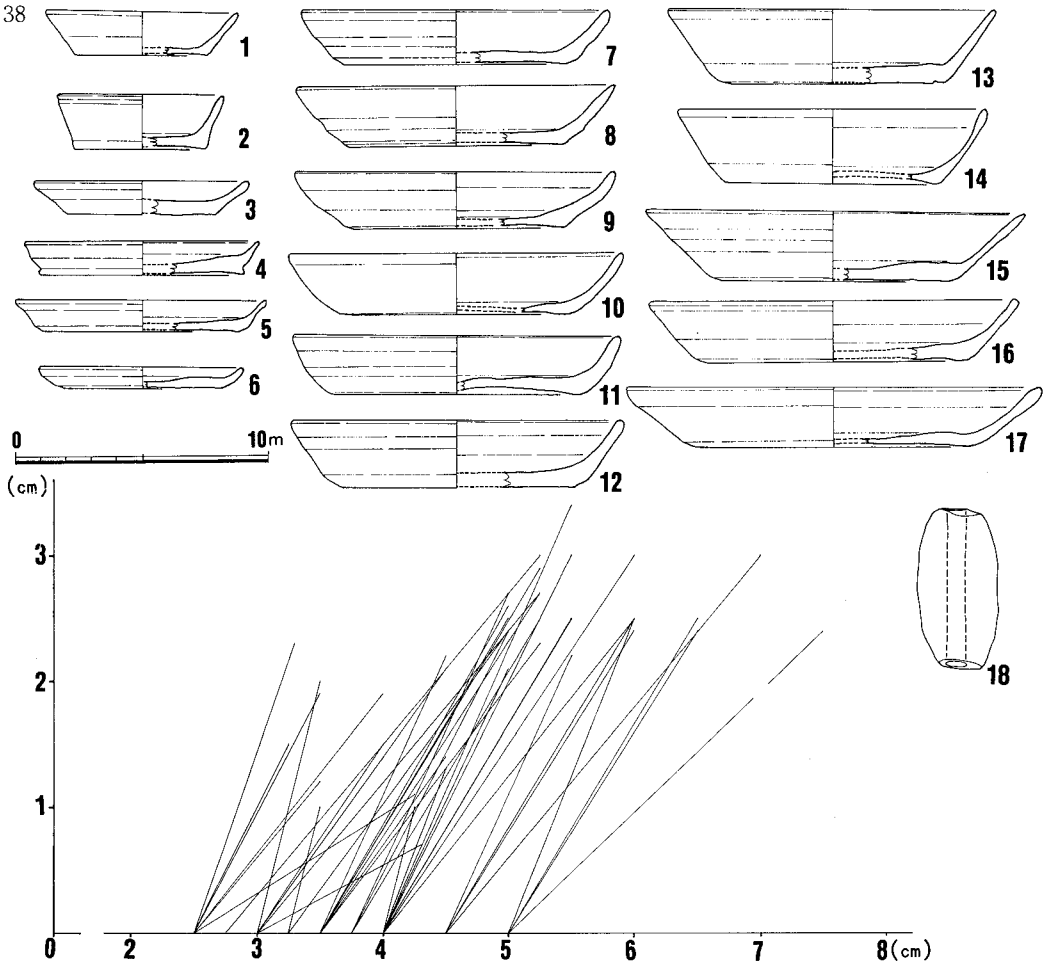


Fig. 28　　16号土坑出土遺物

上と内面天井部に青白釉がかかる。外面が厚く、内面はうすい。釉尻は赤褐色に焼ける。

7・9～13は白磁皿で9・10・13は高台をもち、以外は平底である。11の底部露胎部には二行に墨書が残され「五丁（十カ）…、八万□」と読める。8はⅤ類の白磁碗で、その高台内露胎部にも墨書が残され、「五十内（カ）」と読める。14は白磁四耳壺体部下半の破片である。15、16は龍泉窯青磁碗である。15は高台が小さく、体部が斜め外方に直ぐにのび、口縁が外反するもので外面を櫛状施文具による方射状の刻線で飾り、内面にはヘラ片切彫りと櫛がき文とによって草花文を施す。胎は灰色で精良、緑の強いオリーブ釉が高台畳付以内を除いて全面にかかる。龍泉碗0類の古い時期のものである。16は龍泉碗Ⅰ－1類で、口縁を外反させ、外面体部にヘラ片切彫りの蓮弁を描き、その上に櫛状施文具の掻き目を施す。内面はヘラおよび櫛状施文具によって劃花文を施す。胎は灰色で15よりやや粗い。17陶器皿で、口縁が肥厚し、外底面を上げ底状にえぐる。この他、柿釉を施した天目碗破片がある。この17号土坑から出土した遺物は土師

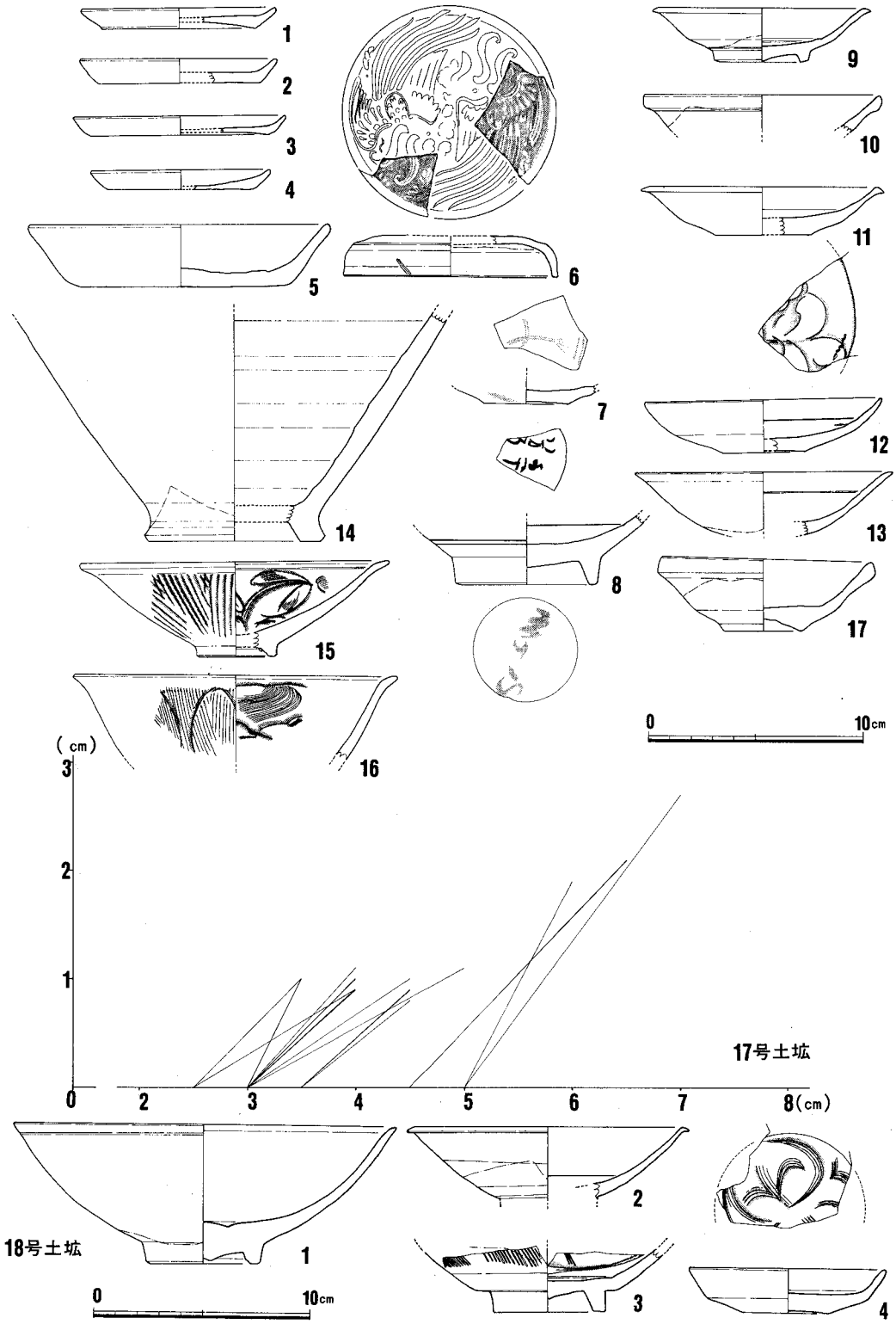


Fig. 29　　17・18号土坑出土遺物

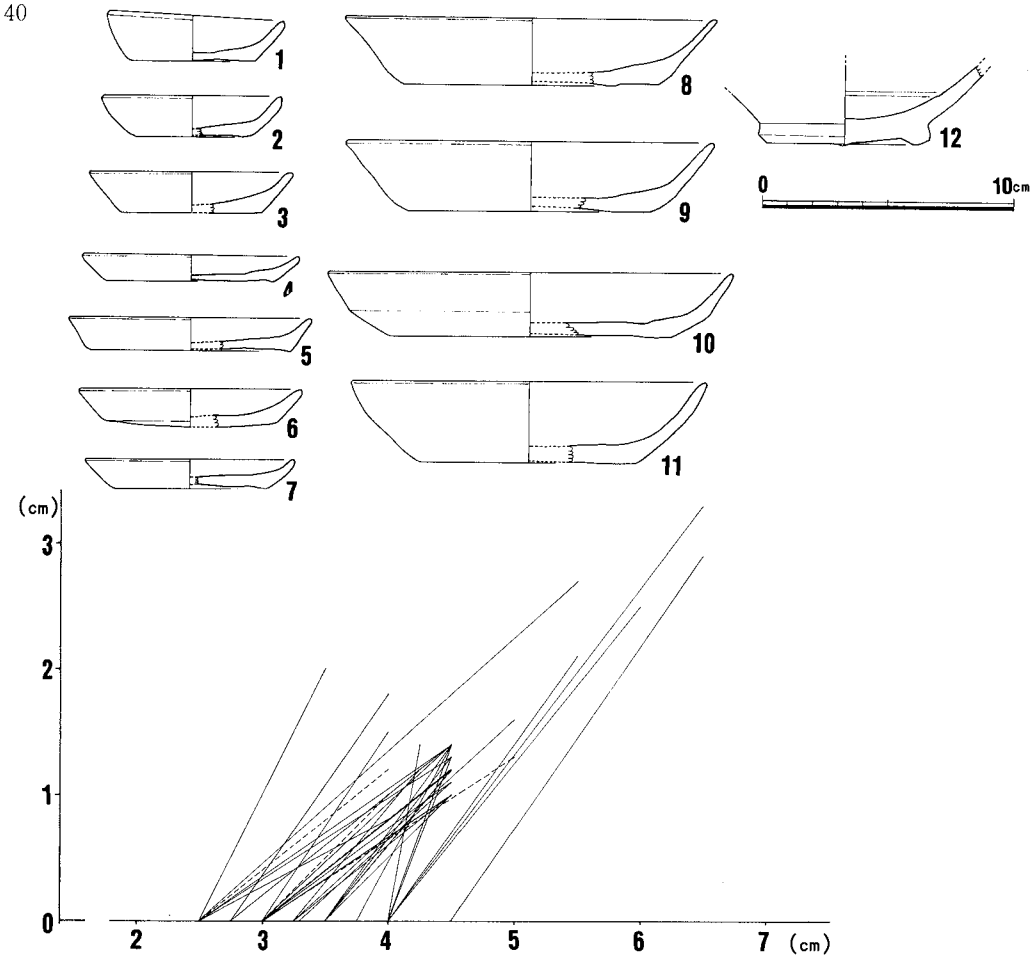


Fig. 30　19号土坑出土遺物

皿類がほとんど糸切りであるが、陶磁類には古相のものが多い。井戸掘削時に下層から紛れ込んだものであろうか。

18号土坑（Fig.25・29）　A－2－Ⅱ区で検出された。長軸1.3m、幅0.9mの楕円形をした土坑で壁はなだらかに立ち上り、底面は平坦である。深さ40cmを計る。遺物量はそれほど多くなく、白磁碗４点、白磁皿６点、青磁は龍泉碗Ⅰ類７点、皿Ⅰ類１点、同安系碗Ⅱ類７点、皿１点があり、青磁には輪花碗１点がある。陶器はA群、B群、C群、その他がそれぞれ11点、１点、５点、１点を数え、国産品には、焼き締まった土師小皿21点、瓦11点があったにすぎず、その大半が小破片である。図に掲げたものは次のようである。１が白磁碗で通例みない器形をもち器壁は外方に丸味をもって立ち上り、口縁端をわずかに外反させる。見込には小さな茶溜りを作り、中心部は高まりを見せる。底部には同安窯系青磁碗Ⅱ類のような高台をもつ。胎は灰色で気孔がある。高台脇以上に灰色の釉が施され、ピンホール・貫入がある。２は小振りの白磁碗

でⅥ－３類にあたる。３は同安窯系青磁碗Ⅱ類にあたるが、焼きが甘く胎は肌色、釉もわずかに青味のある肌色の発色をしており、細かな貫入が目立つ。４は見込に櫛状施文具で草花文を刻した龍泉青磁平底皿Ⅰ－１類である。

19号土坑（Fig.25・30）　Ａ－２－Ⅲ区で検出された。東側半分を壁によって切られているがほぼ円形のプランをもつ井戸掘り方である。径3.2ｍ程度で、深さは0.75ｍを計る。22号土坑を切っている。井戸枠等の構造は確認されなかったが、掘り方最下面に人頭大の礫数個があった。この井戸掘り方も遺物の混在がはげしく、そのほとんどが破片である。出土遺物は次のようである。白磁碗にはⅣ類10点、Ⅵ類12点、Ⅸ類７点、その他判別のつかない小破片30点があり、皿には高台付Ⅱ類２点、平底Ⅲ類31点、同Ⅶ類１点がある。青磁には龍泉碗Ⅰ－５、６類がそれぞれ６点、１点、皿には平底のⅠ－５類３点、同安窯系には皿２点がある。この他、青白碗２点、皿２点があり、陶器ではＡ群３点、Ｂ群10点、Ｃ群10点のほか、群不明の大型容器７点、皿１点があった。国産品には須恵器23点、古墳時代土師器26点、瓦器碗19点、土師質土器５点、瓦11点があり、鉄釘７点も出土している。土師皿類には糸切り杯が５点、糸切り小皿25点、ヘラ切り小皿５点のほか小破片 264 点があった。時期決定は困難であるが13世紀後半以降に営まれたものであろうか。

20号土坑（Fig.31・32）　Ａ－２－Ⅲ区で検出された。長軸2.5ｍ、幅1.2ｍの不整長円形のプランをもち、深さ0.5ｍを計る土坑である。西側壁はなだらかで東側は急である。主軸は真北を向き、隣接する22号土坑と同一方位をとり、後述する溝の基本的な方位と一致しているところが興味深い。土坑内は、炭化物を多量に含む黒色砂質土で覆われ、中からは微細な焼骨片が検出されている。火葬墓もしくは火葬施設と考えられる。遺物はそれ程多くない。その数量は付表に示すとおりである。図示した遺物は、１・３が三角玉縁で低い高台をもつ白磁碗Ⅳ類で、２・４は見込の釉を輪状に削る白磁碗Ⅸ類である。釉は２が明灰色の、４が緑灰色の発色を見せる。また、５は龍泉青磁平底皿Ⅰ－１類に該当する。６は磁胎で緑灰色の青磁釉を施す長頸壺の破片である。土師皿類にヘラ切り底は認められず、糸切り底のみである。銅銭(7)は天禧通宝である。

21号土坑（Fig.31･33･34、PL.10－(**1**)）Ａ－２－Ⅲ区で検出された。20号土坑に接し、４号土坑を切る。北端を壁によって切られ、全体の規模は不明であるが、長軸現在長２.５ｍ、幅約1.5ｍの不整長円形を呈しており、深さ1.15ｍと深い。横断面形はＵ字形に近い。土坑内には炭化物を多量に含む黒色土や灰が層をなして堆積している上、中からは焼骨片が多量検出されており、更に棺釘と思われる鉄釘や、蔵骨器と思われる須恵質の大型壺の出土から、20号土坑と同様に火葬墓もしくは火葬施設であると考えられる。土坑内には人頭大の礫数個が置かれていた。先述したようにこの土坑の長軸も真北の方位をとっており、溝の方位との関係が興味深い。遺物は比較的多量で、火熱によって釉や胎に変化を起こしているものも多い。

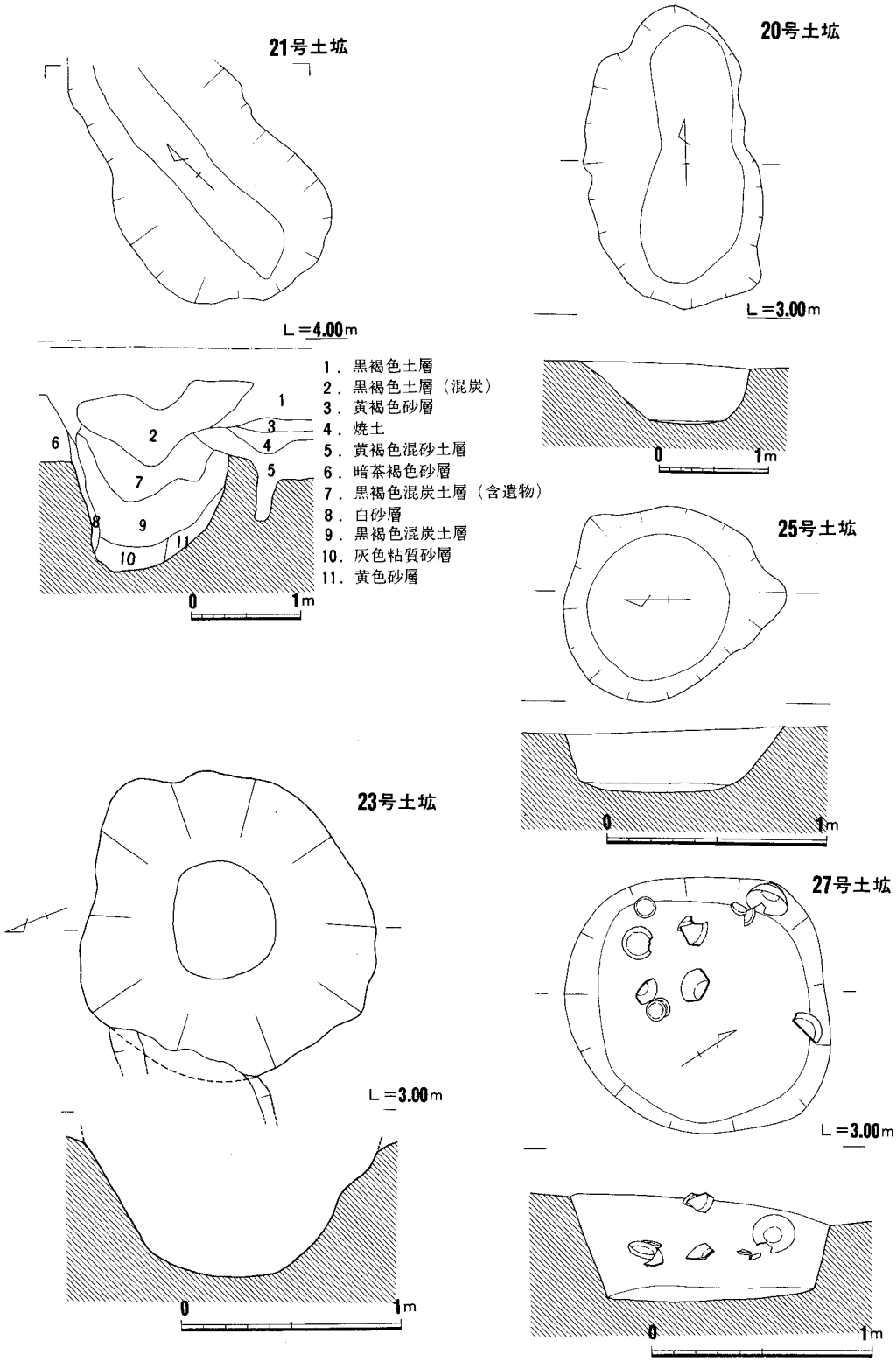


Fig. 31　20・21・23・25・27号土坑実測図

出土遺物の数量は付表に掲げたとおりであり、ここでは図示した遺物について簡単な説明を加えよう。１～12は土師小皿で、土師皿類計測グラフに示したように底径は６～７cm、口径８～９cm、器高１cm前後に集中し、すべて糸切り底である。13～19は土師杯で、底径９～11cm、口径13cm前後、器高２cm前後に集中する。これもすべて糸切り底である。これら土師皿類には、火葬の際の火熱によって焼き締められたものも認められる。20～22は青白磁である。20は型作りの合子の身で体部外面に菊弁がある。21、22は同形同大の平底皿で青白釉を内外面施釉した後にカンナ状工具で底部脇の器壁を釉ともに削っている。底部は露胎である。この他、口ハゲの底部全面施釉で、内面に魚藻文を施した型作りの平皿もある。23～25・30は白磁碗で、23は見込の釉を輪状に掻きとるⅨ類、24がⅣ類、30がⅥ類、30がⅥ－３類に該当する。26～29は白磁平底皿で、26・27は口ハゲ、28、29は口縁を外方につまみ出すⅣ－２類にあたる。このうち29には見込にヘラ描きの蓮華文が刻まれている。31・32は高台付の白磁皿で、いずれもⅡ類に属

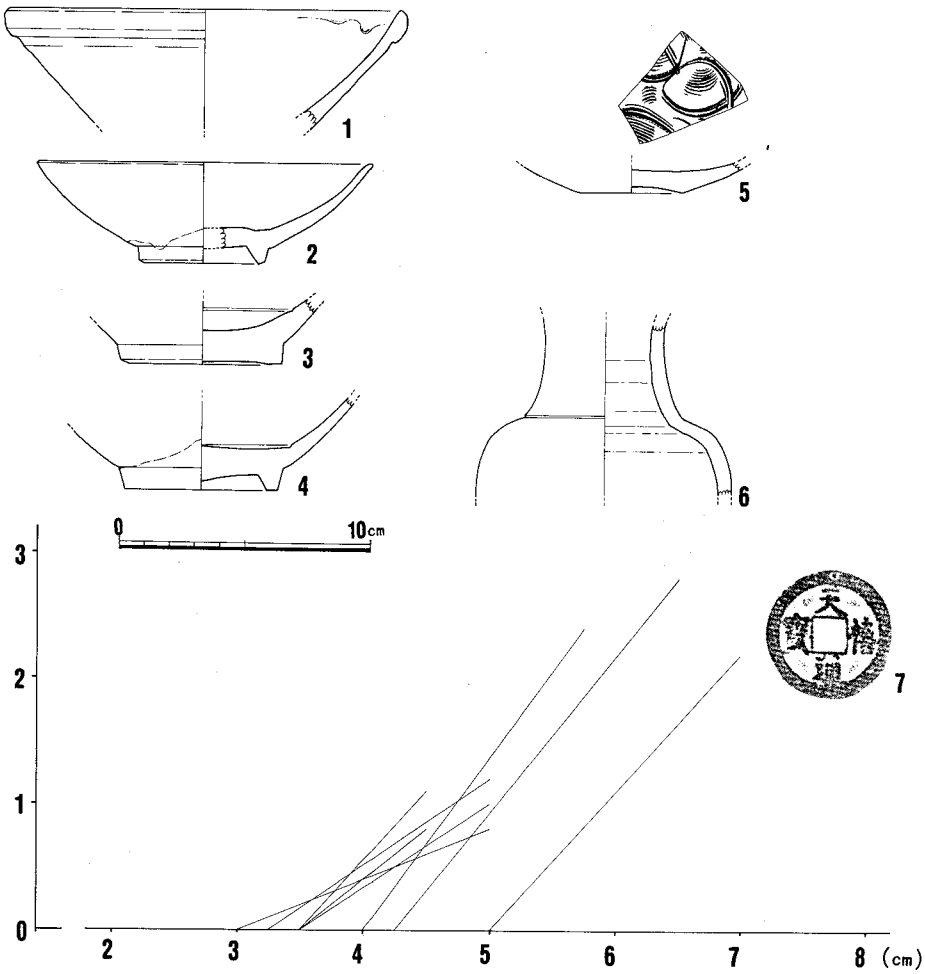


Fig. 32　　20号土坑出土遺物

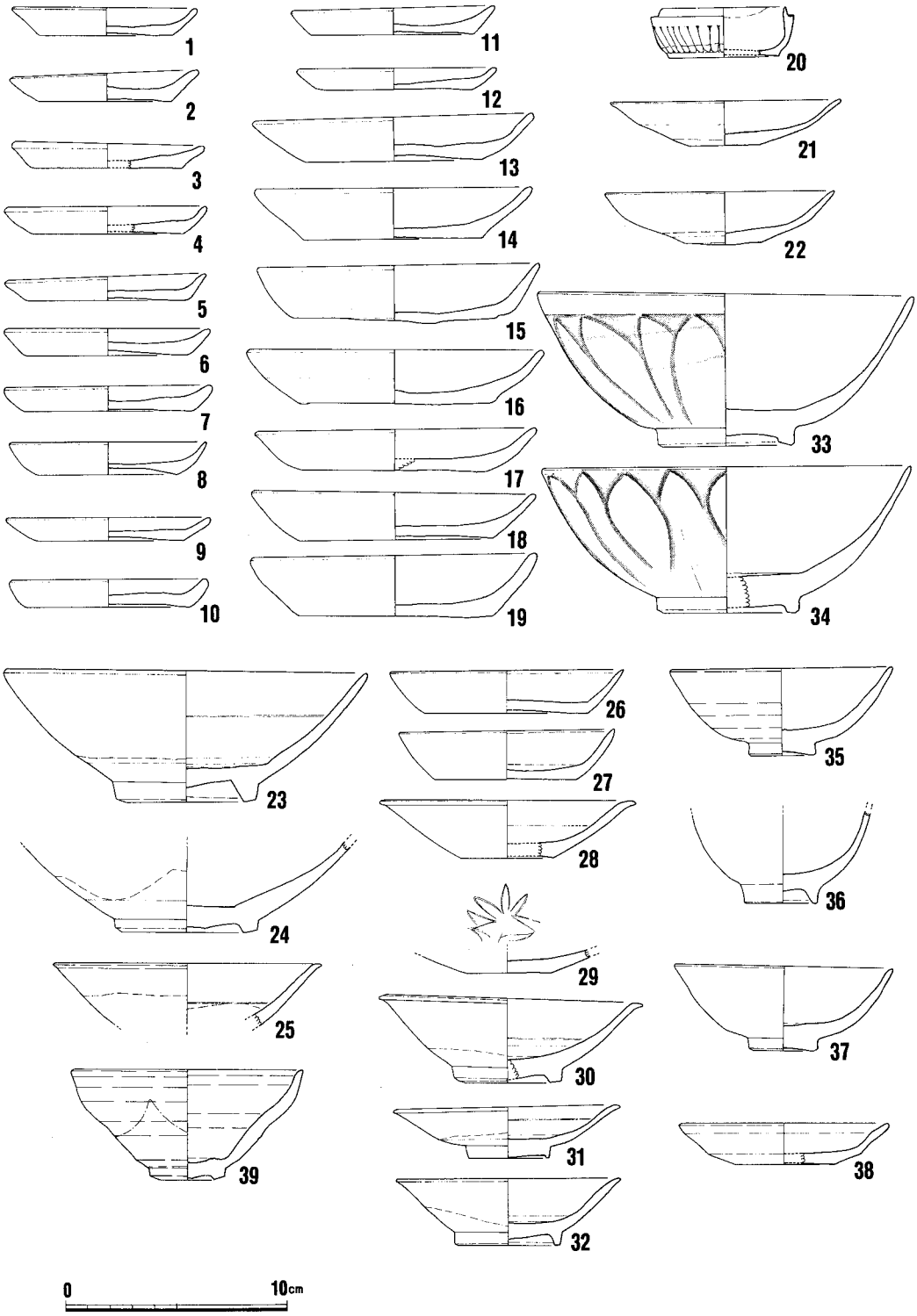


Fig. 33　21号土坑出土遺物（1）

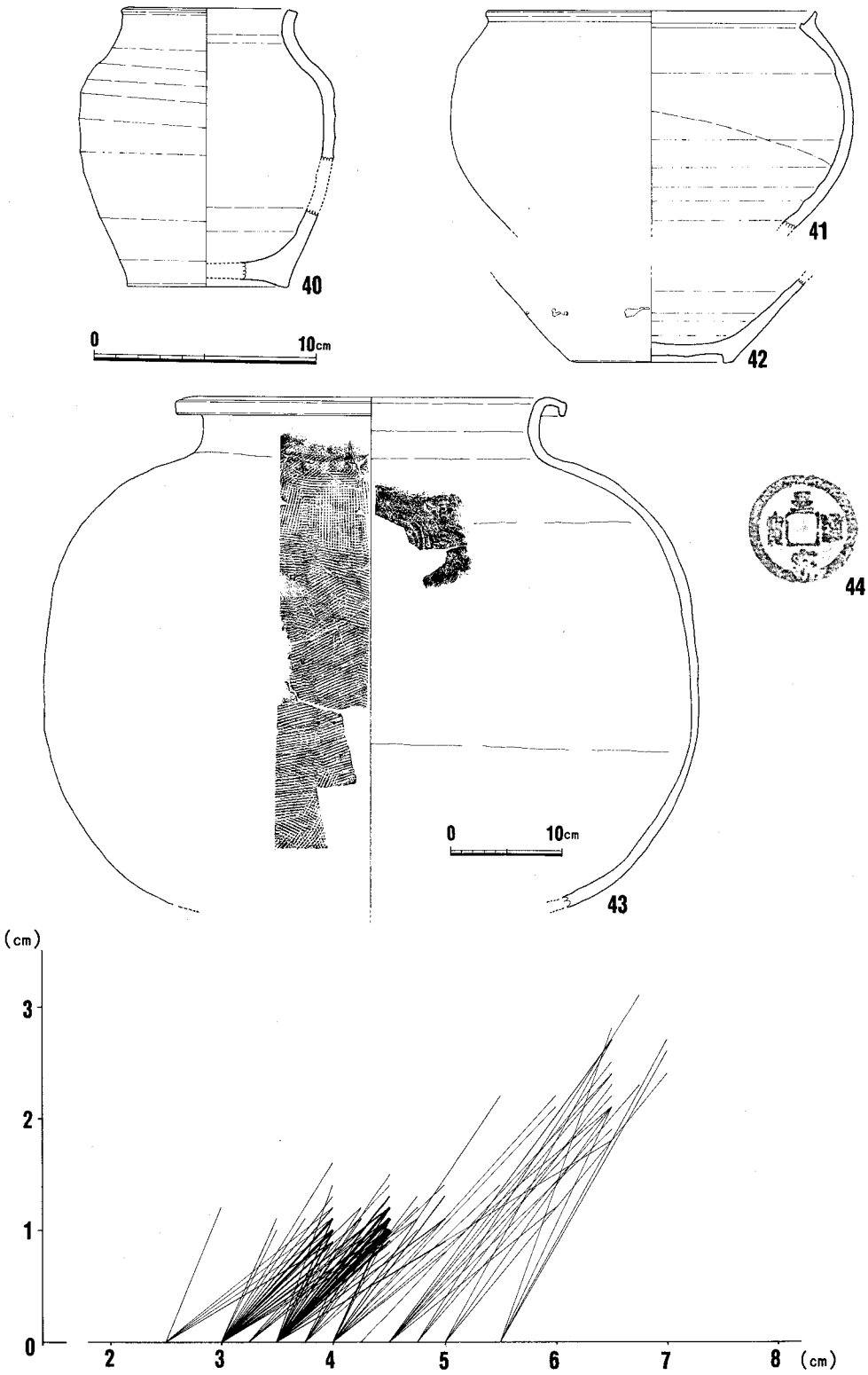


Fig. 34　　21号土坑出土遺物（２）

している。この他、白磁には肩部に花卉唐草の浮文を型押しで施し外面に貫入の多い灰青釉をかけた小型の壺があった。これはフィリピン等南方に多く見られる器形であり、元代に位置づけられている。33・34は外面にヘラ切りの蓮弁を持つ龍泉青磁碗でいずれも茶味の強いオリーブ色の釉がかけられている。33の見込には「金玉満堂」の文字がスタンプされているが、辛うじて「玉」の文字のみが鮮明に見える。この33は火熱の影響が著しく、急激な温度変化によって生じるPotlid 現象のあばた状の凹みが多く見られる。35～37は青磁小碗である。35、37は茶味強いオリーブ色の釉がかかる。出入口２・３区１号土坑で出土した龍泉窯小碗（Fig.94―15）に器形は類似するが、口径が更に小さく、高台のえぐりが少なくわずかにアーチ状に削るのみであるところに特徴がある。時代的に後出する器形なのであろう。38は同安系青磁の平底皿である。39は黒釉磁（天目）碗で、火熱の影響によって釉が縮緬状に縮んでいる。この他火熱によって釉が沸騰したもう１点の完形品があった（PL.10―(2)）が、盗難にあった。陶器にはＢ群にはいる頸のすぼまった短頸壺(40)や、鉢（41、42）などがある。また、43は須恵質の大壺で、胴部はほぼ球形をなし、頸部は短かく直立し、口縁は外に開き更に端部は下がる。内面は同心円文の叩き目が残り、外面には平行線の叩き目が残る。この大甕は、19号土坑をはさんで西側にある22号土坑出土の破片と接合した。後にも述べるが、このことによって21号土坑と22号土坑は同一時期に営まれたものであると言える。このほか、銅銭（皇宋通宝）が出土している。これら21号土坑出土遺物は、ほとんどが副葬品であると考えられるが、その数は多く、一体だけの火葬とは考えられない。多数の遺体を荼毗に付すような火葬施設であろう。おそらく13世紀後半から14世紀前半頃に位置づけられよう。

22号土坑（Fig.35）　Ａ－２－Ⅲ区で検出された。Ａ－１・２区の境にあたる。19号土坑（井戸）の掘り方によって大半は切られている。現存長軸0.9ｍ、幅0.5ｍを計るが、本来は20・21号土坑と同様に長円形をなすものと思われる。主軸の方向は、20・21号土坑と直角、すなわち東西方向にとっている。10㎝程の浅い皿状の土坑で、内部には木炭等がぎっしり詰まっており、また焼骨片が出土している。人頭大の石数個も置かれている。蔵骨器かと思われる大型の須恵質壺も出土し、これは先に述べたように21号土坑のものに接合した。これらの状況から22号土坑も20・21号土坑と同様の火葬墓もしくは火葬施設であると判断される。出土遺物は多くない。白磁碗はⅥ類２点を含む４点、皿は高台付Ⅱ類１点、青磁は同安系碗１点、瓦器９点、瓦１点、土師質土器１点、須恵器および須恵質土器各２点、弥生・古墳時代の土器５点、陶器類４点である。土師皿類には杯１点と小皿３点があり、いずれも糸切り底の完形で火熱を受け焼き締まっている。それらの小破片は36点を数える。図示した遺物は１～３が土師小皿、４が土師杯、５が瓦器（内黒土器）碗、６が高台付白磁皿Ⅱ類の完形で見込を輪状に掻きとるものである。７は陶器壺の底部破片でＢ群に属するものであろう。

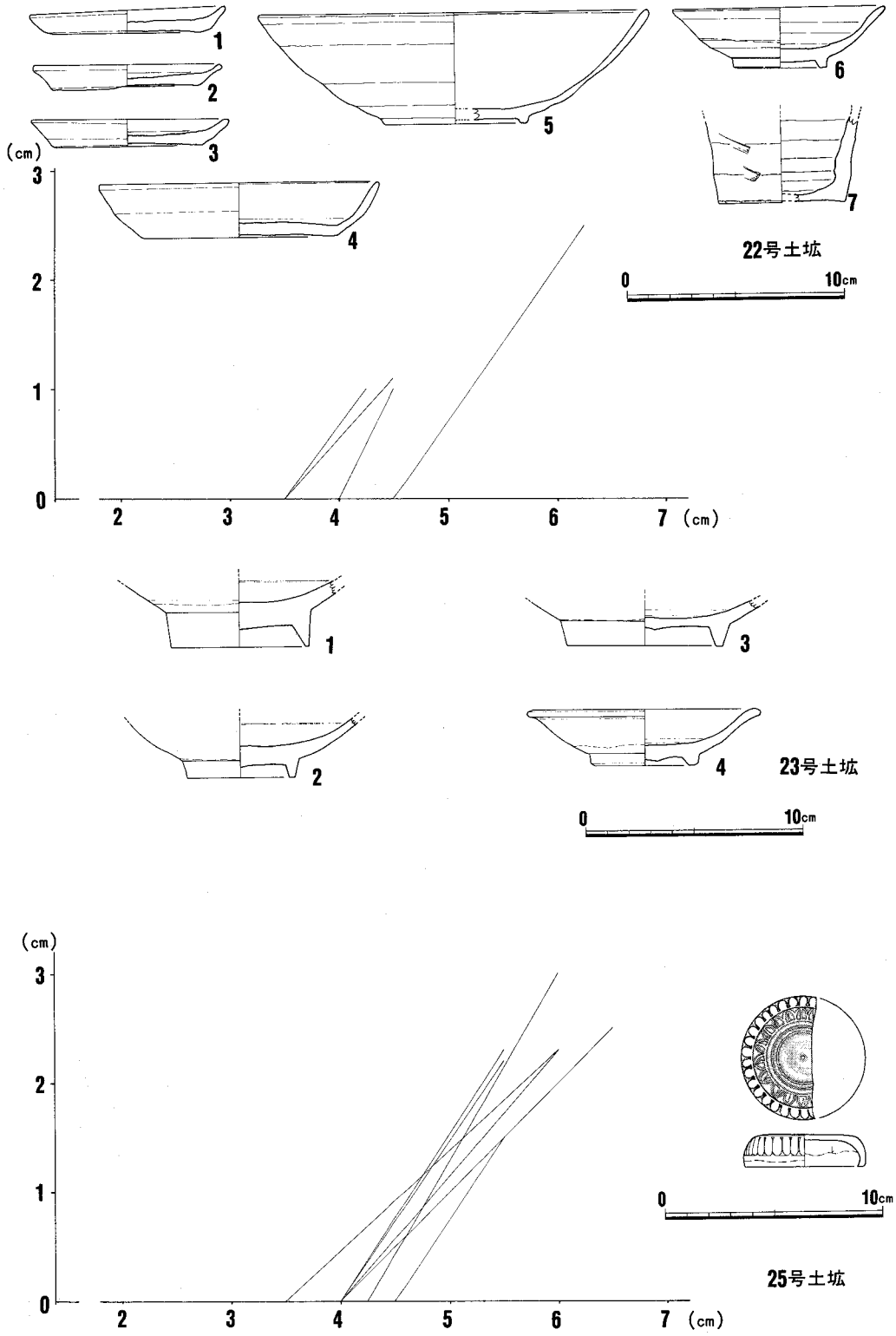


Fig. 35　　22・23・25号土坑出土遺物

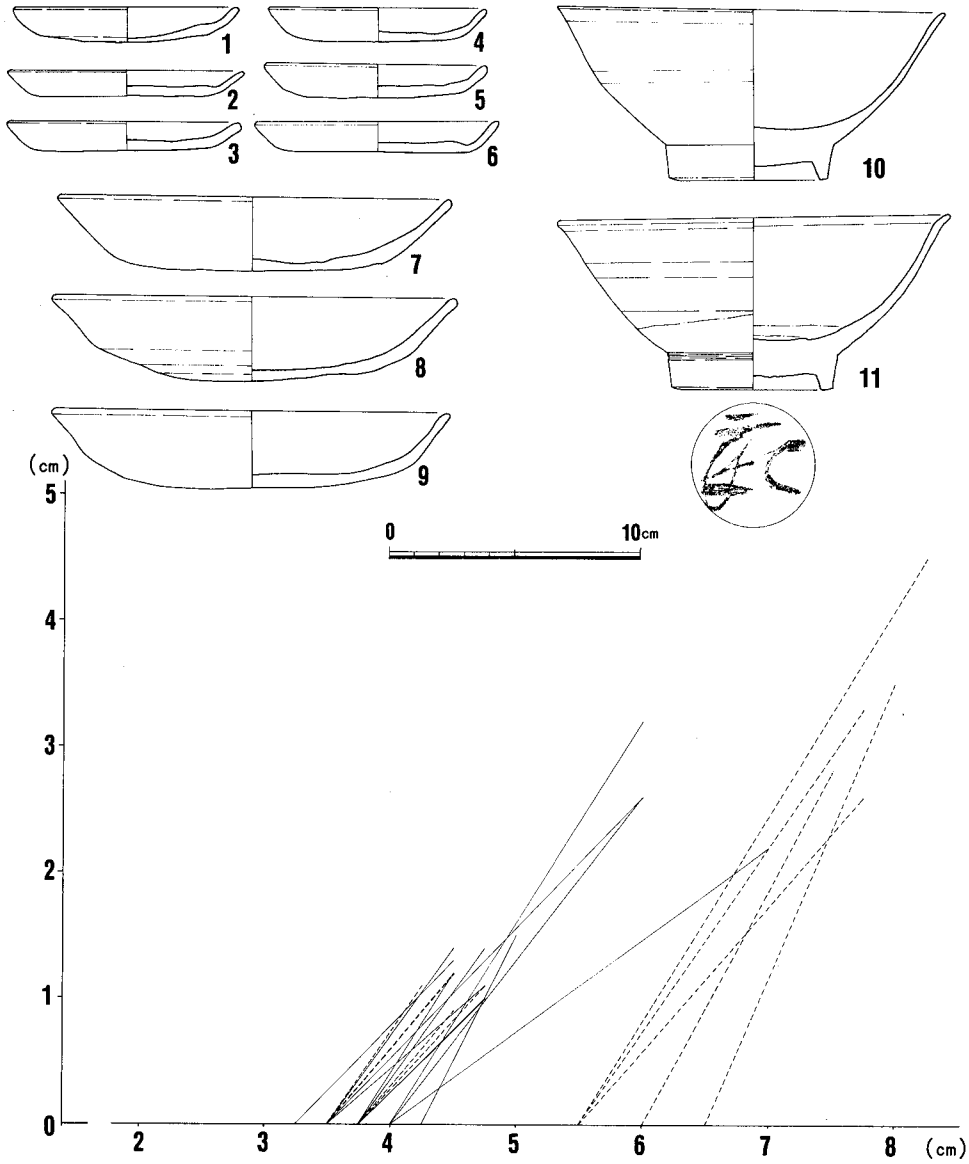


Fig. 36　27号土坑出土遺物

これら火葬墓もしくは火葬施設の性格をもつ20～22号土坑は互いに近接し、それらの基本的な方位、営まれた時期に共通性が認められる。これら火葬施設の集中は、鎌倉時代末頃にこの地で多数の遺体処理が行なわれたことを窺わせ、戦乱などの関係が考えられる。

23号土坑（Fig.31・35）　A－2－Ⅱ区で検出された。1号溝、24号土坑を切っている。径2.2～2.3mの平面形ほぼ正円をなす井戸掘り方で、深さ1.15mを計る。この掘り方最上面には黒色炭化物層が皿状に堆積しており、中に焼けた銅銭2枚、焼骨片が存在していることから、井戸廃棄後にその凹みが火葬施設として利用されたのであろう。出土遺物は、白磁碗がⅣ類9

点を含む18点、白磁皿８点、龍泉青磁碗５点、同安系青磁碗３点、陶器片７点、青白磁碗２点がある。国産品は土師質土器２点、瓦器碗類３点、瓦質土器２点、瓦６点、鉄釘３点などがあり、土師皿類は小破片８点が見られるのみである。図示した遺物は１～３は白磁碗、４が高台付白磁皿である。

24号土坑　Ａ－２－Ⅰ区で検出された。23号土坑、１号溝に切られる。茶黄色の砂が皿状に堆積している。白磁碗２点、陶器２点が出土しているが、いずれも小破片である。自然層の落ち込みの可能性が強い。

25号土坑（Fig.31・35）　Ａ－２－Ⅱ区で検出された。径約0.9ｍのほぼ正円形をなし、深さ30cmと浅い土坑である。性格は不明である。出土遺物は白磁碗Ⅳ・Ⅵ・Ⅸ類が各１、４、３点、同皿、袋物各１点、龍泉青磁碗４点、陶器13点、青白磁合子１点、土師皿類は糸切り杯７点で小破片が他に46点ある。図示した遺物は青白磁合子の蓋である。

26号土坑（Fig.21）　Ａ－２－Ⅱ区で検出された。８号土坑に接するが切合い関係はない。径1.0ｍ程のほぼ正円形で、深さ1.5ｍと深い。覆土は黒褐色土である。遺物量は少なく、白磁碗２点、同袋物１点、青白磁皿１点、瓦１点、土師質土器２点、陶器３点、土師杯小破片６点だけであり、いずれも小破片である。

27号土坑（Fig.31・36）　Ａ－２－Ⅲ区で検出された。４号、13号土坑に近接する。1.2×1.15ｍ程の平面形隅丸方形をなす土坑である。底面は平坦で壁はほぼ直に立ち上る。遺物は床面からやや浮いた状態で出土しているが、時期の違いはあまり見られず一括遺物として扱うことができよう。出土遺物の数量は付表に掲げたとおりであり、ここでは図示した遺物について若干の説明を加える。１～６は土師小皿である。ヘラ切り底と糸切り底とが相半する。７～９は土師杯でヘラ切り底が多い。10・11は白磁碗Ⅴ類に属するものであり、ともに口縁端がやや開く。11は見込を輪状に掻き取るもので、高台内露胎部に墨書銘があるが、判読しがたい。これらの出土遺物の年代はほぼ12世紀前半代に求められよう。この遺構の性格については、土坑墓の可能性も考えられるが、遺物が床面からやや浮いた状態であるところに難点が残る。

28号土坑　Ａ－２－Ⅰ区で検出された。１号溝を切るようにして営まれたものであるが、覆土の黒色土が、１号溝のそれと区別できず、１号溝掘り下げ完了時に確認された遺構である。そのため遺物のかなりの部分が１号溝に含まれている。炭化物、灰等が径約２ｍ程の広がりをもって堆積しているが、土坑の範囲は必ずしも明確にしえなかった。この炭化物層中には焼骨片や火熱を受けて脆くなった鉄釘、銅銭などが含まれており、20～22号土坑と一連の火葬墓もしくは火葬施設であろう。この遺構の年代については、出土遺物から押えられないが、１号溝の機能が停止する段階すなわち14世紀前半、鎌倉時代末から室町時代初頭頃が考えられよう。

29号土坑（Fig.37・38、PL.13―(1)）　Ａ－１－Ⅰ区で検出された。長軸1.0ｍ、幅0.4ｍの

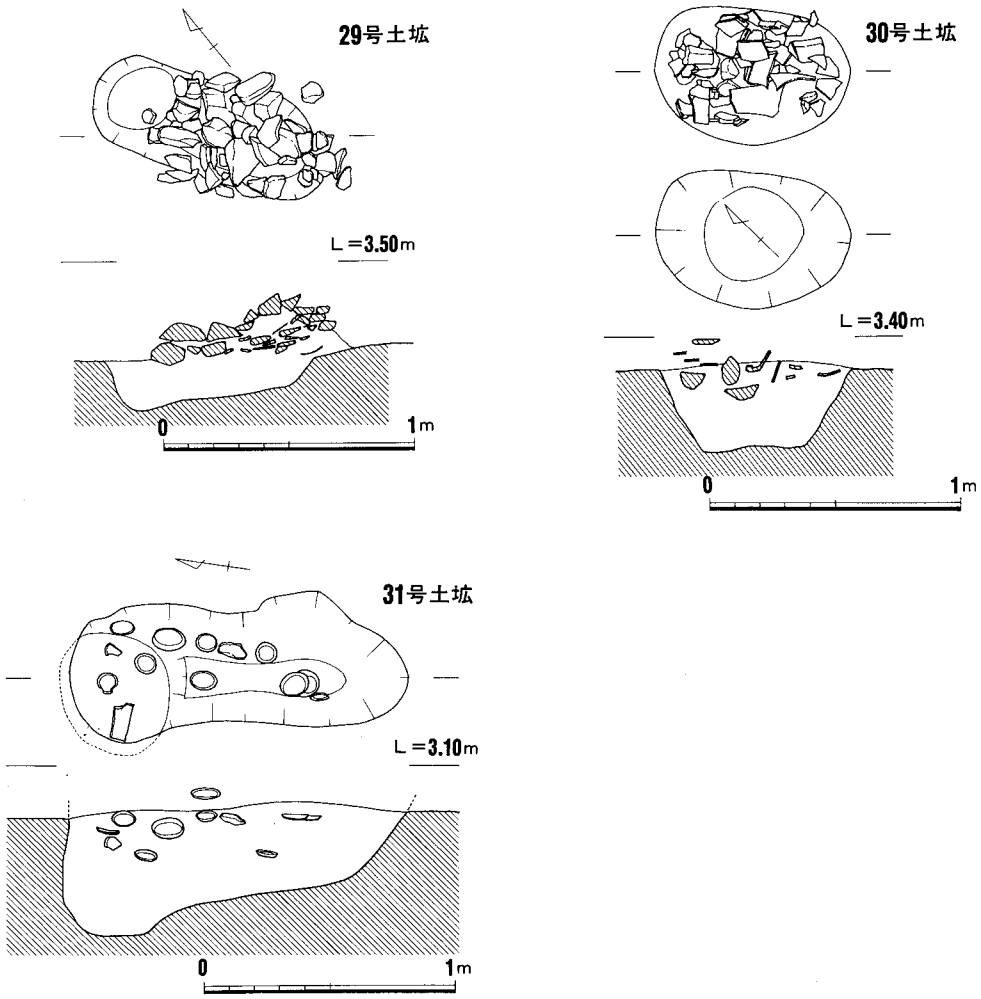


Fig. 37　29・30・31号土坑実測図

長円形をなす土坑で深さ20cm程で浅い。土坑の主軸の方向はN－29°－Wをとる。この土坑内の覆土は炭化物を含む黒色土でその中に須恵質の蔵骨器と思われる壺が置かれ、その上面を多量の破砕礫が覆っていた。これらの礫はいずれも火熱による赤化、剝落、脆化が著しい。須恵質壺は二次的な火熱の影響を受けているとは思えないが、上部礫の影響か、大きく割れている。出土遺物はそれ程多くなく、白磁碗1点、皿1点、龍泉青磁碗2点、皿1点、陶器は10点である。いずれも破片の出土である。国産品では土師杯4点、小皿6点があり、それらの小破片は26点である。いずれも糸切り底である。この他図示した須恵質壺は口径17.5cmで、胴部最大径は、26.9cmを計る。頸部は斜めに立上り、口縁部を肥厚させる。口縁の内側には浅いくぼみを設ける。内面は体部がハケ目調整で頸部以上はナデ調整である。外面はハケ目調整を行なったのち

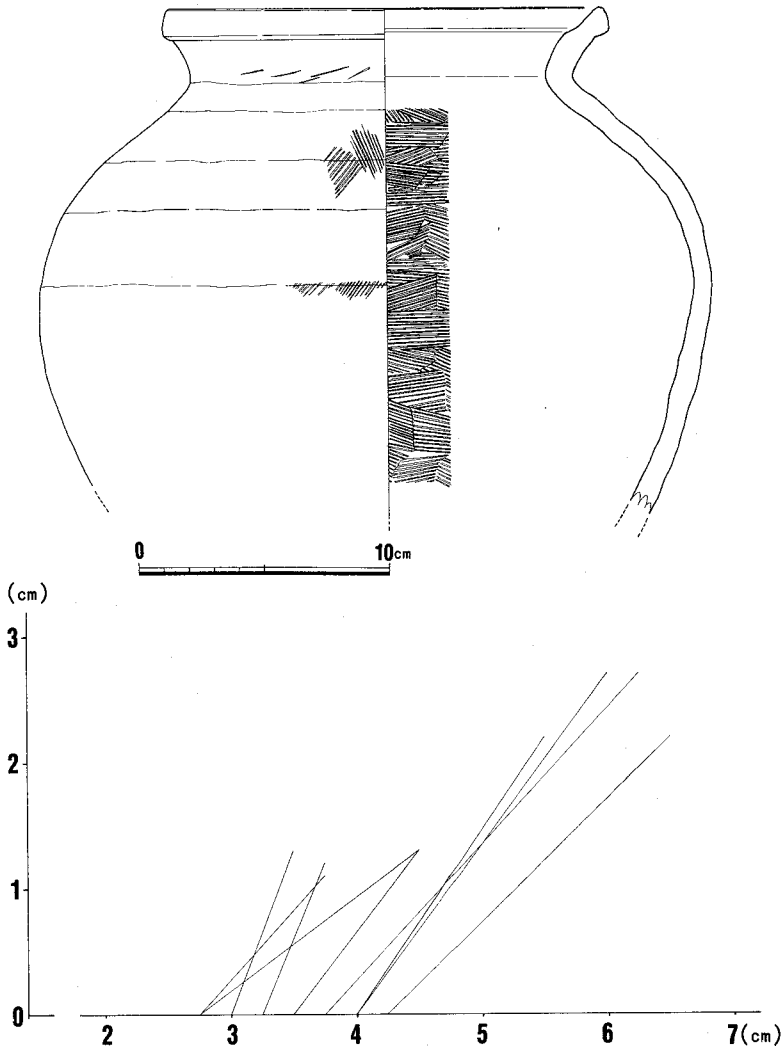


Fig. 38　29号土坑出土遺物

にナデ調整を行なっている。底部は欠損しているが平底であろう。北九州市椎木山遺跡(註)でも同形の壺が蔵骨器として使用されている。おそらく14世紀代に位置づけられるものであろう。

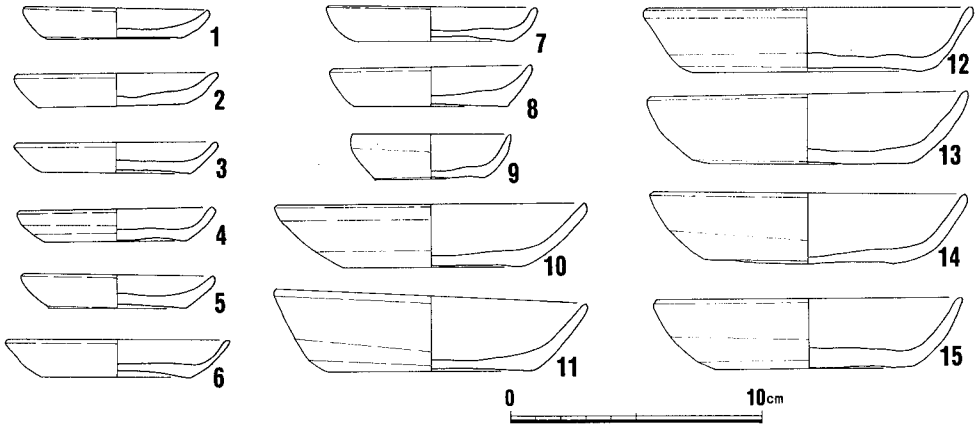
(註)「椎木山遺跡」北九州市埋蔵文化財調査報告第24集　1977

30号土坑（Fig.37、PL.13—(2)）Ａ－１－Ⅲ区で検出された。0.8×0.55ｍの楕円形をなし、深さ0.35ｍを計る。主軸はＮ—43°—Ｗをとり、29号土坑と近い。この小土坑中には木炭片が多く詰まり、焼礫および火熱の影響を受けた常滑大甕の破片がその上を覆っている。火葬墓であろう。図示はしてないが、常滑大甕は口縁帯の幅広いもので、13世紀後半から14世紀中葉に位置づけられる。この他白磁碗２点、同皿３点、青白磁碗１点、陶器１点があったがいずれも小破片で副葬品ではない。土師杯４点、土師小皿５点は副葬品であろう。いずれも糸切り底である。鉄釘２本も見られた。

31号土坑（Fig.37・39、PL.14—(1)）　Ａ－１－Ⅱ区で検出された。1.35×0.5ｍの不整長円形の土坑で深さは0.3～0.5ｍを計る。主軸はＮ－８°－Ｗの方向をとる。覆土は炭化物、焼土を含む黒褐色土で、焼骨が少しはいっていた。この覆土中には床面より浮いた状態であるが土師皿類が完形品ではいっており、副葬品であると思われ、この土坑も火葬墓かと思われる。土

師皿類は計測グラフに示すとおり、すべて糸切り底である。この他白磁碗４点や、白磁口ハゲ皿１点もあるが小破片で副葬したものとは思えない。14世紀前半代か。

32号土坑（Fig.40～43、PL.14・15）　A－1－Ⅱ区で検出された。34号土坑に接し、４号溝を切る。径2.1ｍ、深さ0.35ｍの不整円形をした土坑で、覆土は炭化物層と砂質土が互層になっている。南東端に径0.4ｍの小ピットがある。この土坑からは多量の遺物が出土しており、その数量は付表に示すとおりである。図示した遺物は、１～31が土師小皿、32～39が土師杯であり、計測表に示すように糸切り底にヘラ切り底がかなり混じるのが特徴的である。40は瓦器碗、41は瓦器皿で糸切り底である。42は青白磁小碗で内面に雷文の型押しが見られ器壁は薄い。43は青白磁合子蓋で上面に草花文の型押しがある。44は白磁四耳壺または水注の頸部破片、45は白磁平底皿Ⅲ類、46は白磁碗Ⅱ類で内面を白色堆線で区画する。47は同安窯系青磁碗で高台露胎部に墨書があるが、判読しがたい。49は同皿である。48は龍泉青磁Ⅲ類の、外面に鎬蓮弁を施す浅碗であるが、他の一連の遺物に比べ時期的に新しすぎ、混入したものであろう。50は陶



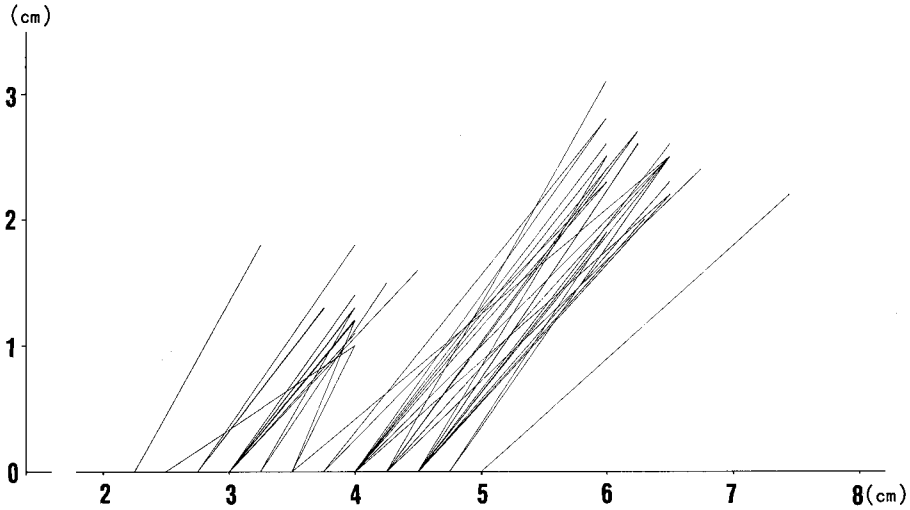


Fig. 39　31号土坑出土遺物

器Ｃ群にはいる水注で口縁を盤口壺形にする。口縁をわずかにつまんで注口となす。胎は粗く多くの砂粒が混じっている。無釉で焼き締め風になっている。51～53は黄釉鉄絵盤である。51・52は外方に開く幅広の鍔をもつもので、53は口縁端を折り返し丸く収めるものである。従来この口縁端を丸く収めるものは、鍔をもつものより後出し、13世紀代と考えられていたが、近年博多では12世紀代の遺存状態の良好な遺構でも検出されるようになり、32号土坑から出土する一連の遺物と必ずしも矛盾しないと考える。54はライトブルーの発色をもつガラス製品である。一部混入と思われる遺物を除いたところで、この遺構は12世紀半ばから後半にかけての頃に位置づけたい。性格は明確ではないが廃棄物処理に用いられたものか。

33号土坑　Ａ－１－Ⅲ区で検出された。径1.0ｍ程度のほぼ正円形をなすものであるが、深

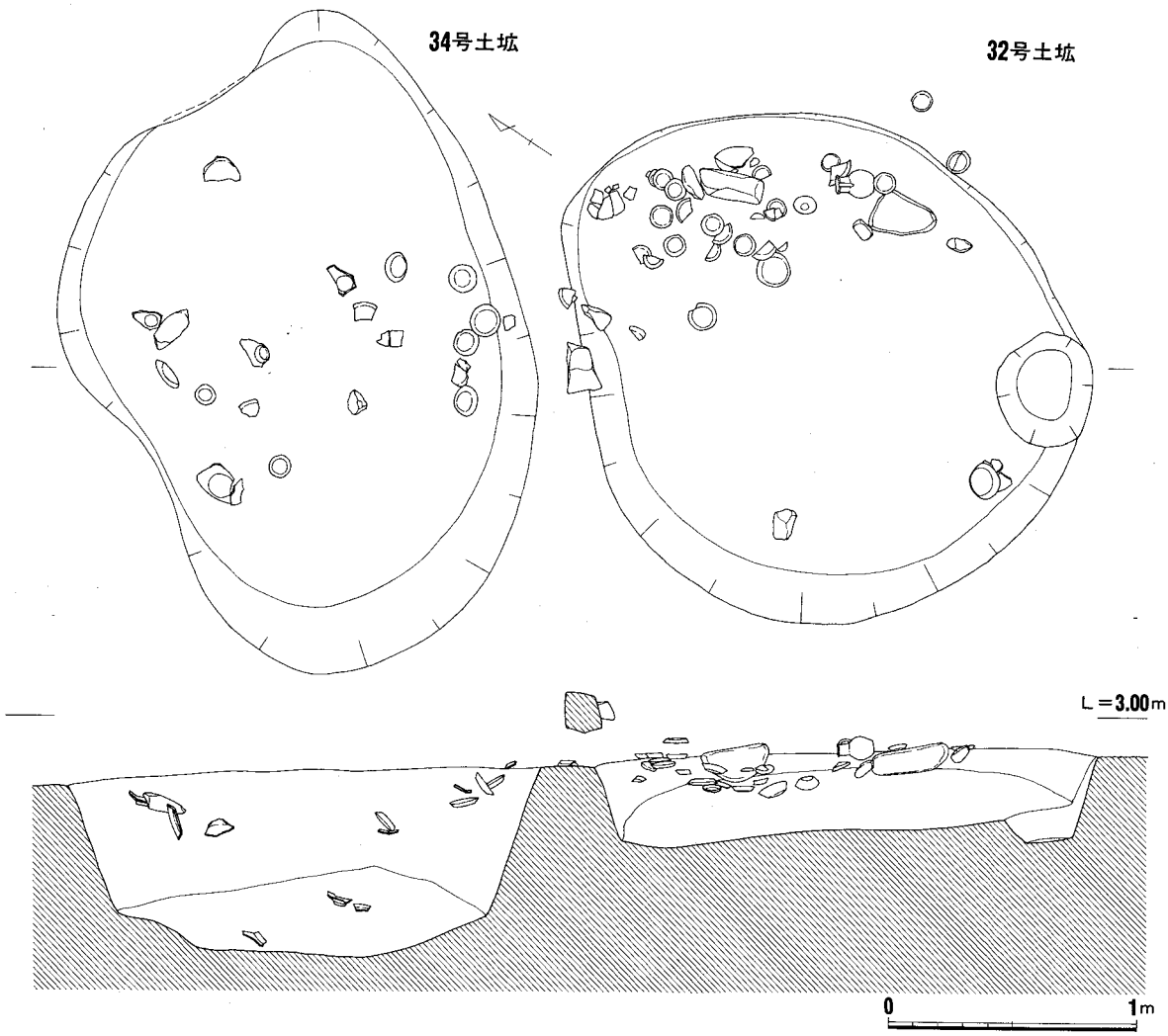


Fig. 40　　32・34号土坑実測図

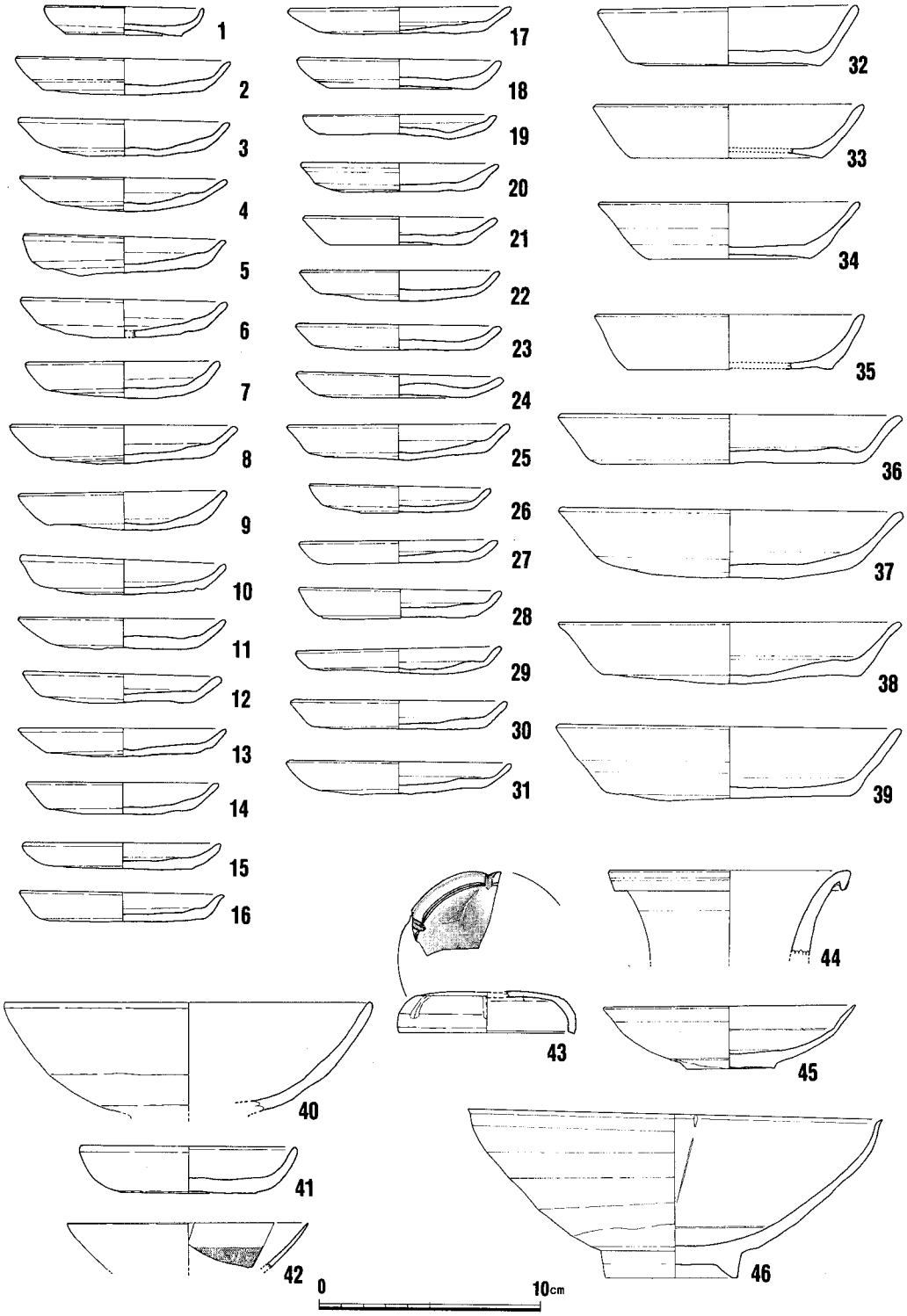


Fig. 41　32号土坑出土遺物（1）

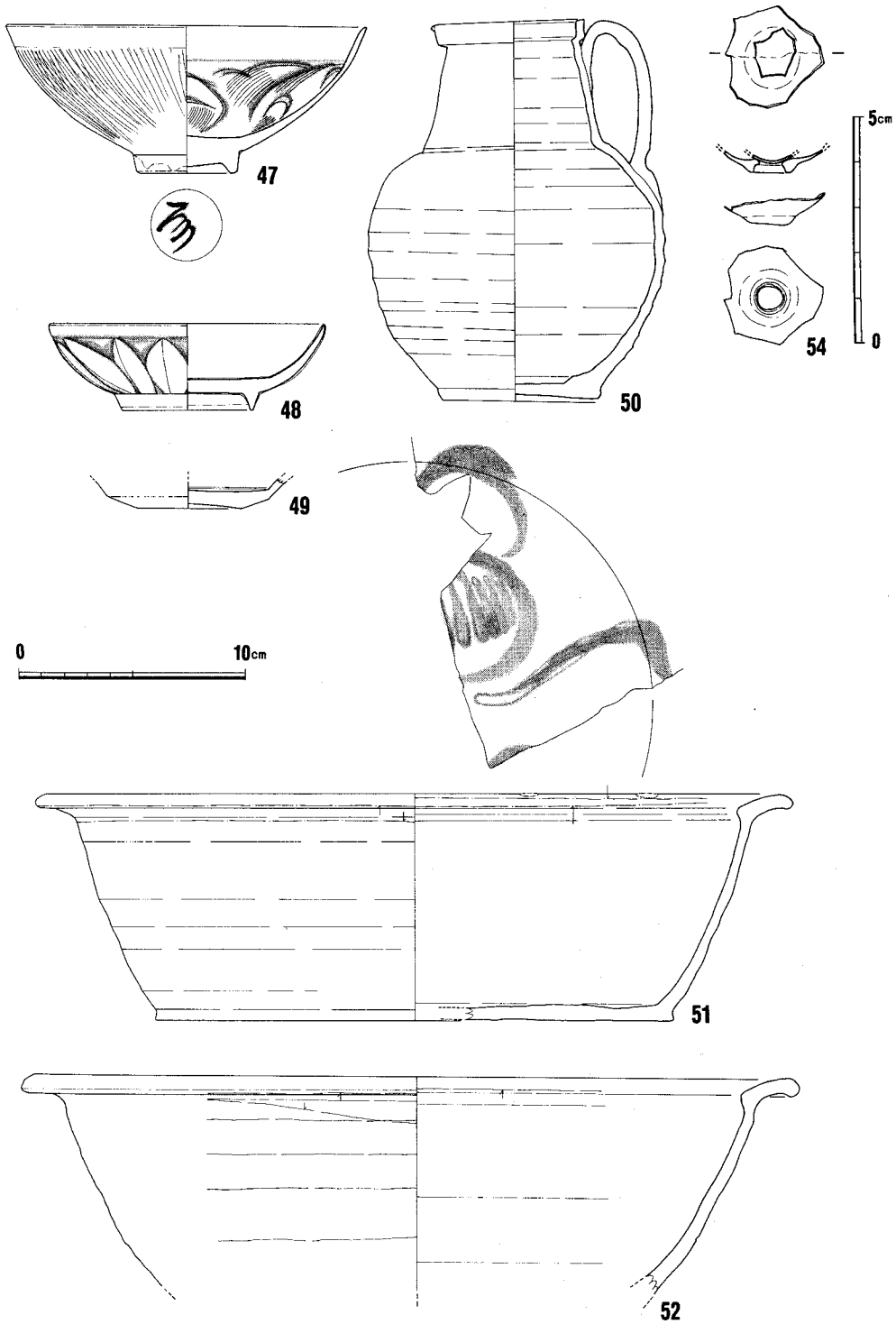


Fig. 42　32号土坑出土遺物（２）

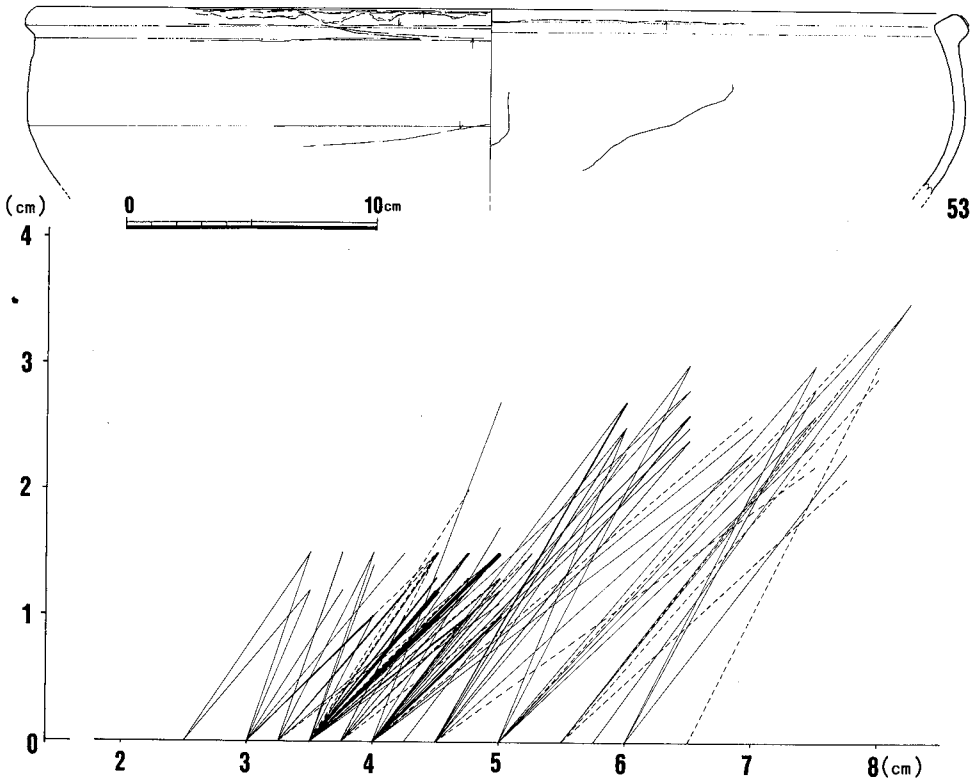


Fig. 43　32号土坑出土遺物（3）

さ20cmと浅く、自然の落ち込みであろう。遺物は出土していない。

34号土坑（Fig. 40・44、PL. 14・15）　A－1－Ⅱ区で検出された。2.7×1.9mの不整長円形を呈し、深さ0.75mを計る。32号土坑と同様に、炭化物と砂層とが互層をなす。性格は明確でない。多くの遺物が出土しているが、それらの数量は付表に示すとおりである。図示した遺物は、1～8が土師小皿、9～15が土師杯である。これらは計測グラフに示すとおり、糸切り底が大半を占めるが、一部ヘラ切り底も見られる。16～18は白磁碗でいずれもⅥ類に属し、18の内面には櫛描文がある。19は白磁碗Ⅳ類、20は同Ⅸ類で、21・22はⅥ－3類である。23は白磁平底皿Ⅲ類である。24はB群に属する陶器で底部を削って三角の高台を作り出している。四耳壺であろうと思われる。遺物には混在が認められるが土師皿から見ると、この遺構の遺物は32号土坑より後出するものである。

35号土坑（Fig. 45）　A－1－Ⅰ区で検出された。1.15×0.65mの長方形に近い形状をなす。床面は平坦であるが、中央部に小ピットがある。遺物は床面から浮いた状態で出土し、必ずしも共伴遺物とは言えない。青磁皿、鉄製刀子、滑石製石鍋破片各1点が出土している。性格は

明確にしがたいが、形状からすると土坑墓の可能性もある。

36号土坑 (Fig.45)　Ａ－１－Ⅰ区で検出された。1.2×0.9ｍの楕円形を呈する。深さは35cm程で深皿状の断面形をなしている。遺物では土師皿類の小破片が数点出土しているが、それ以外には認められない。遺構の性格も不明である。

37号土坑　Ａ－１－Ⅰ区で検出された。長軸0.8ｍ、最大幅0.4ｍの双円形をなす。深さ24cmと浅い。柱穴かもしれない。瓦片２点、鉄釘２点が出土している。

38号土坑　Ａ－１－Ⅰ区最南隅にあたり、当初土坑であると思われたが、分割調査のための誤認で、のちに１号溝または28号土坑の末端にあたるものと確認された。ここでは欠番とし、遺物は１号溝に入れた。

39号土坑　Ａ－１－Ⅲ区で検出された。北側の一端を壁によって切られる。長軸現在長 1.6ｍ、幅1.0ｍで、長円形をなすものと思われる。灰褐色の覆土であるが、遺物は非常に少なく土師皿類小破片が数点出土したのみである。深さ0.34cmを計る。遺構の性格は明確にしがたいが、この長軸は、ほぼ真北を向く。

40号土坑　Ａ－２－Ⅲ区で検出された17号土坑（井戸）と同一であり、ここでは欠番にしておく。

41号土坑（Fig.45・46）　Ａ－１－Ⅱ区で検出された。3.5 ×2.6ｍの楕円形を呈し、深さ1.2ｍを計る。断面形はすりばち状をなし、地山黄白色砂層に掘り込まれている。井戸の掘り方であると考えられるが、井戸枠等は検出されなかった。掘り方の東端部に径50cmのピットが掘り込まれている。覆土は少し汚れた黄白色砂である。遺物の出土量は少ない。図示した遺物はⅥ類の白磁碗１点（１）のみであるが、この他土師杯３点、土師小皿３点があり、それらの小破片14点も出土している。計測表にはこのうち測定値の確実なものを呈示している。土師杯の口径が17cmと大きいのが注目される。遺物が少なく時期は明確にしえないが、31号土坑より以前に営まれたもので13世紀代の井戸であろう。

42号土坑（Fig.46）　Ｂ－Ⅲ－ｂ区で検出された。上部で検出された遺構である。長軸の一端を土留壁によって切られるが、3.6×2.9ｍの規模をもつほぼ楕円形をなす土坑である。覆土は黒褐色土である。深さ30cm程度である。遺物は小破片ながら比較的多く、その数量は付表に示すとおりである。しかしその大半は混入したものと思われ、所属時期の違いが大きく、遺物も微細なものが多い。図示した遺物について簡単に説明しよう。１は青白磁小壺の頸部から口縁部にかけての破片で、口縁は外方へ水平に開き、頸部と体部の外面の境には段がつく。内面頸部下半は露胎で以外は青白釉が施される。２は同安窯系青磁皿の底部破片であるが、見込みに環状の細い浮文が認められる。３は龍泉青磁碗で、外面にヘラ描き蓮弁文を施し、その上に櫛状施文具によって脈を刻むⅠ－１類に属す。また内面にもヘラの片切り彫りと櫛描きによる劃

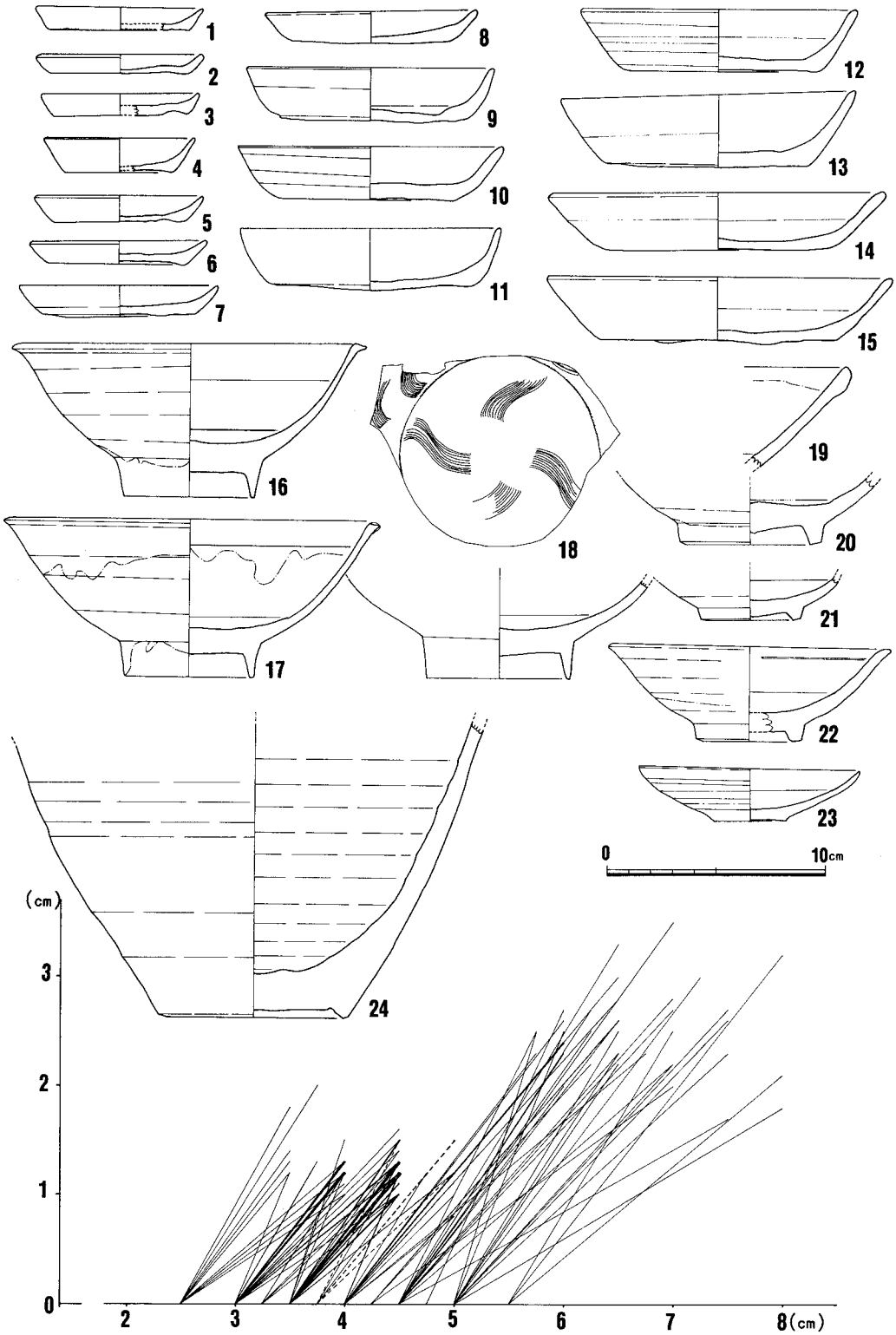


Fig. 44　　34号土坑出土遺物

花文を施す。このほか特徴的な遺物として15世紀代に見られる高台をアーチ状に抉った白磁皿がある。高台内も含めて全面施釉される。見込みには重ね焼きによる高台の付着痕が残される。廃棄物の処理用土坑であろう。その営まれた年代は15世紀以降かと思われるが確実ではない。

43号土坑 (Fig46)　Ｂ－Ⅲ－ｃ区で検出された。北側の一端を土留壁に切られているが、平面形はほぼ楕円形をなすと思われ、長軸現在長2.7ｍ、幅2.4ｍを計る。上層確認遺構である。遺物はやや多く数量は付表に掲げてある。それぞれ小破片が多く、おそらく廃棄物処理用の土坑と思われる。遺物は混在しており、明代の染付や近世陶磁各１点などもある。鉄釘12点、雲母片１点も出土している。土師皿類はいずれも糸切り底である。図示した遺物はいずれも白磁

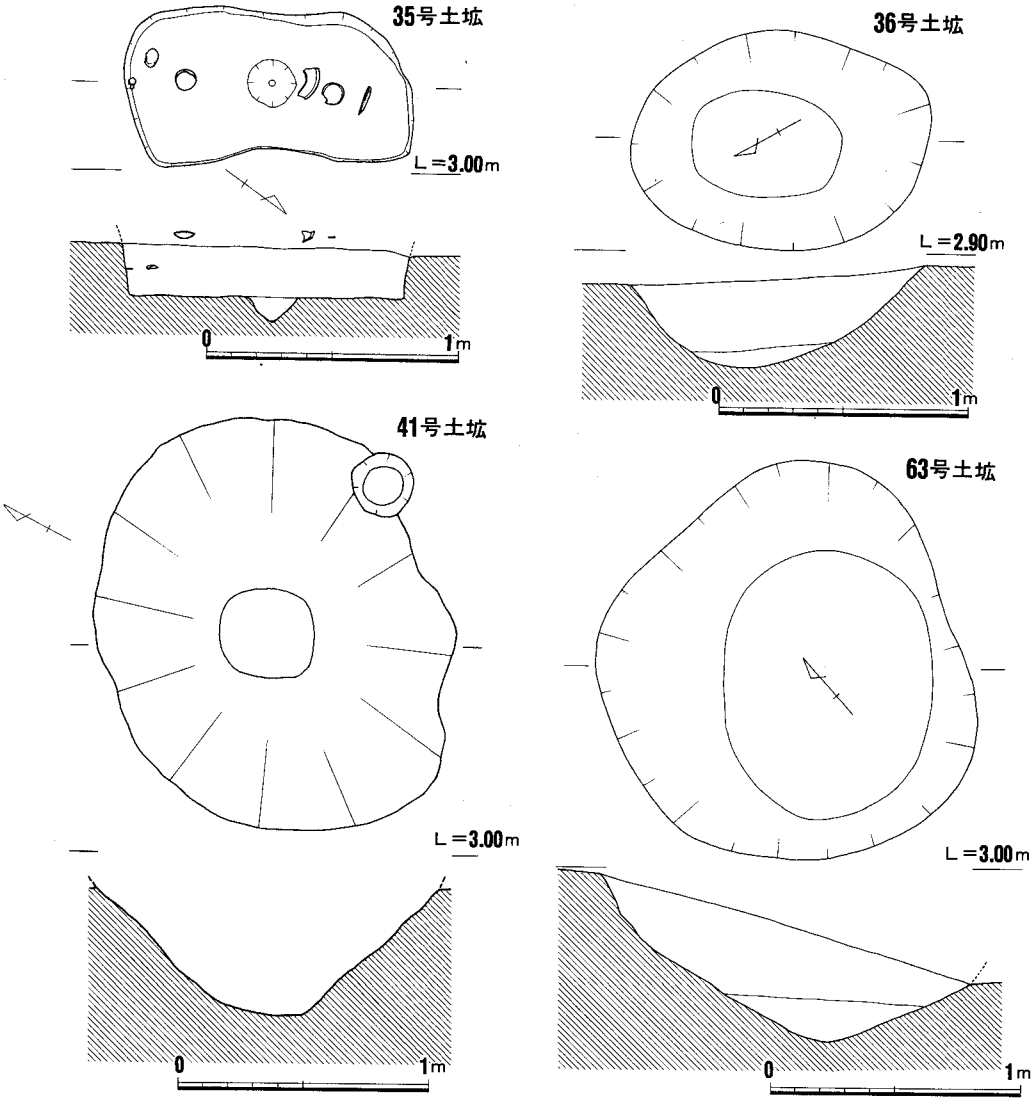
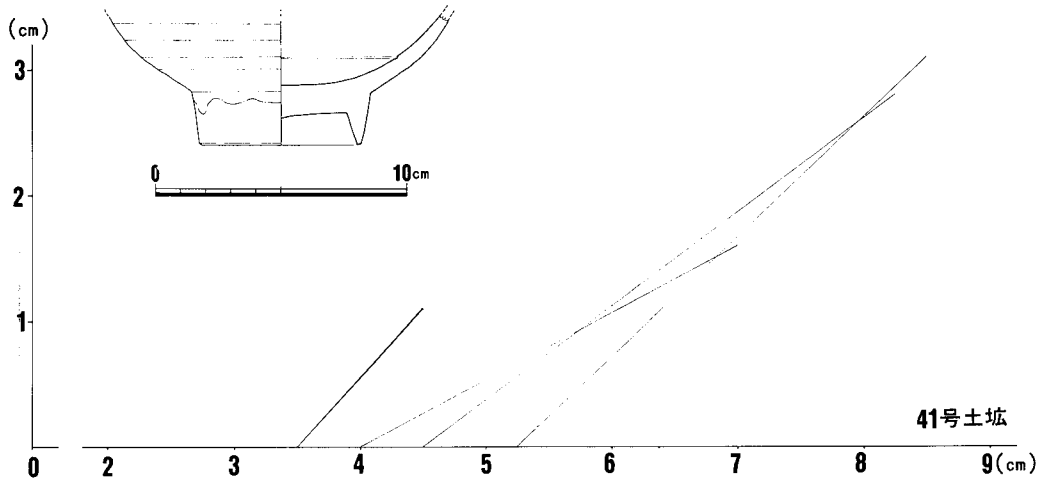
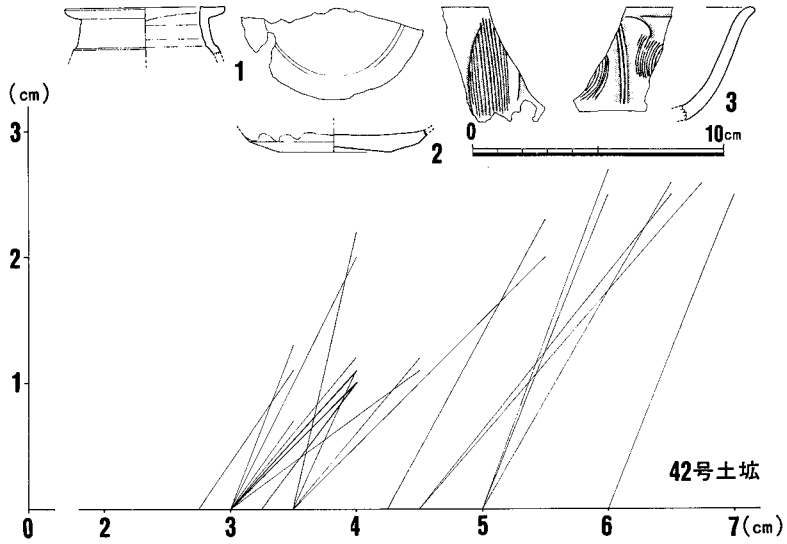


Fig. 45　35・36・41・63号土坑実測図





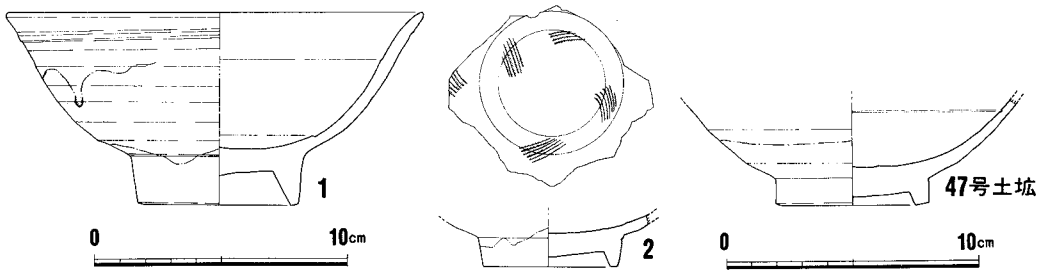


Fig. 46　41・42・43・47号土坑出土遺物

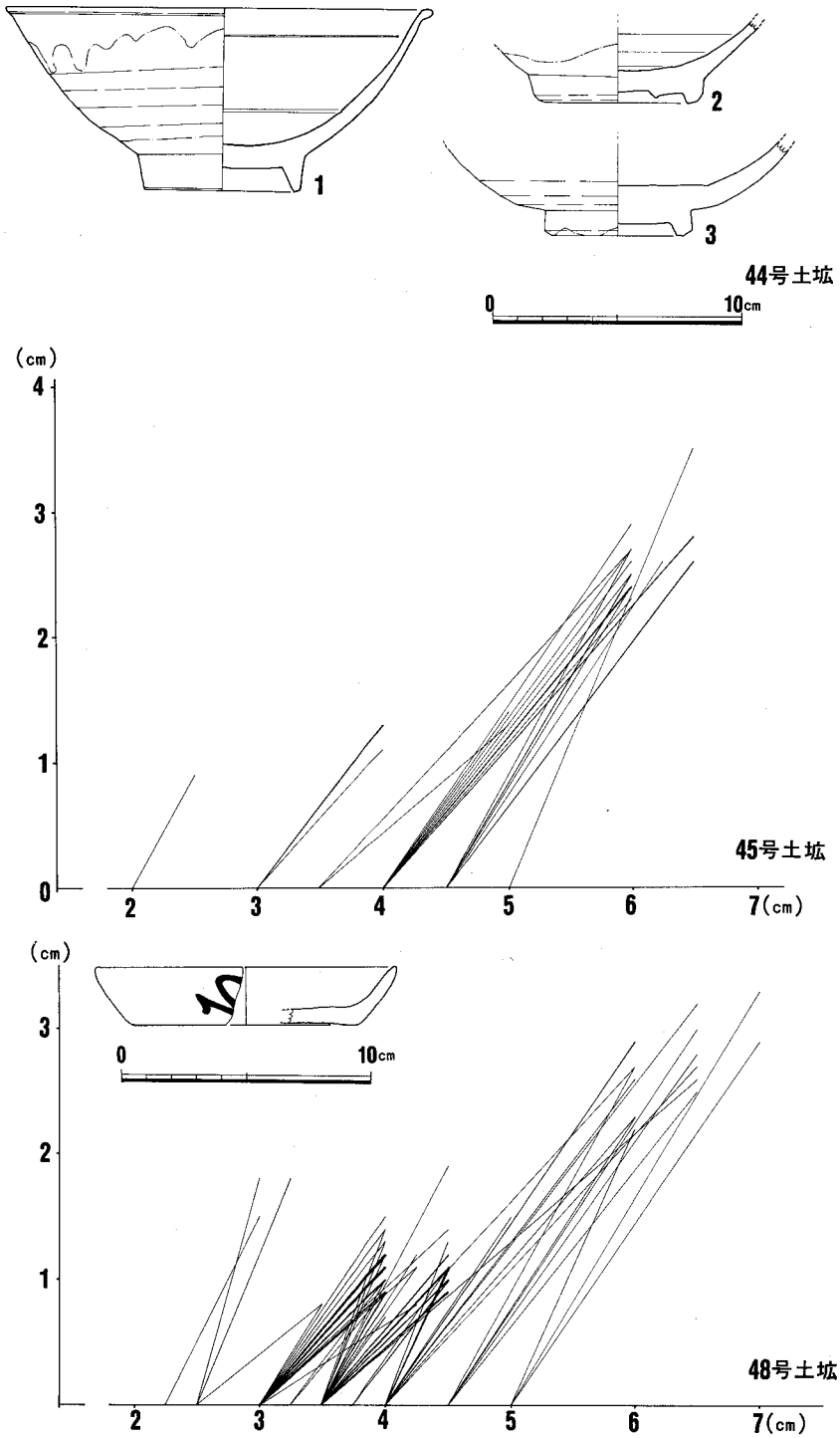


Fig. 47　44・48号土坑出土遺物と45号出土土師皿類計測グラフ

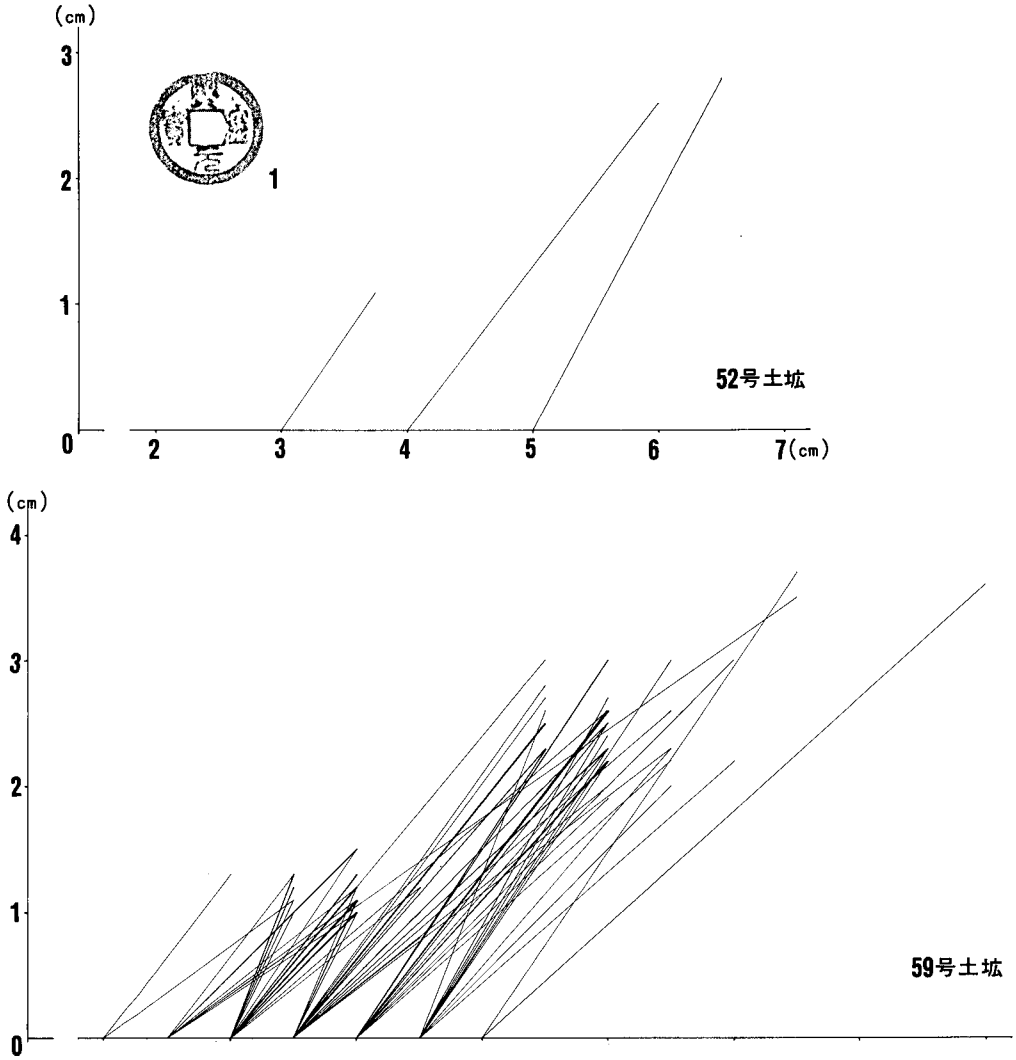


Fig. 48　52号土坑出土遺物と59号土坑出土土師皿類計測グラフ

碗で、1がⅤ類に属するもので、2がⅨ類に属し、見込みの釉を輪状に掻きとるものであるが内面に櫛描文が施されている。

44号土坑 (Fig. 47)　B－Ⅲ－d区で検出されている。0.6×0.55mのほぼ円形をなす小土坑で深さ0.45mを計る。炭化物を多量に含む黒色土が覆土であり、この中に鉄釘11点や糸切り底の完形土師皿類が出土しており、火葬墓の可能性が考えられる。遺物数量は付表に示した。遺物は、1が白磁碗Ⅵ類、2が同Ⅸ類で見込みを輪状に削るもの、3が龍泉窯青磁碗である。

45号土坑 (Fig. 47)　B－Ⅲ－d区で検出された。北西端半分を土留壁によって切られるが全体は径2m程の円形をなすものと思われる。深さ10cmで浅皿状の断面形をなす。出土遺物の

数量は付表に示すとおりである。土師皿類はいずれも糸切り底で、杯が多く、底径８～９㎝、口径12㎝、器高２～2.5㎝に集中する。図示はしてないが青白磁口ハゲ皿の完形があった。

46号土坑　Ｂ－Ⅲ－ａ区で検出されている。Ｂ調査区の北隅にあたり、半分を土留壁によって切られている。全体形不明であるが、径1.0ｍ程度の円形土坑であろう。深さ0.7ｍと深い。覆土中には焼土塊が含まれている。出土遺物は白磁碗６点、青磁龍泉碗２点、同安系碗、皿各１点、青白磁碗２点、陶器５点、天目碗１点のほか、瓦器碗、土師質土器各１点、土師皿類小破片199点があり、鉄釘14点もあった。

47号土坑　Ｂ－Ⅲ－ｃ区で検出された。径1.4ｍの円形をなすと思われるが、土留壁によって半分を切られる。上層で確認された土坑である。出土遺物は白磁碗10点、皿１点、同安系青磁碗１点、陶器13点（緑釉１点を含む）のほか、国産品には瓦器碗類１点、土師質土器19点、瓦質土器１点、須恵器２点、古窯系陶器２点、瓦19点などがある。土師皿類には糸切り小皿３点があったが、その小破片は25点を数える。またライトブルーの発色を見せるガラス塊１点もあった。廃棄物処理の土坑であろう。

48号土坑（Fig.47）Ｂ－Ⅲ－ｆ区の上層で検出された。５号（２号）溝を切る。不整三角形で浅い。出土遺物は土師皿類を中心としているが、それは計測グラフに示すとおりである。中には外面体部に墨書のあるものもあった。いずれも糸切り底である。銅銭１枚もあったが、銹がひどく種類は不明。廃棄物処理の土坑か。

49号土坑　Ｂ－Ⅲ－ｇ区の上層で検出された遺構である。2.1×1.4ｍの楕円形をなし、深さ40㎝と浅い。出土遺物は少なく、白磁碗２点、同袋物１点、龍泉碗１点、陶器16点のほか、瓦10点、古窯系陶器２点が出土している。廃棄物処理の土坑であろうが、土師皿類が小破片のため時期は明確にしえない。

50号土坑　Ｂ－Ⅲ－ａ区の上層で検出された。長辺1.5ｍ程の不整三角形をなすが、浅く、黒褐色土の自然の落ち込みかもしれない。白磁碗６点があるが、うち２点は口ハゲで、同じく皿は口ハゲが２点ある。龍泉青磁碗はⅠ類５点、Ⅱ類１点があり、同安系碗３点、その他の碗１点がある。陶器類15点である。国産遺物には土師質土器２点、瓦器碗類２点、瓦質土器１点、瓦４点、鉄釘２点がある。土師皿類は糸切り小皿が１点あるが、小破片は132点を数える。

51号土坑　Ｂ－Ⅲ－ａ区の上層で検出された。径2.3ｍの円形をなすものと思われるが、土留壁によって切られている。53号土坑を切る。深さ22㎝と浅い。黒褐色土が覆土であるが、その中に多数の円礫がはいっている。出土遺物は少なく、白磁碗１点、龍泉青磁碗・陶器４点などが見られる程度である。

52号土坑（Fig.48）　Ｂ－Ⅲ－ｅ区の上層で検出された。土留壁によって半分程切られているが、径約４ｍのほぼ正円形をなすものと思われる。深さ0.7ｍを計る。出土遺物は多い。白

磁には、碗Ⅳ類4点、Ⅵ類9点、Ⅶ類4点、その他6点があり、皿には口ハゲ2点がある。袋物2点も見られた。青磁には龍泉碗Ⅰ類が15点、Ⅱ類7点、その他1点、小碗3点があり、同安系碗4点、皿1点がある。青白磁には碗3点、皿2点のほか、合子1点、香炉2点がある。陶器にはA群8点、B群11点、C群11点、その他6点がある。国産品には古窯系陶器4点、須恵器4点、土師質土器（含土鍋2点）4点、瓦器碗類1点、瓦質土器2点、瓦6点などがあり滑石製石鍋1点、鉄釘3点なども見られた。この遺構の土師皿類は、いずれも糸切りで、細片を含めて937点にのぼるが、口径等計測可能なものはわずかに3点にすぎない。この他、銅銭1枚（熙寧元宝）も出土している。廃棄物処理用の土坑であろう。

53号土坑　B－Ⅲ－b区上層で検出された。51号土坑に切られている。不整形の平面形をなし、深さ20cmと浅い。自然の凹みを廃棄物の処理に用いたものであろうか。遺物はやや多く、白磁碗8点、その他2点、青磁龍泉碗9点、同皿、その他各1点、陶器13点などのほか、国産遺物には土師質土器11点（含土鍋4点）、瓦1点、瓦質土器1点、鉄釘16点があり、土師皿類には小皿4点のほかそれらの小破片93点がある。

54号土坑　B－Ⅱ－a区上層で検出された。1.2×1.0mの楕円形をなす土坑で深さ30cmを計る。内には近世瓦破片が多く廃棄されていた。砥石1点もあったが、これも近世のものである。

55号土坑　B－Ⅱ－d区上層検出の遺構である。6号溝が埋まった段階に掘り込まれたもので近世の廃棄物処理用の土坑である。比較的多くの遺物が検出されているが、伊万里、唐津系の近世陶磁が多い。2.0×1.6mの長方形で20cmと浅い。

56号土坑　B－Ⅱ－d区上層で検出された。一部c区にかかる。2.5×0.9mの長方形をなし、深さ0.15～0.2mと浅い。55号土坑に近接し、同様の近世廃棄物処理土坑であろう。遺物は多く、数量は付表に記すとおりである。

57号土坑　B－Ⅱ－d区で検出されたものであるが、近代の攪乱である。

58号土坑　B－Ⅱ－c区上層で検出された。1.5×1.4mの方形に近く、深さ25cmを計る。土坑内からは寛永通宝、皇宋通宝各1点のほか、銘不明の銅銭3点が出土している。江戸時代の墓の可能性もあるが、東長寺古絵図（Fig.11）には墓地らしい描写はなく廃棄物処理用かもしれない。

59号土坑（Fig.48）　B－Ⅱ－d区で検出された。一辺1.2mの方形に近い土坑であるが、浅く、一端の掘り方線は明確でない。土器溜り的な様相を示しており、近世土師皿類が多い。出土遺物の数量は付表に示す。計測グラフに示すとおり、土師皿類は全て糸切り底で、底径が小さく、口径が大きく、器高が高い形態のものが多い。近世土師皿類の特徴であろう。

60号土坑　B－Ⅲ－d区で検出された。44号土坑の下層で検出されたものである。遺物は少なく土師皿類の糸切り小皿3点、杯2点が出土した程度である。

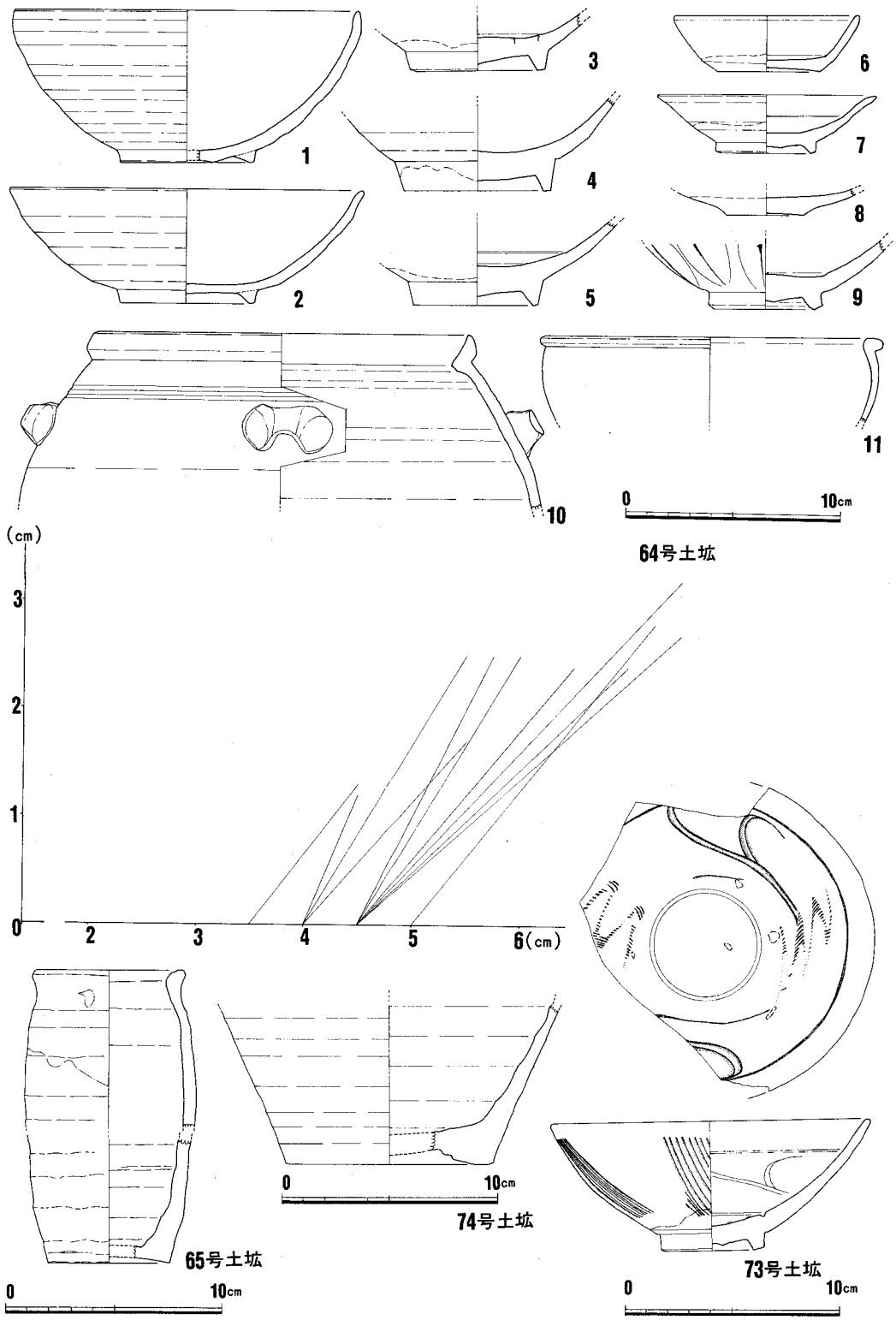
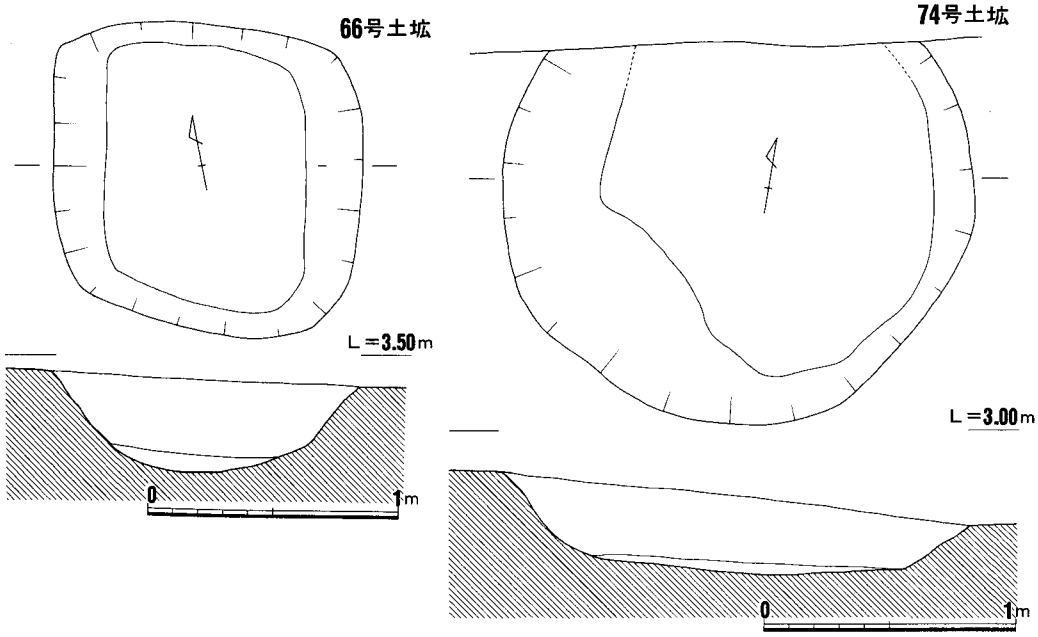


Fig. 49　64・65・73・74号土坑出土遺物



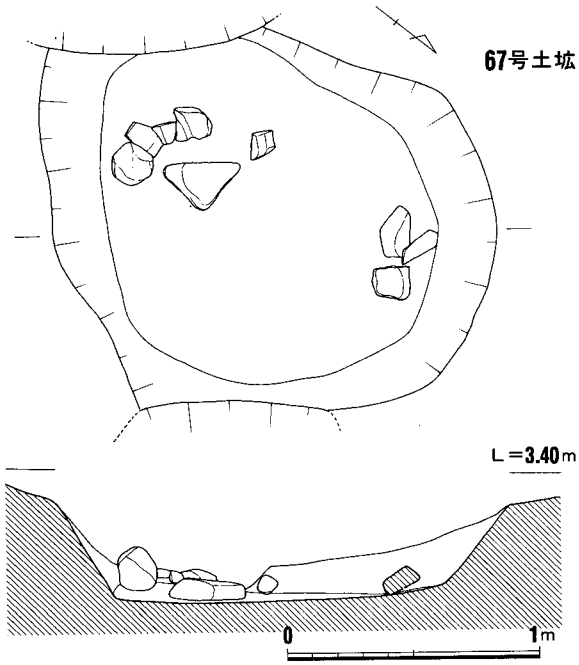


Fig. 50　　66・67・74号土坑実測図

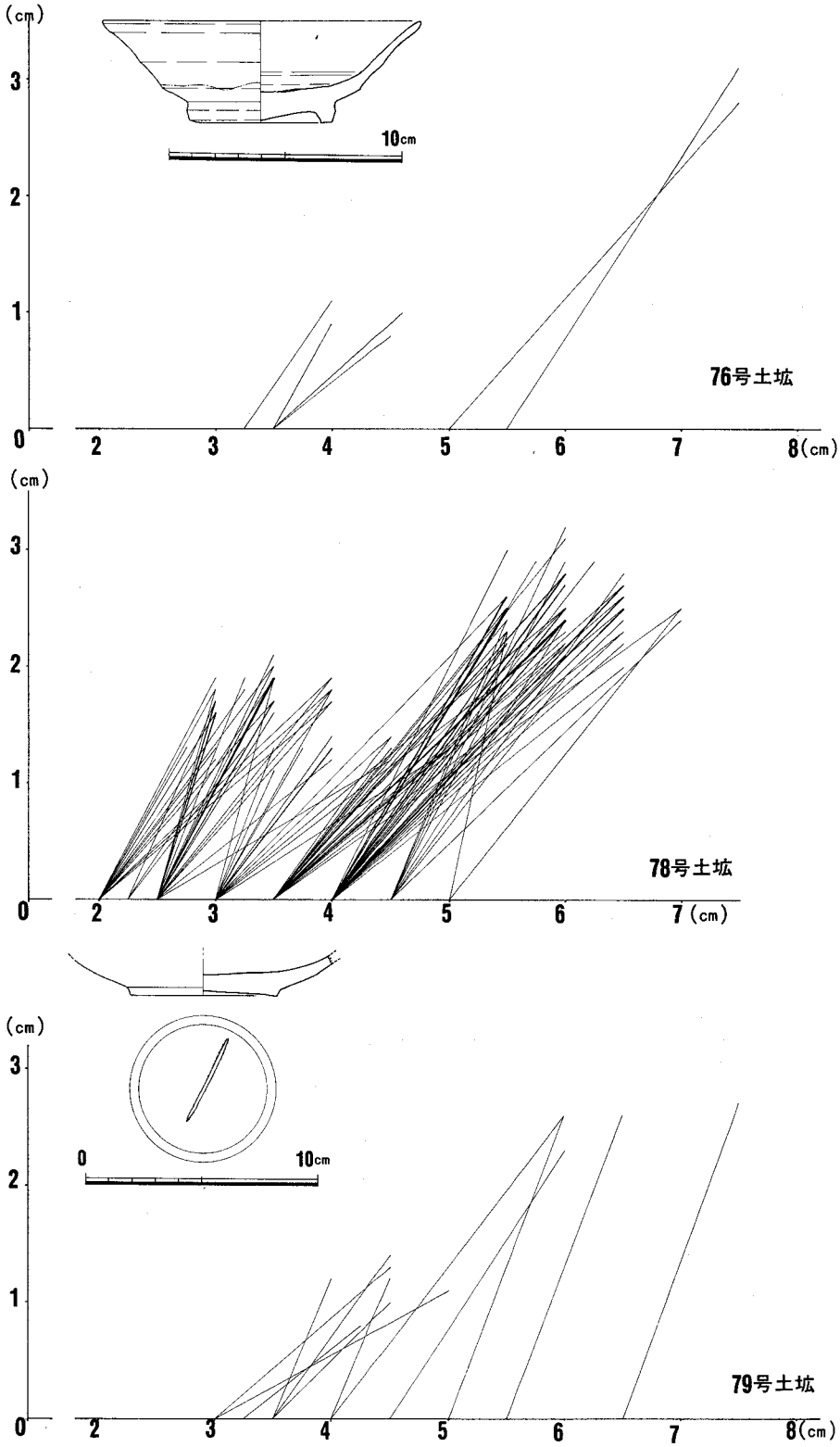


Fig. 51　76・79号土坑出土遺物と78号土坑出土土師皿類計測グラフ

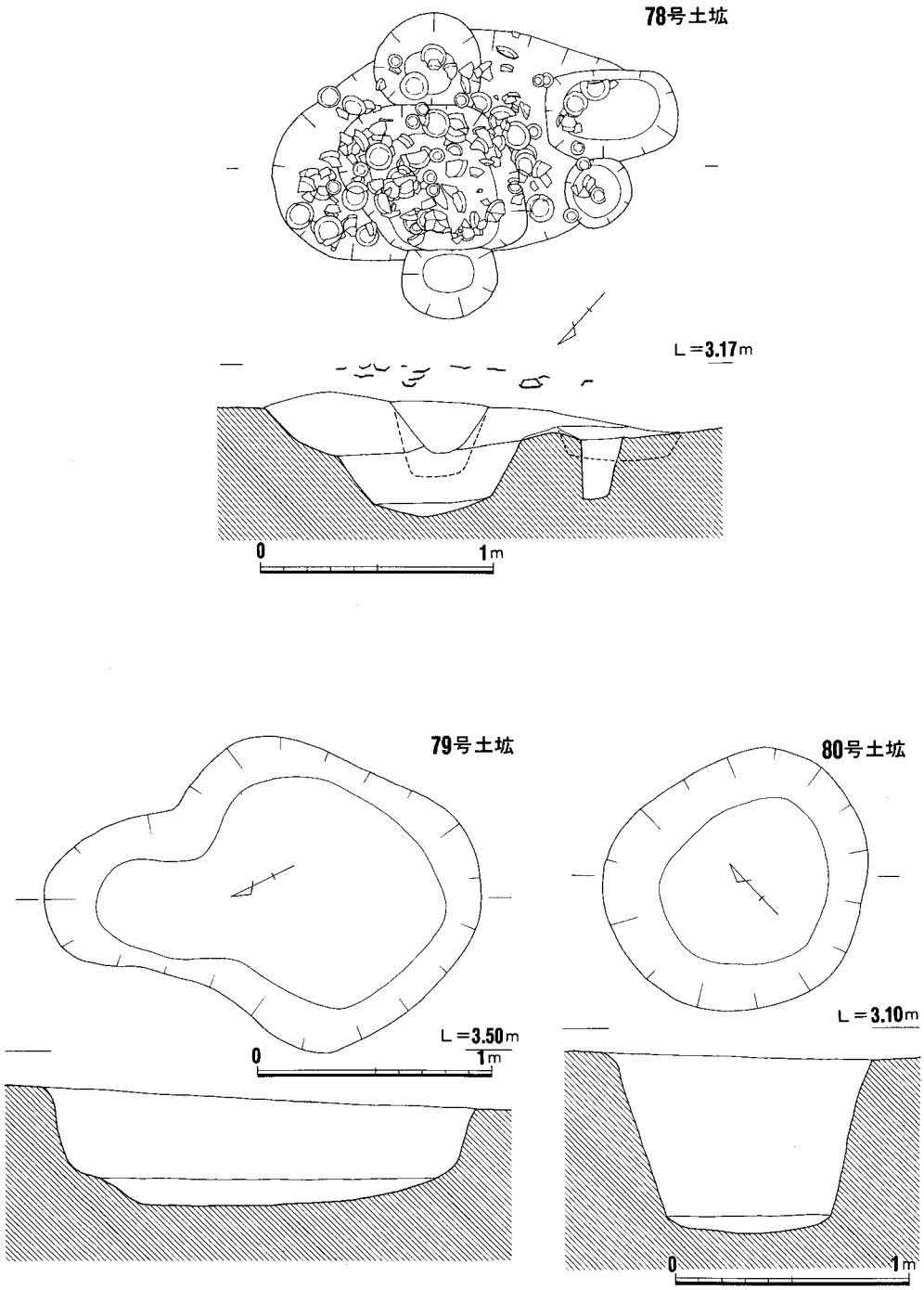


Fig. 52　78・79・80号土坑実測図

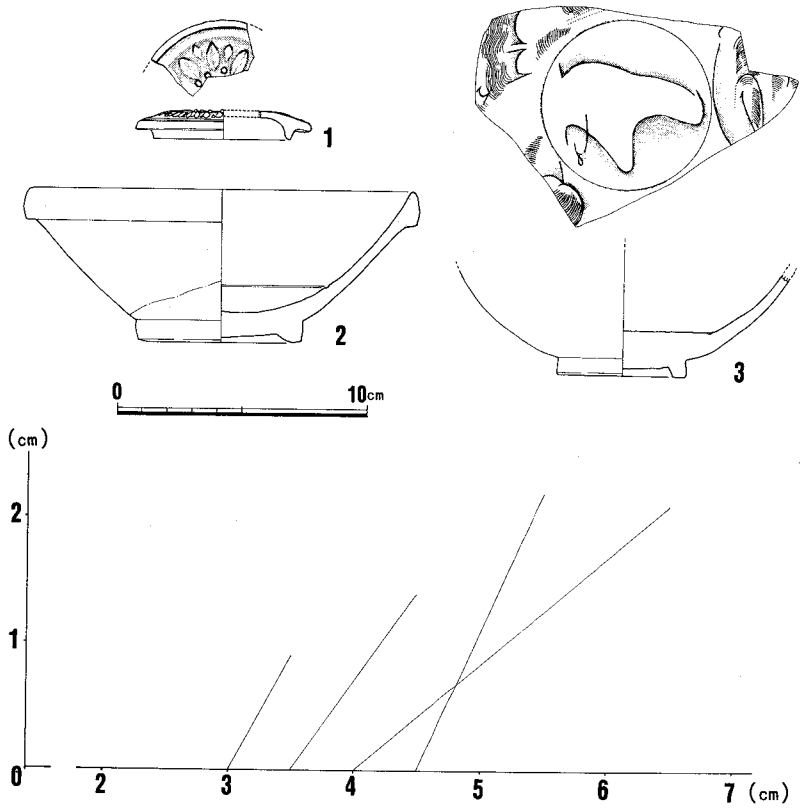


Fig. 53　80号土坑出土遺物

61号土坑　Ｂ－Ⅲ－ｄ区で検出された。60号土坑に接する。遺物は極めて少量である。

62号土坑　Ｂ－Ⅲ－ｃ区で検出された。地山砂層に掘り込まれている。1.1×1.0ｍの楕円形を呈す。遺物量は少なく、性格不明。

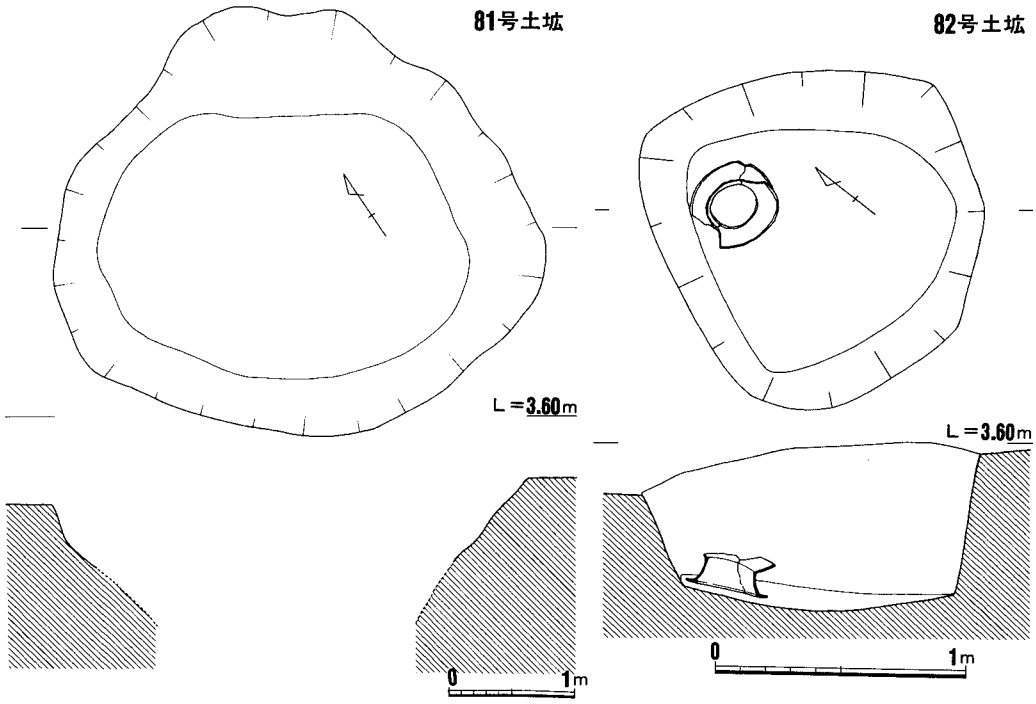
63号土坑　Ｂ－Ⅲ－ｃ区の43号土坑の下層で検出された。砂層に掘り込まれている。1.3×1.1ｍの楕円形を呈するが、遺物量は少なく性格は不明。

64号土坑（Fig.49）　Ｂ－Ⅲ－ｂ区の42号土坑直下で検出された。遺物の出土量は付表に示す通りであるが、図示した遺物は１・２が瓦器碗で、３～５が白磁碗、６～８が白磁皿、９が外面に鎬蓮弁をもつ龍泉青磁碗、10、11が陶器である。計測グラフに示すように土師皿類は糸切り底で杯が目立つ。遺物の時期差が大きく、混在したものであろう。

65号土坑（Fig.49）　Ｂ－Ⅲ－ｂ区で検出され、地山砂層に掘り込まれた下層の遺構である。0.7×0.6mの長方形を呈す。出土遺物は白磁では袋物１点のほか小破片３点があり、青磁では、龍泉碗Ⅰ類１点、同安系碗１点がある。陶器ではＡ群５点、Ｂ群６点、Ｃ群12点があり、図示したものはＢ群に属する短頸壺で、体部上半と下半の破片であり、同一個体と思われる。このほか瓦４点、須恵器２点、古窯系陶器20点などがあり、糸切り底の杯２点もあった。

66号土坑（Fig.50）　Ｂ－Ⅲ－ｂ区の下層検出遺構である。一辺0.9ｍの隅丸正方形をなし、深さ35cmを計る。断面形は深皿状をなす。遺物の出土量は少なく、性格、所属時期は不明である。

67号土坑（Fig.50）　Ｂ－Ⅲ－ａ区の下層検出遺構で、地山砂層に掘り込んでいる。一辺1.5ｍの不整方形をなし、深さ40cmを計る。床面に人頭大の礫９個を置く。遺物は少なく、性格、



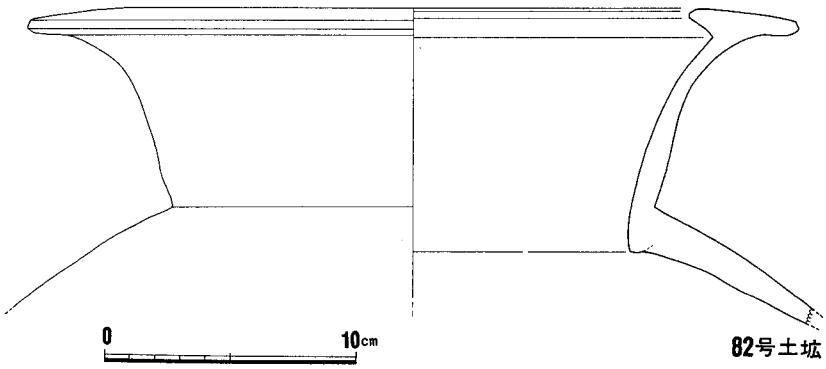
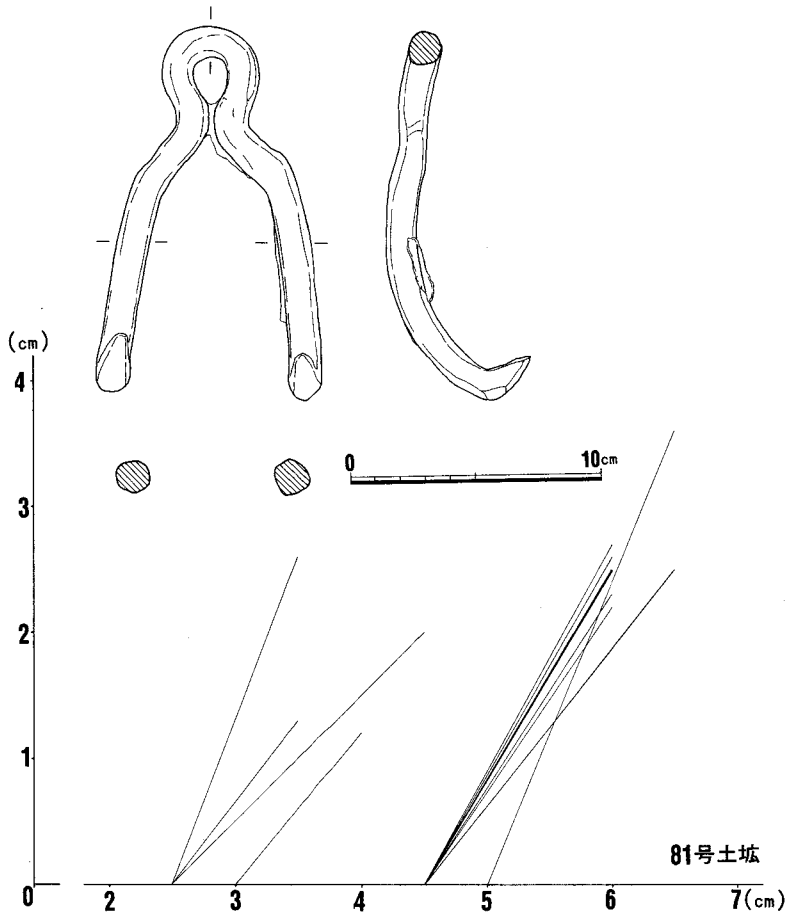


Fig. 54　81・82号土坑実測図と82・84号土坑出土遺物



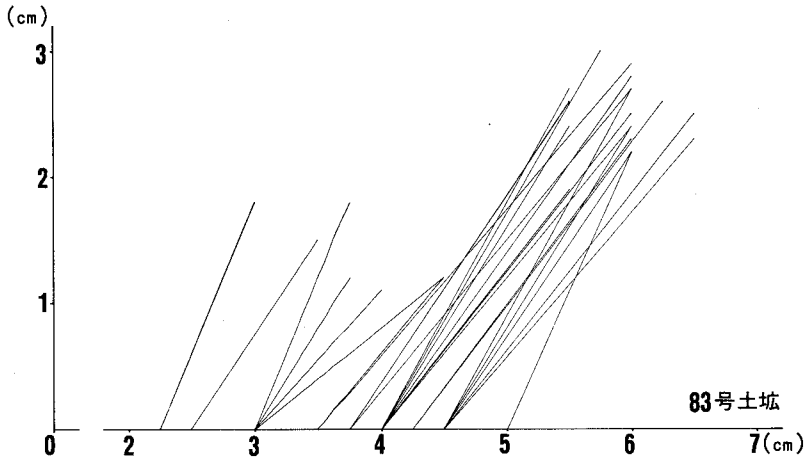


Fig. 55　81号土坑出土遺物と83号土坑出土土師皿類計測表

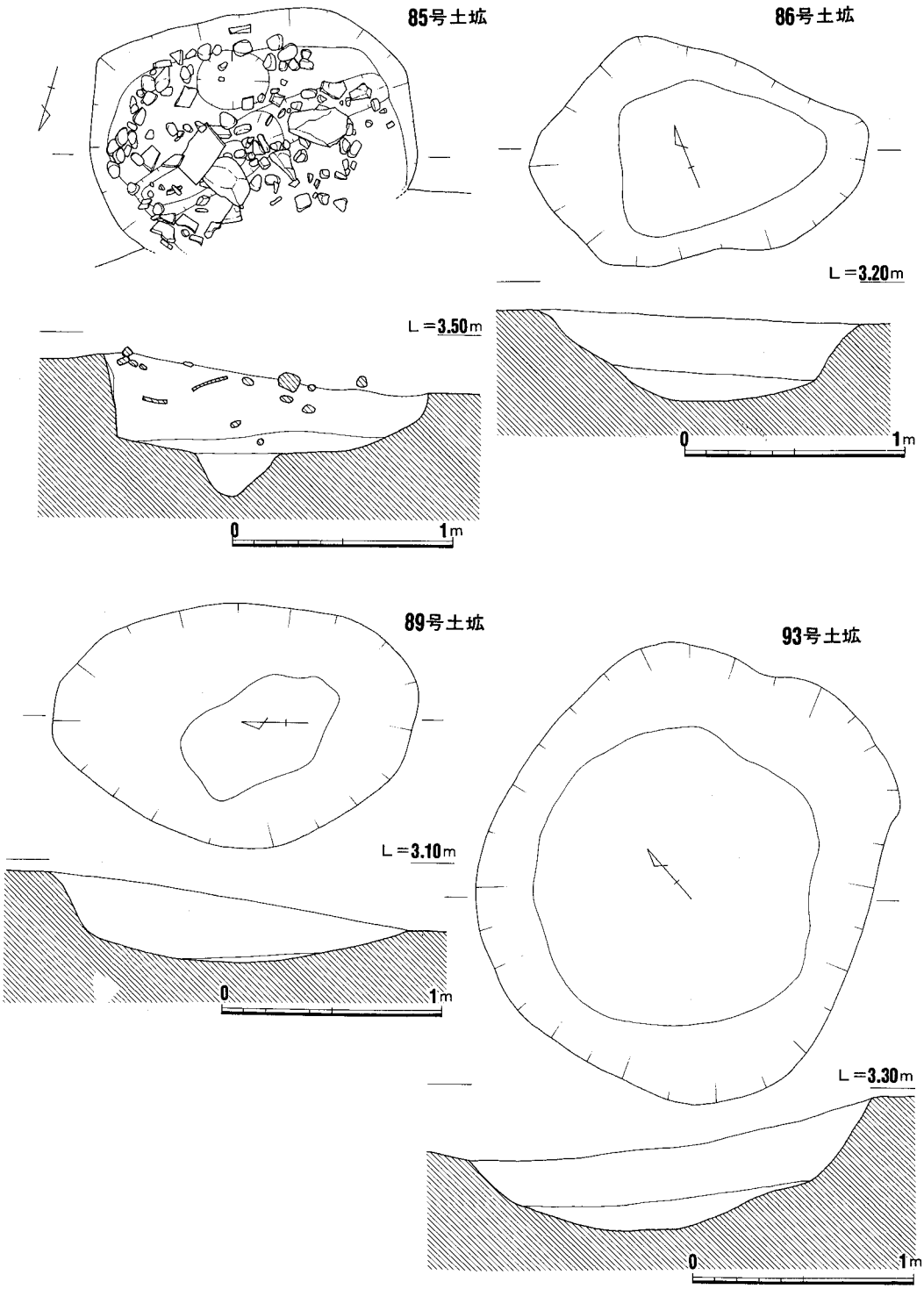
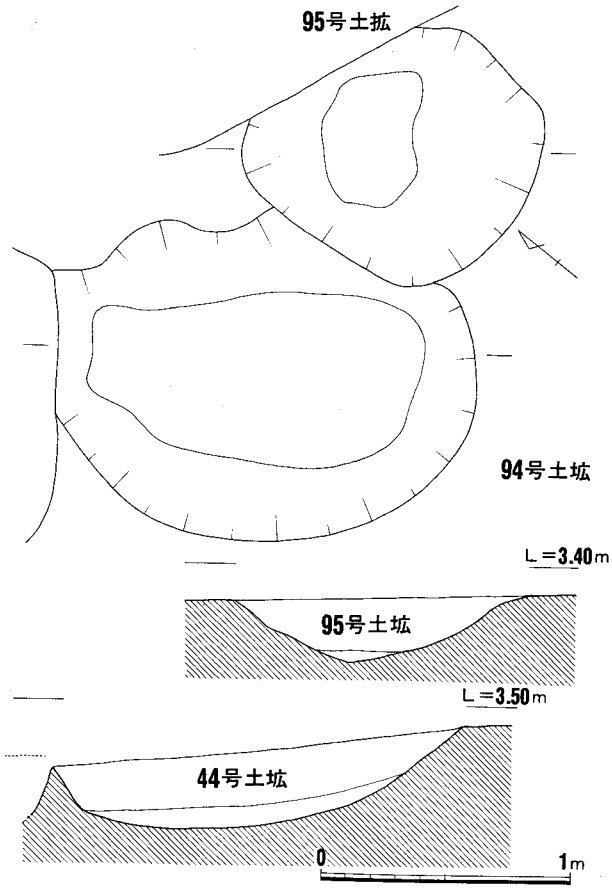


Fig. 56　85・86・89・93号土坑実測図



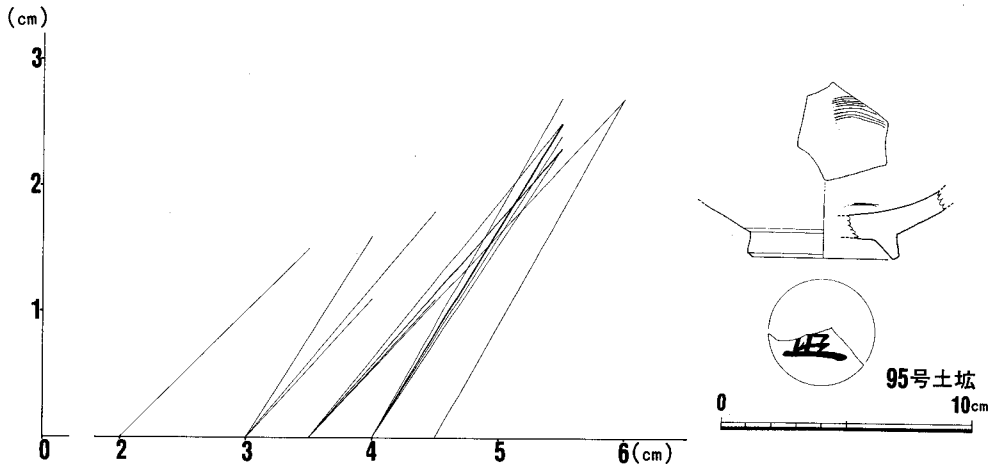


Fig. 57　94・95号土坑実測図と95号土坑出土遺物

所属時期等明確でない。

68号土坑　B－Ⅲ－d区下層検出遺構で地山砂層に掘り込む。1.3×0.9mの不整方形をなす。出土遺物は瓦器碗1点、瓦3点、土師質土器10点、須恵器3点のほか陶器1点が出土している。土師皿類には糸切り杯2点、同小皿4点とヘラ切り杯1点があり、それらの小破片47点がある。

69号土坑　B－Ⅲ－e区の下層検出遺構である。1.9×0.9mの長円形をなす。上部に土師皿類土器溜があった。その他に白磁碗6点、陶器2点等がある。土師皿は細片で年代不明である。

70号土坑　B－Ⅲ－a区で検出された。1.1×0.9mの楕円形をなし、深さ0.3mの浅い皿状の断面をなす。遺物には鉄釘1点があるにすぎない。

71号土坑　B－Ⅲ－a区で検出されている。大半は土留壁に切られている。地山白色砂に汚れた砂がはいり込んでいる。遺物は出土していない。性格、年代ともに不明である。

72号土坑　B－Ⅲ－e区で検出され、71号土坑同様の汚れた砂が地山砂層中に入る。遺物は出土していない。

73号土坑（Fig.49）　B－Ⅲ－e区で検出された。土留壁によって切られる。径1.5mのほぼ正円をなすと思われ、深さ40cmを計る。同安窯系青磁碗Ⅱ類が1点出土している。

74号土坑（Fig.49・50）　B－Ⅲ－g区で検出された。3号甕棺墓を切り、2号（5号）溝によって切られる。遺物は少なく、陶器B群に属する壺の底部破片が出土しているのみである。

75号土坑　B－Ⅱ－b区で検出されている。2号（5号）溝によって切られる。地山砂層に汚れた砂がはいっており、出土遺物はなかった。

76号土坑（Fig.51、PL 16）　B－Ⅱ－a区の2号(5号)溝最下面で検出されており、径約1mのほぼ正円形をなしている。土坑内に最大径0.5mの大礫が置かれていた。湧水がひどく、下位を掘ることはできなかった。井戸枠等は検出されていないが、上位から掘り込まれた井戸の最下面にあたるものと思われる。出土遺物は比較的多く、その数量は付表に示すとおりである。土師皿類はすべて糸切り底である。図示した遺物は白磁高台付皿で見込の釉を輪状に掻きとるⅡ類である。

77号土坑（PL. 16―(1)・17）　B－Ⅱ－a区で検出され、76号土坑に近接する。2.0×1.0mの長方形をなす。湧水がひどく床面は明確でない。出土遺物は白磁碗Ⅵ類6点、青磁では龍泉碗Ⅰ類1点、同安系Ⅱ類1点、陶器にはA群1点、C群1点があった。土師杯で2点、小皿1点もあり、糸切り底である。

78号土坑（Fig.51・52、PL.17―(2)）　B－Ⅰ－e区で検出された。数個の遺構の切り合いで、上面に多量の土師皿を廃棄する。出土遺物は付表に示すとおりで、土師皿類はすべて糸切り底で、小皿は器高の高いものが多い。

79号土坑（Fig.51・52）　B－Ⅰ－e区の検出でB区西隅にあたる。1.86×1.36mの洋梨形を呈す。出土遺物は白磁碗6点、陶器C群鉢1点、青白磁皿1点で、土師皿類はすべて糸切り、大

型の杯がある。図示したものは青白磁皿で底部に浮文がある。

80号土坑（Fig.52・53）　Ｂ－Ⅰ－ｅ区で検出された径１ｍの正方形をなす土坑で、井戸掘方であろう。上部覆土から熙寧元宝１点が出土している。出土遺物は白磁碗27点皿１点、青磁龍泉碗２点、皿１点、同安系碗８点、皿２点、その他の青磁４点がある。青白磁皿３点、合子蓋１点もある。陶器はＡ群６点、Ｂ群７点、Ｃ群13点、その他２点である。国産遺物は須恵器４点、瓦器碗2点、瓦質土器２点、瓦24点があり、土師皿類は糸切りで杯２点、小皿５点、小破片67点がある。図示した遺物は１が青白磁合子蓋、２が白磁碗Ⅳ類、３が龍泉碗Ⅰ－４類である。

81号土坑（Fig.54・55）　Ｂ－Ⅰ－ｂ区で検出された。3.5×3.1ｍの円形をなす。近世井戸である。出土遺物には図示した鉤手状の鉄製品があり、伊万里など近世の陶磁も20点と多い。

82号土坑（Fig.54、PL.19―(1)）　Ｂ－Ⅰ－ｇ区で検出された。1.25×1.35ｍの不整円形の土坑である。床面に弥生中期後半頃の鋤先形口縁をなす壺形土器口頸部が倒立してあった。本来は甕棺に用いられていたものであるが、覆土中に白磁、土師質土器、瓦などが混っており、廃棄物処理の際同時に埋められたものであり、甕棺墓の項では扱わなかった。

83号土坑（Fig.55）　Ｂ－Ⅰ－ｅ区で検出された2.1×1.2ｍの不整円形土坑である。遺物はやや多く白磁碗３点、皿１点、青磁龍泉碗１点、同安系碗１点、天目１点に、瓦器３点などがあり、計測グラフに示すように糸切り土師杯、小皿が19点、８点あり、それらの小破片は253点に及ぶ。

84号土坑（Fig.54、PL.18）　Ｂ－Ⅰ－ａ区で検出された近世初頭の瓦（塼）積み井戸である。遺構は土留壁で半截されている。井戸枠内から図示した青磁碗（１）と白磁碗（２）をはじめ土師小皿が出土し、掘り方からはＢ群陶器破片が出土している。

85号土坑（Fig.56）　Ｂ－Ⅰ－ｇ区で検出された。1.5×1.1ｍの長方形をなす。覆土中には近世瓦、礫が多数投棄されている。近世の廃棄物処理土坑である。

86号土坑（Fig.56、PL.19）　Ｂ－Ⅰ－ｇ区で検出された。1.5×1.1ｍの卵形をなす。深さ0.4ｍの深皿状の断面形をなし、遺物は少ない。性格不明である。

87号土坑　Ｂ－Ⅰ－ｆ区で検出されている。1.5×1.05ｍの長方形に近く、深さ0.4ｍを計る。遺物はそれ程多くなく、白磁碗３点、皿１点、龍泉碗、同安系碗各１点、陶器Ｂ群鉢１点のほか、若干の土師皿類が見られる。

88号土坑　Ｂ－Ⅰ－ｆ区で検出された2.1×1.2ｍ程度の不整長円形をなす土坑である。地山白砂層中に汚れた砂がはいり込む。深さ0.3ｍを計り浅い。出土遺物はほとんどない。

89号土坑（Fig.56）　Ｂ－Ⅰｂ区で検出された遺構である。1.8×0.9ｍの長円形をなす。地山白色砂に汚れた砂がはいり込んでおり、浅い皿状の凹みをなす。遺物はほとんど見られない。

90号土坑　Ｂ－Ⅰ－Ｃ区で検出された。1.1×0.65ｍのほぼ長円形をなすが、やはり汚れた砂がしみ状に地山白色砂中にあるもので明確な遺構とは認め難い。遺物は殆んどみられない。

91号土坑　B－Ⅰ－c区の検出遺構である。2.5×1.9mの不整円形で、深さ1mを計る。井戸の掘り方であると思われるが、井戸枠等は検出されていない。須恵器杯、土師質甕、白磁碗各1点が出土している。

92号土坑　B－Ⅰ－g区で検出されたもので、幅2.3m、長さ約5mの溝状遺構で、深さ35cmと浅い。地山砂層にうすく汚れた砂がはいり込んでおり、性格も明確ではない。遺物も少ない。

93号土坑（Fig. 56）　B－Ⅰ－g区で検出され、1.95×1.25mの隅丸長方形をなす。深さ45cm程で皿状をなす。遺物は少なく、須恵器杯破片1点が出土しているにすぎない。

94号土坑（Fig. 57）　B－Ⅰ－c区で検出され、95号土坑と接するが切りあいは明確でない。1.68×1.25mの長円形をなし、深さ35cmの皿状をなす。遺物はほとんど認められない。

95号土坑（Fig. 57）　B－Ⅰ－c区で検出され、径1.1mの不整円形をなす。深さ28cmの浅い皿状をなす。出土遺物はやや多く、その数量は付表に示すとおりである。滑石製石鍋、砥石各1点も出土している。土師皿類はいずれも糸切り底である。図示した遺物は白磁碗Ⅱ類に属するもので見込に櫛描文をもち、底部に墨書が残されているが、半欠であるため判読できない。

96号土坑　B－Ⅰ－c区検出の土坑である。一部中世遺物の混入も見られるが、11号甕棺墓であろうと思われる。

建物礎石列（Fig 58、PL. 27―(1)）A－1－Ⅲ区で検出されたもので、主軸方位をN－82°－Wにとり、一部壁中に逃げている可能性もあるが、現存する桁行4間(3.8m）で、径20～30cmの平石を用いたそれら礎石間の寸法は1.95mで等間隔である。礎石は一列のみ検出されており、柵または塀状の建物の可能性が高い。この礎石列の方位は1、2号溝の方位と近似し、それらと同時期、すなわち14世紀半以前に営まれたものであろう。

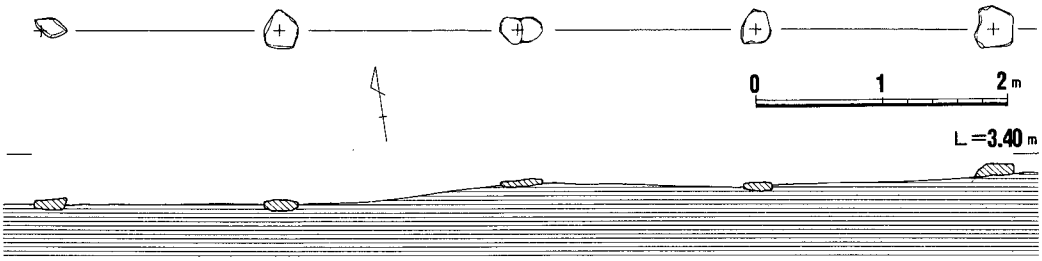


Fig. 58　A-1-Ⅲ区検出の礎石列実測図

ピット群　A－1－Ⅰ・Ⅱ区とA－2－Ⅰ・Ⅱ区の下層を中心に1群、B－Ⅱ区上層とⅠ・Ⅱ区下層を中心に一群がある。A区のピット群は、重複しているものも含めて18穴が数えられる。径40cm程度のものから20cmの小形のものまで様々である。掘立柱建物の柱穴と思われるが、周辺遺構などによって寸断され、組織的に把握はできない。1・2号溝と同様の時期であろう。B区上層ピット群は22穴を数える。組織的把握は困難である。室町～江戸期の建物柱穴であろう。下層ピット群は砂層に掘り込まれており、掘り方は不明確である。溝と同様の時期であろう。

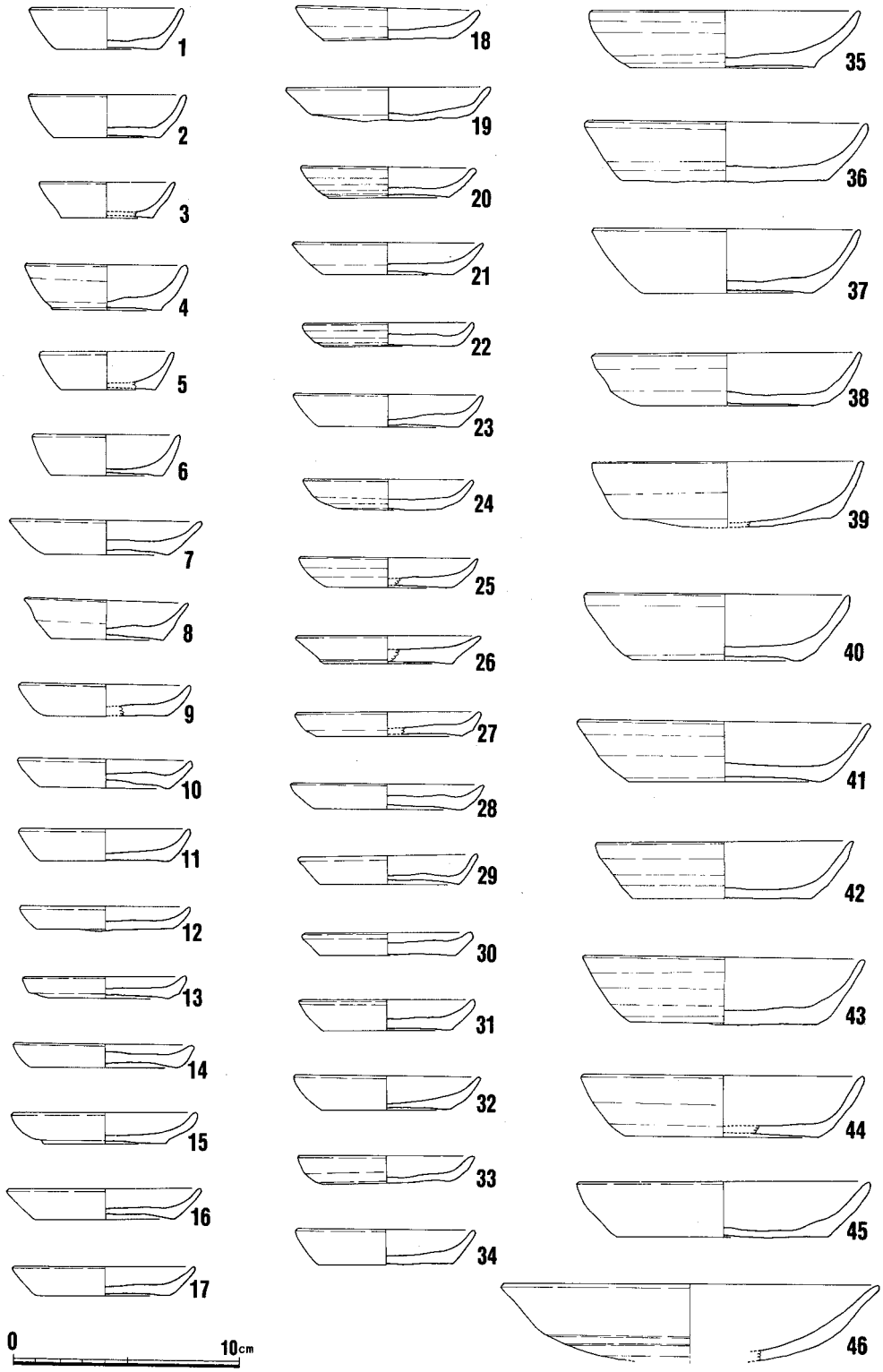


Fig. 59　　１号溝出土遺物（１）

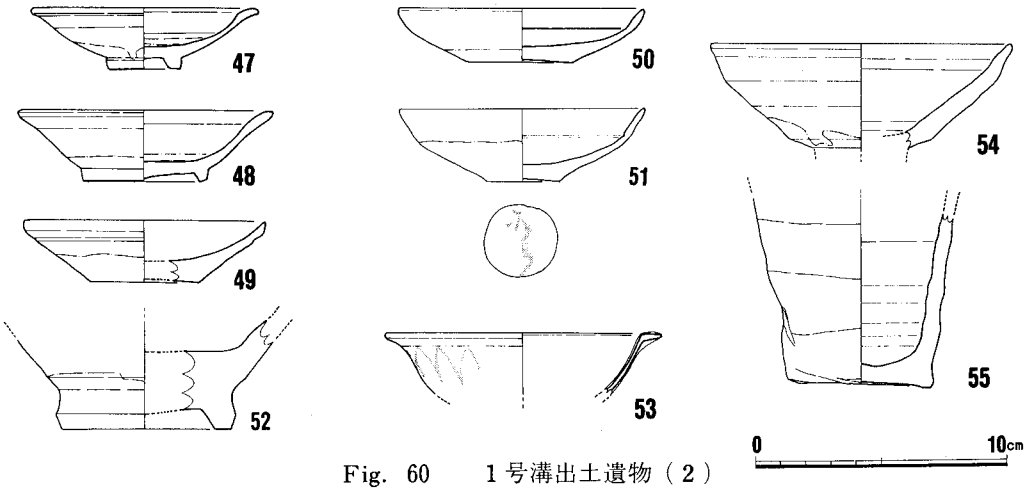


Fig. 60　　1号溝出土遺物（2）

1号溝(Fig.59・60、PL20—(2))　A－2－Ⅰ・Ⅱ区で検出されている。幅1.8mで、溝床面と上端との比高は80cmを計り断面形はU字形をなす。一部23号、28号土坑に切られる。主軸方向はN－86°－Wのほぼ東西を向き、2号溝と平行する。1号溝は14号土坑壁に接するところで収束している。この溝の上面には、この溝が埋没し溝としての機能を失い辛うじてその痕跡をとどめる段階に多量の土師皿類が廃棄されている。これらの土師皿類は完形品が多く、また数枚重ねで置かれたものもあって、単なる投棄ではないことが窺われ、祭祀に伴うものではないかと推察される。出土遺物は多量で、その数量は付表に示すとおりである。図示した遺物は1～6・8が器高3.0～3.4cmの高い土師小皿、7.9～34が器高1.0～1.8cmの低い小皿で、19のみがヘラ切り底である。35～45は土師杯でいずれも糸切り底をなす。糸切り小皿の口径別点数を見ると、7.0cm＝65点、7.5cm＝25点、8cm＝193点、8.5cm＝13点、9cm＝87点、9.5cm＝3点、10cm＝22点で、8cmに集中している。ヘラ切り小皿は2点で、いずれも口径9cmである。杯はいずれも糸切り底で、11cm＝59点、12cm＝138点、12.5cm＝15点、13cm＝151点、14cm＝31点、15cm以上＝13点と、12～13cmにピークが見られる。これらは14世紀前半代を中心としたものである。46は土師丸底杯で体部下半が肥厚し、瓦器碗に共通した器形をもつ。47、48は高台付白磁皿、50、51は平底白磁皿で、51の底部には仮名書きの墨書がある。同名の文字は類例は多いがまだ判読されていない。52は白磁で四耳壺の底部破片で高台脇にくびれを作る形式のものである。53は外面に蓮弁文を施し口縁を水平に開く龍泉青磁Ⅲ類の杯である。54は天目碗で口縁直下にくびれをつける。55は陶器B群の壺体部下半である。白磁碗はⅣ類、Ⅵ類が多く口ハゲのものもあり、皿にも口ハゲ平底4点がある。青磁龍泉碗はⅠ－5・6・9類とⅡ－2類、Ⅲ類が多い点が特徴的である。この遺構の溝としての機能を失う時期はほぼ14世紀前半段階求められよう。

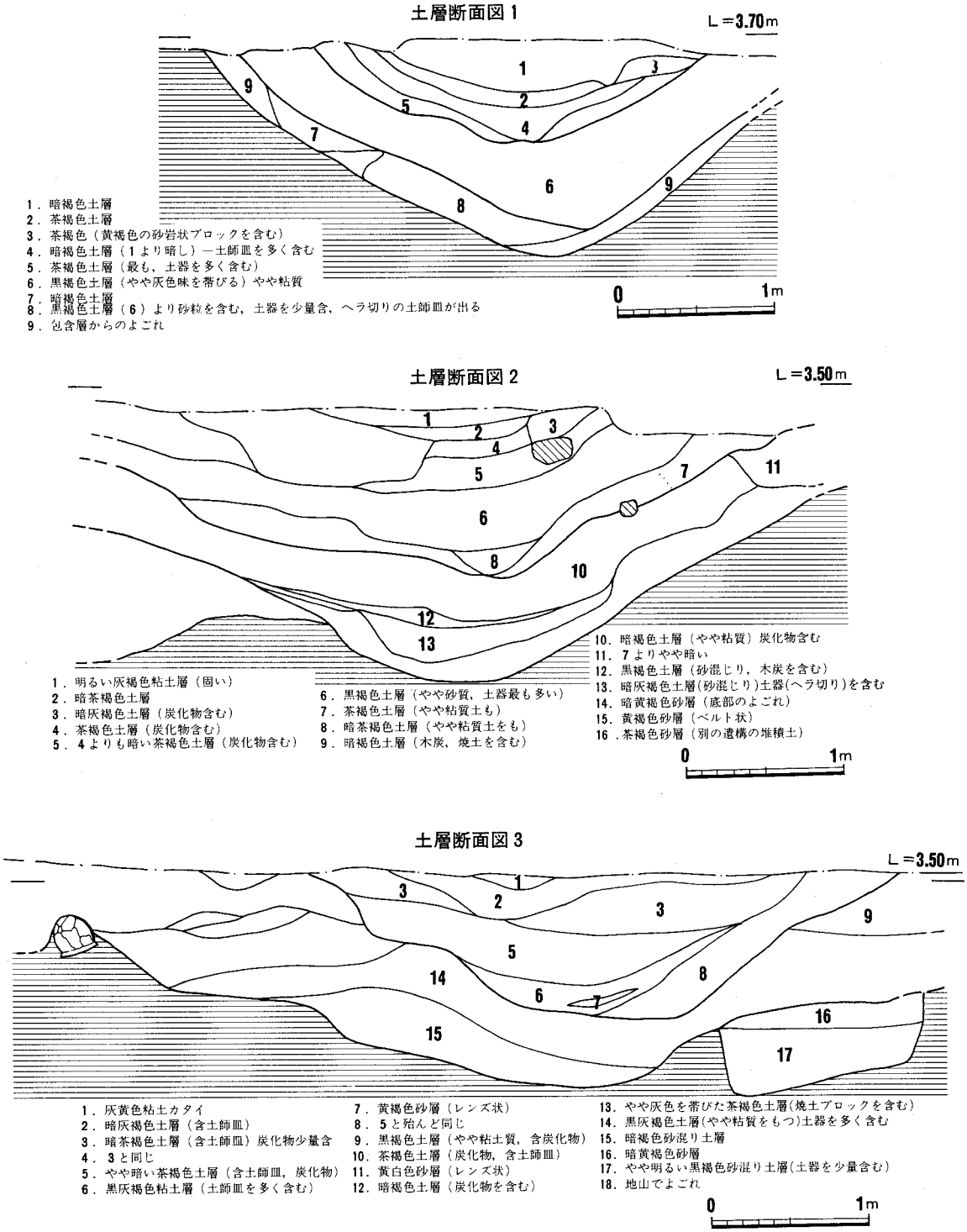


Fig. 61　　２号溝（５号溝）土層断面図

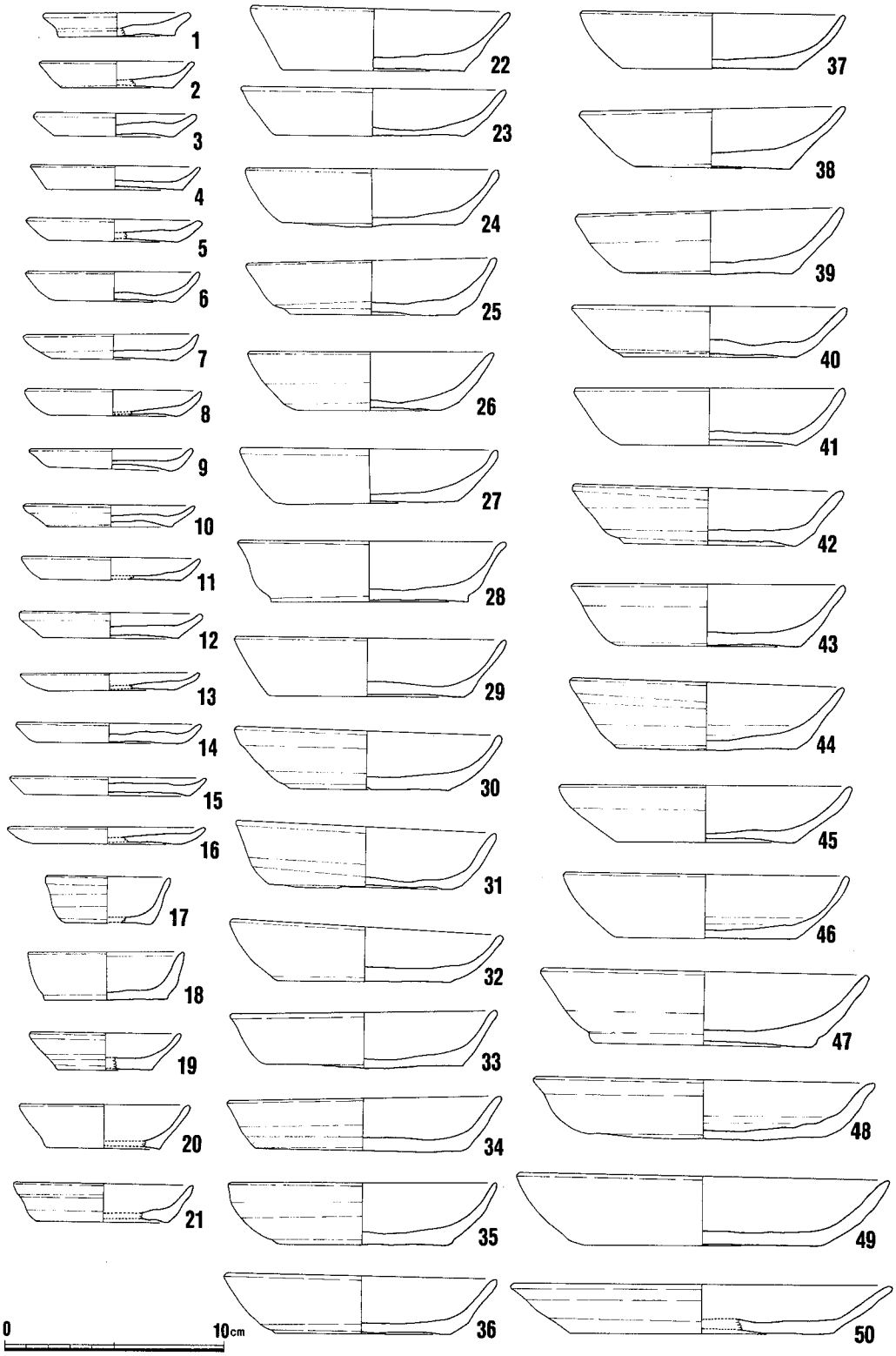


Fig. 62　　2号溝（5号溝）出土遺物（1）

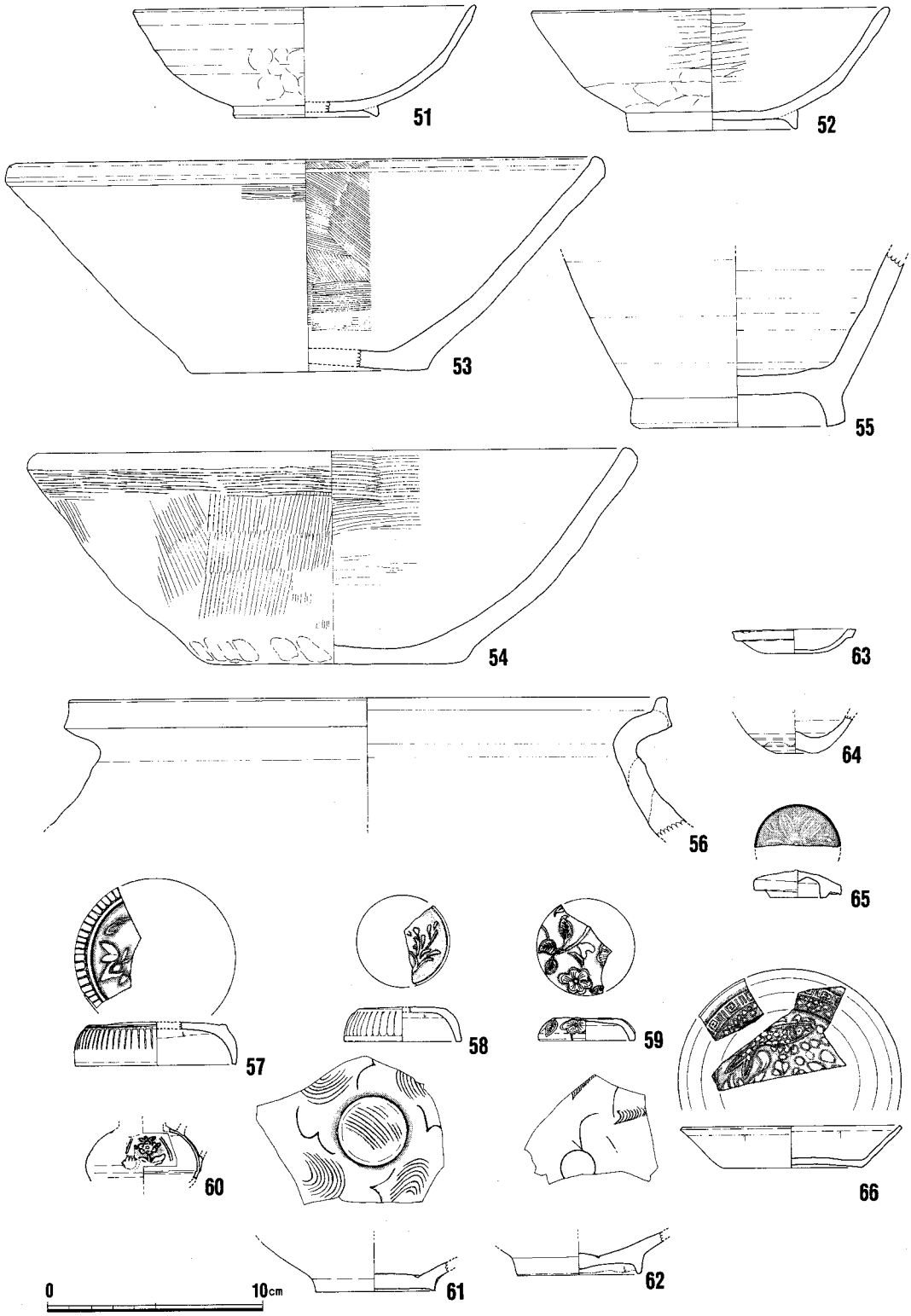


Fig. 63　　２号溝（５号溝）出土遺物（２）

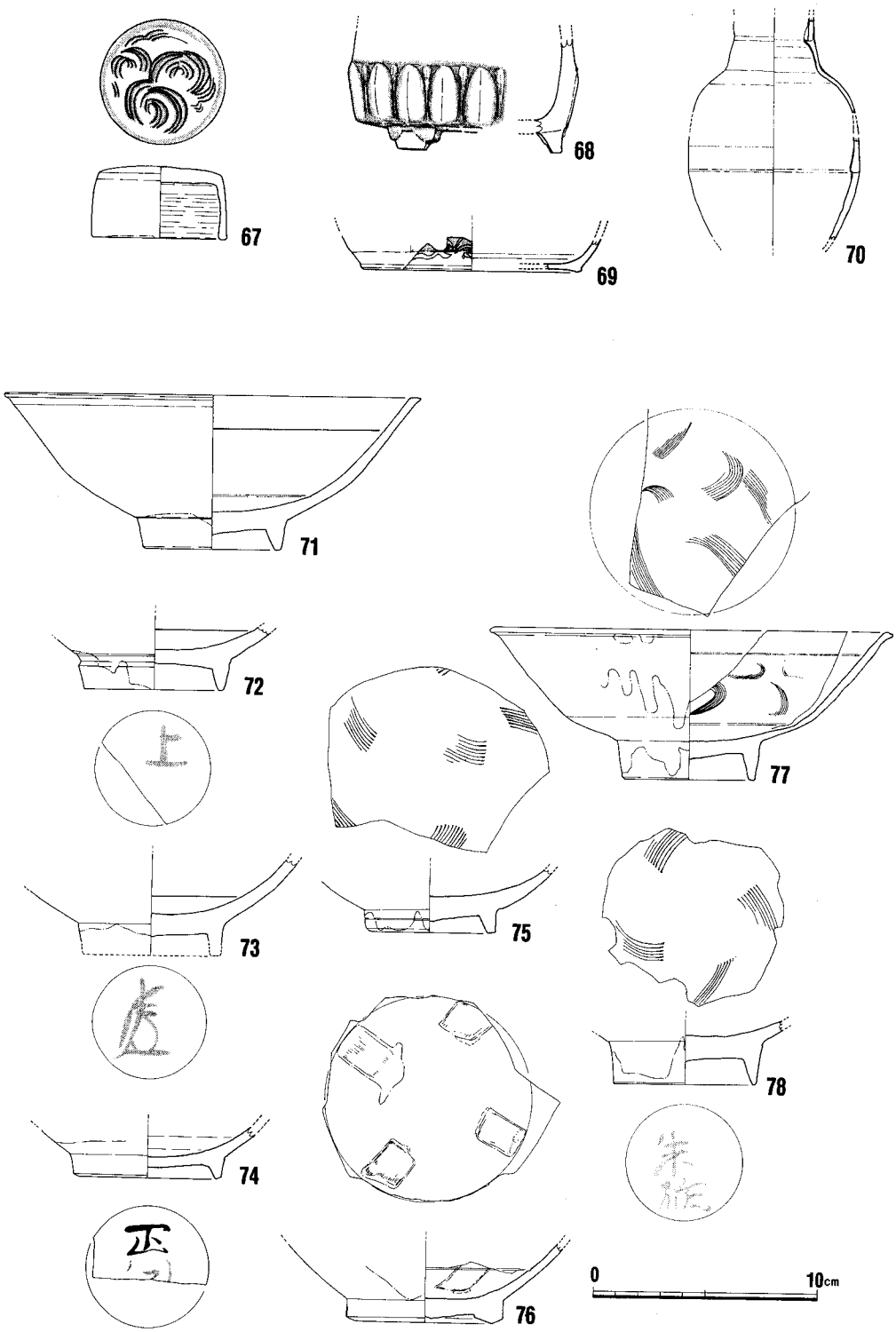


Fig. 64　　2号溝（5号溝）出土遺物（3）

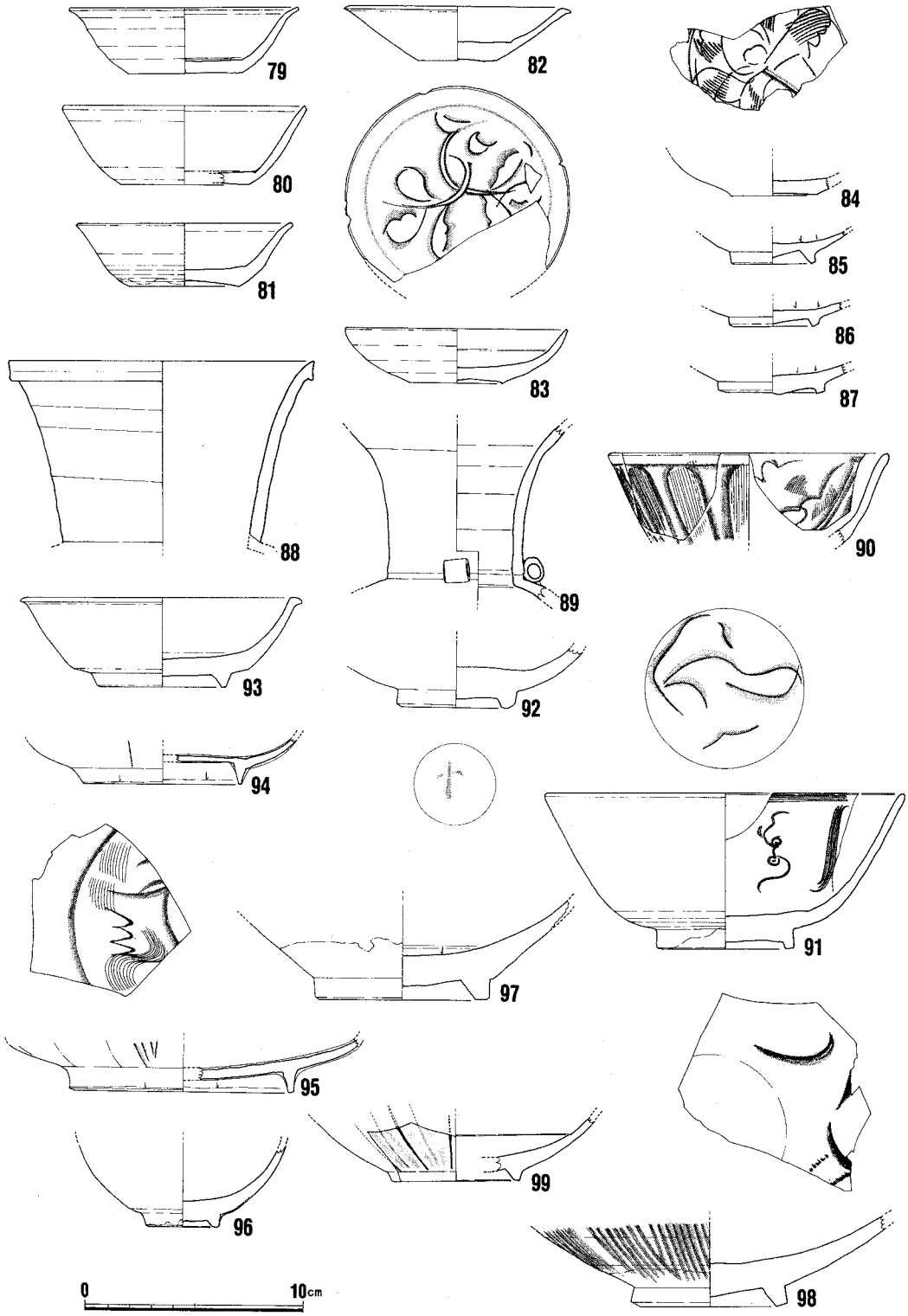


Fig. 65　　２号溝（５号溝）出土遺物（４）

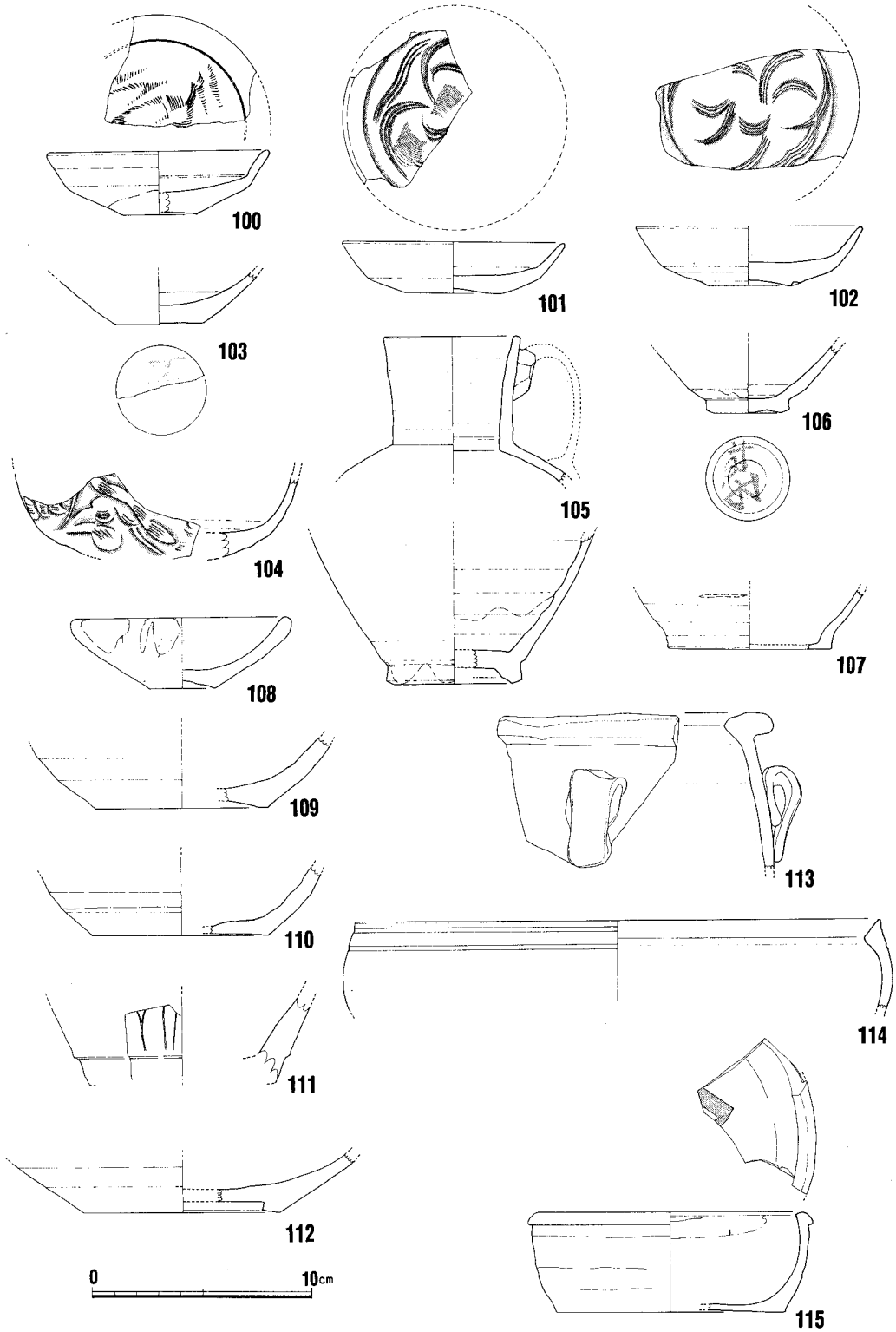


Fig. 66　　2号溝（5号溝）出土遺物（5）

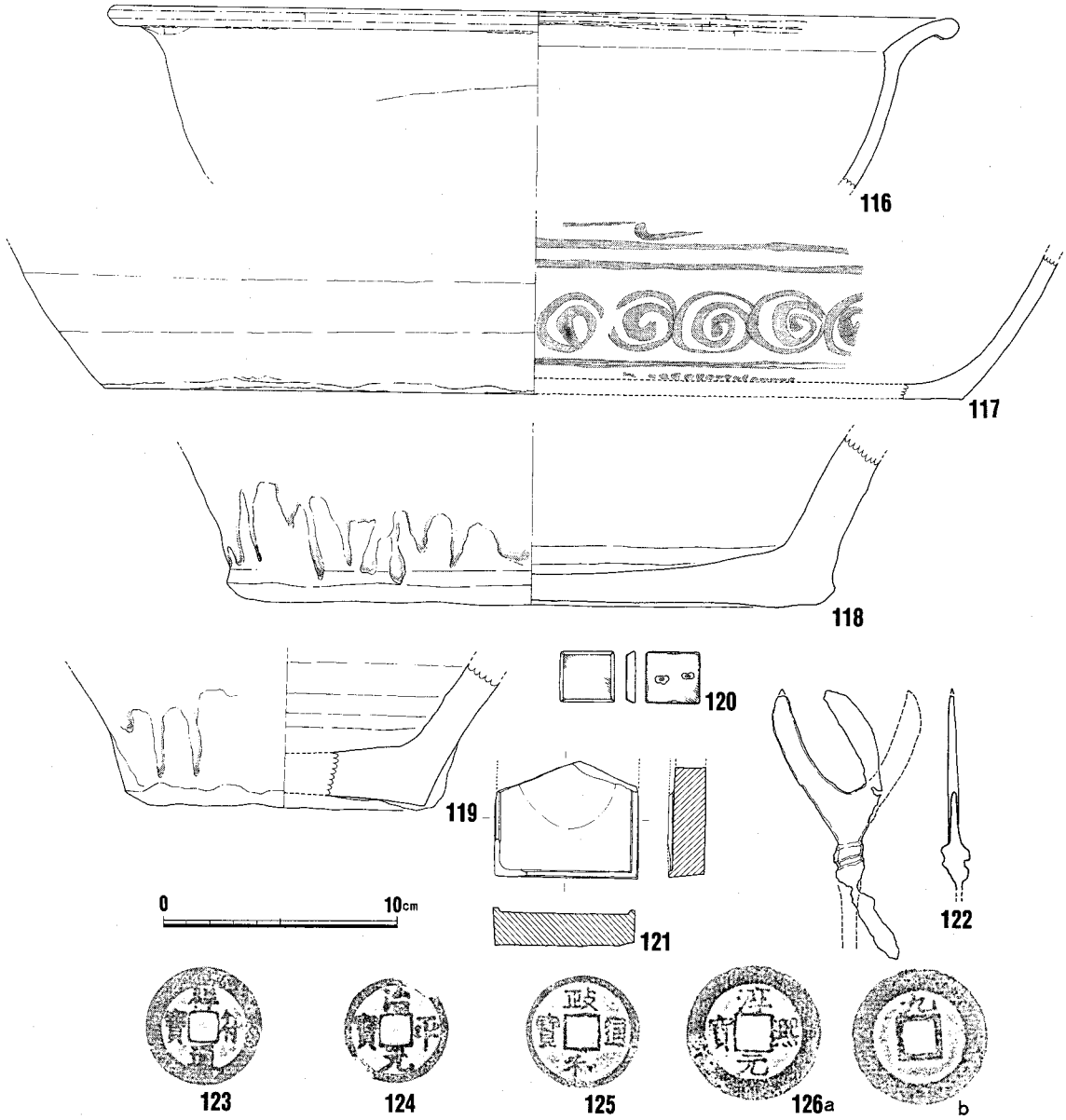
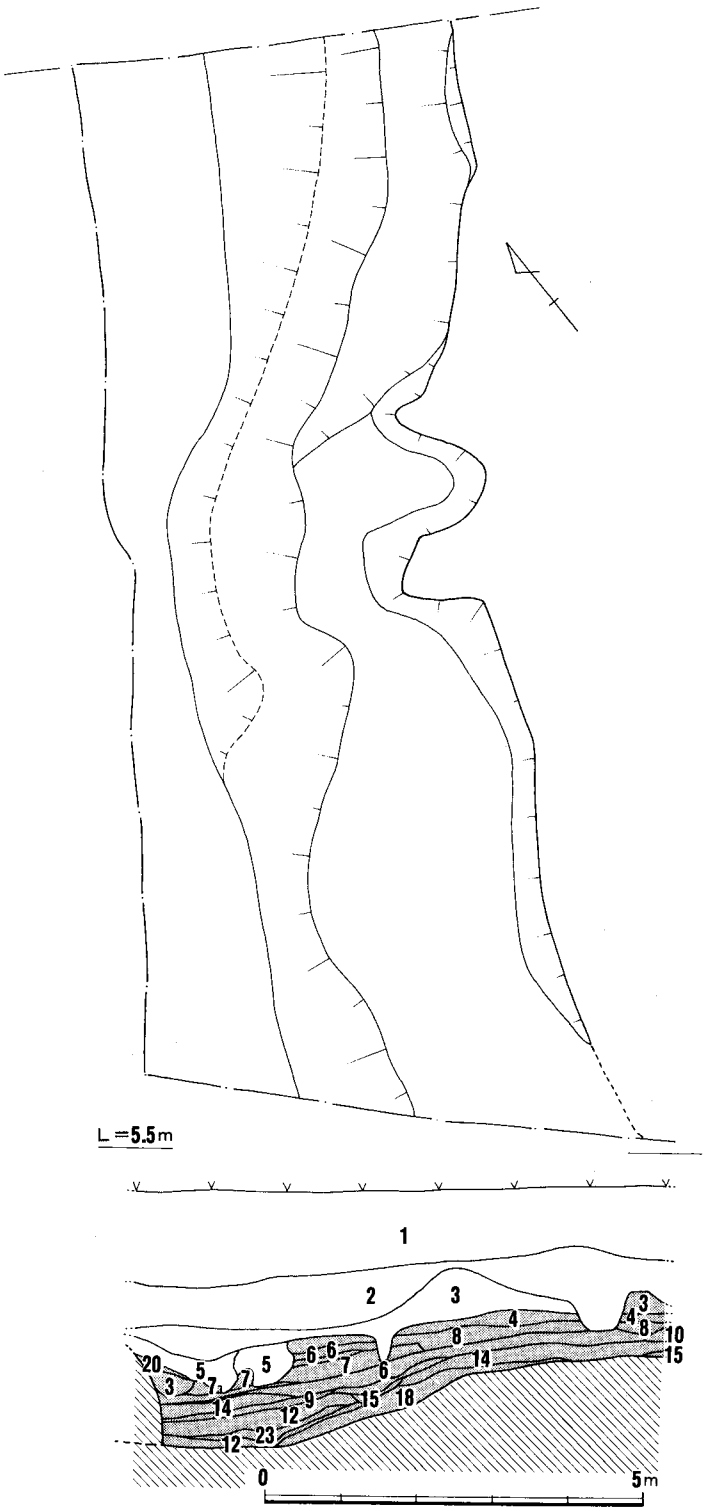


Fig. 67　　２号溝（５号溝）出土遺物（６）

２号（５号）溝（Fig. 61～67、ＰＬ．20～26）　　Ａ－２区とＢ－Ⅱ・Ⅲにかかる溝である。Ａ－２区調査時には２号溝と呼んだが、Ｂ区調査での溝検出時には２号溝と若干ずれる感じがあったので５号溝と呼称した。その後、両者同一の溝であることが確認された。ここでは２号(５号)溝と呼ぶ。この溝は主軸をＮ－88°－Ｅのほぼ東西方向にとり１号溝と平行している。Ａ・Ｂ区を斜断する恰好になり、西側は調査区外に延びているが、東側はＢ区東隅で収束している。土層断面図1～3（Fig. 61）で観察できるように、上層と下層に大きく区分され、このうち上層部分では、膨大な量に達する土師皿類が出土しており注目される。上層溝は土師皿類の

大量出土する面をもって、その規模が推察され、幅2.5～3.7m、深さ0.65～0.95mを計り、断面立上りはなだらかで深皿状をなしている。壁の土留等の痕跡は観察されず、素掘であったものと思われる。最下位に粘質土や砂層が見られ、排水などの機能はあったものと思われるが、日常的に水が澱んでいたとは思われない。土師皿類のほとんどが完形品で投棄されており、しかも数枚重ねで出土する例も多く、単なる廃棄物の処理とは考えられない。この面から出土する土師皿類は、後でも述べることになるが、いずれも糸切り底で、器高の高い小皿も多く、14世紀前半代に所属時期を求められるものである。A区では当該期の火葬墓もしくは火葬施設が多く、それらの祭祀に関わるものではないかと推察される。また、極めて短期間のうちに投棄されたものであろう。下層の溝は地山白色砂層中に掘り込まれたもので、弥生時代甕棺墓地等を切って営まれており、幅3.5～4.5mで深さ1.3～1.8mを計る。壁はなだらかで土留等の痕跡は見出せない。皿状の断面形を見せるが、地山が砂であるため徐々に崩壊し、このような状況を示すのであろう。本来の壁の立上りはもっと急であったと思われる。この下層溝最下面は既に湧水帯に達している。下層溝での遺物出土量は上層溝には及ばないが、最下面から出土する土師皿類は糸切り底を全く含まず、すべてヘラ切りであることは重要で、この溝の造営年代はほぼ11世紀後半に求められる。下層溝の主軸もほぼ東西を向いており、上層溝はこれを踏襲したものである。出土遺物は、付表に示すように、また写真に示すように夥しい量である。ここでは図示した遺物を中心に若干の説明を加えることにしておきたい。なお、特に断わらない限り上層溝の遺物である。1～16は器高の低い土師小皿、17～21は器高の高い土師小皿である。22～50は土師杯でいずれも糸切り底である。これらのうち法量を確実に把握しうるものから口径別点数を見てみると、小皿では7cm＝925点、7.5cm＝142点、8cm＝1,657点、8.5cm＝83点、9cm＝357点、9.5cm＝5点、10cm＝31点となり、杯では11cm＝1,266点、12cm＝2,970点、12.5cm＝122点、13cm＝808点、13.5cm＝13点、14cm＝148点、15cm以上＝59点となる。小皿では7cmと8cmにピークが見られるが、7cmには器高の高い小皿が多い。杯では11、12、13cmが多く、特に12cmにピークがある。この傾向は1号溝の場合と同じで、ほぼ同時期、すなわち14世紀前半代に営まれたものであろう。51、52は瓦器碗で、ともに指ナデの後ヘラ研磨を行なう。53、54は瓦質のこね鉢で内外面ハケ目調整を行なうが、内面体部下半は使用による磨耗が著しい。55は瀬戸系の壺で灰黄色の緻密な胎をなし、灰青色の釉がうすく施されているが器壁になじまない。56は須恵質の大壺である。57～70は青白磁である。57～59は印籠形合子の蓋、65は壺形合子の蓋で、いずれも上面に花文を型押しする。60は水滴の胴部で上半に花文をもつ。63は上面のみに施釉した蓋と思われるもので、おそらく小型壺とセットになるものであろう。下層溝出土。64は小壺で底部にへそ状のくぼみをもつ。61、62は碗で高台内を浅く削り、見込に大小の沈圏線をめぐらし、体部にはヘラと櫛による文様を施す。62は下層溝出土。66は口ハゲの印

花皿で、見込には魚藻文の浮文をもつ。67は上面に櫛描き渦巻文をもつ梅瓶の蓋で、博多での出土例は少ないが、この遺構では同文様の梅瓶胴部破片が２点出土している。68は体部下半に複弁の鎬蓮弁文をもつ香炉で、厚く青白釉がかかる。脚は露胎である。69は体部に唐草文の浮文をもつ型作りの壺で、徳化窯タイプのものである。70は胎の薄い壺で、頸部と体部に継目が見える。71～78は白磁碗で、74、76以外は下層溝の出土である。これらには墨書を底部に残すものが少なからずあり、「上」(72)、「正綱」(74)、「朱旋」(78) と読める。76は三角玉縁をもつⅣ類であるが、見込に４ケ所長方形に釉を削りとっているものである。79～84は平底皿である。79～81は口ハゲ、82は口縁端部を外方に引き出すもの、83は見込に片切彫りの花文を施すもの、84はヘラの細線と櫛による花文をもつものである。85～87は高台付皿でいずれも見込の釉を輪状に掻きとる。88、89は白磁水注の頸部で、89には管状の耳がつく。90～99は青磁碗、鉢である。90～92は龍泉Ⅰ類に属し、92は下層溝出土でこの類は珍しく墨書が見られ「十」と読める。93～95は畳付のみを露胎とする龍泉Ⅲ類で、この遺構ではこの種がやや多い。97、98は茶色にくすんだ釉をかける鉢で高台が厚い。99は外面に平坦な陽刻蓮弁文を施し灰青色不透明釉をかける高麗青磁で、畳付のみを露胎となす。96は緑青色透明釉をかける小碗である。100～103は青磁皿である。100、103は同安系、101、102は龍泉窯である。103は下層溝出土で「王」の墨書がある。105は白磁水注で底部と頸部は接合しないが同一個体と思われる。104は外面にヘラと櫛による草花文を施す青磁壺で、外面のみ青緑色の釉を施す。106は天目碗で底部に墨書が残されているが、判読しえない。107～119は陶器である。107、108、116が下層溝から出土している。108が皿である。107はＡ群の壺で胎が薄い。109、110、112、114はいずれもＢ群に属し、114の鉢以外はいずれも壺の底部である。113はＣ群の四耳壺で縦耳がつく。 111は外面に細沈線による蓮弁文を刻した緑釉陶器で、釉が一部銀化している。胎は緻密で磁質に近い。115～117はＡ群に属する泉州磁灶窯の黄釉鉄絵盤である。115は小型で、口縁端部をわずかに折り返し肥厚させるもので、内面底にのみ褐彩が見られる。 116は下層溝の出土で広い鍔がつく。外面体部上半から内面にかけてベージュ色の化粧土をかけ、内面に茶味の強い透明釉をかけている。口縁端の下に目跡がつく。 117は大型の盤で内面体部下半に渦巻文をめぐらしている。118・119は胎の粗い大型容器である。これら図示したもの以外に、広東なまこ風の釉をかけた高台付鉢や大型容器、鉄斑文の釉下彩にオリーブ色の透明をかけた青磁質の壺などがあってバリエイションに富む。120は2.3×2.1cmの長方形をなし、厚さ4.2mmで断面台形をなす石帯巡方である。裏面に２個の小孔からなる穴を２ケ所穿っている。白色を呈するが石材は不明。 121は粘板岩を用いた長方形の硯である。 122は雁股式の鉄鏃で、14世紀前半代の戦乱を示す好資料である。このほか21枚の銅銭が出土しているが拓本可能なものは少なく、123の祥符通宝、124の治平元宝、125の政和通宝、126の淳熙元宝の４枚だけである。



1．撹乱
2．茶味の強い明茶褐色
3．明茶褐色（土器細片混り）
4．黒茶褐色
5．茶褐色土（土器細片混り）
6．黄緑色粘土混り土層
7．黄色砂層
8．灰色褐色土
9．黒褐色粘質土層
10．やや明るい灰茶褐色土
11．黒褐色土層（やや砂質，下方は粘質）
12．強粘質泥炭状黒色土層（含骨片）
13．炭黄色砂層
14．暗茶褐色土
15．白色土
16．黒褐色砂層
17．やや暗い灰黄色粘質土
18．茶褐色砂層（レンズ状の黒色土）
19．黄褐色砂層（若干の粘質土を含む）
20．灰白色砂層
21．酸化鉄
22．黒色土中にうすい砂層の互層
23．黒褐色土（レンズ状のうすい砂）

Fig. 68　　3号溝(谷状落ち込み)実測図

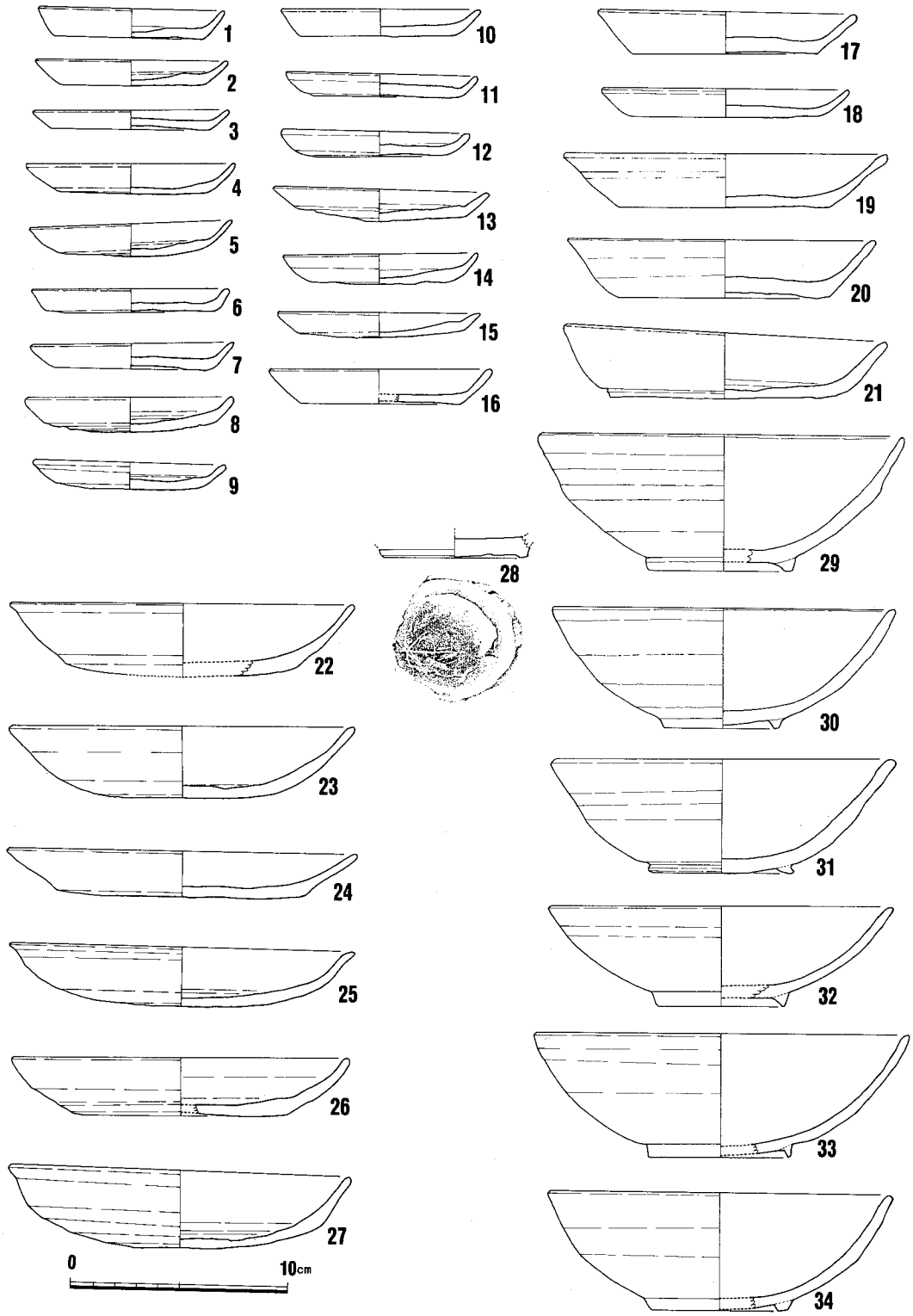


Fig. 69　　３号溝出土遺物（１）

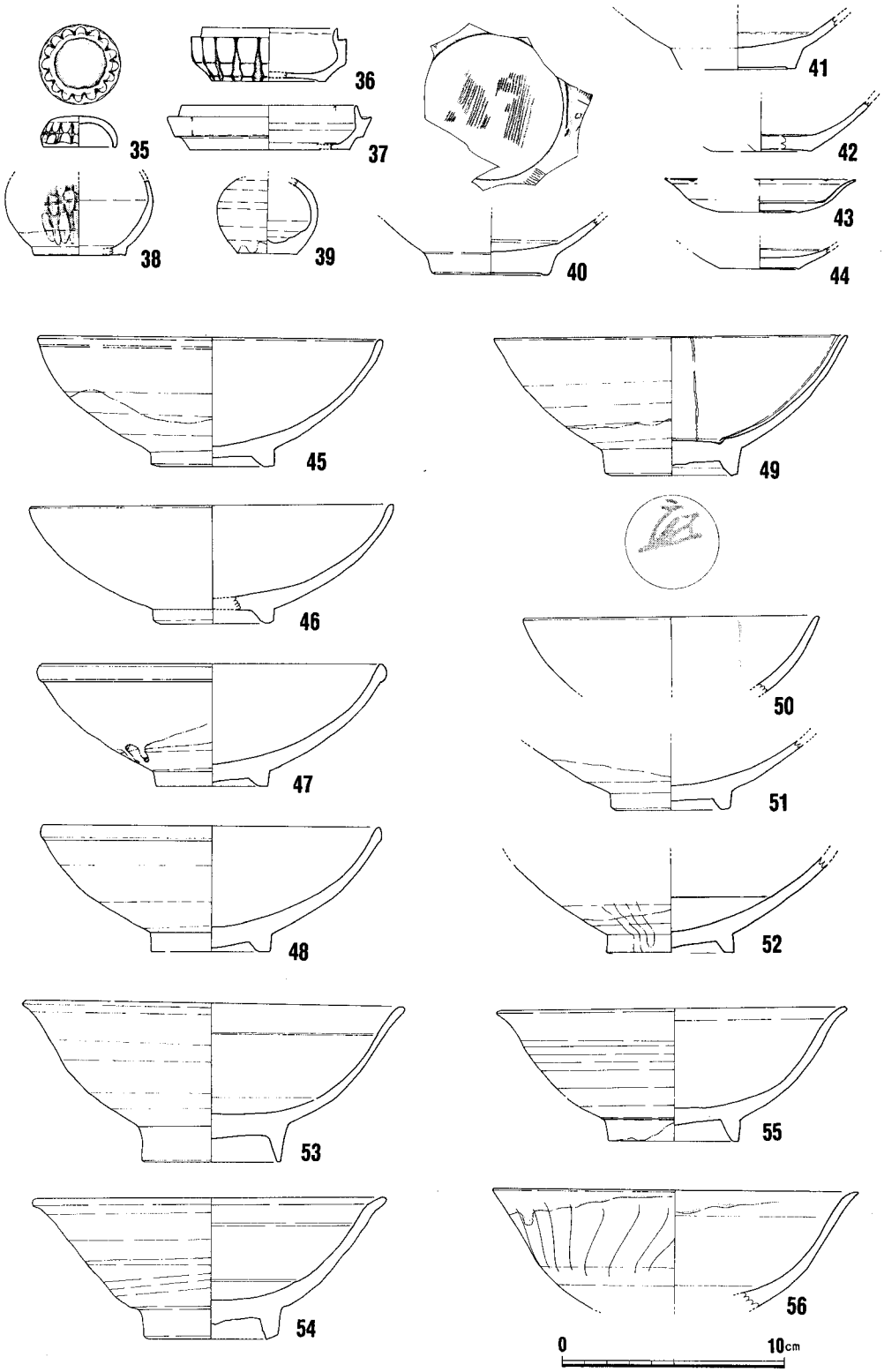


Fig. 70　　3号溝出土遺物（2）

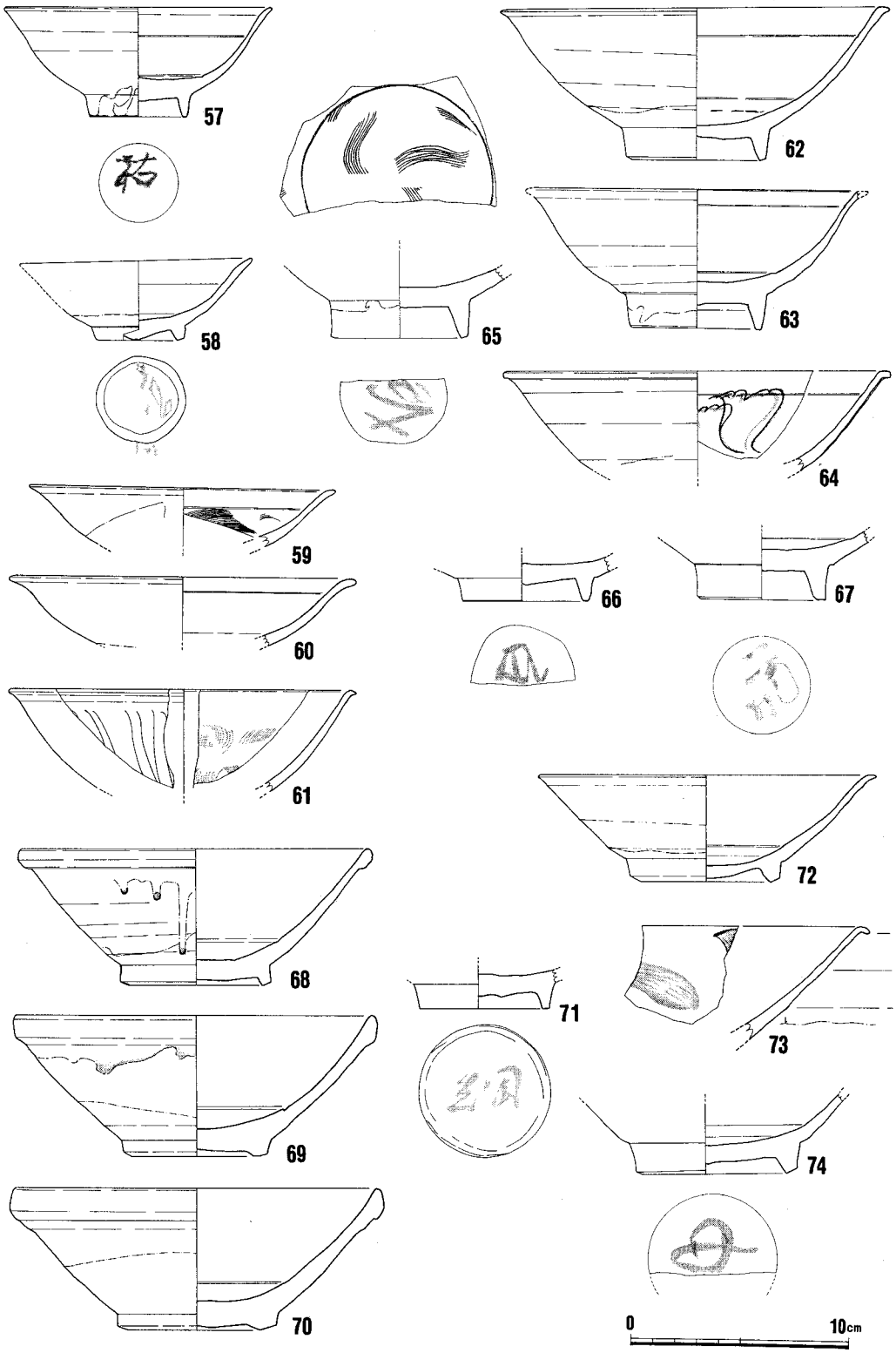


Fig. 71　　３号溝出土遺物（３）

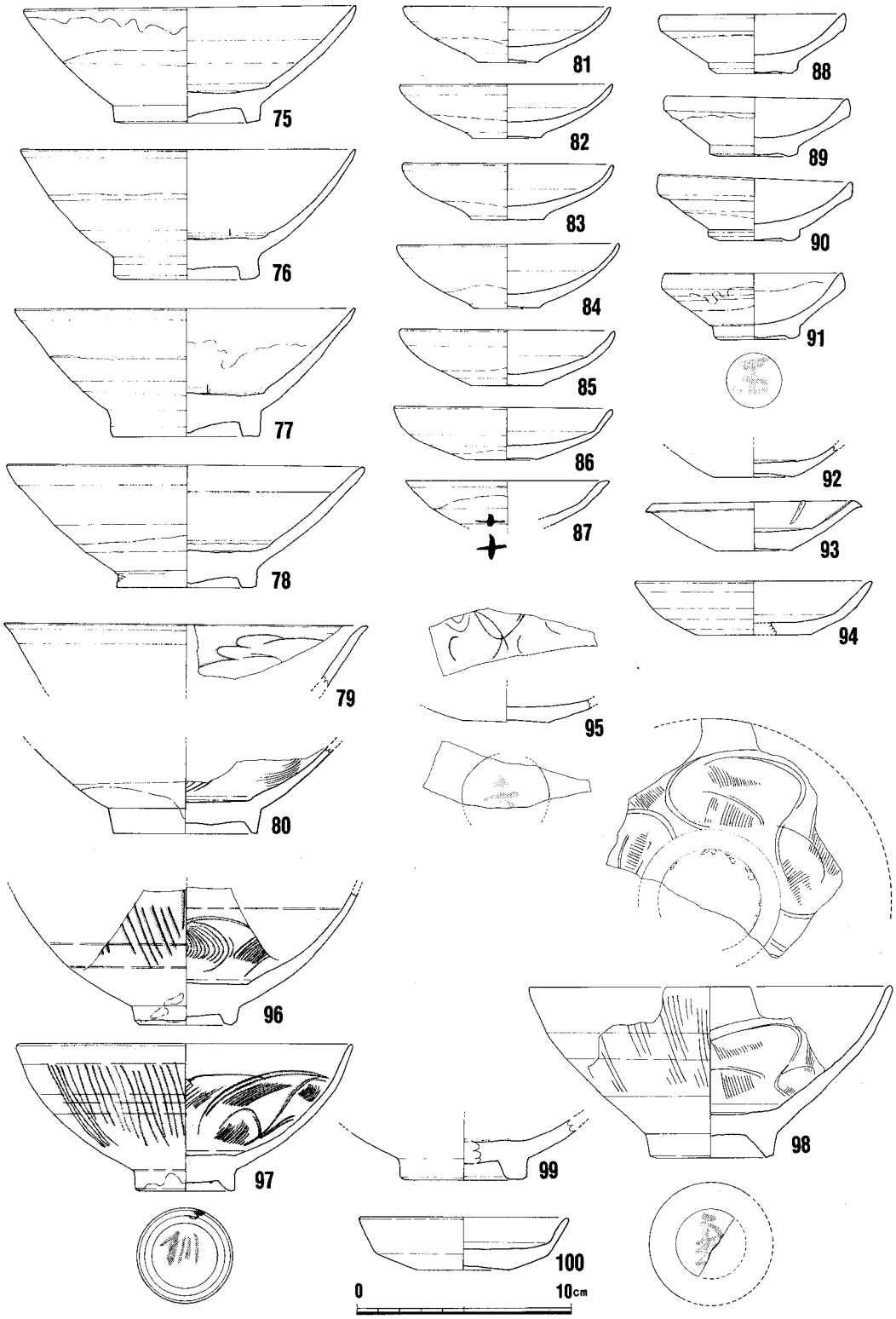


Fig. 72　　3号溝出土遺物（4）

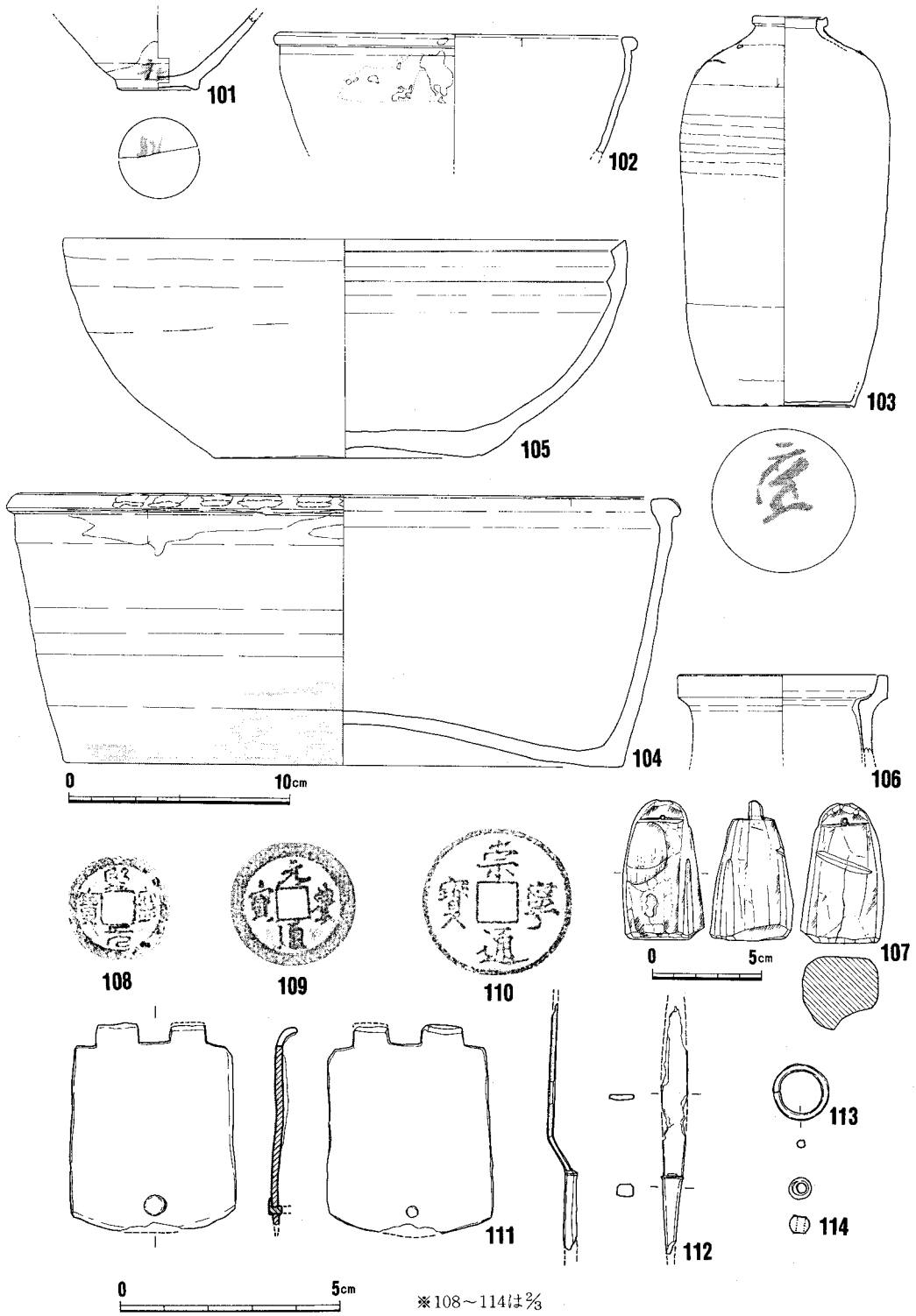


Fig. 73　　３号溝出土遺物（５）

3号溝（Fig. 68～73、PL. 5・6・26）　A区北端で検出された。その大半が調査区外に延びているため、A区では片側の立上りが検出されたにすぎない。地山白色砂層の大きな落ち込みであるが、厳密には溝とはいえず、この付近から櫛田神社方面へ開析している自然谷の一部である。ここでは便宜上3号溝と呼ぶ。A区東に隣接する東長寺の本堂建設にともなう発掘調査（博多第8次調査）でも、その谷頭部落ち込みが確認されている。このことは博多の旧地形復元の上に重要な知見である。落ち込み最下面と現地表面との比高差は3.4 mと深く、落ち込み上端との差は1.1 mを計る。きわめてなだらかな落ち込みとなっている。落ち込みにそって流れ込むような土層断面を示し徐々に堆積したものである。下層には砂層と泥炭状の土との互層が見られ、水分を多く含んでいる。遺物は大きく上層と下層とに分けられるが、遺物取り上げ段階で混乱が生じ、ここでは一括して扱うことにしておきたい。出土遺物は極めて多量で、その数量は付表に示すとおりである。図示した遺物に若干の説明を加えておく。1～16は土師小皿で、5、8、9、13～15はヘラ切り底で、以外は糸切り底である。17～21は糸切り底杯、22～27はヘラ切り底杯である。下層でヘラ切りが多く、上層で糸切りが多いのは当然のことであるが、ここではヘラ切り底が他の遺構に比較して多いことを指摘することにとどめたい。28～34は瓦器類碗であり、出土量も多い。28の外底には刻線がある。35～44は青白磁である。35は合子蓋36・37は身である。38・39は小壺。40・41は碗で、底部をわずかに抉り高台を作り出している。42～44は平底皿で、43は口縁を輪花となす。45～80は白磁碗、鉢の類である。45～52はⅡ類のもので、口縁端を丸く収めるもの、小さな玉縁を作るもの、白堆線を施すものなどがある。49には、103と同じ文字が記されているが判読できない。53、55～60はⅤ類に含まれるもので、口縁部を外反させ丸く収める。57には「祐」の墨書がある。58にも墨書があるが判読できない。54はⅤ類と同様の器形をもつが、胎が粗く、器壁の調整も雑で、高麗風の青灰色不透明釉がかけられるものである。61～67、71～73はⅥ類に含まれるもので、口縁端を外方に水平につまみ出す。73は鉄絵を施す鉢で、66～67、71には墨書が見られるが、71が「綱」と読めるだけで他は判読できない。68～70は三角玉縁をもつⅣ類である。74～78は見込輪状掻き取りで、体部が直に開くⅨ類のもので、75には花押様の墨書が見られる。79、80はⅧ類で、内面にヘラおよび櫛による文様を施している。81～95は白磁皿である。81～86は平底皿のⅢ類にあたる。87は高台付皿Ⅱ類で体部下半露胎部に「十」の墨書が見られる。88～91は口縁三角玉縁の高台付皿Ⅰ－2類で、91には「王」銘の墨書がある。93は口縁端を外に突き出し、内面体部に白色堆線をつける平底皿Ⅳ－2類である。94は白色釉をかけたものであるが、青磁風の器形をもつ。96～99は青磁碗である。96は幅広の櫛描文を外面にもち、内面にヘラと櫛による文様を施す同安系青磁碗通有の文様構成をもつが、器形、施釉法等は龍泉碗に近い。不透明の濃いモスグリーン釉がかかる。97は同安系碗で、外底のくりは平坦である。ここには「綱」の略字が墨書されている。

98も同安系碗で見込の釉を輪状に掻き取るものである。底部に墨書がある。99は分厚い高台を持ち緑の強い釉を施すもので、見込の釉を輪状に掻き取る。白磁に多い器形である。100は無文の龍泉青磁皿である。101は天目碗で高台脇の削りが斜めになっている。体部下半と底部に墨書があるが、いずれも判読できない。102～106は陶器で、102～104はA群磁灶窯系のもので、102が口縁折返しの玉縁をもつ鉢。104が同様の口縁をもつ深い盤。103が器壁の薄い小口瓶で肩部にのみチョコレート色の釉がかかり、内面はロクロ巻上痕が顕著である。肩部に目跡がつく。これは、3号溝の上層から倒立した状態で完形品として出土した。底部に墨書が残るが判読できない。105は胎が粗く石英粒を多く含むこね鉢で、口縁内面直下に二条の突帯状の隆起をもつ。106は灰色で石英粒を多く含む粗胎の坩堝で、内面に明青色のガラス滓が付着している。石製品には滑石製石鍋破片およびその再加工品16点などがあるが、いずれも小破片で図化しがたい。石鍋には縦耳のつくものと、鍔をもつものとがある。107は粘板岩を用いた分銅形石製品である。頂部両側を削り、つまみを作り出し、小孔を穿っている。重量調整のためであろうか、側片に数条の樋状の削りがある。現重量110gを計る。銅銭5枚も出土しているが銘の確認できるのは、108の熙寧元宝、109の元豊通宝、110の崇寧通宝のみである。111～113は銅製品である。111は銙帯の鉸具にあたる部分で、片面は欠損している。下端に革帯を留める釘が打たれている。博多における銙帯の存在意義は2号溝で検出された巡方とともに、極めて重要で、平安時代の大宰府官人らの荘園私貿易との密接な関係を示しているものといえよう。112はバターナイフ形を呈し、一端は平坦で他端は長方形の厚い断面をなすヘラ状の製品である。113は環状の銅製品で径1.25cmと小さい。飾金具であろうか。114はガラス小玉で、美しい明青色を呈している。106のガラス坩堝とともにガラス工房の存在を示すものである。

4号溝 (PL. 27)　A－1－I区の上面で検出された遺構である。主軸をN－9°－Eにとり、A区を斜断する恰好となる。32号、34号土坑を切り、34号土坑に接したところで収束しており南は壁によって寸断されている。幅0.5m、深さ0.3mで規模が小さい。雨落溝であろうか。ここでは遺物量は少なく、糸切り底の土師杯、小皿とともに白磁碗9点、同安系碗2点、龍泉碗2点、皿2点などの破片が出土しているにすぎない。

6号溝 (Fig. 74)　B区の南端付近で検出された。現街筋に直交し、N－41°－Eをはかる。溝幅は1.9m、下端0.7mのU形をなし、深さ90cmを計る。出土遺物には混じりが大きく、図示した古唐津類に混って中国陶磁類も多く見られる。土師皿類は全て糸切り底である。古唐津類の出土から、溝の造営年代は16世紀終末以降に比定され、太閤町割

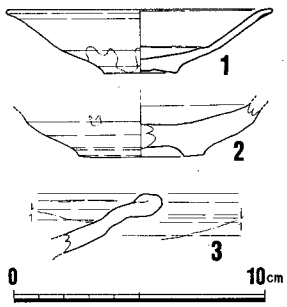


Fig. 74　6号溝出土遺物

に相当する溝であると考えることができる。

2）A・B区遺構外出土の遺物

A区遺構外出土の遺物 (Fig. 75～79)

1、2は墨書のある土師小皿である。3、素焼の不動明王頭部、1号溝の上面より14世紀代の遺物と出土した。4は未使用の瓦質の擂鉢で、5は小形の土鍋。以上は国産品である。6～11は青白磁。8は厚手の粗造品、10は青みのない透明釉のかかる口ハゲの皿だが、作行は粗い。11はオリーブがかった透明釉である。12～27、29～35、39、46は白磁に分類されるが、12は青白色の釉、29は黄白色の釉のかかるものである。36は破面灰色で露胎部は赤茶を呈する胎にオリーブ色を帯びたガラス質の釉がかかる青磁で、畳付に托珠を置いて焼成している。窯系は不明。37～38、40～44は龍泉窯系の青磁、28、45は同安窯系の青磁である。47～49、51、52は天目碗である。52は禾目が出ており、口縁は削って覆輪をした跡が見られる。付表に記された天目碗は40点であるが、うち35点が福建省の建窯付近で生産されたもので、そのほとんどは図例のようなすっぽん口であるが、外反口縁のものも2点見られた。又、漆黒の釉の上に明らかに施文をした跡のみえるものが2点、B区での1点を加えて、今回報告分では3点が得られた。あるいは金彩でもなされていたかと思われる。この他に、江西省の吉州窯製品である玳皮盞が2片ある。1点は鼈甲色の斑文があるが、1点は火加減が不良で灰白色のガサついた斑文を見せている。残りの3点(同一個体の可能性あり)は薄手で高台がつき、口縁の直口する小型の碗で胎土は灰色、釉は黒褐色であるが天目釉ではなく、別系統のものであるが一応ここに数えている。また、参考までに美濃の天目も1片あることを記したい。55は灰色の粗い土にこれも灰味の強い不透明釉のかかる蓋で、草花文と思われる鉄絵が見られる。この他に瓶の破片と思われる2片があるが、釉色はかなりオリーブ色が強く、鉄絵は無雑作にくるくると曲線を描き散している。この破片は内面にも釉がかかっている。53は墨書のある陶器壺の底で、準A群1とした長胴の四耳壺の底である。54は磁灯系の茶褐色釉のかかる鉢、56、57はいわゆる黄釉盤で56には磁灯童子山窯に見られる特長的な鉄絵文が見られる。59、61は陶器B群に属するが、59は良質でほとんど青磁といえるほどである。58、60は陶器C群である。62～67は滑石製品で、小さな石鍋（外に煤付着）と小容器類、紡錘車である。68は鉄製刀子、69は分銅形青銅製品、70は青銅製飾金具。他に数は少ないが中国や日本の銅銭が出土している。

以上の他に小片ではあるが、空色釉のかかった碗の小片1点がある。灰色の土に白化粧を施し、トルコブルーの釉をかけるが、光沢はなく、一部剝落している。口縁は直口し、器内に陽刻の印花文がある。又、黄褐色釉の花文印花の合子蓋1点も見られた。珍らしいものとして、透かし彫のある彩色陶器1片がある。灰色の土は堅く焼けており、七宝繋ぎ透かし文で、中に切れ目のある四弁花を配して紅く塗り、七宝繋ぎ文はベージュに彩色される。内面のろくろ目

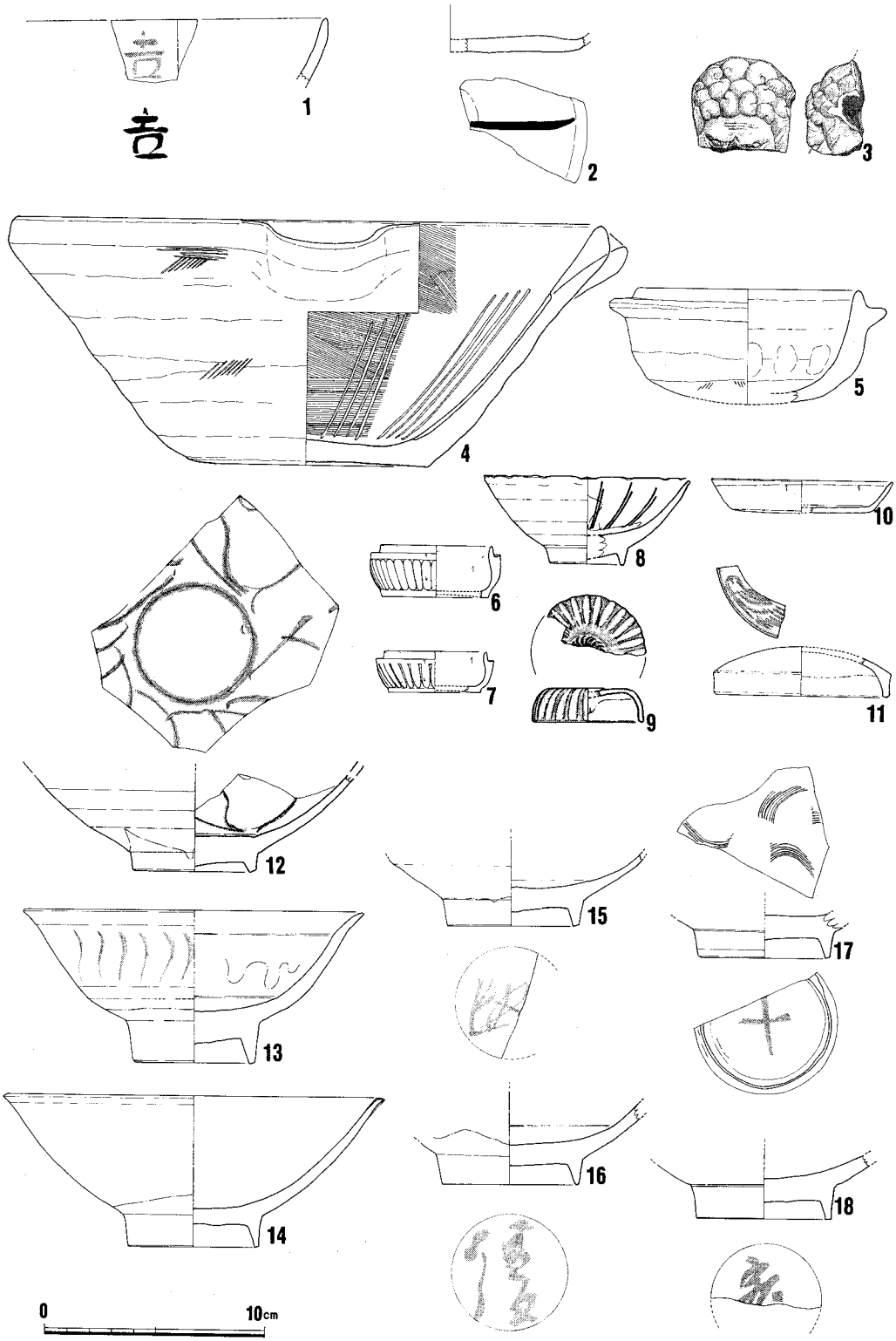


Fig. 75　　Ａ区遺構外出土遺物（１）

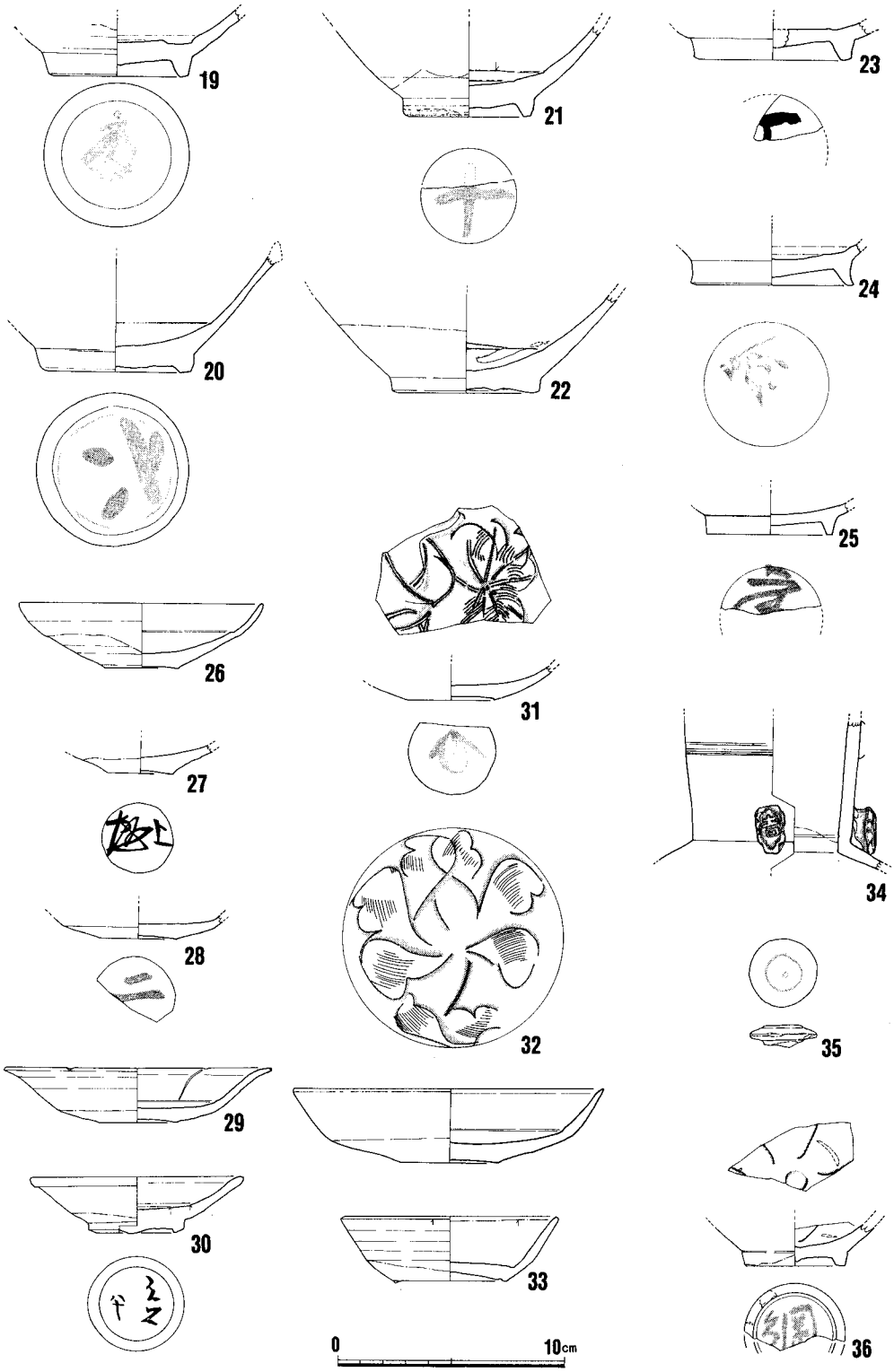


Fig. 76　　A区遺構外出土遺物（2）

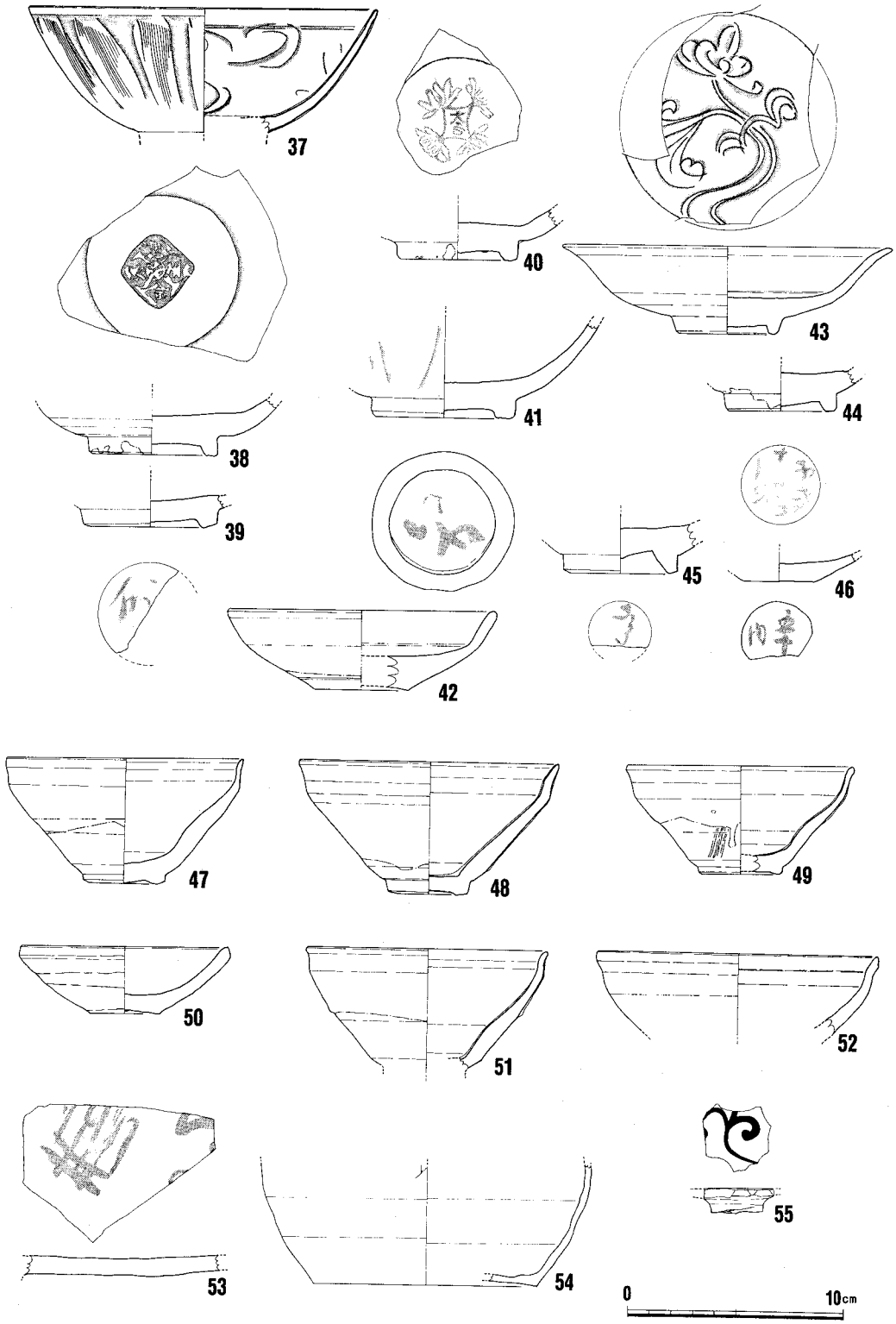
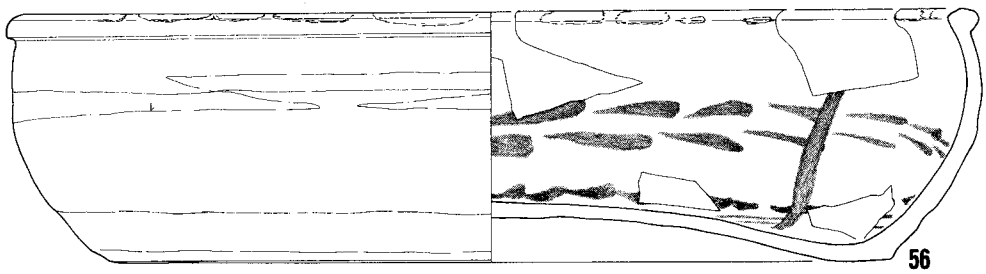


Fig. 77　　Ａ区遺構外出土遺物（３）



0　10cm

Fig. 78　A区画遺構外出土遺物（4）

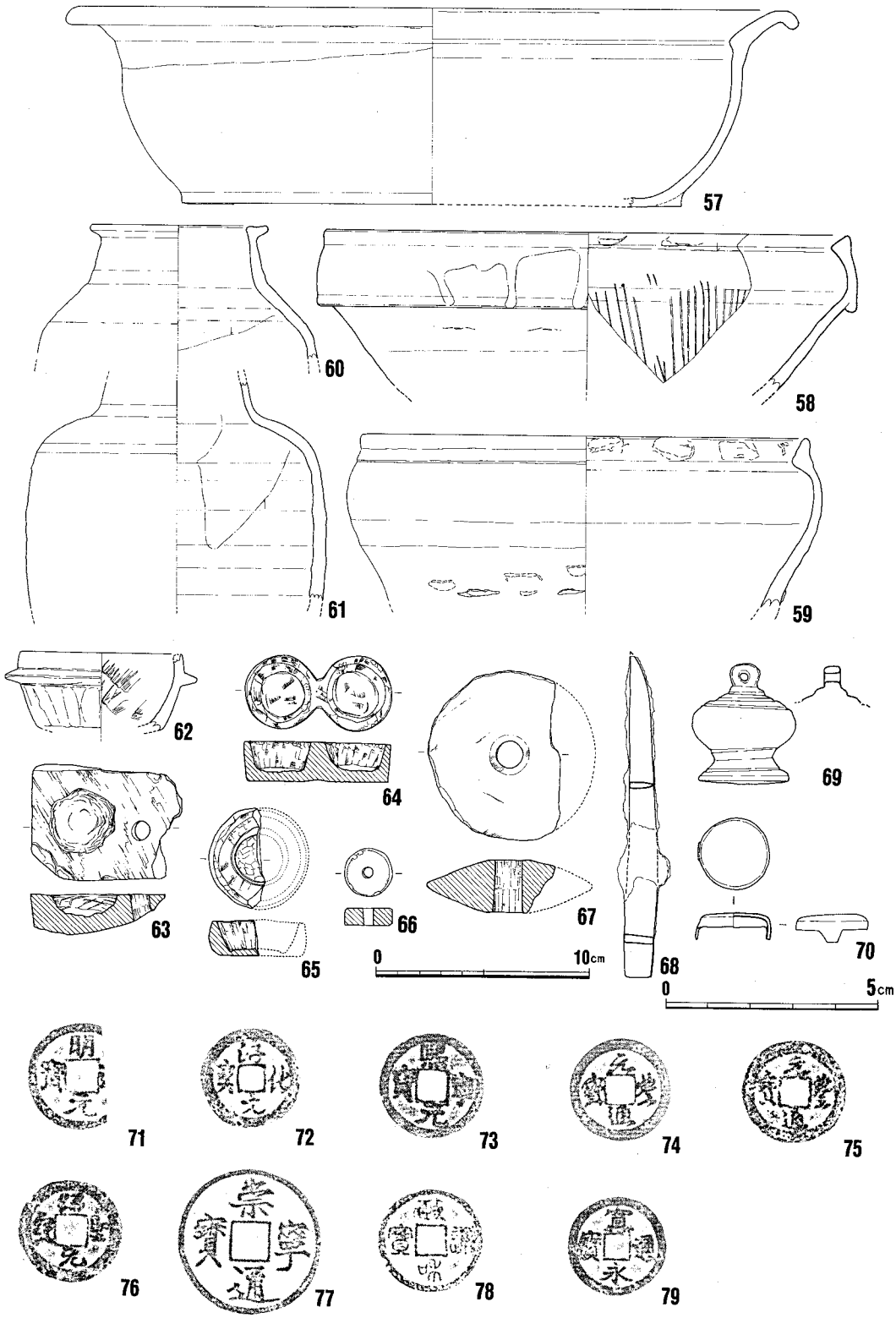


Fig. 79　A区遺構外出土遺物（５）

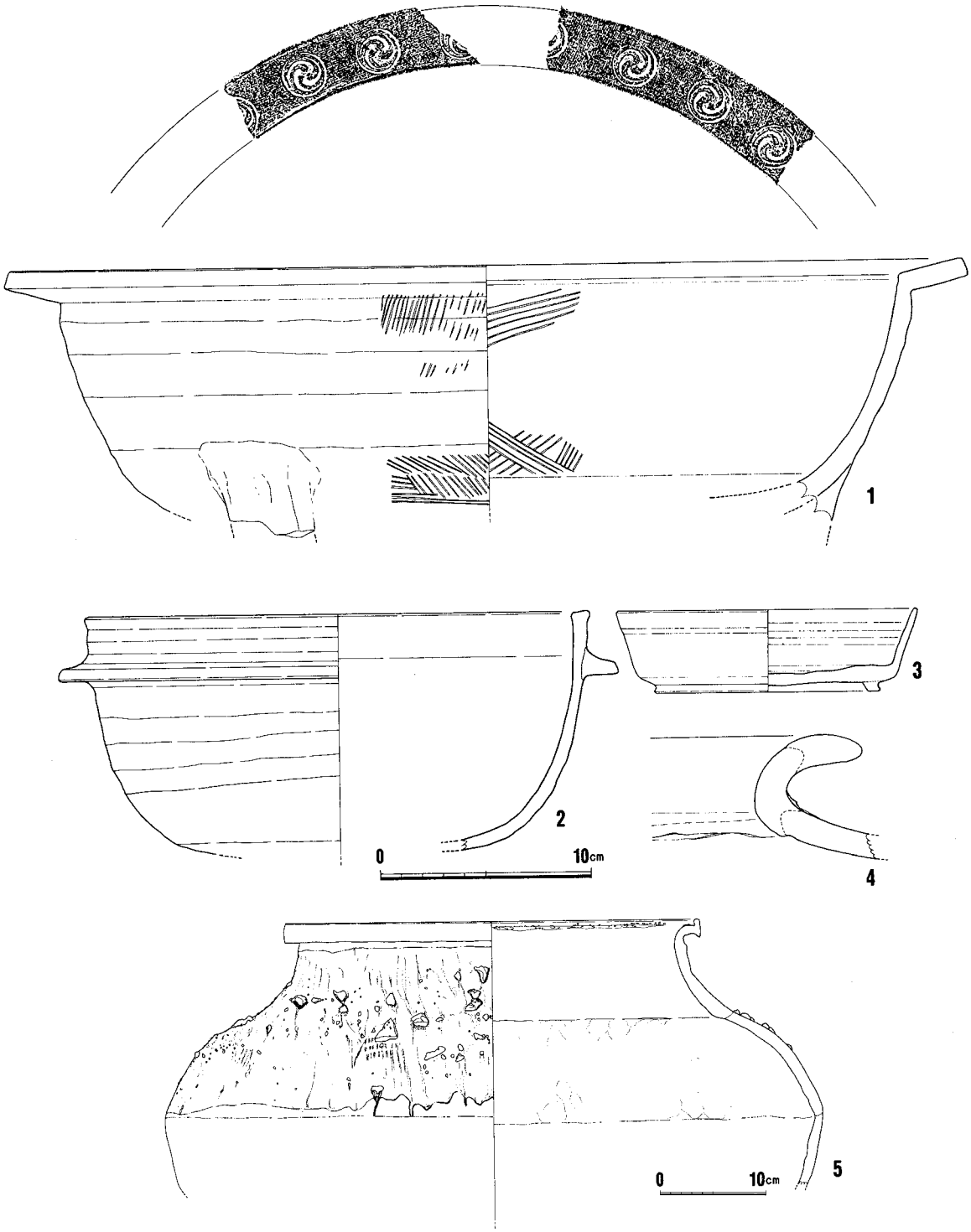


Fig. 80　B区遺構外出土遺物

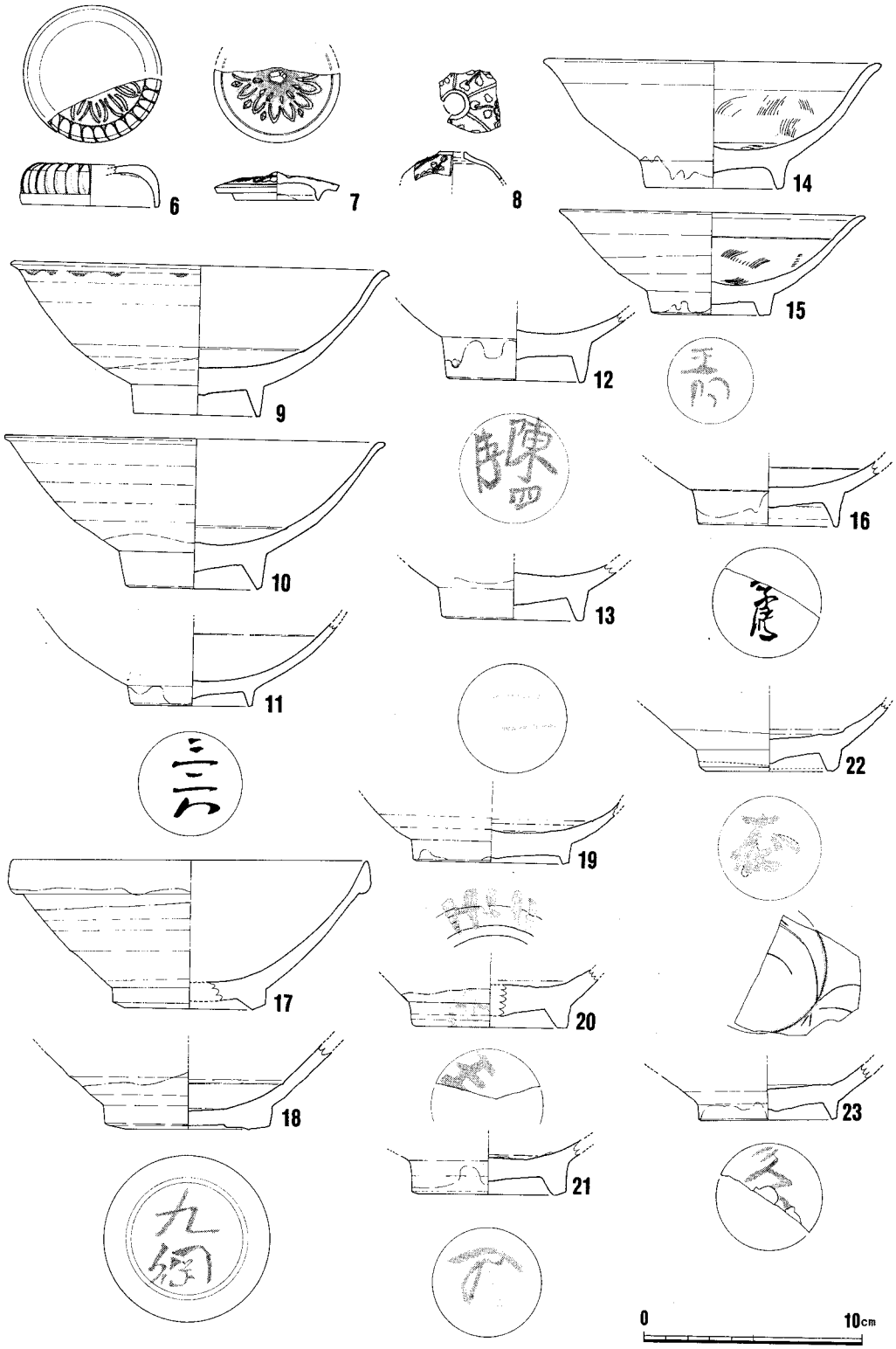


Fig. 81　　Ｂ区遺構外出土遺物（２）

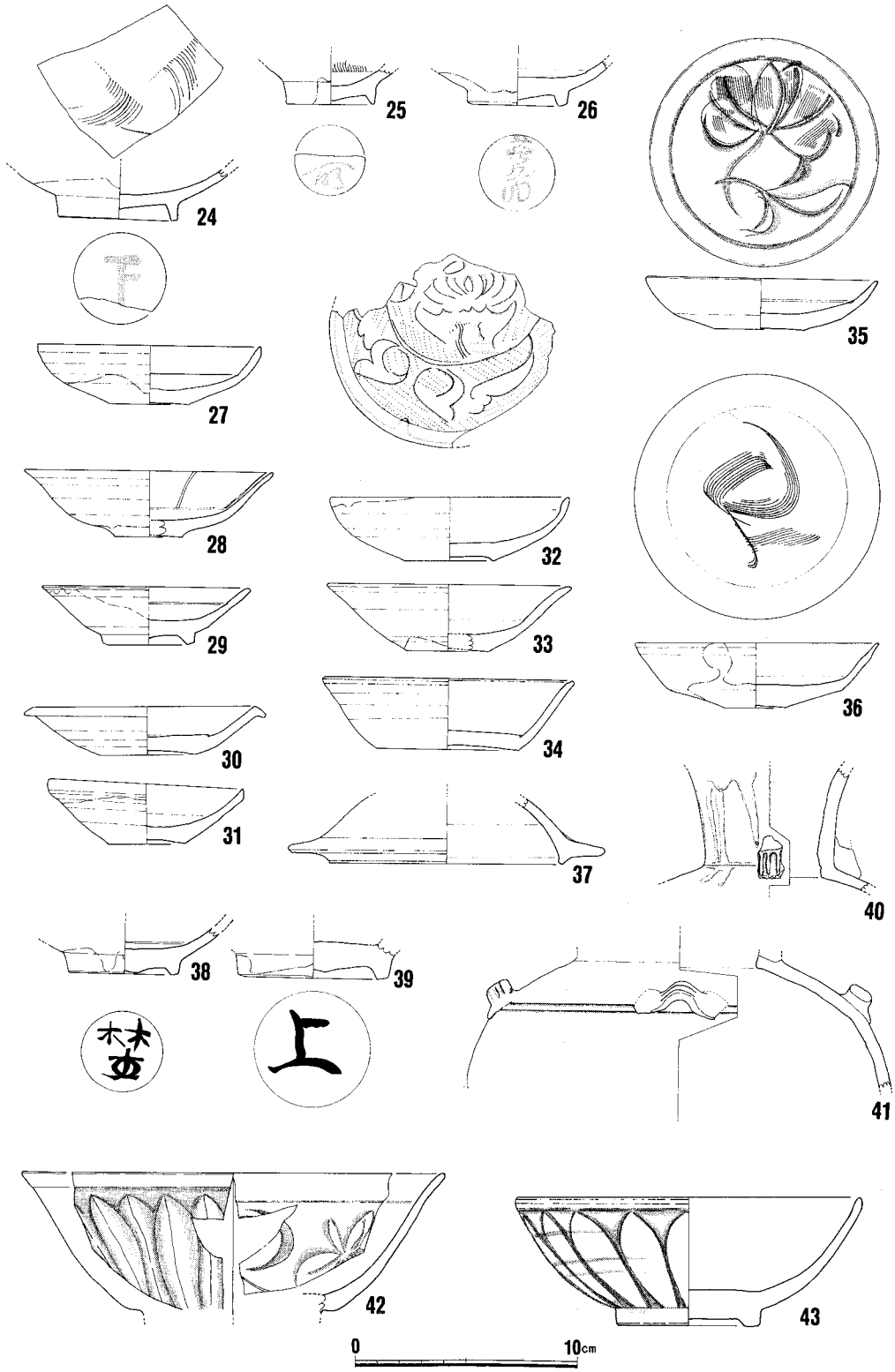


Fig. 82　　B区遺構外出土遺物（3）

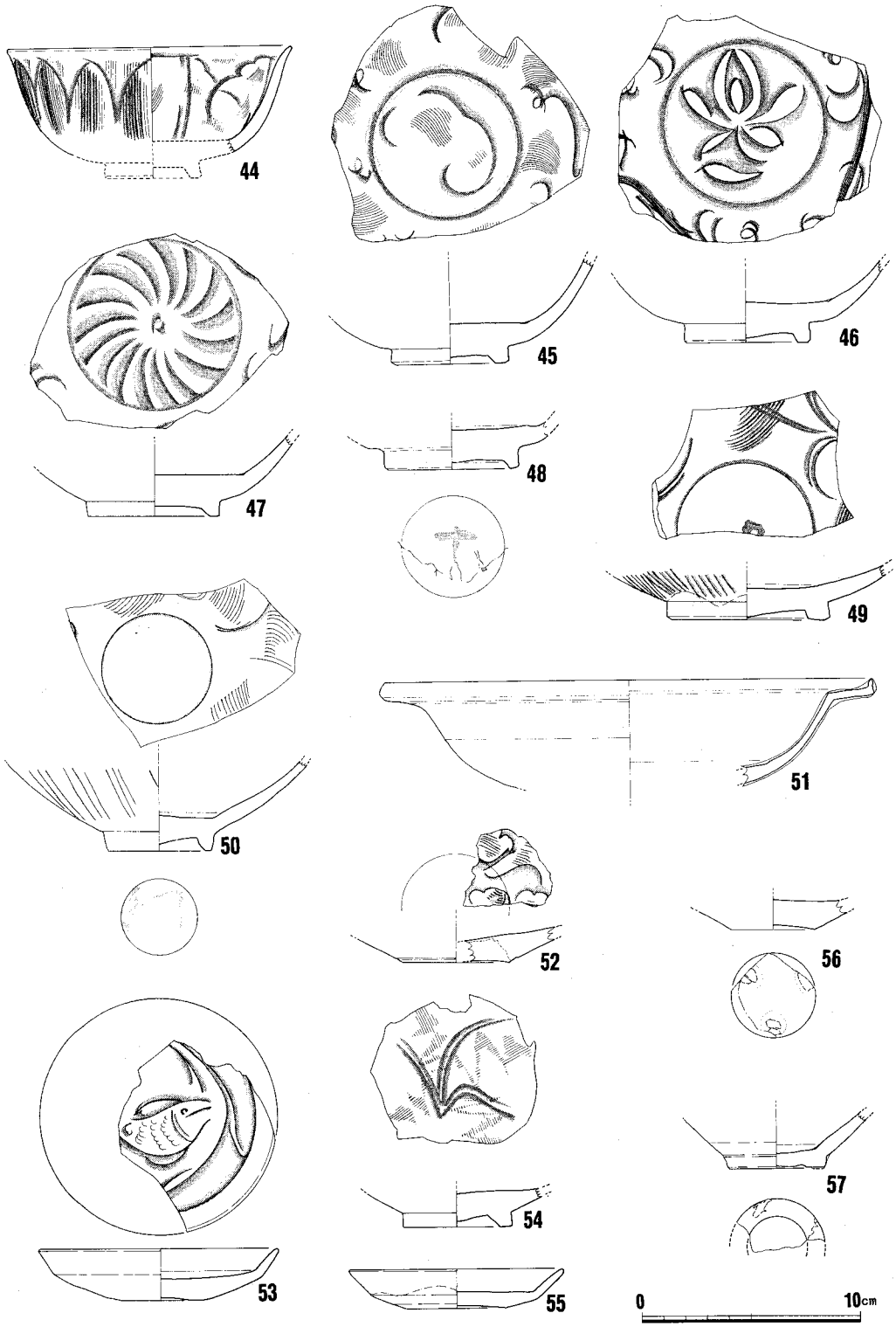


Fig. 83　　Ｂ区遺構外出土遺物（４）

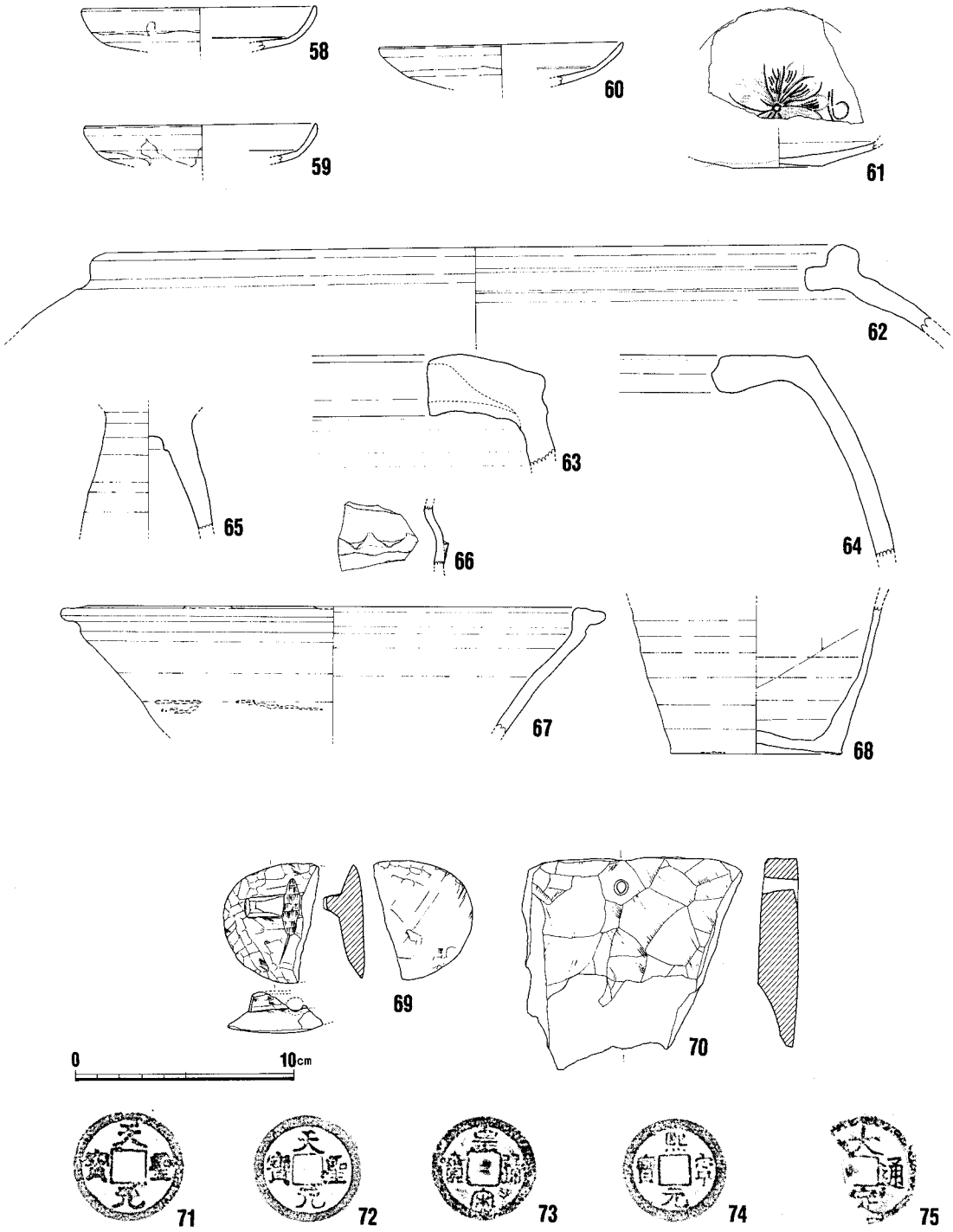


Fig. 84　　B区遺構外出土遺物（５）

を見ると、かなり大型の器の垂直部分である。出土は３の不動明王と同じく１号溝上面、14世紀代の遺物に混っていた。

Ｂ区遺構外出土の遺物 (Fig. 80～84)

１、土師質の火舎、２は土師質の土鍋である。４は渥美の壺口縁部で平安末から鎌倉にかける時代のもの。５は常滑の大甕上部。肩にかかったオリーブ色の灰釉に、上から落ちた土が盛大に付着している。格子文と縞文を組み合わせた印文が見られる。14世紀。６～８は青白磁、９～37、39～41は白磁である。28は黄白色の釉、32は一面に刺突文を施しているが釉が熔けずピンホールとなって残っている。36は灰白色の光沢ある釉で、淡色の同安窯系青磁によく似た印象がある。42～56は青磁である。49、50、54、55は同安窯系の青磁で、他は龍泉窯系の青磁である。57は高麗の蛇ノ目高台の青磁碗。他に高麗青磁２点、李朝の灰色、灰白色釉の碗各１が得られた。58～61の皿は今回初めて見るもので、陶器Ａ群に似た土に黄白色ないし黄オリーブ色の釉がかかる。見込には花文印花が見られる。底近くから露胎で赤茶色を帯び、外底の削りはあいまいである。62～64に示したように大形の容器もよく破片が残っている。おおむねＣ群に属するが、分類で群を構成するに至らない陶器Ⅰとした頸無し大壺の良好な上部もみられた。数量については付表を参照されたい。65～67はＢ群の陶器で、ことに67は良質である。69、70は滑石製品。69は焼けており、石鍋の鍔付近を再利用したものと思われるが、確かな用途は不明である。

以上に図示したものの他に、目についたものを補足したい。まず黒釉の磁灶窯系の軍持の破片がある。軍持は一般に東南アジアで多く出土し、日本では見られない器形と言われているが「博多Ⅱ」でも報告したように、日本にも入っていることがわかった。すでにこれまでに同器形、同釉の数個体を見ているので確認しておきたい。又、小片ながら唐物茶入と思われる３個体もある。うち１個は丸壺である。土はきわめて細かくねっとりして薄い。次に、古窯系として数えた破片に、備前の擂鉢が見られる。室町時代のものである。他の大部分は常滑と思われる破片であり、中には瀬戸かと思われるものもあるが、はっきり分類することは難しい。明代の染付には15世紀から16世紀末までのものが見られるが、近・現代でまとめた国産の陶磁器の中には16世紀末ごろの美濃天目３片、又慶長以後の唐津の碗・皿・擂鉢片等、1610～30年の伊万里焼など、これまでの博多の発掘調査で捉えられなかったものが含まれていることを明らかにしておきたい。

3）甕　棺　墓

A～C調査区、特にB区を中心に16基の甕棺墓を検出した。そのほとんどが後世の削平、遺構によって破壊されており、遺存状態が極めて悪い。甕棺墓はB区全域、A区東南隅、C区北部にベルト状に分布し、後述する出入口3調査区の北半部に連なる。この両調査区の間は、一見、墓群の空白地帯をなすが、近・現代の攪乱を受けており、発掘区の北東部にあたる東長寺の境内から甕棺墓が発見されていることを考え合わせると、本来の墓域はこの欠落部を含めて、より北東及び南西への帯状の拡がりをもっていたと考えられる。甕棺を埋置する墓坑はすべてこの地域一帯の基盤層である白砂層を切り込んで設営されており、この甕棺墓群が、東長寺付近から発掘地点の南西に位置する萬行寺近辺にかけて延びる古砂丘上に営まれたことがわかる。これは、同じ高速鉄道建設に伴う調査で明らかにされた藤崎遺跡、西新町遺跡などの博多湾沿岸の弥生時代墓地と立地上の共通性を示している。また、これらの調査区と浅い谷を隔てた天福寺（博多22次調査）からも甕棺墓が発見されており、付近一帯が弥生時代の墓地としてかなりの広がりをもつことが推定される。

以下、各々の甕棺墓と甕棺について詳述する。遺存状況が悪いため、出土状況、甕棺本体の図化に極力努めたが、そのすべてを掲載することはできなかった。今回報告するA・B区には13基の甕棺墓が存在し、うち出土状況が明確なもの7基、不明6基で成人用甕棺5基、小児用甕棺8基である。なお、その配置は、付図：A・B区遺構全体図に記してある。

1号甕棺墓（Fig. 85・86）　A区南東隅に位置し、方位を略北東―南西にとる。接口式の成人用甕棺である。削平のため上半部を欠いており、墓坑の形状も不明である。甕棺はほぼ水平に埋置されている。上甕はやや外傾するL字形の口縁部から胴部上半部で最大径をとりながらすぼまり気味に底部へ移行する器形をもつ。胴部中位に一条の三角凸帯を貼付する。外面は刷毛目を残したままで、口縁部、凸帯周辺、内面は丁寧ななで調整を施している。下甕は僅かに内傾したT字形の口縁部をもつが、内側の張り出し部分を打ち欠いている。胴部中位にM字状の凸帯を貼付する。最大径は凸帯上位にある。内外面ともなで調整を施している。

2号甕棺墓（Fig.85・86）　B区東隅、14号甕棺墓に近接して位置する。方位はほぼ南北をとる。接口式の成人用甕棺であるが、ほぼ半分を欠損し、墓坑の形状も不明である。甕棺はほぼ水平に据えられている。上甕・下甕ともにT字形の口縁部を有する大型甕棺であるが、下甕がやや外傾する。最大径は両方とも口縁下部にある。上甕は胴部中位に、下甕は胴部中位よりやや下ったところに、それぞれ三角・M字形の凸帯を貼付している。器面は丁寧ななで調整を施している。

3号甕棺墓（Fig. 88）　B区の中央部、北東よりのところに位置するが2(5)号溝による破壊を受け、墓坑の形状、甕棺の埋置状況ともに不明である。僅かに甕形土器の口縁部と底部を発

見した。甕形土器は屈曲のきつい逆Ｌ字形の口縁部をもち、その下位に一条の三角凸帯を貼付する。口縁部、凸帯、内面ともに丁寧ななでによる調整であるが、凸帯下３cm以下は刷毛目調整のままである。推定器高46cm。

４号甕棺墓　Ｂ区北隅に位置する。遺存状態が極めて悪く、２個体分の甕形土器片を検出している。器形は両方とも８号甕棺墓下甕と同形のもので、やや外傾する逆Ｌ字形の口縁部とその下に一条の三角凸帯を貼付する小児用甕棺である。口縁～凸帯周辺部以外は刷毛目を残したままである。

５号甕棺墓　Ｂ区のほぼ中央部に位置するが、後世の攪乱により旧状を留めていない。墓坑中より甕棺片を採取したのみである。

６号甕棺墓 (Fig. 88)　Ｂ区東側中位に位置するが、２号溝に切られて遺存状態が悪い。呑口式の小児甕棺である。上甕は鋤先状口縁をもつ壺形土器の口縁～頸部を打ち欠いたもので、胴部中位に一条の三角凸帯を貼付している。底部は少しあげ底気味である。全体を丁寧ななでで仕上げている。下甕は僅かに内傾する逆Ｌ字形の口縁をもつ甕形土器で、胴部中位に一条の三角凸帯を貼付している。口唇部端に貝殻腹縁による刻み目を施している。最大径は凸帯上にある。底部は僅かにあげ底気味である。外面の凸帯より上部と口唇部上面には丹塗りの痕跡を留めるが、他の部分は定かでない。内面には刷毛目調整の痕跡が認められる。

７号甕棺墓　10・11号甕棺墓に隣接して成人用甕棺の胴部片が出土している。Ｍ字形の凸帯を一条貼付したもので、１・２・11・12号甕棺下甕と同タイプと思われる。

８号甕棺墓 (Fig. 85・89)　Ｂ区北隅に位置する小児甕棺墓である。主軸はほぼ東西方向である。墓坑は平面形長楕円で、甕棺はほぼ水平に埋置している。上甕はやや内傾する逆Ｌ字形の口縁をもつ甕形土器で、口縁下に一条の三角凸帯を貼付している。凸帯下10cmの幅で丹塗の痕跡を留める。底部は平底である。下甕は僅かに内傾する逆Ｌ字形の口縁をもつ甕形土器で、口縁下に一条の三角凸帯を貼付する。底部はややあげ底気味である。外面に刷毛目を残す。

９号甕棺墓 (Fig. 85・88)　Ｂ区北隅に位置する小児甕棺墓である。墓坑は方位をほぼ南北にとり、斜めに掘り込んで甕棺を埋置している。上甕は外傾する逆Ｌ字形の口縁をもつ鉢形土器で、口縁下に一条の三角凸帯を貼付する。器面はなでによる調整である。下甕は僅かに内傾する逆Ｌ字形の口縁をもつ甕形土器で、口縁下に一条の三角凸帯を貼付する。外面凸帯下は刷毛目、他は丁寧ななで調整を施している。

10号甕棺墓 (Fig. 89)　11号甕棺墓に隣接して検出した小児用甕棺墓であるが、11号との前後関係は不明。上甕は内傾する逆Ｌ字形の口縁部をもつ甕形土器で、口唇部端に刻み目を施す。口縁下に二条の三角凸帯を貼付する。外面は刷毛目調整の後、口縁及び凸帯周辺を丁寧ななでで仕上げている。下甕はほぼ水平な逆Ｌ字形の口縁をもち、その下に一条の三角凸帯を貼付し

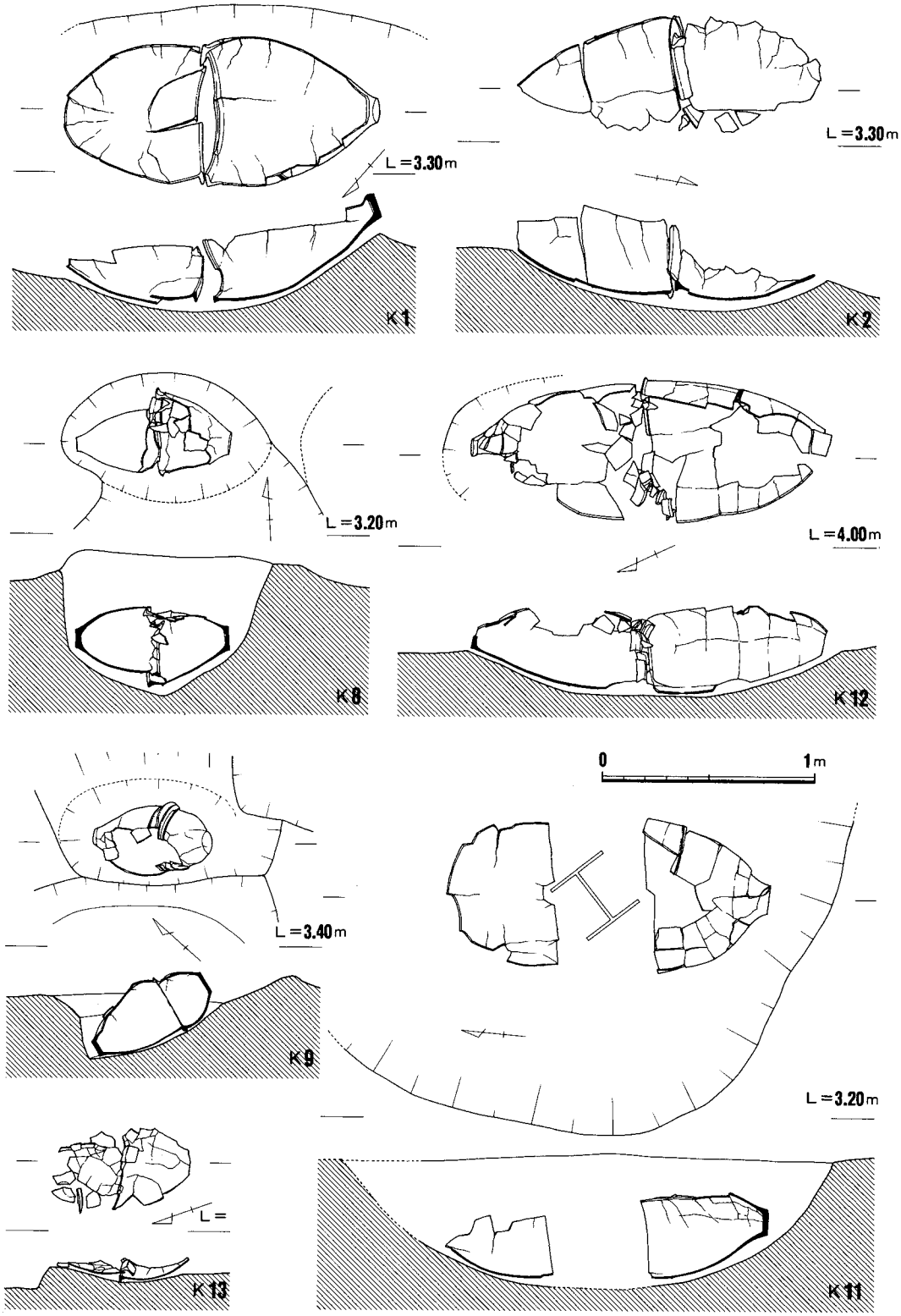


Fig. 85　甕棺墓出土状況実測図（1/30）

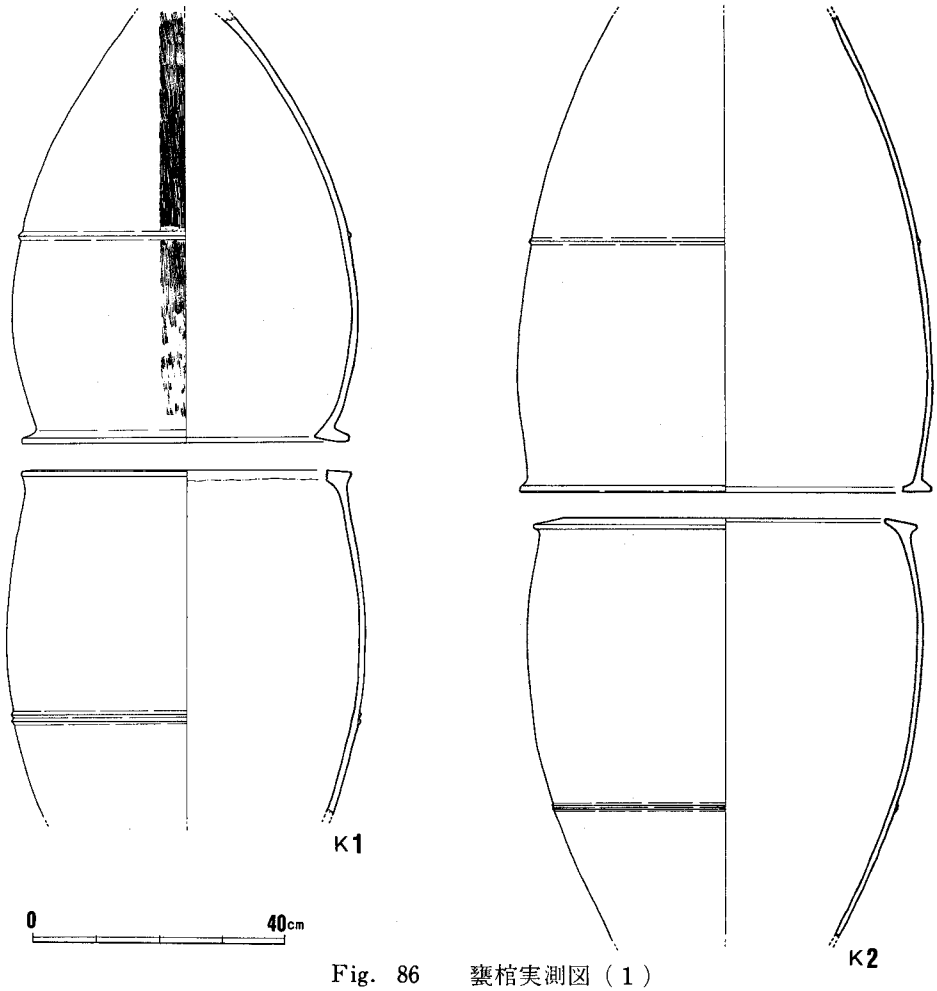


Fig. 86　甕棺実測図（１）

た甕形土器である。底部はあげ底。外面に刷毛目調整の痕を留めている。推定器高47.5cm。

11号甕棺墓 (Fig. 85・87)　Ｂ区南側に位置する成人用甕棺墓である。工事用のＨ鋼によって破壊され、遺存状態は良くない。甕棺はほぼ水平に据えられている。上甕はやや外傾するＴ字形の口縁部をもつ大型甕棺で、胴部中位に一条の三角凸帯を貼付する。口縁部は内側に肥厚している。下甕は口縁部・底部とも欠失するが、胴部中位にＭ字形の凸帯をもつことから、１・２号甕棺墓の下甕と同タイプと思われる。両甕とも器面全体に丁寧ななで調整を施している。

12号甕棺墓 (Fig. 85・87)　Ｂ区南隅で13号甕棺墓と隣接して検出した成人用甕棺墓である。墓坑の方位はほぼ北東ー南西である。甕棺はほぼ水平に埋置されている。上甕はやや外傾するＴ字形の口縁部をもち、胴部中位に一条の三角凸帯を貼付する。最大径は口縁部下にあるが、張り出しは弱い。下甕も同タイプの大型甕であるが、口縁部の内側が肥厚し、凸帯はＭ字形で

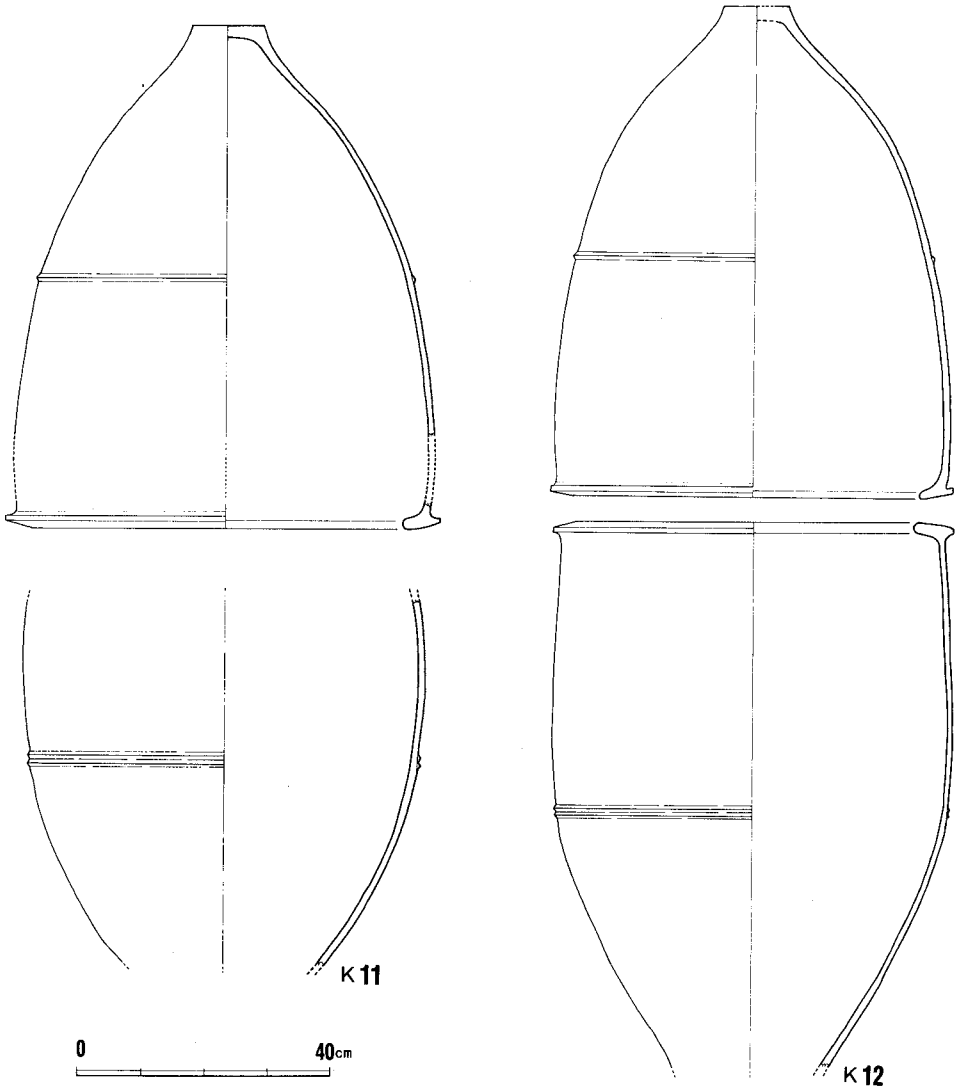


Fig. 87　甕棺実測図（2）

ある。やや長胴である。

13号甕棺墓 (Fig. 85・89)　12号甕棺墓と切り合うが、その先後関係は不明。墓坑に水平に埋置された接口式の小児用甕棺墓である。上下棺とも内傾する逆L字形の口縁部をもつ甕形土器であるが、下甕には口縁部下の三角凸帯が認められない。両方とも外面に刷毛目を残す。

以上、各甕棺墓について説明したが、大型甕棺は形態上の特徴よりみて、汲田式の範疇に入り、弥生中期前半代の時期に相当する。小児用甕棺に用いられた土器もおおよそこの時期に比定できよう。

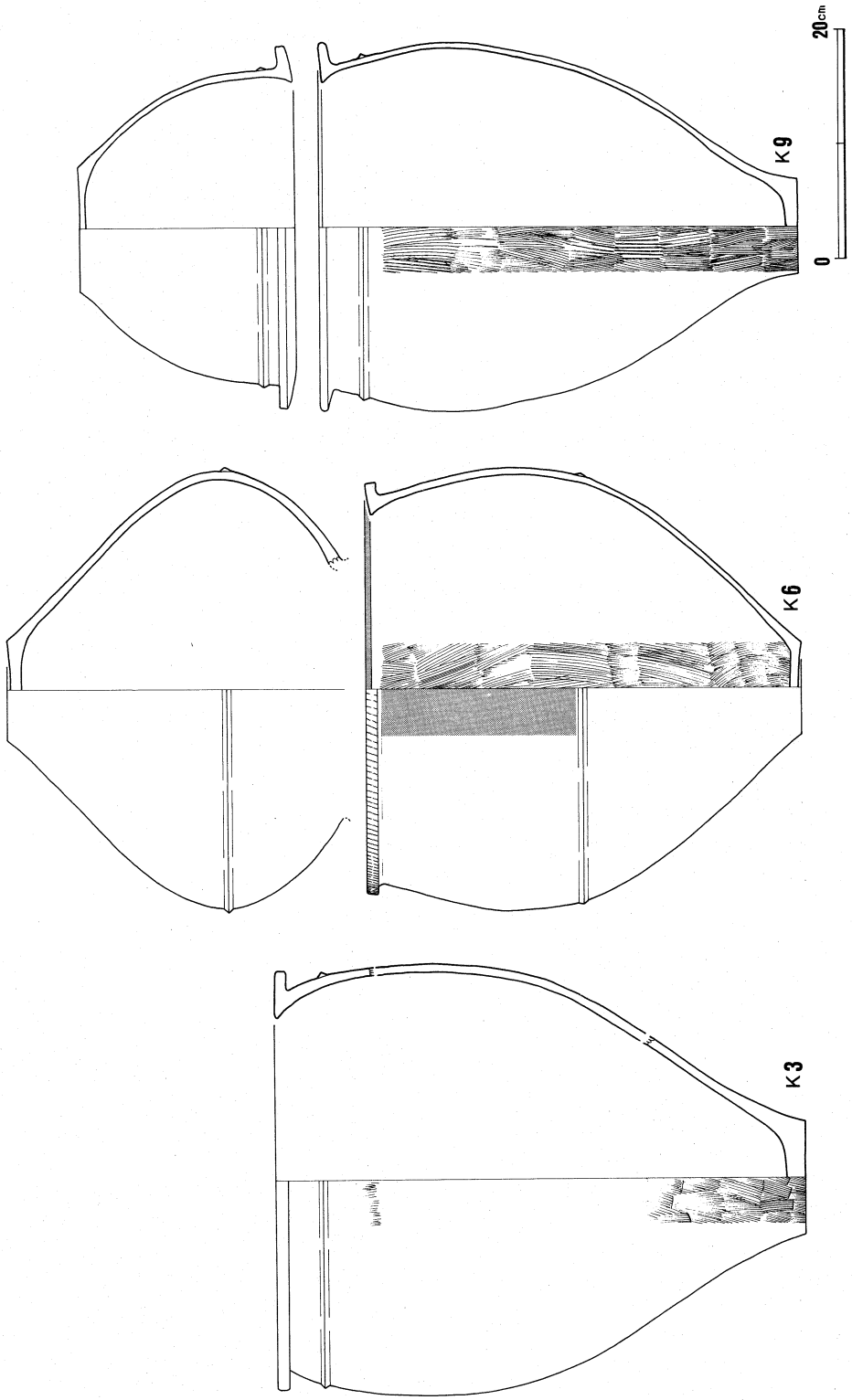


Fig. 88　甕棺実測図（３）

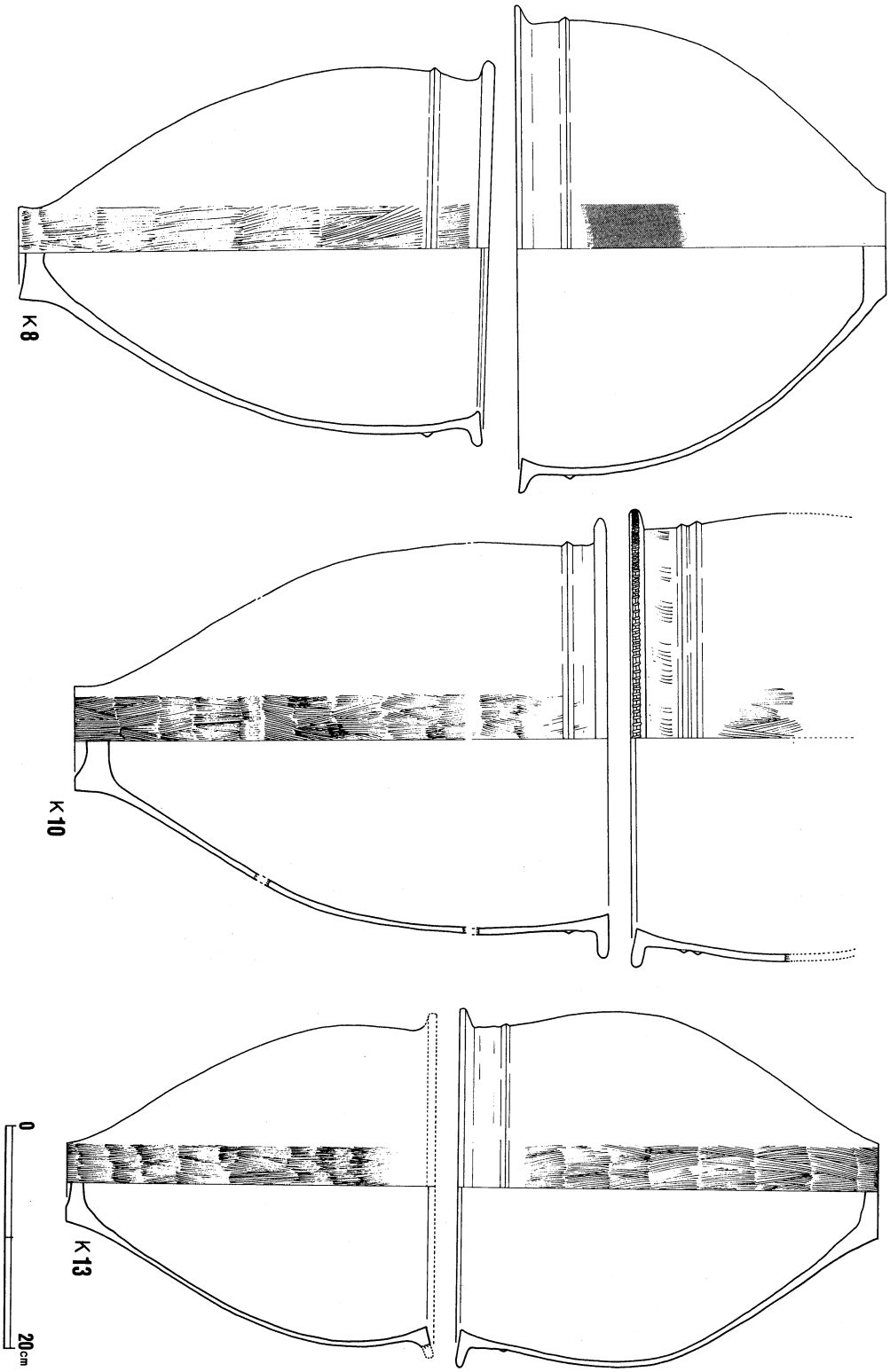


Fig. 89　甕棺実測図（4）

２．小　　結

以上、地下鉄１号線関係の博多遺跡群調査区のＡ・Ｂ区について調査の概略を述べてきた。調査報告としては不充分な内容で、誠に心もとないが、ここでＡ・Ｂ区の調査に関する問題点と成果をいくつかにまとめておくことにしたい。

Ａ・Ｂ区の調査は博多における初めての本格的な調査で、調査員自体博多のもつ諸問題に疎く、当初の段階では問題意識の欠如したまま調査を行なったのは否めないことで、深く反省しているところである。しかし、この調査で得られた数々の資料が、現在の博多遺跡群の調査を導き出したものであって、市街地再開発チエックの引き金となったのは評価されなければならない。

本調査での成果の一つに、東西および南北方向を向く溝（１・２号溝）が発見されたことがあげられる。この溝は雨落溝のように小規模な側溝的性格のものでなく、極めて大規模なもので土地の区画にともなう溝であると推定される。この溝の造営年代は、最下層出土のヘラ切り底をなす土師皿・杯から、12世紀前半代以前に求められる。博多の街割については、戦国時代末の豊臣秀吉による太閤街割以前には、永禄６(1563)年以前に描かれたとされる聖福寺古絵図から、太閤街割に類似する街割があったことが知られていた。ところがこの東西方向をもつ溝は聖福寺古絵図以前に全く違った方向の街割があったことを初めて我々に示してくれたのである。のちの周辺調査においても、これと同一方向、又はこれと直交し南北を向く溝が検出されるようになり（Fig.９）、この古い街割が博多遺跡群を広く覆っていたことが明らかになった。この方位の区画線は古代における都城と共通しており、その起源は中国にある。また、この溝の造営年代である11世紀後半から12世紀前半代には、博多の地に「宋人百堂」があったとされ、これら東西南北を向く溝の起源は「宋人百堂」の形成と緊密な関係にあるものと思われる。この溝の上層では大量の土師皿類が出土し、Ａ区で検出された多くの火葬墓・火葬施設と時期的にも一致をみることから、この土師皿類がそれらに対する祭祀的な意味をもっていたものと考えられ、その大量投棄によって溝は廃棄されたものと考えられる。この土師皿類の年代は14世紀前半代に求められる。のちに調査したＤ区では東西方向を向く溝が埋まりかけた段階で、その上に火葬頭蓋骨110体分以上を置く特殊な遺構が検出され、これも14世紀前半に比定されている。14世紀前半段階は、鎌倉時代から南北朝にかけての争乱期にあたり、多く戦死者が出たと思われＡ区およびＤ区の火葬墓・火葬施設はそれと関係あるものであろう。２号溝上層で出土した雁股式の鉄鏃はこれらのことを象徴している。この時期をもって東西南北を向く街割は廃止され、博多駅築港線道路拡張部や東長寺境内で検出された敷石道路のように、聖福寺古絵図に見られるような方向へと土地区画は変換してゆくのである。これは戦災からの復興と、北条氏以後の新たな博多支配権力の台頭によるものであろう。

出土遺物の総数量については付表に記載したとおりである。これは破片数によるもので個体数を表したものではないが、全体的な傾向を知る上では無益ではないと考える。ここでは遺物の大まかな様相を見るために、それらの数量比を試みてみたい。古墳時代以前、近世以降を除いた古代中世、すなわち博多の貿易都市としての特殊性をもつ時期の容器類の構成比は、それを端的に表現するものであろう。総数量187,133点のうち、国産陶器類は157,935点で、84.4％を占めるが、これは土師皿類が152,863点の大多数を占め、１、２号溝のように土師皿類大量投棄遺構の小破片までを含めた結果である。貿易陶磁総数29,198点のうち、朝鮮陶磁はわずか10点で、圧倒的多数を中国陶磁が占めている。中国陶磁では白磁11,294点で38％、青磁6,799点で23％、青白磁1,078点で3.7％、黒釉磁(天目)111点で0.4％、明染付25点で0.1％、陶器9,881点で33.8％の割合となる。この数値はこれまでに整理の完了した博多第４次調査地点や、本文第３章で述べる祇園駅出入口２・３のものと驚く程の一致を見る。白磁では碗9,365点、皿1,747点、その他の器種182点で、それぞれ82.9％、15.5％、1.6％を占める。碗ではⅣ、Ⅵ、Ⅸ類が多い。青磁は龍泉4,741点、同安系1,791点、越州系７点、その他253点で、それぞれ69.9％、26.3％、0.1％、3.7％となる。龍泉では碗：皿：は８：１、同安系では2.7：1となる。陶器ではＡ群の盤、四耳壺の類1,599点、Ｂ群四耳壺、水注類1,352点、Ｃ群四耳壺2,765点などが極立って多い。これら陶器類には多くの大型容器があるが、国内の古窯系陶器はほとんど姿を見せず、わずかに14世紀以降になって、常滑や備前系の大型容器が出現するようになる。

これら中国陶磁には多くの墨書銘が残されていた。墨書は底部の露胎部に残されるのが通例で、まれに高台脇にも書かれている。書体は楷書から草書、達筆なものから雑なものまで多様である。墨書の内容は、１）中国人姓と考えられるもの　２）「綱」など職名と思われるもの　3）数字　４）花押状文字　５）仮名文字　６）その他に大別される。これらは組合わさって記される例も多い。墨書のあるものには白磁碗、皿が圧倒的に多いが、器種の絶対量によるものであろうか。中国人姓や「綱」の文字が記されるものに関しては、宋人百堂との深い繋がりがあると思われ興味深い。今後の内容の解明に期待せねばならない。

甕棺墓群の存在も重要な問題の一つである。博多湾をめぐる古砂丘上には弥生中期を中心とした甕棺墓の営まれている例が多い。それらの遺跡と同様に博多での弥生時代集落は発見されていない。また、その経済的基盤としても、後背湿地を利用した水田耕作は可能であるとはいえ、その発展性には乏しいものがある。半農半漁的なものであったのであろうか。同様の問題点をもつ周辺砂丘地域の甕棺墓群とともに、それらの解明が待たれるところである。

第３章　祇園駅出入口２・３の調査

１．調査の経過

地下鉄１号線の建設工事にともなう博多遺跡群内での発掘調査は、昭和52（1977）年11月に開始し、昭和54（1979）年12月に終了した祇園駅舎および地下鉄一般部の調査（調査区Ａ～Ｓ区）と、本体部完了後発注された駅舎出入口、連絡通路等の調査とがある。出入口の調査は各出入口毎に断続的に行なわれ、昭和59（1984）年４月に予定されているＰ２出入口１カ所を残すのみとなっている。地下鉄換気塔本体部については、昭和53（1978）年の博多第４次調査と併行して調査が行なわれ、すでに「博多Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告第86集　1982　で報告されている。本章で報告する出入口２・３区は、国体道路、大博通りの交差点にあたる部分である。調査対象面積は614.5㎡であったが、埋設管等が集中するなど調査不能の地区があった関係上、実際の調査面積は434.5㎡にとどまった。発掘調査地点が主要幹線道路内で、とりわけ交差点に位置するという悪条件から、昼間の道路占用は許可されず、夜10時から朝６時までという夜間調査になった。そのため、路面覆鋼を先行し、発掘調査は覆鋼板をめくって行なうという方法をとった（ＰＬ.31）。一度に占用できる面積が限られているため、Ａ～Ｇのブロックに分けて調査を行なった。また上部攪乱層部分については機械を用いて除去し、以下を人力で精査する方法をとったが夜間で、光源は投光器などの人工光に頼らざるを得ないため、土層の識別が困難であり、作業員にしても調査経験の長い女性作業員は使えず、土木工事関係の方々に頼らざるを得ないというきわめて悪条件下での調査となった。そのため調査の精度が低下することになったのは、止むを得ないとはいえ極めて遺憾なことである。また全体遺構図の作成には測量作業の迅速化をはかるため、ステレオカメラによる航空写真測量を行なった。換気塔に通じる連絡通路にあたるＡブロックは店屋町工区で他の出入口と工区が違うため、昭和55年10月に先行調査し、祇園町工区の分は同年11月末からＧ・Ｆ・Ｅ・Ｄ・Ｃ・Ｂの順に調査し、12月25日に完了した。なお、ＡブロックとＢ～Ｇブロックと遺構番号が重なったため、Ａブロックの分を変更している。

夜間調査が長期にわたるということから、職員の勤務時間の変更を労使協議の上で行ない、それぞれ週39時間の勤務時間を超えないものとし、４名の職員のローテーションで行なうことになった。

発掘調査は、折尾学、飛高憲雄、力武卓治、池崎譲二が担当し、福岡市教育委員会文化課職員諸氏の協力があった。また、調査補助として白石公高、日野孝司、日野光嗣、久保田守、島恭一の援助をうけた。工事を担当された、熊谷組㈱、三井建設㈱、高木建設㈱の方々には全面的な協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

2．調 査 の 概 要

1）遺構と遺構出土の遺物

調査した個々の遺構、遺物について紙数の都合上、詳述することはできないため、ここでは主要な遺構、遺物を説明するにとどめたい。遺構別の出土遺物については付表を参照されたい。

1号土坑（Fig. 90・92～106、PL. 39～44）G区で検出された井戸の本体部で、径90cmの円形をなす。井筒の木質部が痕跡程度に残されている。掘り方は3号土坑（井戸）と区別できなかったが、本体部は多量の遺物が廃棄されており明確に識別された。出土遺物は、巻頭写真、付表、挿図等に示したように龍泉窯青磁碗や皿、陶器などが多量出土しており、それらは一括資料として極めて重要である。これらの遺物は、いずれも釉の変化、破砕などの火熱による影響をうけているが、ほぼ完形に復元しうるものばかりである。おそらく消費者の手に渡る以前の段階で火災にあい、商品価値を失ったため井戸中に廃棄されたものであろうと考えられる。12世紀の半ばから後半に位置づけられる。

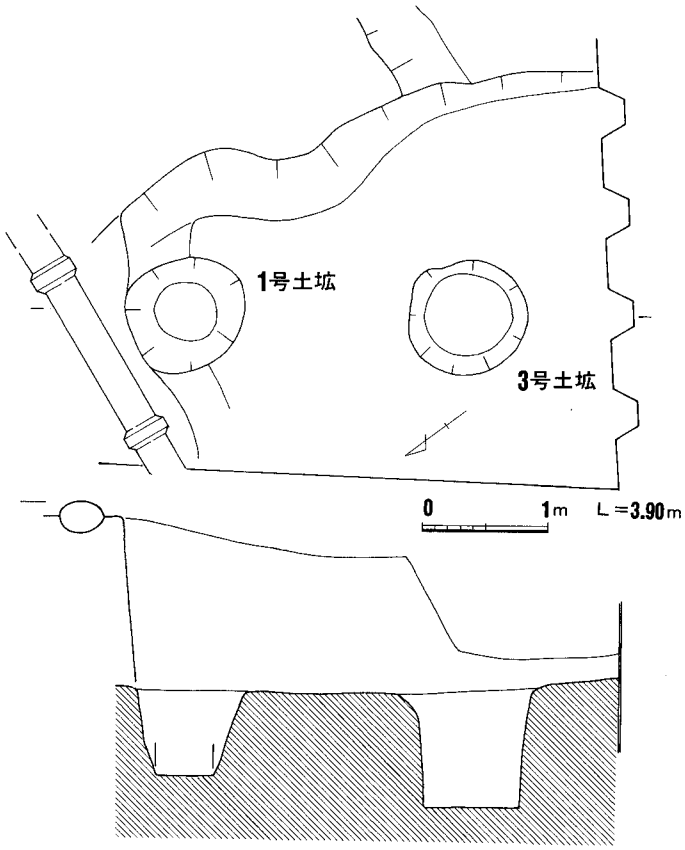


Fig. 90　1・3号土坑実測図

凡　　例

1．図中には次の略号を用いる。
　土坑＝土
　井戸＝井
　甕棺墓＝甕
2．調査区外に記した数字は、座標軸の数値である。

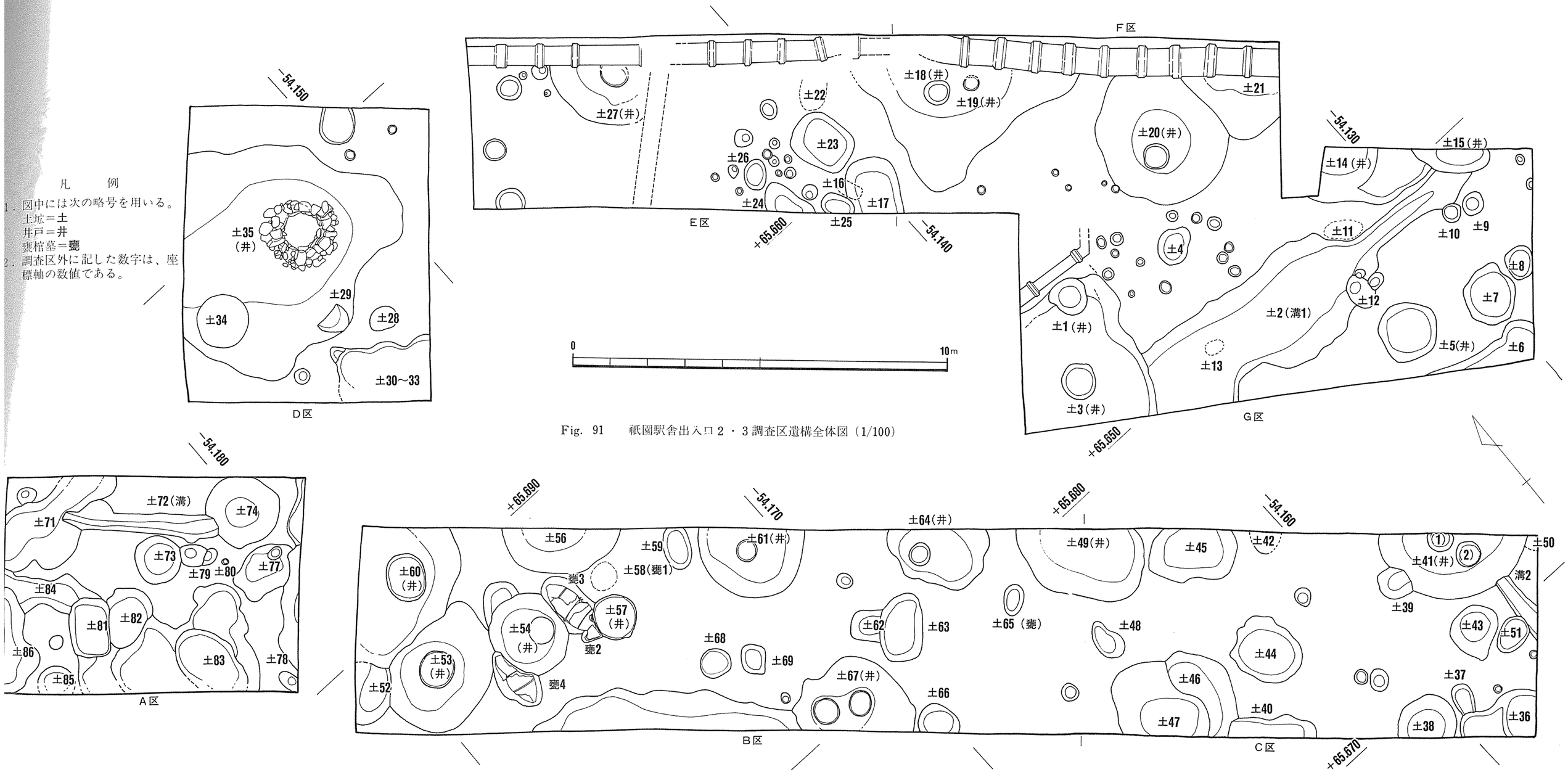


Fig. 91　祇園駅舎出入口２・３調査区遺構全体図（1/100）

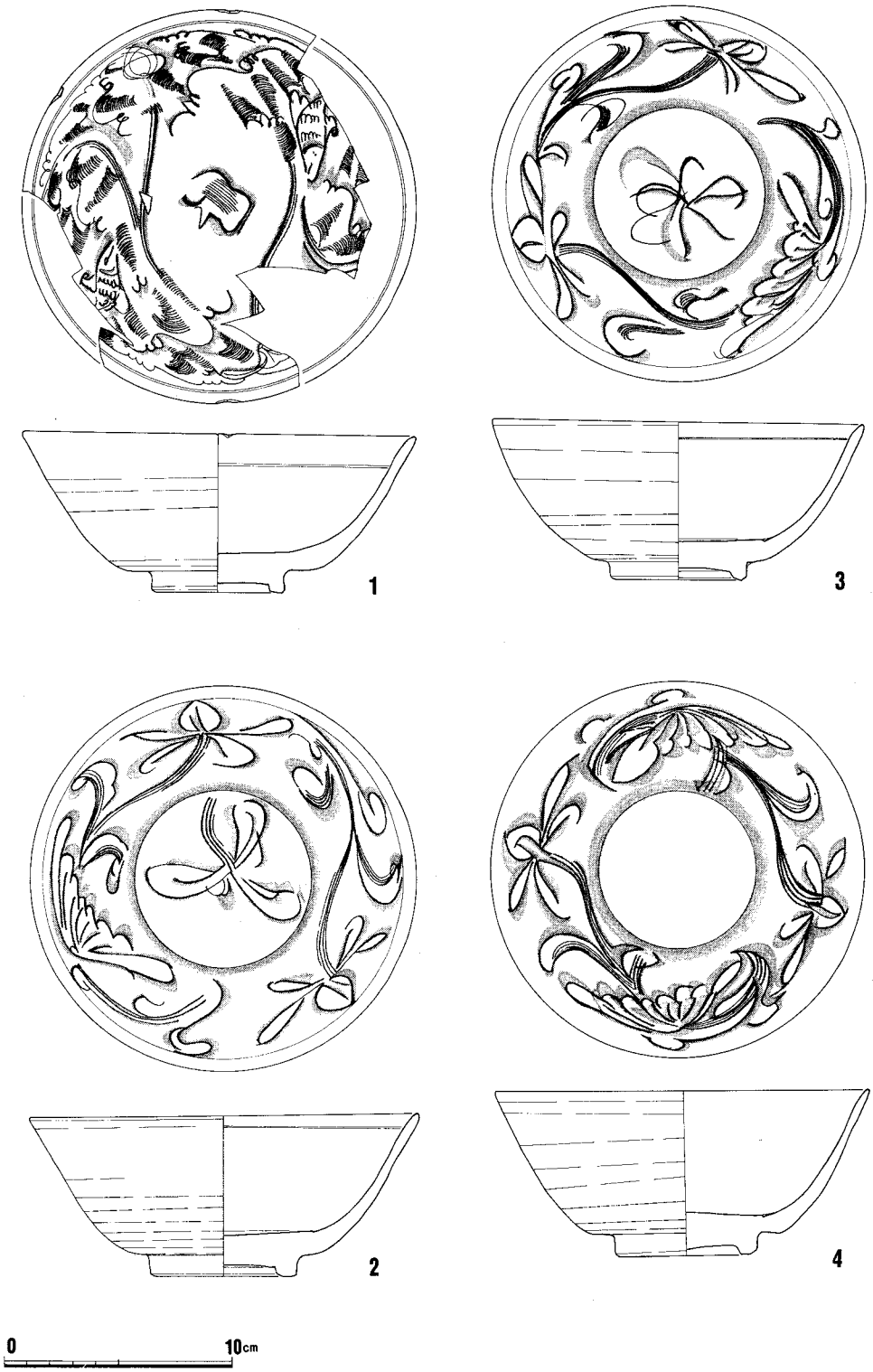


Fig. 92　　１号土坑（井戸）出土遺物（１）

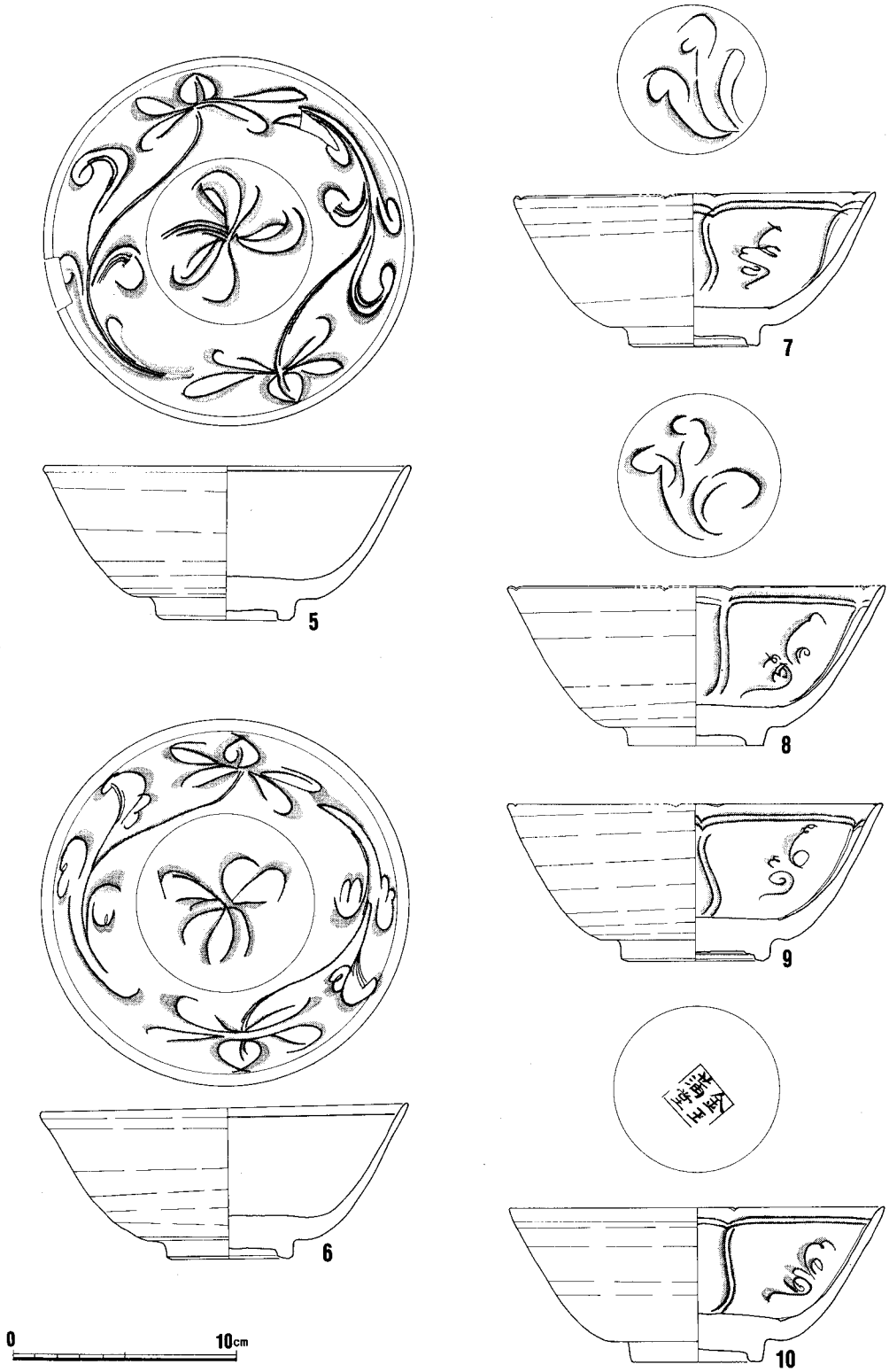


Fig. 93　　1号土坑（井戸）出土遺物（2）

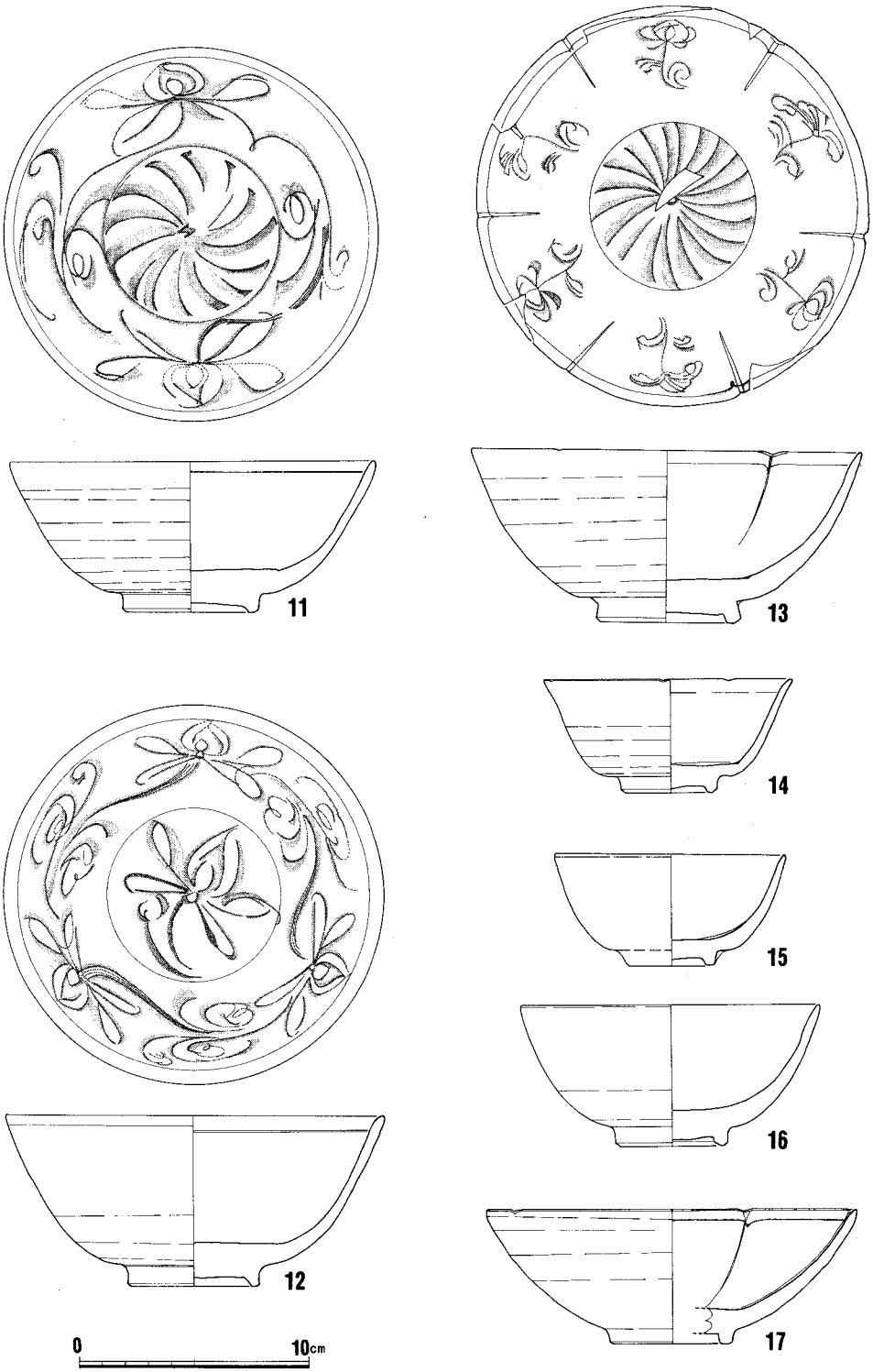


Fig. 94　　１号土坑（井戸）出土遺物（３）

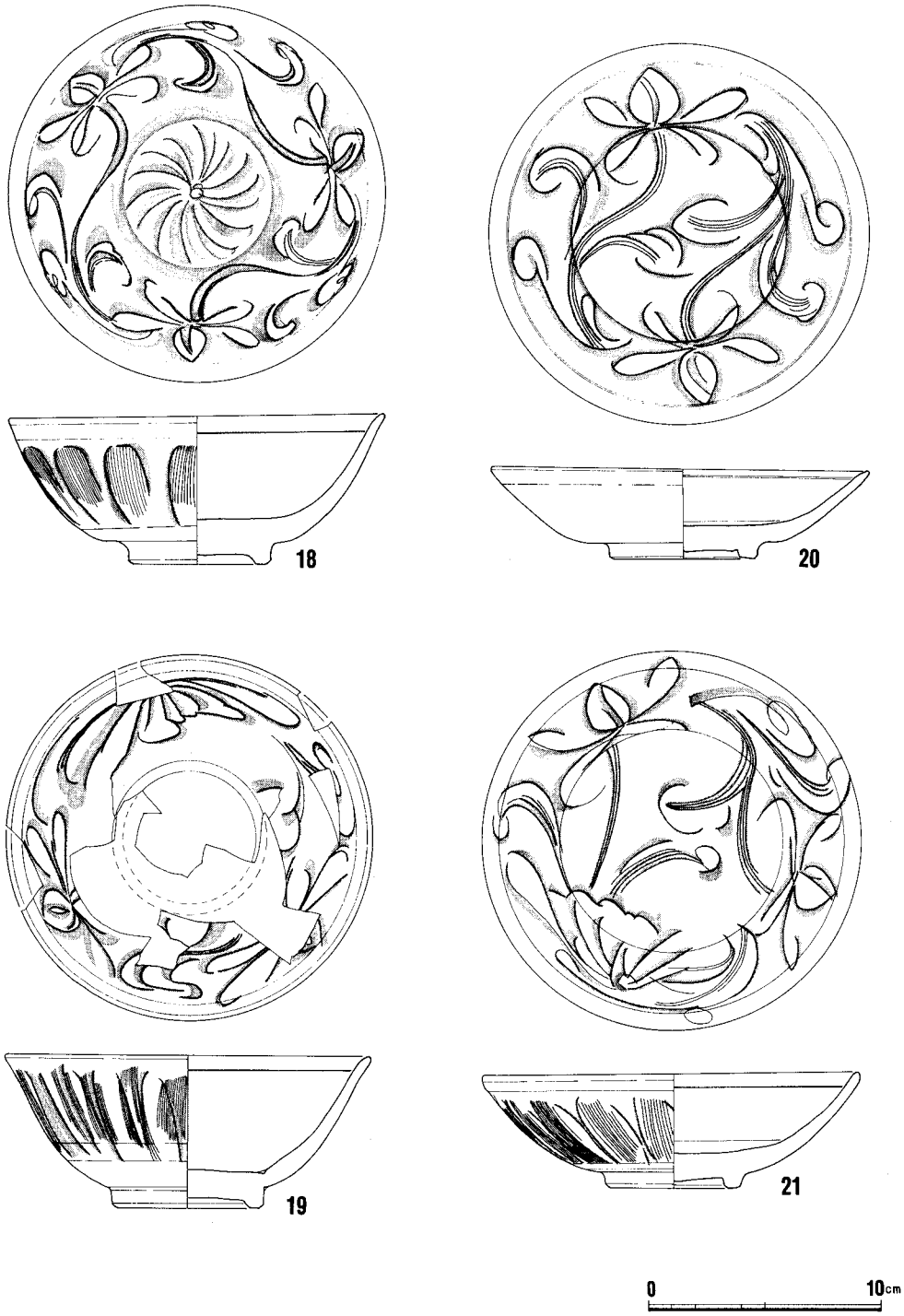


Fig. 95　　1号土坑（井戸）出土遺物（4）

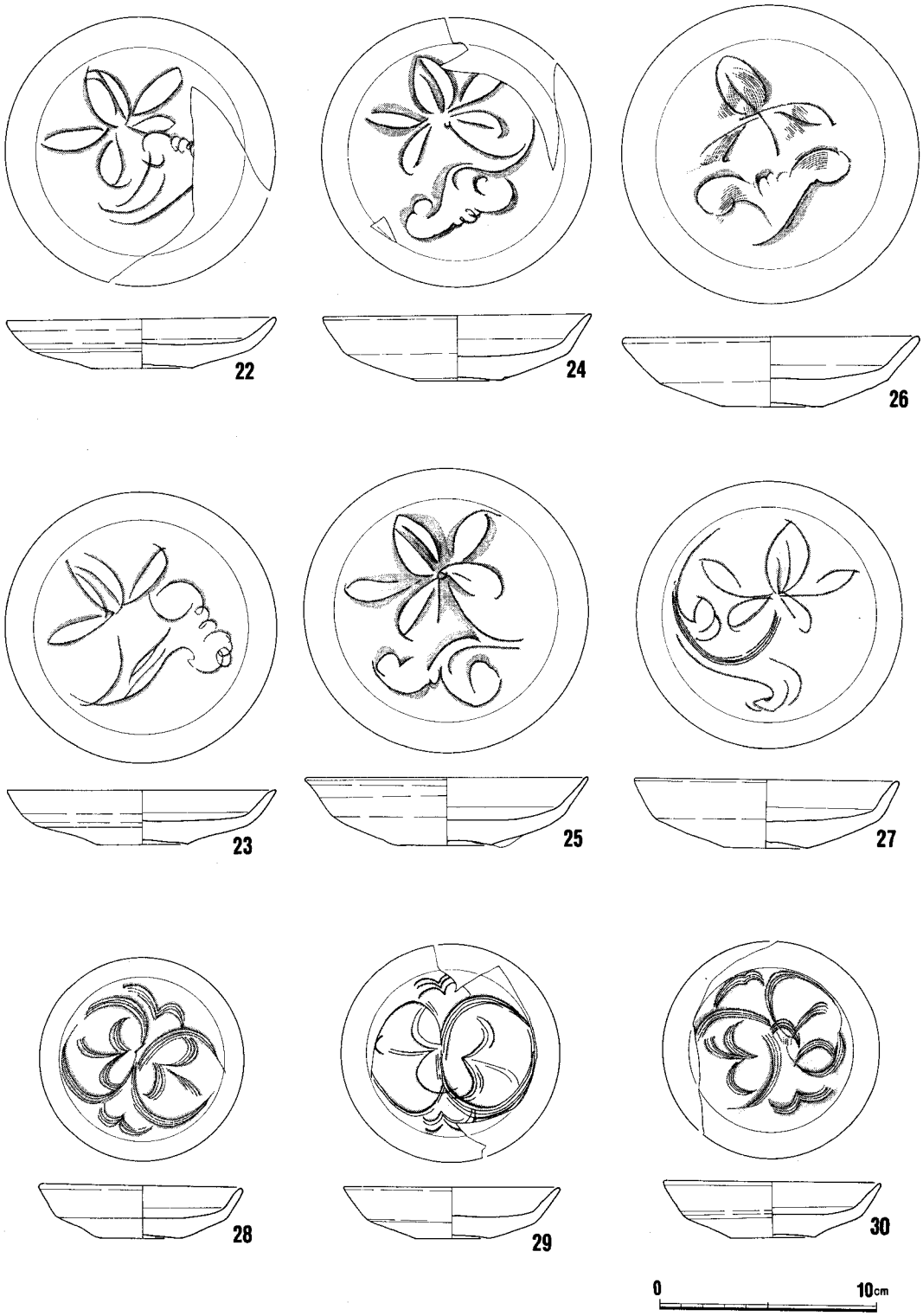


Fig. 96　　１号土坑（井戸）出土遺物（５）

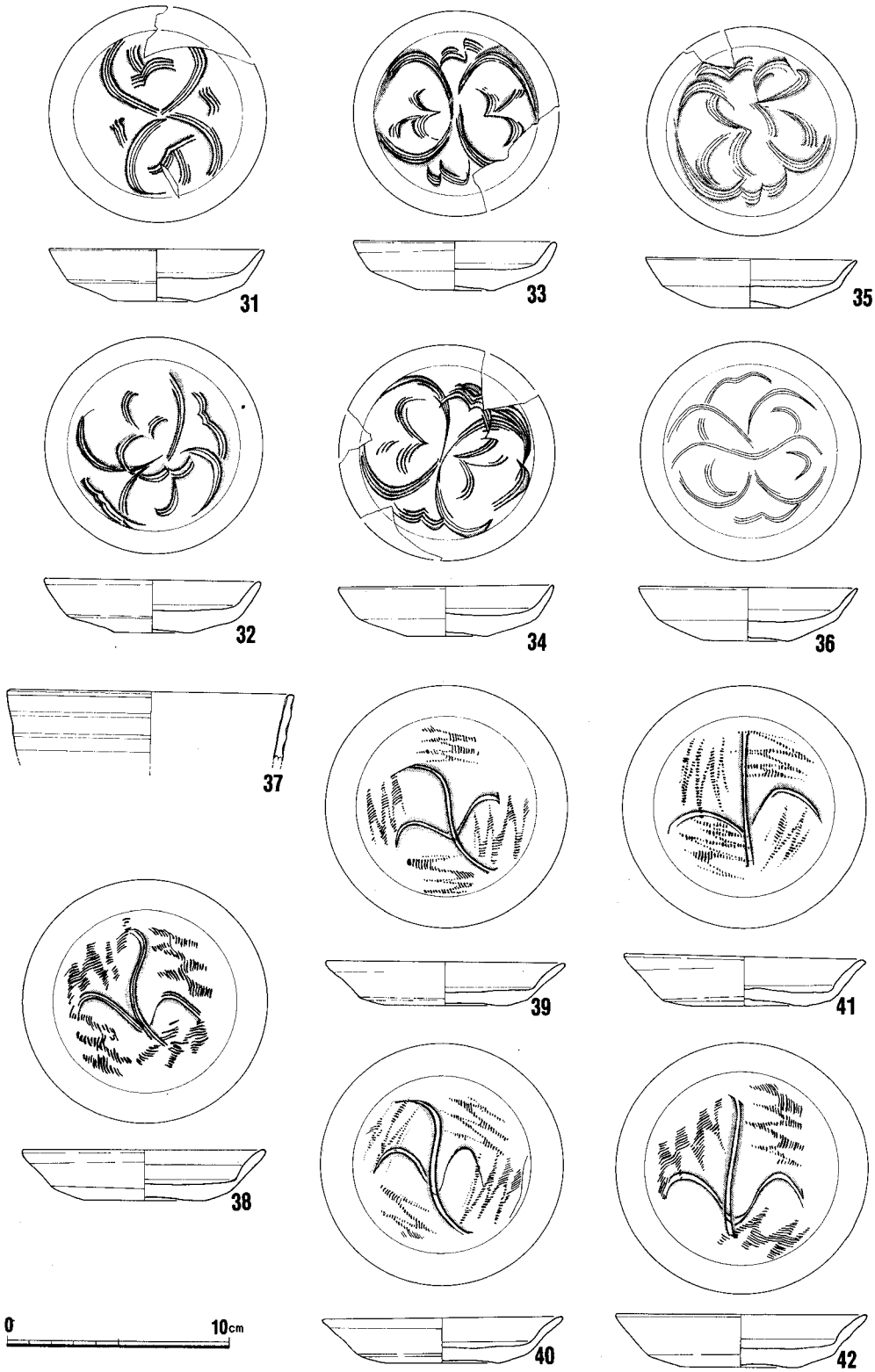


Fig. 97　　1号土坑（井戸）出土遺物（6）

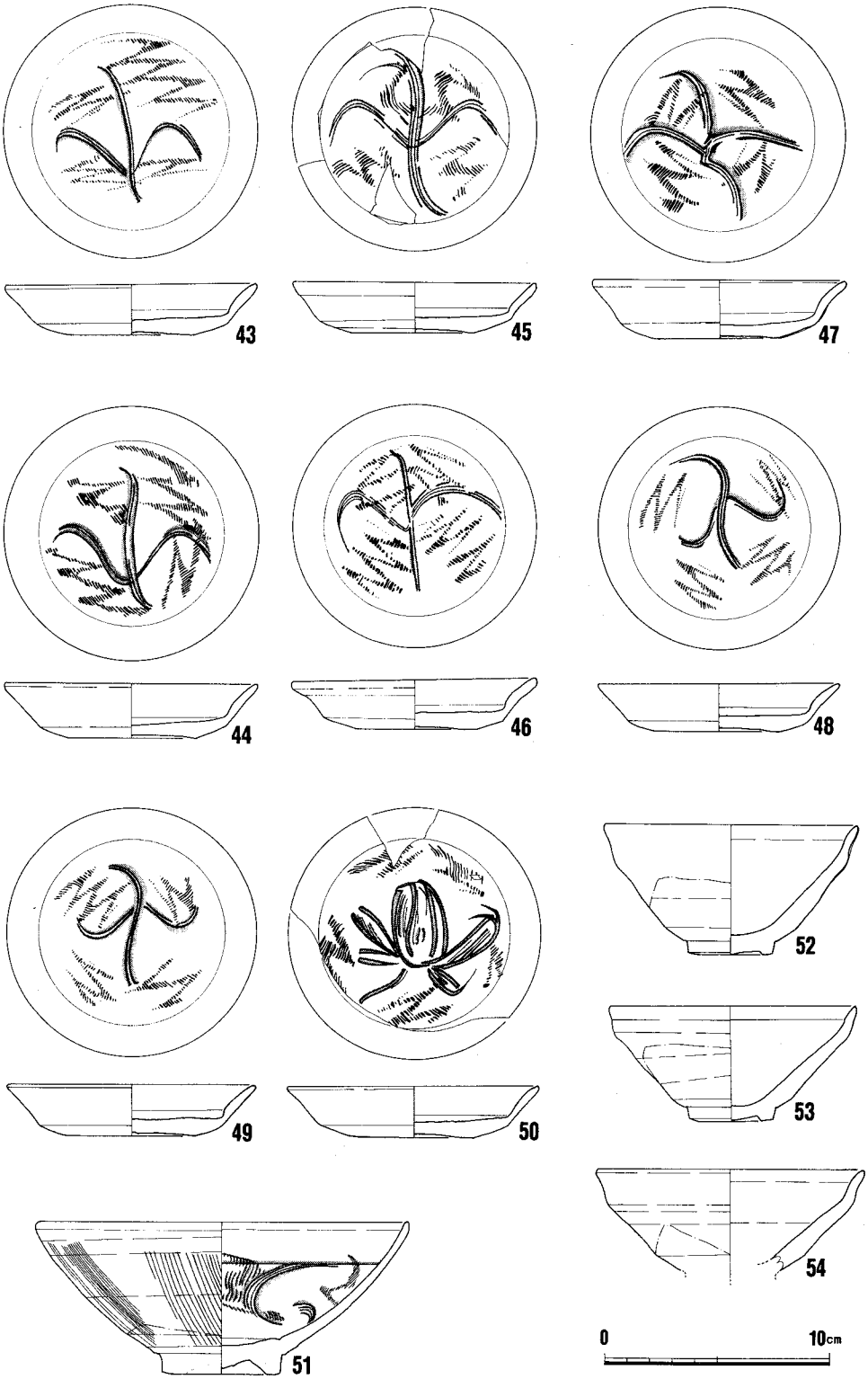


Fig. 98　　１号土坑（井戸）出土遺物（７）

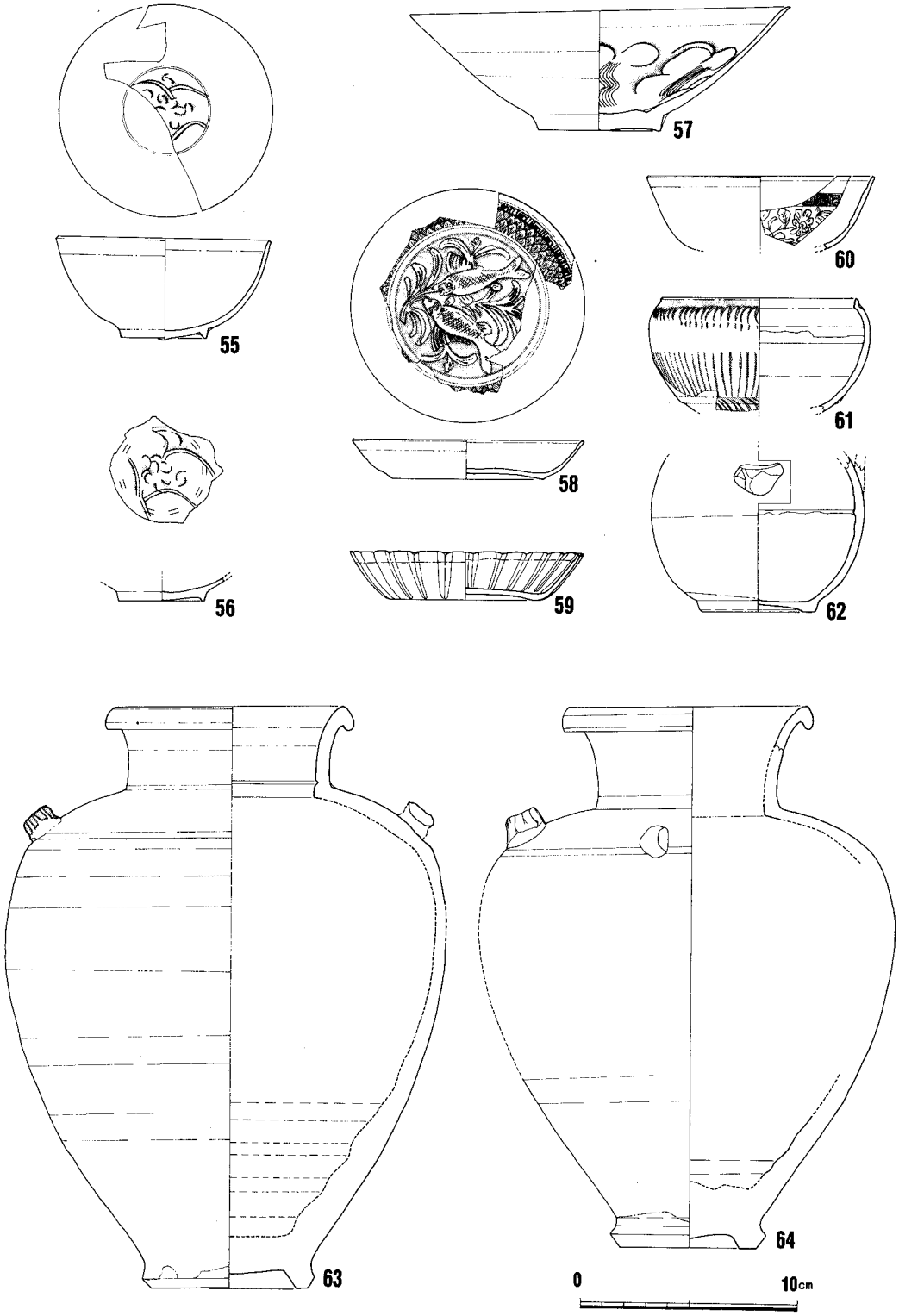


Fig. 99　　1号土坑（井戸）出土遺物（8）

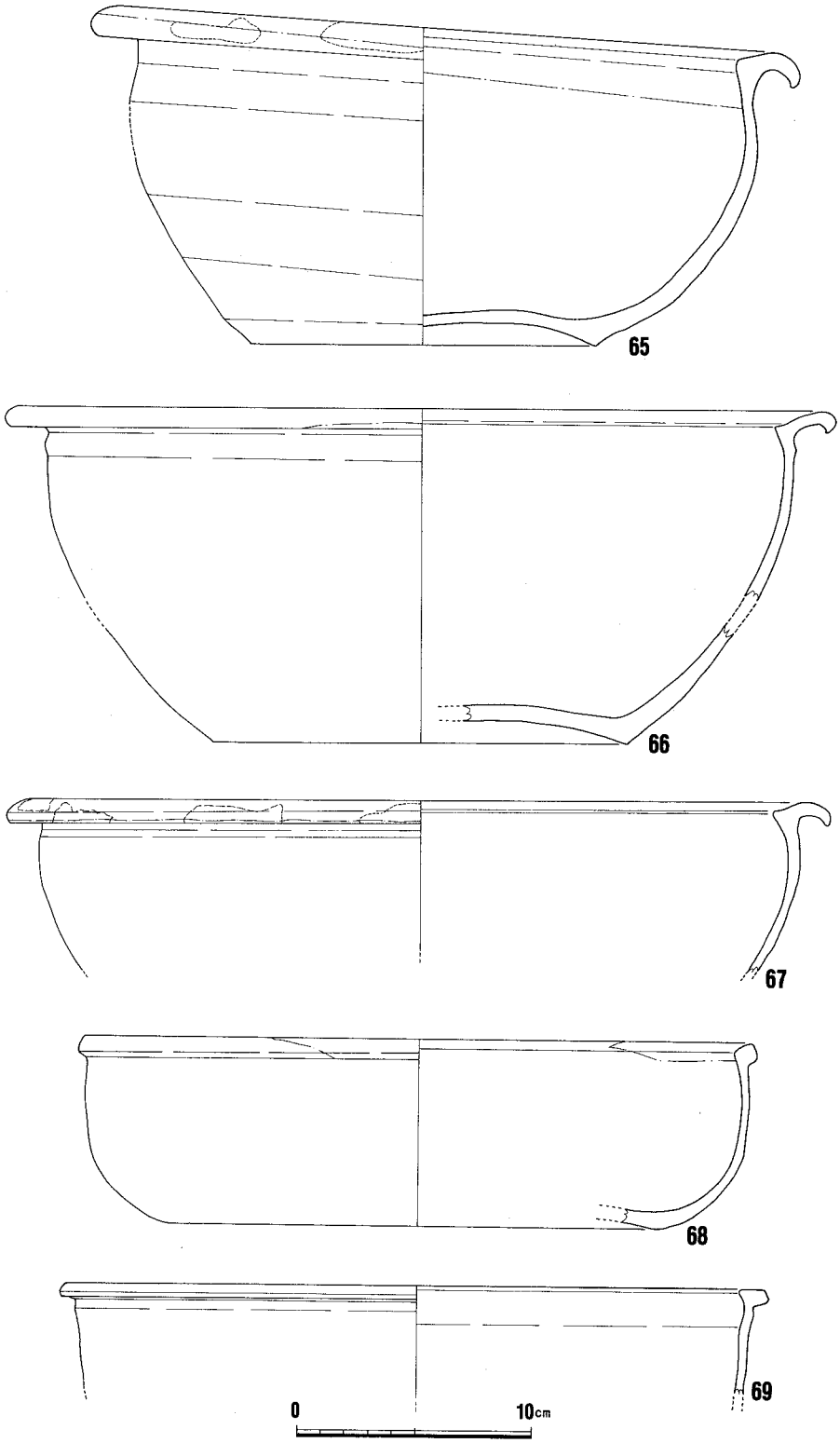


Fig. 100　　１号土坑（井戸）出土遺物（９）

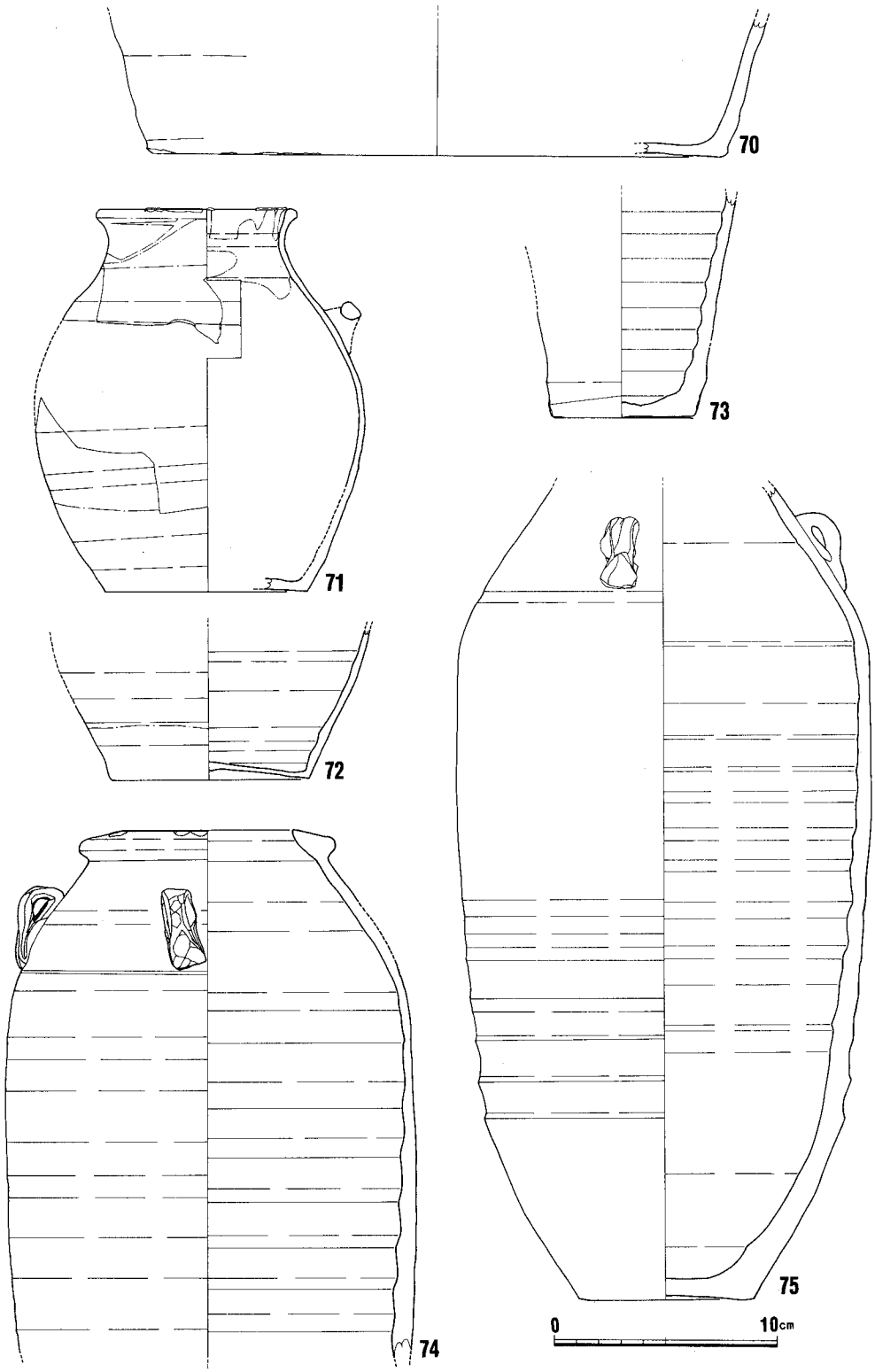


Fig. 101　　1号土坑（井戸）出土遺物（10）

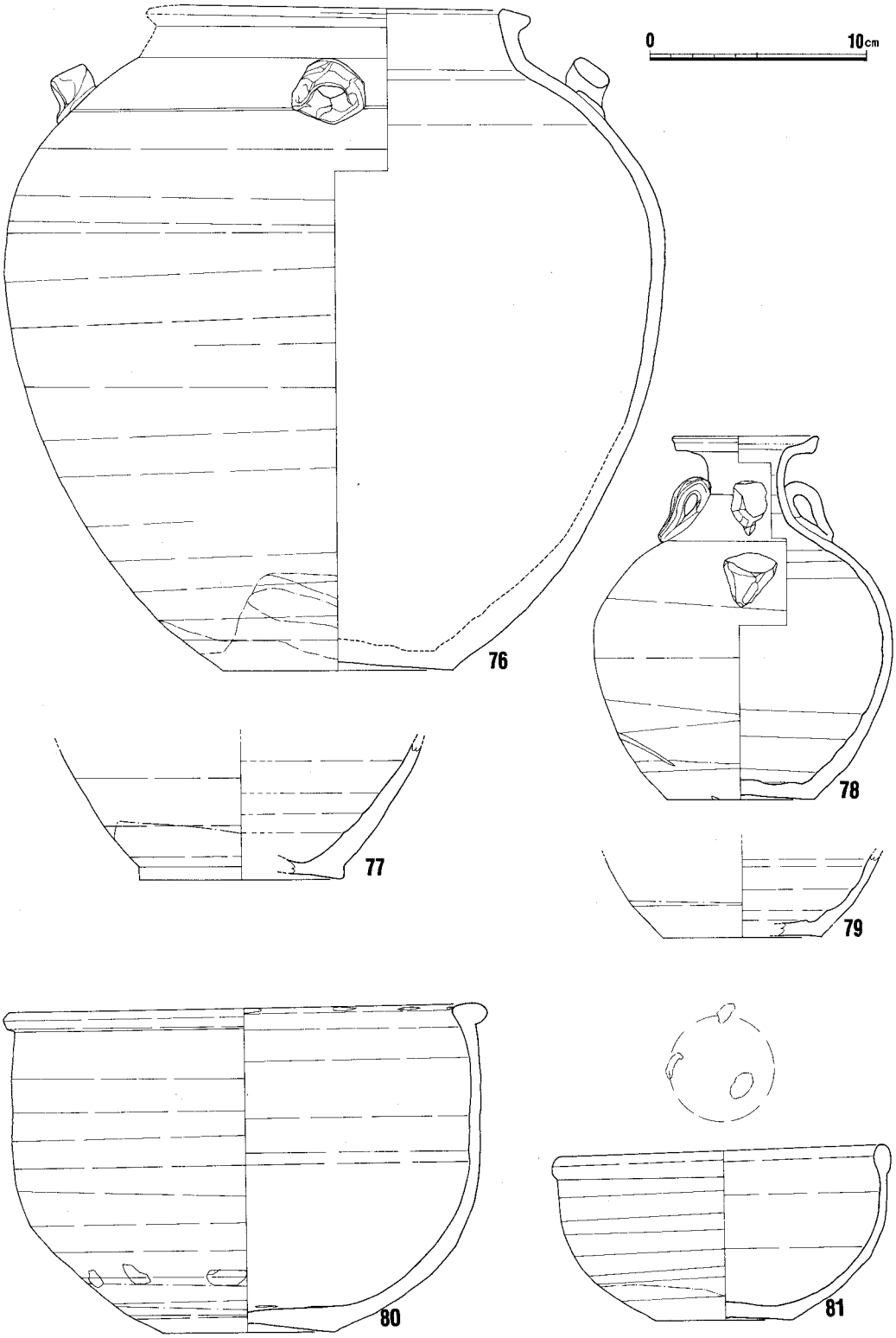


Fig. 102　　１号土坑（井戸）出土遺物（11）

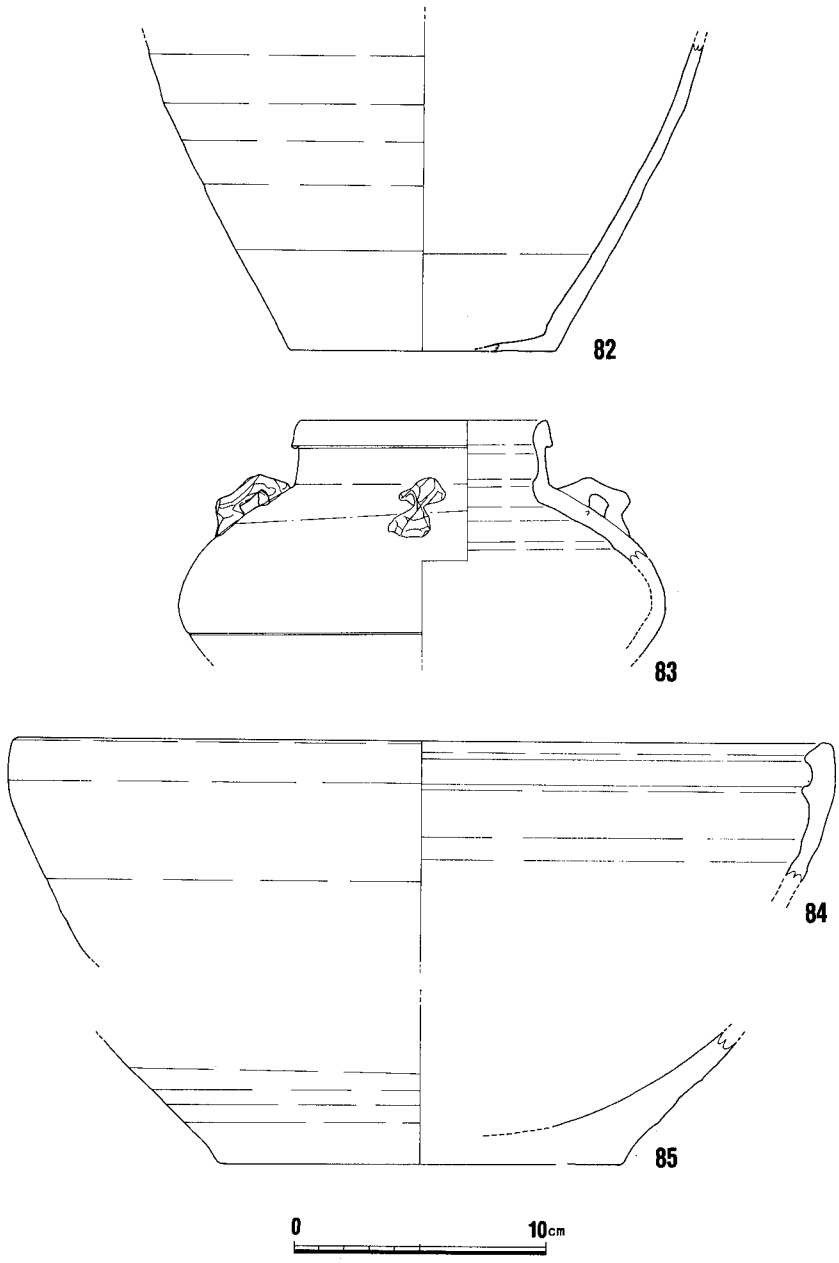


Fig. 103　　1号土坑（井戸）出土遺物（12）

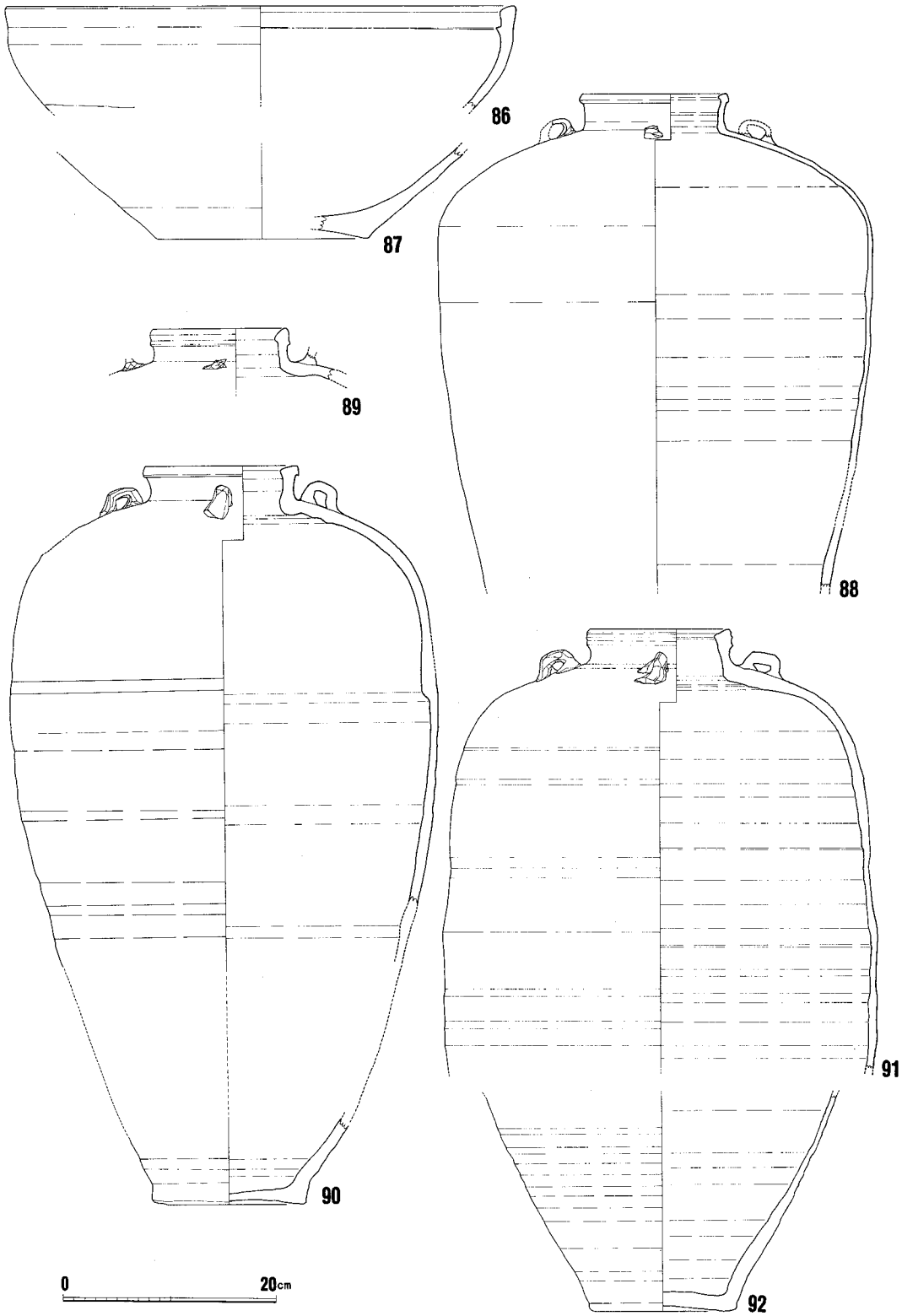


Fig. 104　　１号土坑（井戸）出土遺物（13）

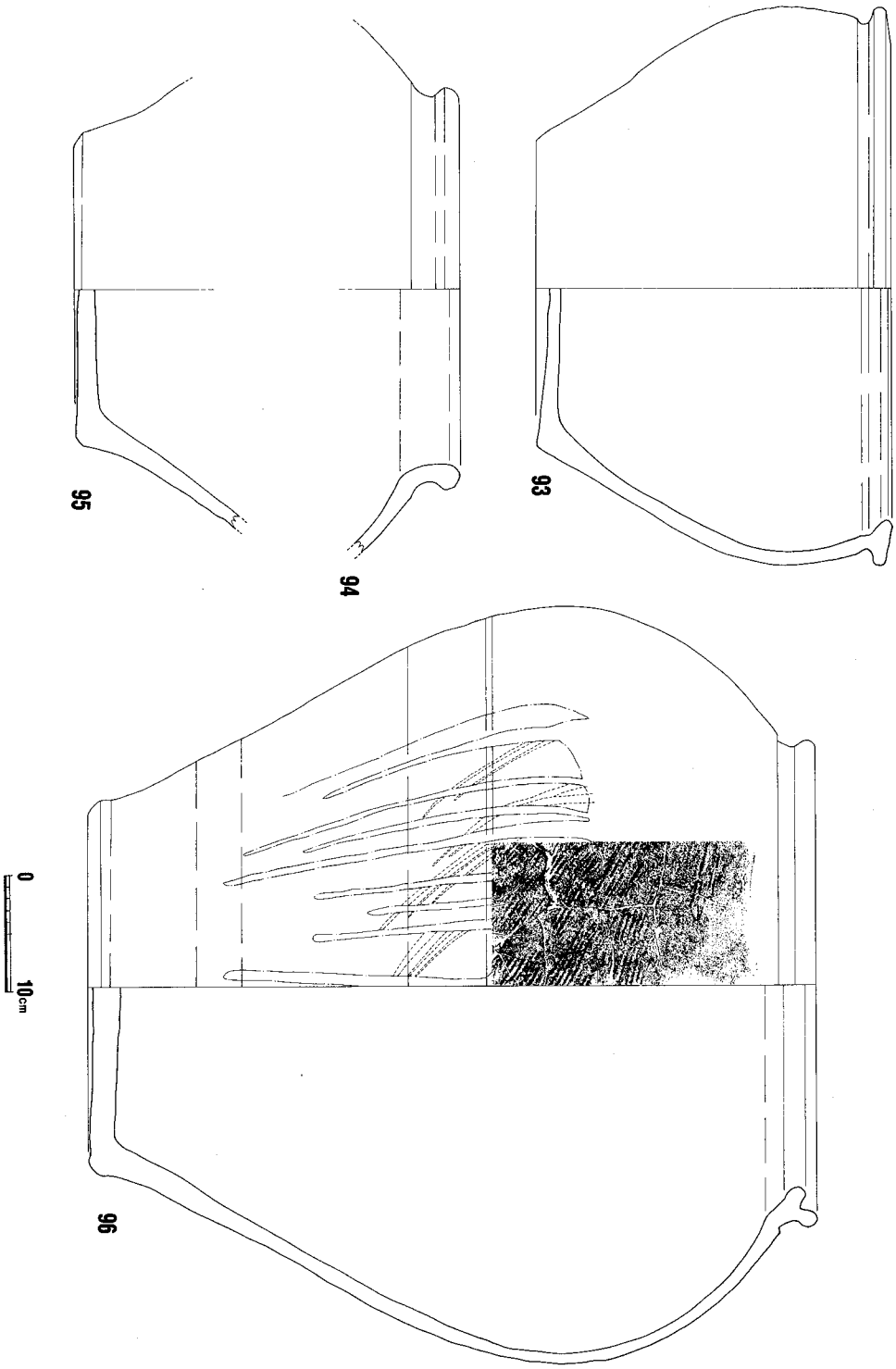


Fig. 105　　1号土坑（井戸）出土遺物（14）

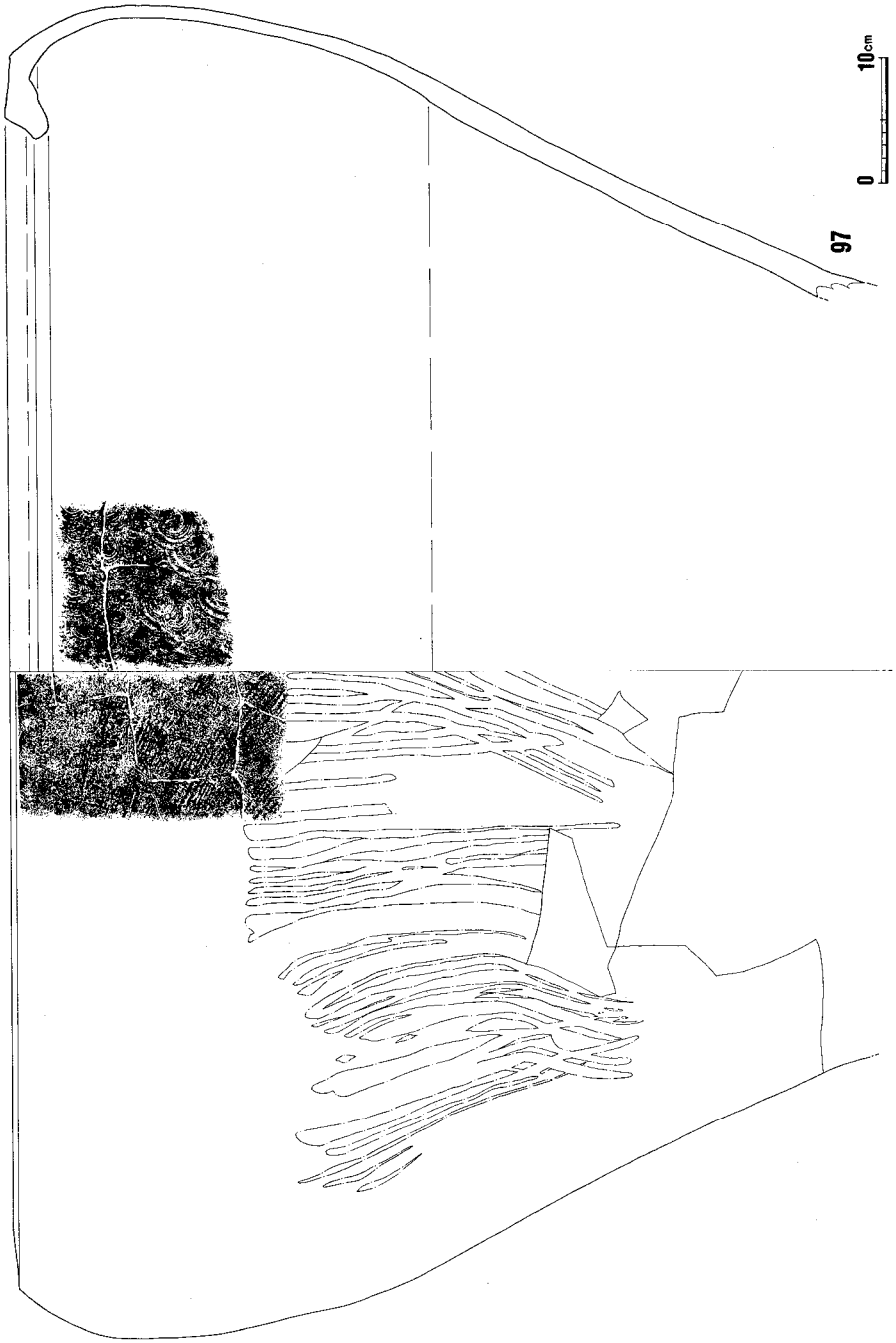


Fig. 106　　１号土坑（井戸）出土遺物（15）

Table. 3　祇園駅出入口２・３区土坑１（井戸）出土の遺物

図	種類	器種	文様もしくは成形技法	胎　土	釉	破裂以外の大事の影響	個数
1			六輪花・蓮池双魚劃花文	灰色やや粗	青灰色透明、氷裂なし、気泡を含む。	変化なし	2
2			双蓮花単葉劃花文、見込文に櫛目	灰色	青みある淡オリーブ色、気泡を含む。	部分的に氷裂が生じている。	7
3			同上で、見込に櫛目なし	灰色、小孔多	ガラス質帯オリーブ色、厚く氷裂なし。	変化なし	16
4			双蓮花双葉劃花文	〃	ガラス質オリーブがかった青灰色厚い。	変化なし	6
5			双蓮花枝劃花文、見込に櫛目有	灰色、小孔あり	淡青緑色透明釉、厚く気泡を含む。	変化なし	21
6			同上で、見込に櫛目なし	灰色	灰オリーブ色半透明、釉中に気泡多し。	変化なし	4
7		碗	六輪花雲文劃花文、見込径小、文有	灰色	灰オリーブ色、光沢あり氷裂なし。	部分的に酸化、粉々に氷裂が入る。	33
8			同上で、見込径大、文有	灰色堅緻	青緑色、氷裂なし。	酸化、氷裂が入る	17
9			〃　見込に文様なし	灰色	青灰色	釉は粉をかけたようにかせ、氷裂多。	10
10			〃　見込に「金玉満堂」	灰色	青灰色の釉	酸化、氷裂	1
11	龍泉窯		双蓮花枝劃花文、見込捻花	灰色やや粗	オリーブ色の釉は薄いが口縁付近に溜る。	変化なし	1
12	青　磁		三蓮花枝劃花文、見込に蓮花	灰色、黒点少々	緑がかった灰オリーブ色、透明。	粉々に氷裂が入る。	1
13			六輪花白堆線、六折枝劃花文	灰色	青みある灰緑色、厚い。気泡多く不透明。	変化なし	1
17			六輪花白堆線文	灰白色	オリーブがかった乳灰色で厚い。	変化なし	1
18		中　碗	三蓮花枝劃花文、見込捻花体外脈入蓮弁文	灰白色	淡オリーブ色。厚く、気泡が多く半透明。	変化なし	13
19			双蓮花単葉劃花文、体外脈入蓮弁文	灰白色	オリーブ色。透明で氷裂はない。	変化なし	1
14			六輪花無文	やや濃い灰色	オリーブ色、ガラス質やや暗い色調。	氷裂→粉々に多重貫入→青灰色にやきぶくれ	≧10
15		小　碗	無文	灰白色	青緑色、ガラス質で厚い、光沢強。	失光沢、大きな貫入	1
16			無文	灰色やや粗	灰緑色、不透明で厚い、長石質。	酸化、多重貫入	1
20		高台付	双蓮花枝劃花文	灰色	青みある淡緑色ガラス質、透明釉。	酸化、多重貫入→沸騰している。	5
21		の　皿	双蓮花単葉劃花文、体外脈入蓮弁文	灰白色	青みある灰濁色、厚く氷裂なし。	変化なし	4
22			蓮花に上向の葉、劃花文	灰白色	空色の明るい砧風	大きな貫入、なまこ少々	2
23		平底皿	〃　劃花文	灰白色	空色の砧風	変化なし	1
24			蓮花に下向の葉、劃花文	灰白色	青みある砧風の落着いた釉、厚い。	所々なまこ風になる。	6
25			蓮花に下向の葉、劃花文	灰白色	オリーブがかったガラス質、厚い。	酸化し氷裂入る。一部では粉々の氷裂。	5
26			蓮花に上向の葉櫛目入り、劃花文	灰白色	緑を帯びた明るい砧風	貫入少々	2
27			蓮花に蕾、櫛目使い、劃花文	灰白色	オリーブを帯びた透明釉、厚い。	大きな氷裂が入る。	1
			無文	灰色	砧風の釉、厚い。	局所に細かい氷裂	1
			口縁部のみで分別不能のもの	灰白色	緑を帯びた明るい釉、やや透明。		2
28			草文の芯右まわり、つなぎの山三つ	灰白色	黄色っぽい淡オリーブ透明ガラス質	局部的に氷裂少々	4
29			〃　〃	灰白色	淡青色、ピンホールあり。	変化なし	1
30			〃　〃	灰色	青っぽい透明ガラス質	局部的に氷裂少々	3
31			〃　〃	灰白色	淡オリーブ透明ガラス質	貫入少々	2
32		平底皿	〃　つなぎの山三つ	灰色	淡オリーブ透明ガラス質	一面に細かい氷裂	4
33		(やや小)	草文の芯左まわり	灰色	オリーブがかる透明釉	局所に氷裂少々	2
34			〃	灰色	青灰色の砧風	変化なし	2
35			草文の芯右・左まわり	灰白色	淡オリーブ透明ガラス質、厚い。	大きく貫入入る。	1
36			〃	灰白色	淡オリーブ透明ガラス質、厚い。	酸化、粉々に氷裂。	1
・			分別不能の破片				7
37		香　炉	胴周りで水平に弦文を重ねる	灰色	青灰色不透明砧風	変化なし	1
38			主文の草文の横線M形　雷光文が３個	灰白色	帯オリーブの釉、薄層	変化なし	3
39				灰白色	空色がかった釉やや厚め。	氷裂少々	15
40	同安窯			灰白色	明青緑色透明釉	失光沢	9
41	系青磁	平底皿		灰白色	主として淡オリーブ透明釉	変化なし	7
42				灰色	淡い灰緑色透明釉	一部酸化、氷裂入る。	4
43				灰ベージュ色	淡オリーブ透明釉	氷裂入る	5
44				灰白色	淡オリーブ透明釉	変化なし	7

図	種類	器種	文様もしくは成形技法	胎　　土	釉	破裂以外の火事の影響	個数
45	同安窯系青磁	平底皿	主文の草文の横線M形		青緑がかった釉	氷裂少々	1
46			縦線折れる	灰白色	灰色を帯びた透明釉、生やけか。	酸化か、細かい氷裂。	2
47				灰色	青灰色の暗い色	氷裂少々	5
48			横線W形	灰白色	青緑色透明釉、光沢あり。	大きく貫入少々	3
49				灰白色	青緑色透明釉、光沢あり。	氷裂少々	2
50			主文は蓮花	ベージュ色	透明釉、一面に氷裂	酸化、氷裂は火事でか？	1
・			無文、施釉不到底、底¾残	灰白色、粗	灰色、灰オリーブ色の二個、薄層。	火に当たっているか？	2
・			欠けていて分別不能の底部				13
・			〃　　口縁部				≒10
51		碗	体外の文は細い櫛描	灰色	ごく淡いオリーブを帯びた透明釉	燻されているが釉には変化なし	1
・			同型式でいずれも小片				5
57	青白磁	碗	極く浅い外底のみ露胎、水波文	灰白色、やや粗	青みある透明釉	局所に粗い氷裂	2
55.56		小　碗	口ハゲ、見込に花枝劃花文	白色	空色を帯びた透明釉	失光沢、大きな貫入	2
60		小　碗	口ハゲ、花文印花文、型造り	白色	クリーム色を呈する透明釉	火に当たっているか？	1
58		皿	口ハゲ、双魚印花文、型造り	白色	淡いオリーブを帯びた透明釉	氷裂	3
59		皿	口ハゲ、25弁菊花形、型造り	白色	空色を帯びた透明釉	局所的に煤ける。	3
61		小　壺	型造り、肩で継ぐ。	白色	空色を帯びた透明釉	氷裂	1
62		〃	〃　　胴で継ぐ。	灰白色	淡灰青色、ややかすむ。	細かく沸騰しガサガサ	1
63.64	白　磁	四耳壺	高台・口造りの特長は同じ。大きさに小差あり。	灰白色	光沢ある透明釉	局所的に貫入あり。	3
52.53 54	天　目	碗	1個は禾目天目である。	黒褐色、やや粗い。	漆黒の不透明光沢釉	失光沢、ブクブクに沸騰。	3
73	陶　器 Ⅰ　類	小口瓶	水びき、頸無しの小口瓶	灰ベージュの砂っぽい土。	肩より上に褐釉		1
71.72		耳付壺	〃	〃	体外上部黒褐釉	釉は黒くブクブク沸く。	2
65		鉢	広い口縁	灰ベージュの土に白黒の砂	蜂蜜色、厚く光沢あり、褐彩あり。		1
66.67		〃	〃	〃	蜂蜜色、厚く光沢あり、褐彩あり。		2
68		盤	細い口縁、器壁に丸みあり。	〃	原状不明、褐彩なし。	釉は白く粉状になる。	1
69		盤	〃　　器壁は直線的。	〃	オリーブ色、つやなし、褐彩なし。	釉はかせているが、火事のせいか不明。	2or3
70		盤	〃　　〃	〃	〃　　〃　　〃		
・		盤or鉢	中広口縁の2片あり。	〃	蜂蜜色の釉、光沢あり。		1
74.75	陶　器 Ⅱ　類	四耳壺	胴部に紐を巻き上げたような跡あり。	暗褐色の緻密な土に石灰様の小粒子入る。	茶緑色、鈍光あり。		3
・						灰色にカスカスに焼け変化著しい小形品1個。	1
80	陶　器 Ⅲ　類	鉢	口で重ね焼き、内底に目跡4個	赤褐色	茶褐色光沢釉		2
81		小　鉢	内底に目跡3個あり。	〃	〃	かせている。	1
78.79		二耳付注　壺	盤口壺。	〃	〃		2
76		四耳壺	輪状の四耳がつく。	赤褐色、石灰様小砂少々。	〃	一部に表面剝離。	1
77		壺か	仮高台を作る	赤褐色	〃		1
88	陶　器 Ⅳ　類	四耳壺	V類と似る。外面に一部叩き目。	赤茶色、混じりなし。	茶色の、生地に吸収されたような釉。		1
82		壺	平底	赤茶色、混じりなし。	下半露胎。上半は不明		1
・		四耳壺	末広がりの頸をもつ中型の四耳壺	赤茶色、混じりなし。		無釉	1
89 90 91 92	陶　器 V　類	四耳壺	内部に紐造りの跡が残る。数個所で継いでいる。	灰ベージュの土に白や褐色の砂が混じる。	ペンキのようにべたっとした茶色の釉が底近くまでかかる。		4
83		四耳壺	上と似る　口・頸部、肩より下は急にせばまる。小形である。	茶褐色の土に白・黒砂混じり。	肩まで茶色釉をかける。	黒くカスカスに焼ける。	1
93	陶　器 Ⅵ　類	甕	やや外傾するT字口縁	黒褐色、白黒の砂混じり。	黒褐色不透明釉	内外一面に表面剝離。	2
94.95		大　壺	口部・底部は同一個体	茶褐色、白・茶・褐の砂混じり。	褐釉	〃	1
96		大　壺	外面上半に斜の叩き目。Y字口縁	褐色、白黒の砂混じり。	黒褐釉、熔けないところでは土色。	表面に剝離多し。	1
97		大　甕	外面に斜、内面に青海波叩き目。	黒褐色に白黒砂混じり。	灰オリーブ～褐色、不透明釉。	表面に剝離多し。	1
86.87		茶緑釉すり鉢	口に受けを作る。器外に斜の叩き目。器内下半はすり減って平滑。	茶褐色の土に白黒の砂混じり。	口縁部に灰～茶緑色の不透明釉をかける。	釉が一部ブクブクして焼けただれている。	1
84.85		無　釉すり鉢	口に二重に段をつける。器内は磨滅して平滑になっている。	褐色の土に白黒の砂混じり。	無釉	一部表面剝離。白っぽく焼ける。	2

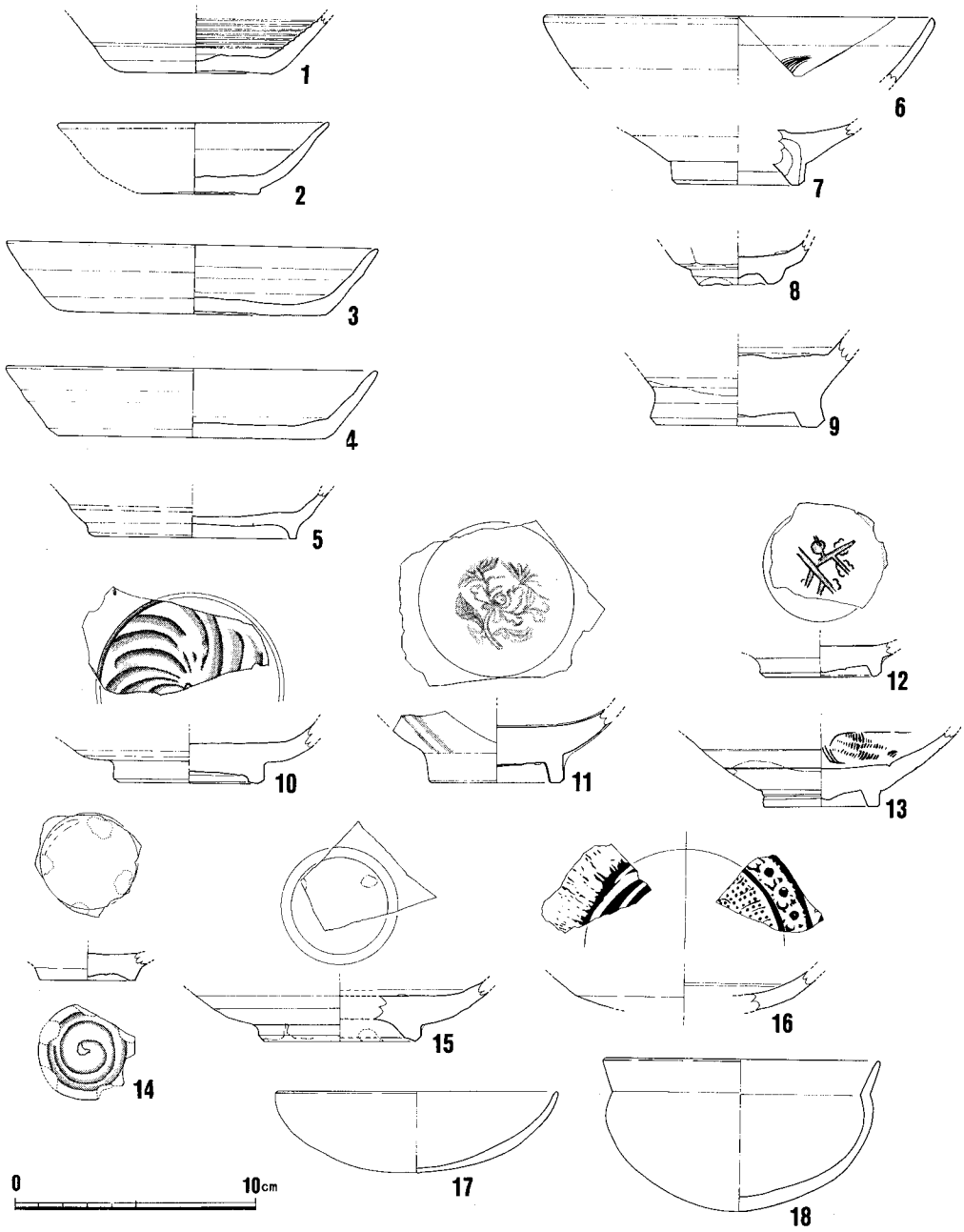


Fig. 107　　2号土坑出土遺物

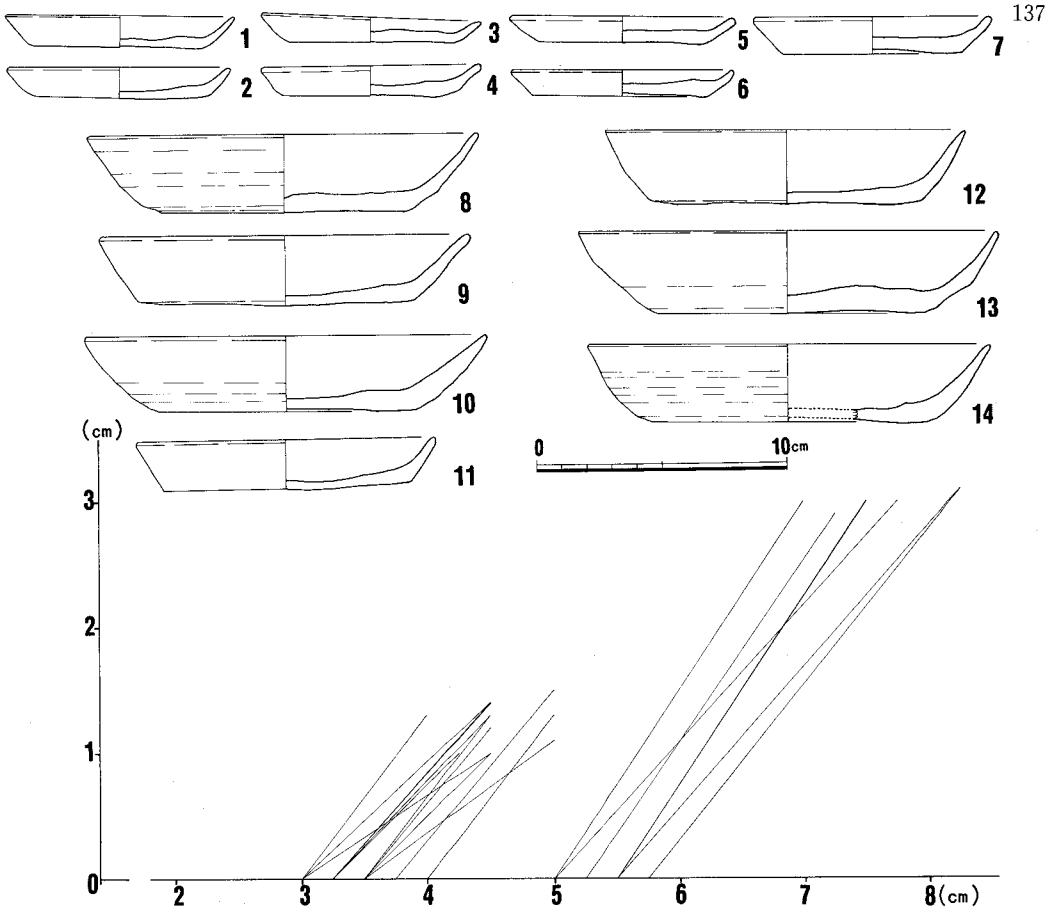


Fig. 108　　３号土坑出土遺物

２号土坑 (Fig. 107)　Ｇ区で検出されている。長軸の方向はほぼ東西を向き、本体部で検出された古期の溝の方向に一致し、溝と考えられるが、両端を他の土坑、壁に切られ明確にしがたい。幅2.6ｍ、深さ0.7ｍの断面Ｕ字形をなす。遺物は混在しており、17、18などの古式土師の一群から、明代の白磁八角形杯(８)、見込みに印花文をもつ青磁碗(11、12)、李朝の陶磁（14、15、16）などが見られる。

３号土坑 (Fig. 108)　１号土坑に隣接する井戸本体部である。径0.85ｍの正円形で、深さ１ｍを計る。木質の遺存は認められなかったが、おそらく木桶組であったろう。出土遺物は図示した土師皿類以外は少なく、白磁碗や陶器などの破片が10点程出土しているのみである。土師皿類は計測グラフに見るとおり、いずれも糸切り底で、小皿は底径7cm、口径9cm、器高１cm強に集中し、杯は底径11cm、口径14cm強、器高３cmに集中する。13世紀代に位置づけられようか。

４号土坑　1.1×0.85ｍの不整円形をなす土坑で性格は不明。Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ類の白磁碗が多く12世紀前半代に位置づけられよう。

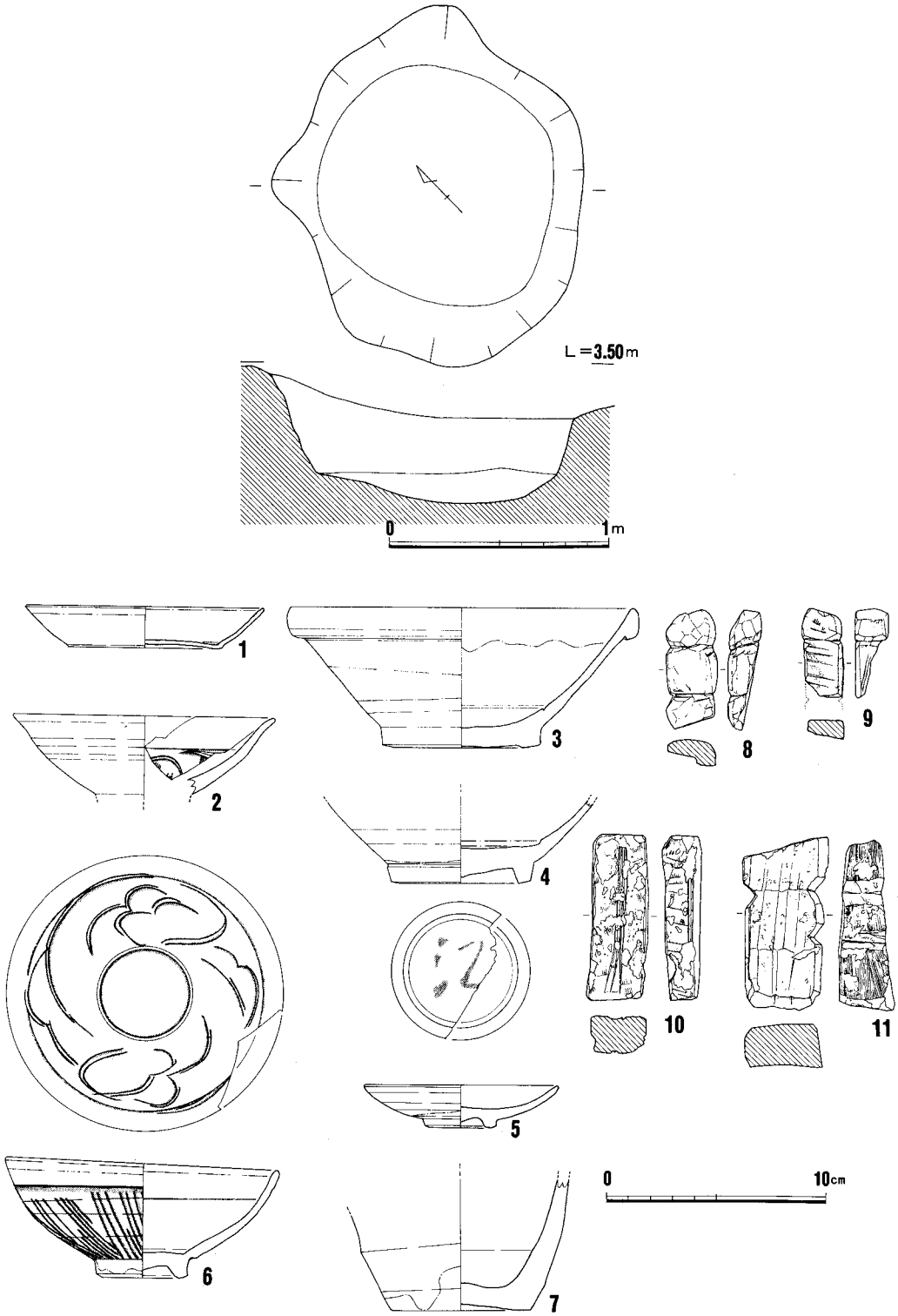


Fig. 109　　7号土坑実測図と出土遺物

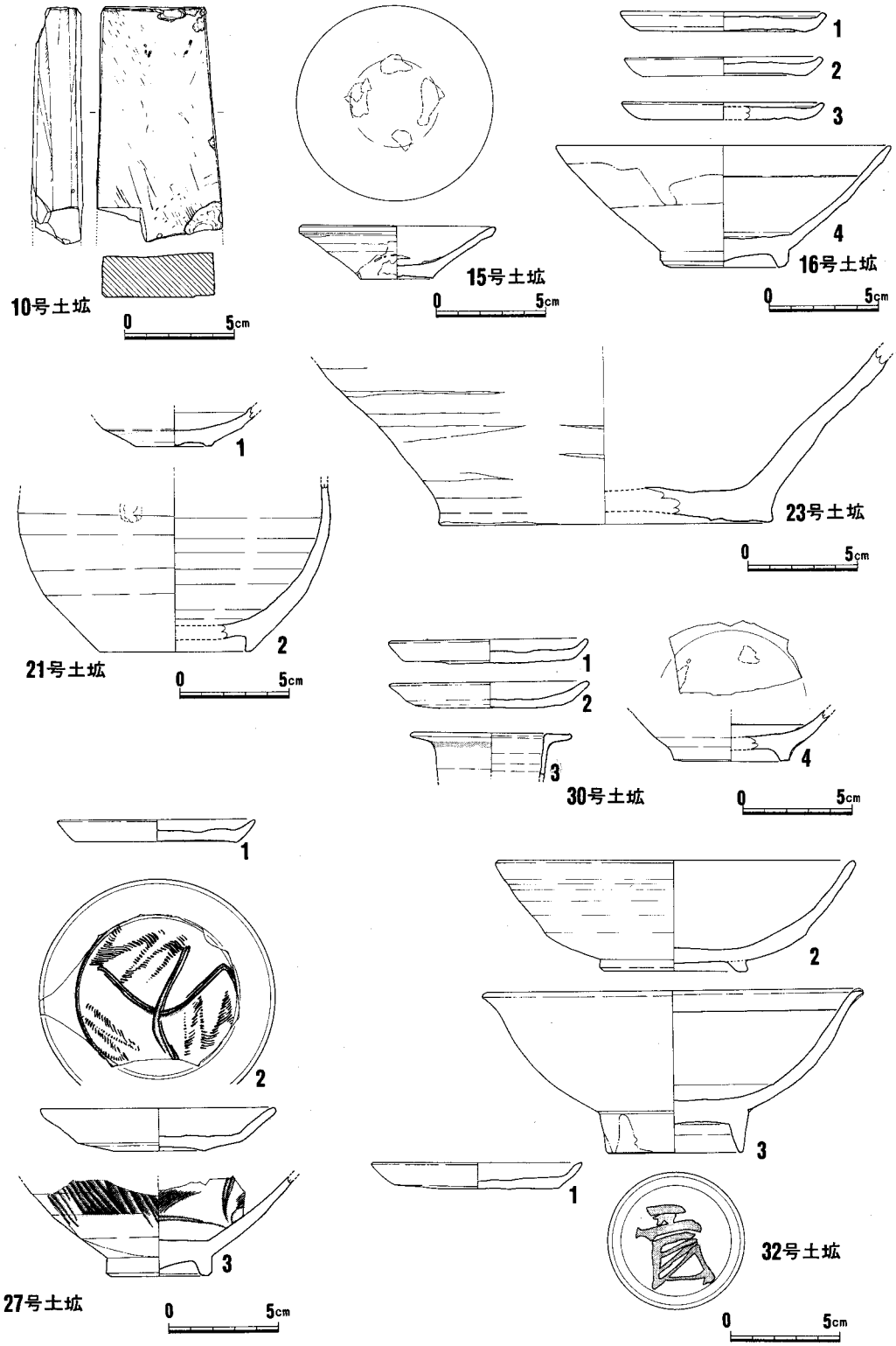


Fig. 110　10・15・16・21・23・27・30・32号土坑出土遺物

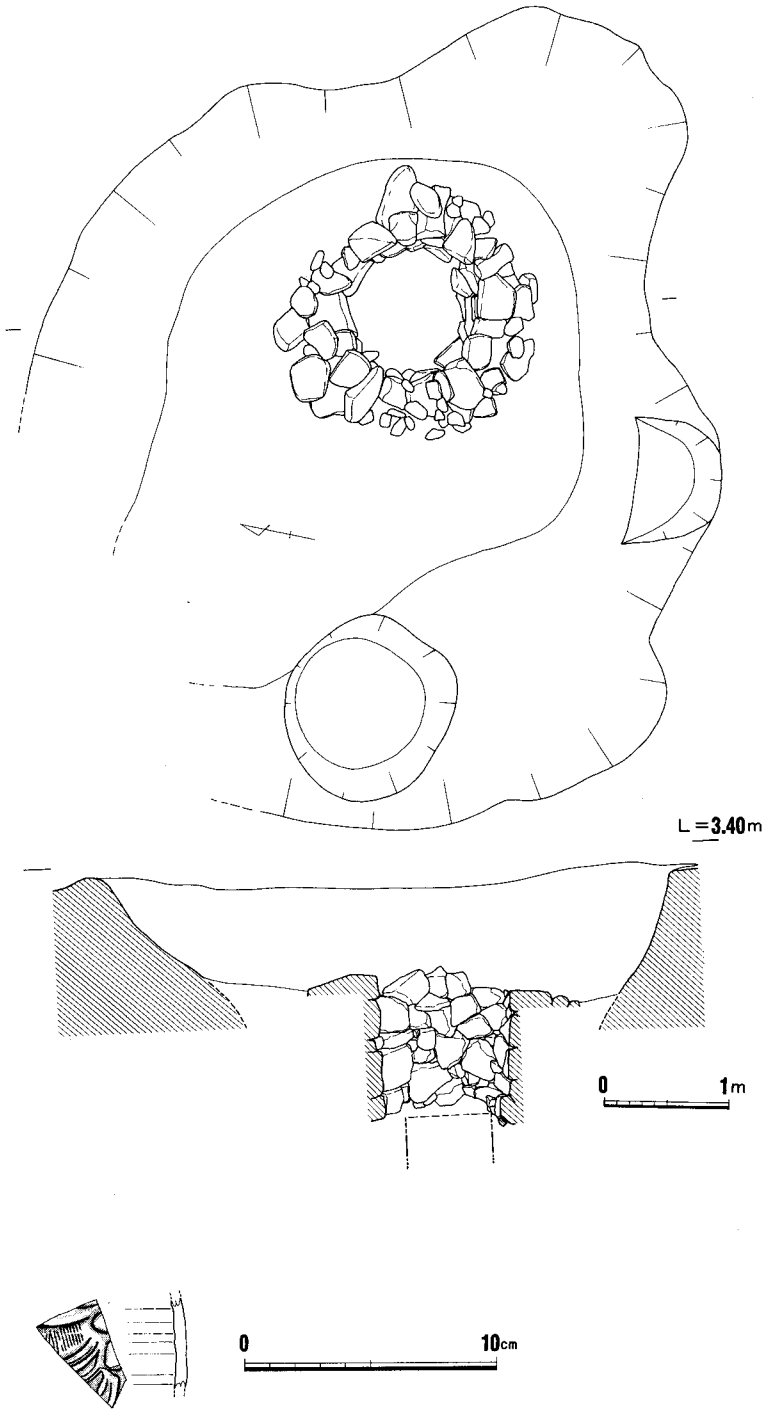


Fig. 111　35号土坑（井戸）実測図と出土遺物

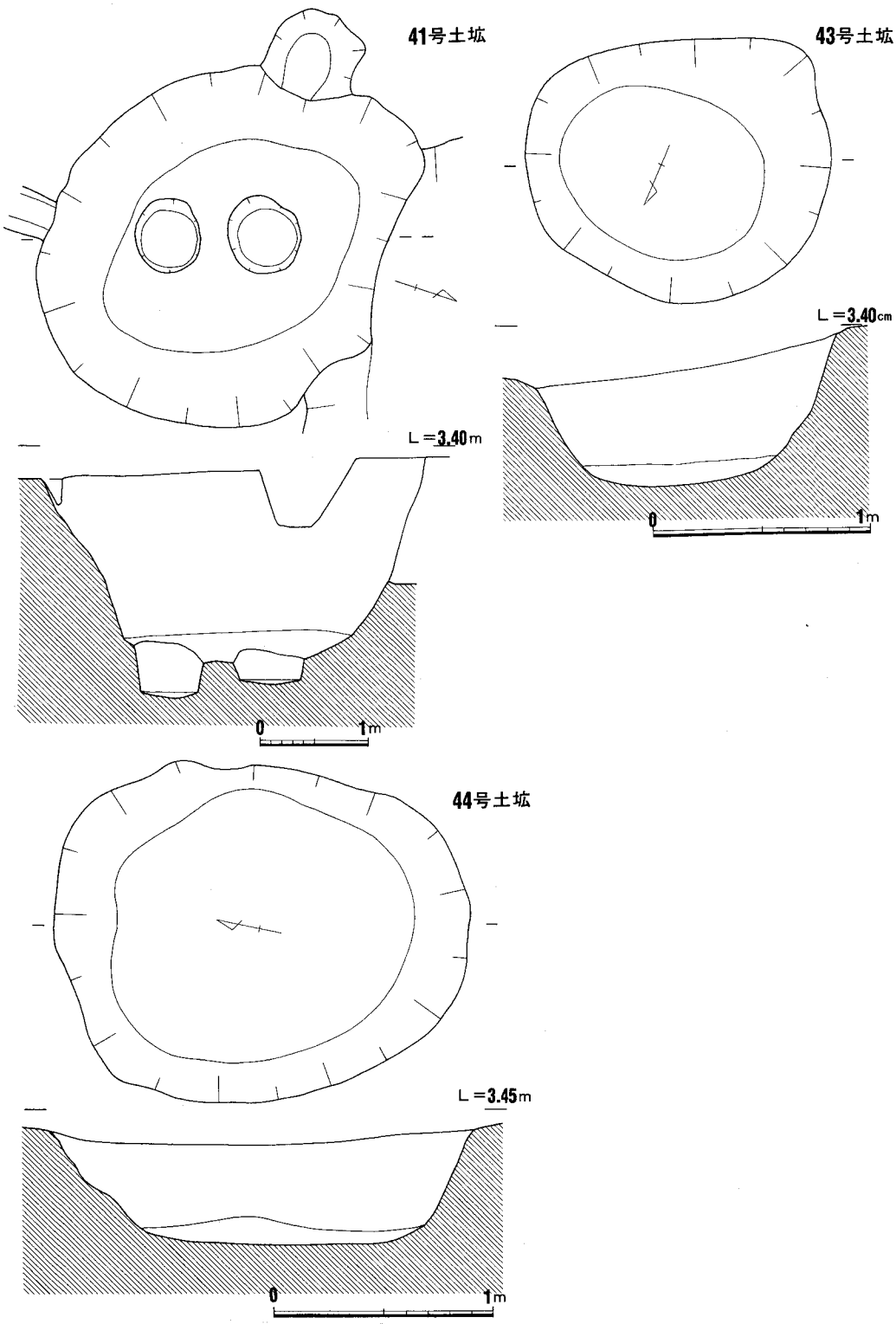


Fig. 112　41・43・44号土坑実測図

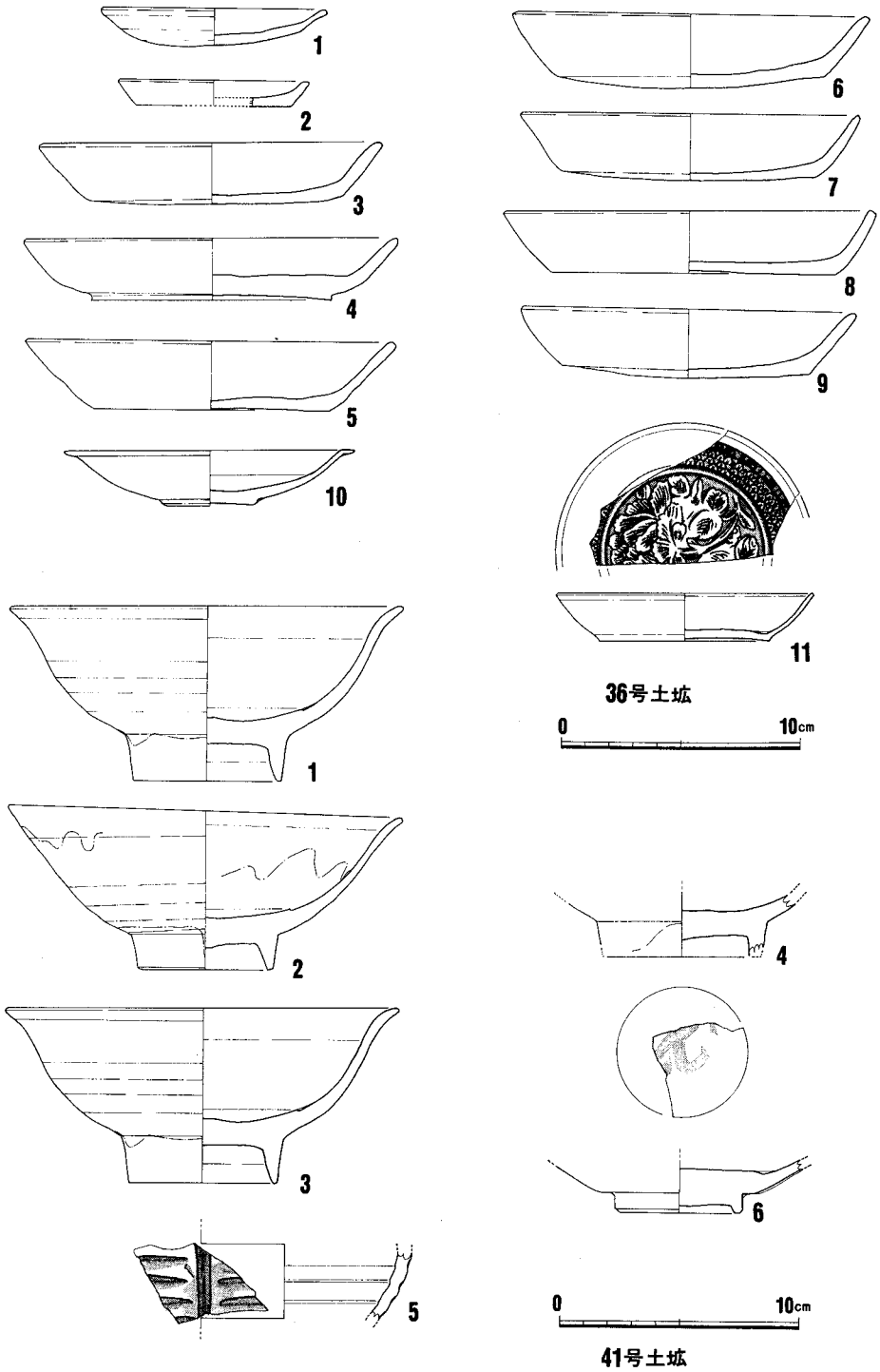


Fig. 113　36・41号土坑出土遺物

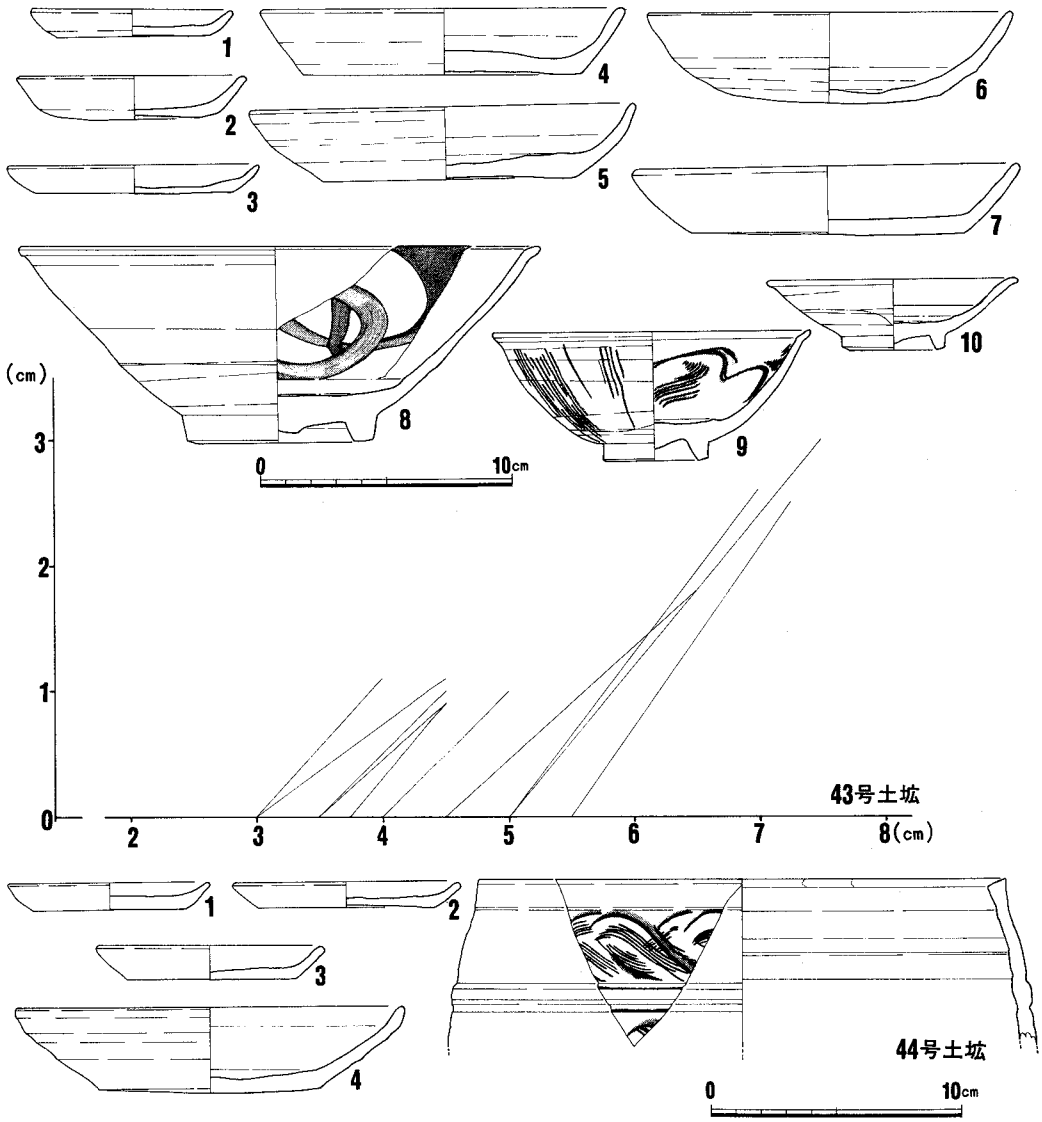


Fig. 114　43・44号土坑出土遺物

７号土坑 (Fig. 109)　Ｇ区で検出されている。1.65×1.3ｍの長円形をなし、深さ0.5ｍを計る。廃棄物処理の土坑であろうか。図示した遺物は、１が無文の口ハゲ青白磁皿、２～４が白磁碗で、４の底部には「江」の墨書がある。５は白磁高付皿、６はほぼ完形の同安系青磁碗である。７は陶器Ｃ群の壺である。８～11は石鍋破片を再利用した滑石製品で、くびれを作る点に共通の特徴がある。石錘であろうか。

10号土坑 (Fig. 110)　Ｇ区検出の近世の廃棄物処理用土坑である。図示した遺物はきめの細かい仕上砥である。多くの近世遺物が混じる。

15号土坑（Fig. 110）　G区検出の土坑である。遺物量は多くない。図示した遺物は褐釉陶器小皿で半磁質のきめ細かな胎土をもち、見込み目跡がつく。口縁に煤が付着し、灯明皿に使用したものであろう。

16号土坑（Fig. 110）　E区検出の土坑で、1.2×0.4mの長方形をなす。土坑墓かと思われる。口径9.5cmで器高の低い糸切り土師小皿（1～3）や、白磁碗(4)が副葬品としてあり、越州窯系青磁破片1点が覆土中に混入していた。遺構は13世紀代かと思われる。

17号土坑　16号遺構の直下に営まれていた土坑で、一端は鋼矢板によって切られる。幅1.4mの長方形をなすものであろうが、遺物量は少なく、性格・年代ともに不詳である。

18号土坑　F区で検出された井戸で、内からは白磁・陶器破片が6点と、土師皿類破片若干が出土しているにすぎない。掘り方は広く、19号土坑と区別できない。

19号土坑　18号土坑に隣接する。井戸である。内部からは白磁碗1点と土師皿類少量が出土しているが、いずれも小破片である。

20号土坑　F区で検出された井戸で、掘り方は径3.5mの円形をなし、本体は径0.7mの円形をなす。木桶組井戸と思われるが木質部は残っていない。出土遺物には白磁碗Ⅱ、Ⅳ、Ⅵ類がそれぞれ、1、1、5点のほか、白磁皿2点、龍泉碗皿各1点、同安碗皿それぞれ1、2点あり、青白磁皿も2点ある。このほか陶器6点がある。いずれも小破片で図化しえない。土師皿類も少量で、計測可能なものは1点だけで、口径8cm、器高1.2cmの糸切り小皿である。

21号土坑（Fig. 110）　20号土坑掘り方を切る。近世の井戸の掘り方であろうと思われるが、大半が土留壁、下水管に切られて明確でない。出土遺物には近世の遺物が多く、図示した遺物は1が唐津の皿、2が碁笥底をなす陶器である。

23号土坑（Fig. 110）　E区で検出されている。1.7×1.3mの隅丸長方形をなし、深さ0.7mを計る。出土遺物は多くなく、白磁碗Ⅳ類、Ⅵ類各1点、同平底皿1点、陶器C群の壺と思われる底部破片1点が見られる程度で、土師皿類も少量あるが、いずれも小破片である。

27号土坑（Fig. 110）　E区で検出された径3m程の掘り方をもつ井戸である。半分ほどは鋼矢板、下水管によって切られている。出土遺物は必ずしも多くはないが、その数量は付表に示すとおりであり、青白磁の口ハゲ印花皿、天目碗、緑釉陶器なども出土している。図示した遺物は、1が土師小皿で、口径9cm、底径7.3m、器高1cmを計り、糸切り底をなす。2は同安系青磁皿で、見込に櫛状施文具による十字文と、雷光文を描くものである。底部に黒褐色の焦げ跡が残される。3は同安系青磁碗で、外面体部を粗くヘラ削りし、上に太い猫掻きを入れる。釉は高台脇まで施され、オリーブ色の発色をする。内面はヘラと櫛状施文具による文様を入れる。底部胎は分厚い。

30号土坑（Fig. 110）　D区南隅での検出である。30号から33号までの土坑が切りあっており、

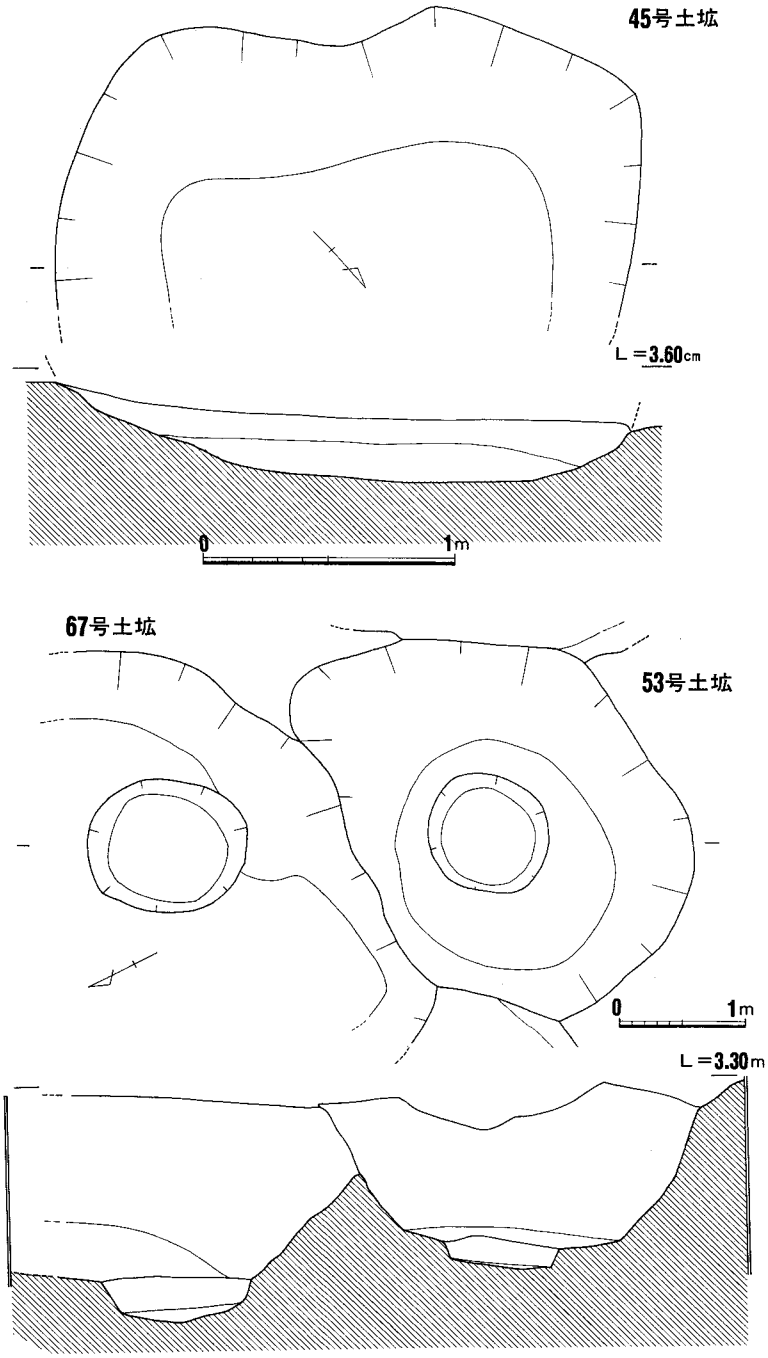


Fig. 115　　45・53・67号土坑実測図

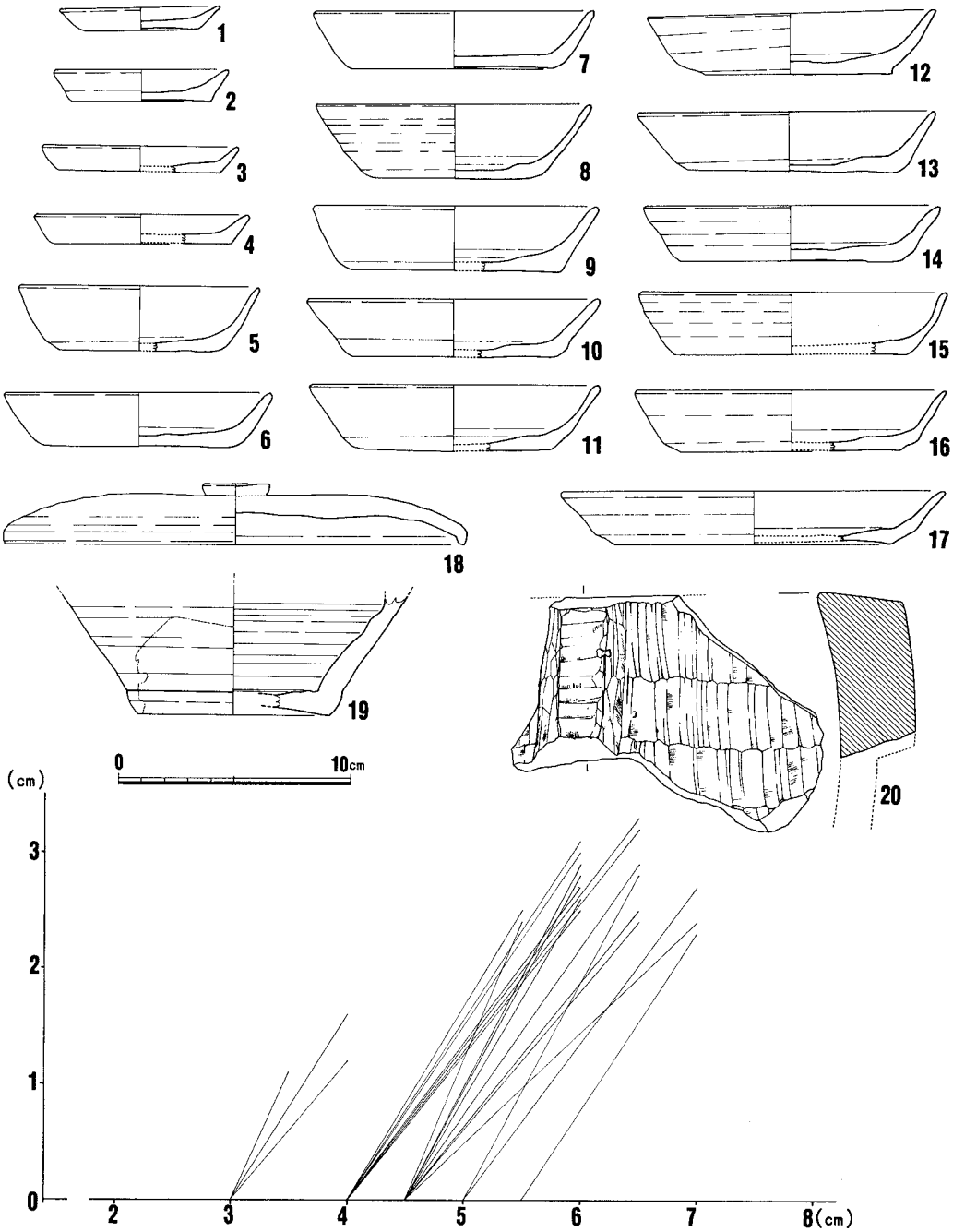


Fig. 116　45号土坑出土遺物

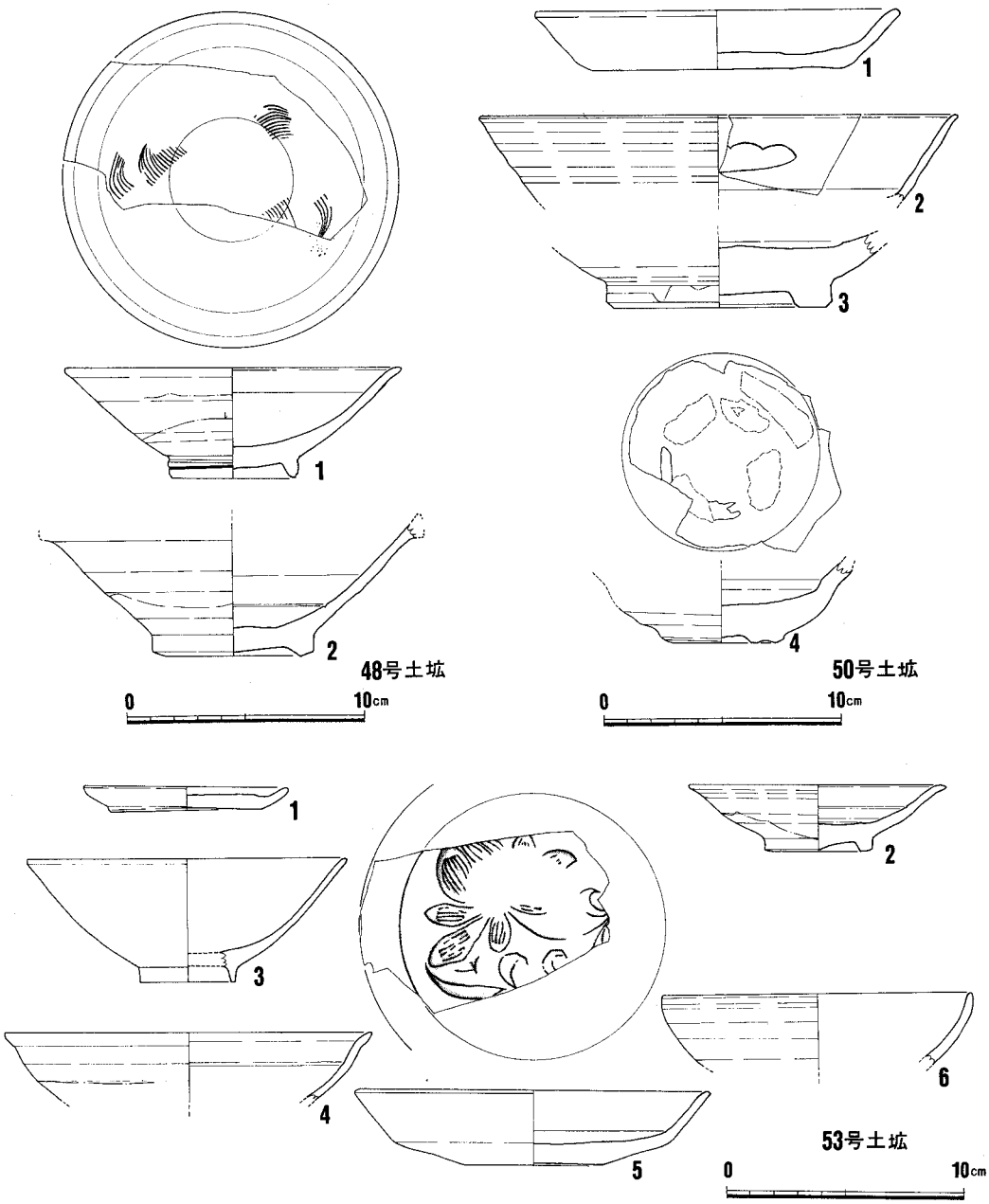


Fig. 117　　48・50・53号土坑出土遺物

順に古くなる。出土遺物は多くない。図示したものは1・2が土師小皿で、いずれも糸切り底をなし、口径９cm強、底部7～8cm、器高1～1.2cmを計る。この他に同形同大の土師皿１点が加わる。３は青白磁の長頸壺もしくは香炉の水平に開く口縁部破片である。胎は白色で内面にろくろ目を残し、内外に空色の透明釉をかける。４は高麗と思われる青磁破片で、暗灰色の土に暗緑色の釉をかける。内底と高台に砂を置き、重ね焼の痕跡が残っている。白磁碗13点もある。

31号土坑　30号土坑に切られ、32号土坑を切る。遺構形態は明確にできない。白磁碗Ⅱ類が６点もあり、目立つ。その他の白磁碗５点がある。いずれも小破片である。

32号土坑（Fig. 110）　31号土坑に切られ、33号土坑を切る。遺構形態は明確でない。出土遺物は少ない。土師皿類で計測可能なものは１の小皿で、糸切底、口径9.5cm、底径7cm、器高１.２mを計る。２は瓦器碗で内外面をヘラ研磨する。底部はヘラ切り後研磨し、台形の高台を貼りつける。３はⅥ類の白磁碗で口縁端が水平に開く。外底露胎部に墨書があるが判読できない。

34号土坑　Ｄ区検出遺構で、35号土坑を切っている。近代の井戸もしくは廃棄物処理用の土坑かと思われるが、井戸枠等の施設は明確にしえなかった。

35号土坑（Fig. 111、PL.32）　Ｄ区で検出された井戸である。6.2×5.5mの大きな掘り方をもち、一部は鋼矢板によって切られている。一辺30～50cmの大礫を円形に組んだ石組の井側をもち、径1.0m、残存高1.15mを計る。底面には径0.7mの木桶組の井筒があるが、木質部が痕跡として確認されるにすぎない。出土遺物はやや多く、その数量は付表に示しているとおりであるが、越州窯青磁の小壺破片や、青白磁梅瓶の破片などがあり、混在が甚しい。このような円形石組井戸の類例は博多では少なく、わずかに２・３例がみられるのみである。木桶組だけの井戸より後出するもので、13世紀後半以降の所産であろう。図示した遺物は青白磁梅瓶の胴部破片で、外面にヘラの片切彫と櫛目で文様を施し、内面にはろくろ目が残される。空色を帯びた透明釉が外面に厚く、内面に薄くかけられ、釉の厚いところでは少し氷裂が見られる。胎は白色で精良である。この他、白磁碗Ⅵ類の底部に墨書の記されたものもあるが、破片であるために判読はできない。

36号土坑（Fig. 113）　Ｃ区検出の遺構である。出土遺物の数量については付表に示すとおりである。図示した遺物は１がヘラ切りの土師小皿で、やや丸底をなし口径９.５cmを計るものでこれと同形同大のものが他に２点ある。2は糸切り小皿で、口径８cm、器高1.0cmの法量をもち、このほかほぼ同形同大ものが４点ある。３～９はいずれも糸切り底の土師杯で、口径15cm前後、器高２.５cm程に集中している。10は青白磁の皿で口縁を水平に引き出すものである。外面底を除いて、全面に淡オリーブ色の透明釉が施され、底部脇は施釉後面取りされている。11は口ハゲで、型作りの青白磁皿で、内面に草花文が施されている。わずかにオリーブを帯びた透明釉が施される。

41号土坑（Fig.112．113）　Ｃ区で検出された井戸である。3.85×3.2ｍの長円形をなす広い掘り方をもっている。深さも井戸底まで２ｍもあり深い。径0.7ｍの井戸本体２基が検出されているが、調査時には掘り方の区別が出来なかったので、合わせて41号土坑と称している。木桶組井戸と思われるが、明瞭な痕跡は見られなかった。出土遺物の数量は、付表に示したようで、白磁碗が多く、Ⅳ類７点、Ⅵ類６点、その他７点となっている。図示した遺物は１～３が白磁碗Ⅴ類で、口縁をやや外に引き出し丸く収め、高台は高く、見込に細い沈圏線がめぐる。１には黄灰色不透明釉が、２には灰青色をおびる厚い釉がかけられている。４はⅦ類かと思われる白磁碗底部破片で高台内に墨書が残されているが判読できない。５は青磁壺の胴部破片で、釉は酸化し茶色の発色をする。内面は無釉でろくろ目が残る。６は龍泉青磁碗の底部破片である。

43号土坑（Fig.112・114）　Ｃ区検出の遺構で、1.4×1.2ｍの楕円形をなし、深さ70cmを計る。廃棄物処理のための土坑か。出土遺物は次のようである。白磁碗Ⅱ類２点、Ⅳ類３点、Ⅵ類６点（Ⅵ－４類の鉄絵鉢１点を含む）、Ⅸ類７点、その他５点。皿は高台付Ⅱ類３点、平底ⅢⅥ類各１点。青磁は少なく龍泉碗小破片２点と同安系碗１点が見られるのみで、他に青白磁碗１点、陶器３点などがある。図示した遺物を簡単に説明しよう。２がヘラ切り土師小皿、１・３が糸切り土師小皿である。この他４枚の糸切り土師皿もあるが、口径８～10cmにまとまる。４～７は土師杯で６のみヘラ切りである。８は白磁鉄絵鉢で、体部内面に鉄絵の釉下彩を施し、見込の釉を輪状に掻きとる。体部は外方に直にのび端部を外に引き出す。高台は台形をなし厚い。９は同安系碗でやや小ぶり。口縁端を外に引き出す。10は白磁高台付皿で見込の釉を輪状に掻きとるものである。

44号土坑（Fig.112・114）　Ｃ区で検出された1.9×1.6ｍの楕円形をなす土坑で、深さ0.5ｍを計り深皿状の断面をなす。床面は平担である。遺物はやや多く、数量は付表に示したとおりである。図示した遺物は、１～３が糸切り土師小皿で口径８～９cmで、器高１cm程である。４は土師杯で、糸切り底、口径15.6cmであるが底径は９cmで小さく、器高3.4cmを計る。５は越州窯系と思われる青磁で、鉢形をなすものであろうか。胎はミルクコーヒー色で緻密であり、内外面にオリーブがかった透明釉が施されているが均等ではない。口縁端を掻きとり、硅砂が付着している。外面にヘラと櫛による波状文様が施されている。

45号土坑（Fig.115・116）　Ｃ区で検出された遺構で長辺2.3ｍの長方形を示すものかと思われるが、一部鋼矢板に切られ明確でない。深さ20cm強で浅く、皿状の断面形をなしている。出土遺物の数量は付表に掲げているとおりである。龍泉青磁碗Ⅱ－２類が６点あることに目をひかれる。この他越州窯青磁１点や青白磁碗２点も含まれている。ここでは土師皿類が比較的まとまって出土している。１～４は土師小皿でいずれも糸切り、５～17は土師杯でいずれも糸切り、法量にバリエイションがある。18は須恵器蓋、19は陶器壺、20は古いタイプの縦耳がつく

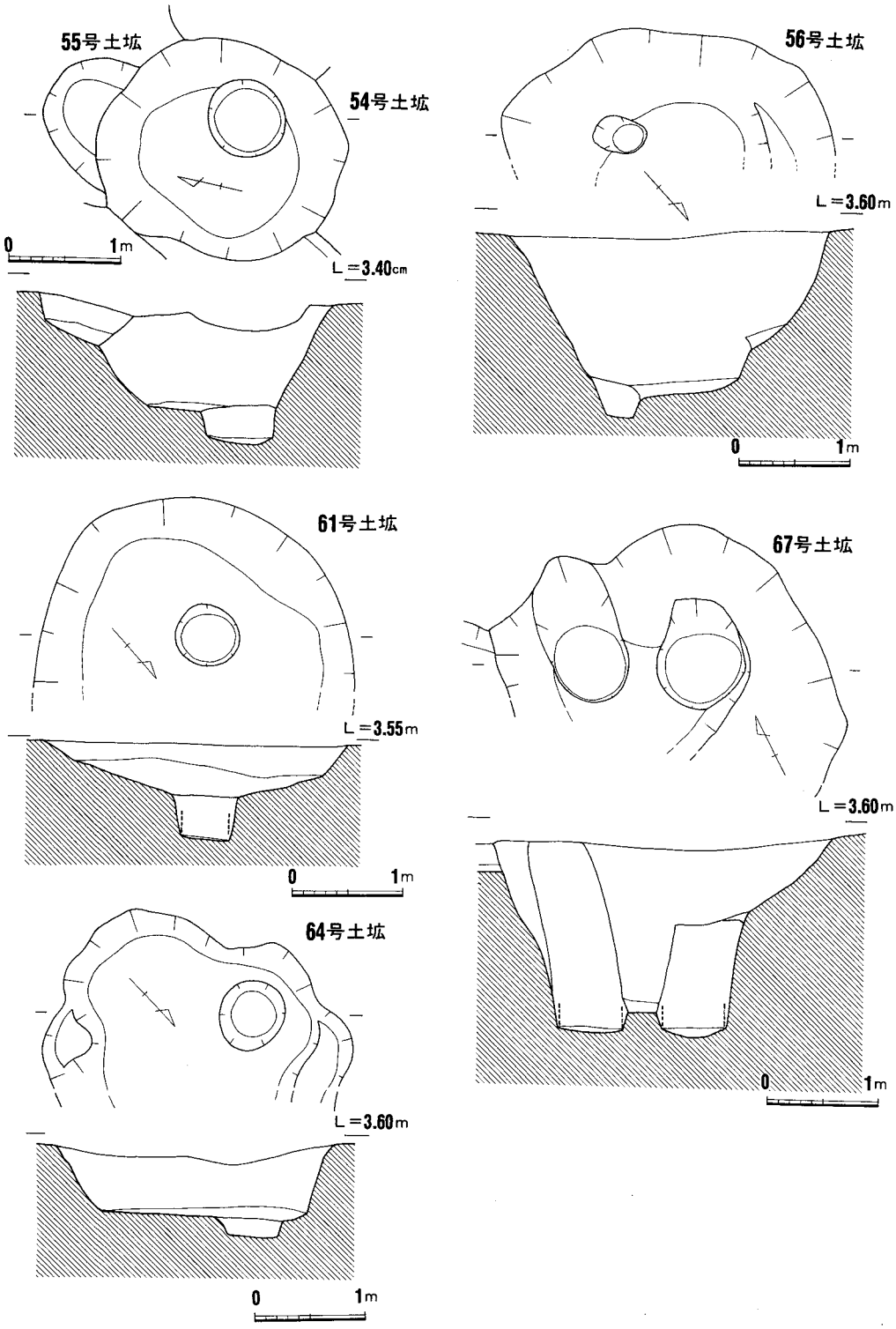


Fig. 118　54・55・56・61・64・67号土坑（井戸）実測図

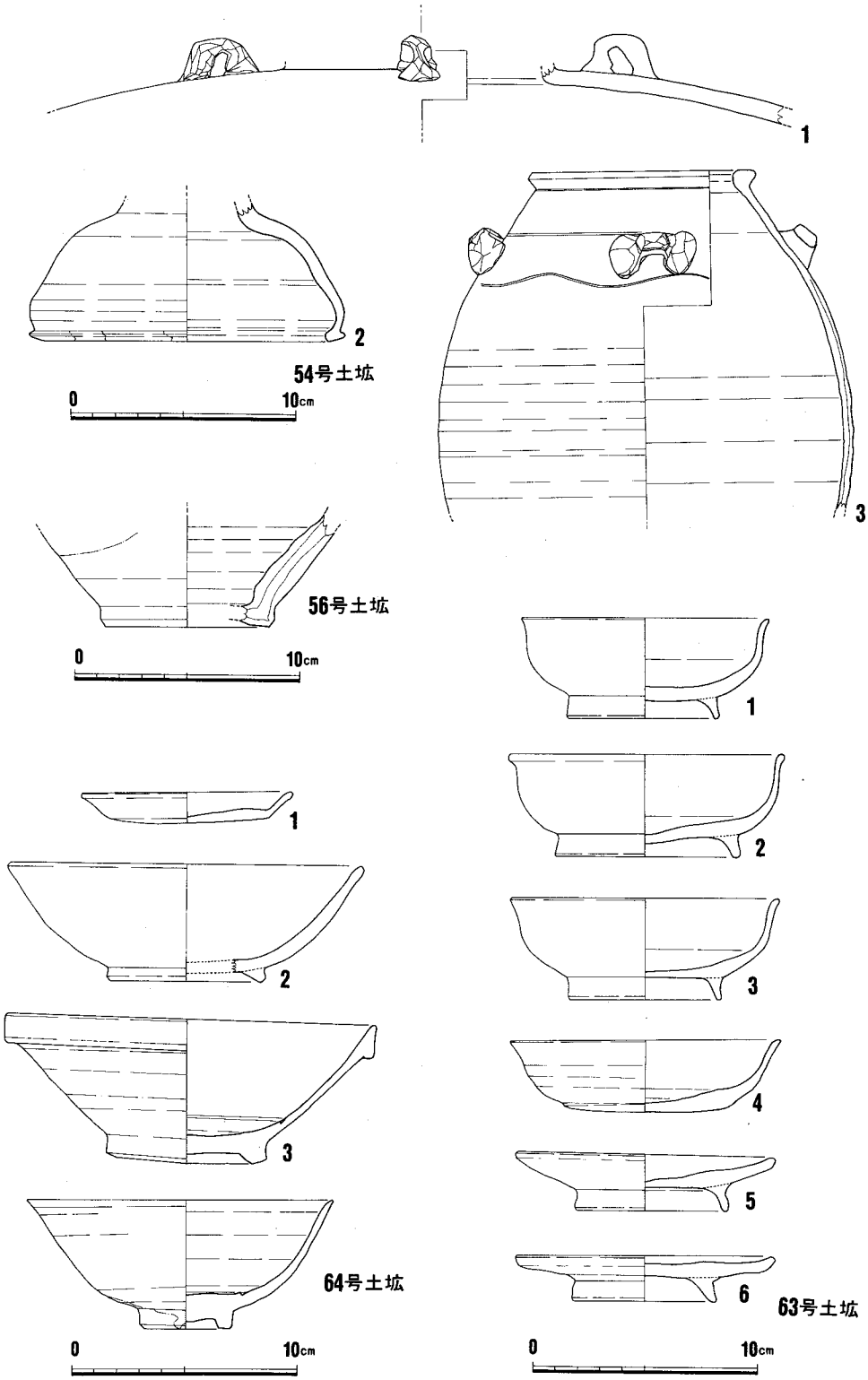


Fig. 119　54・56・63・64号土坑出土遺物

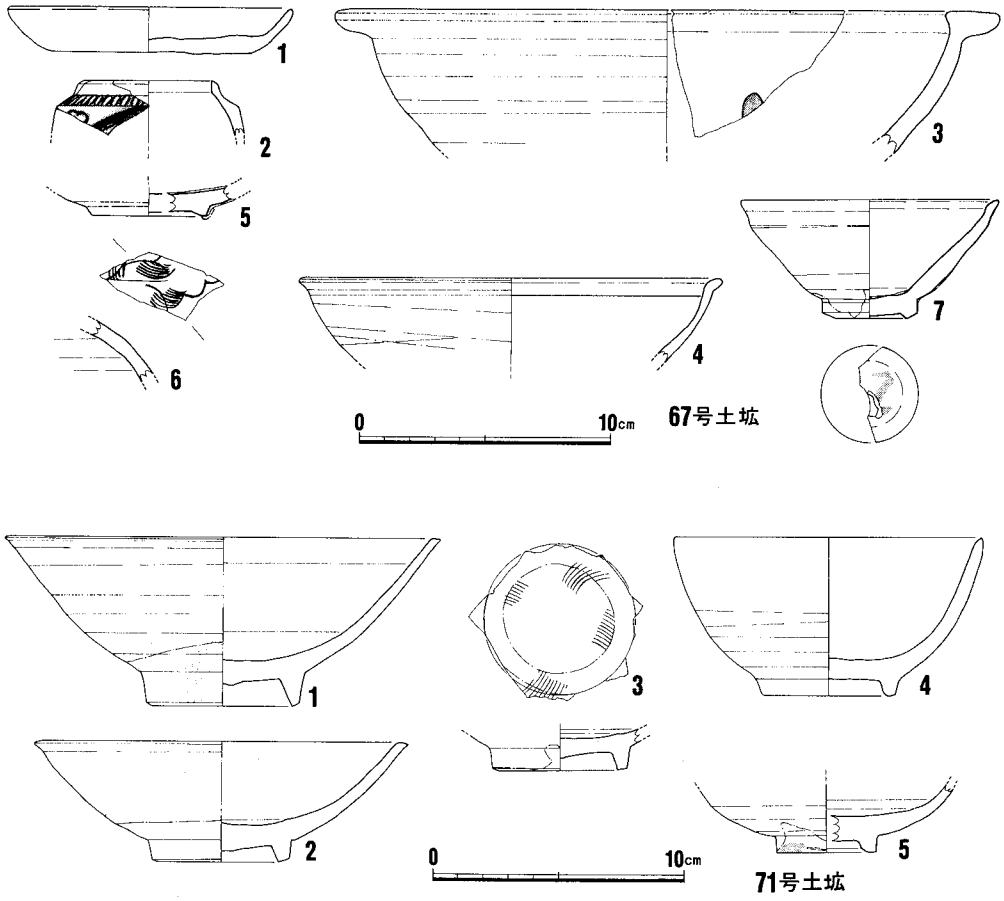


Fig. 120　67・71号土坑出土遺物

滑石製石鍋破片である。

48号土坑（Fig. 117）　C区で検出された。性格不明の土坑である。遺物量は少ない。図示した遺物は1が白磁の浅碗で2が三角玉縁の碗である。

50号土坑（Fig. 117）　C区検出遺構で性格は明確でない。遺物の出土数量は付表に呈示しているが、白磁碗Ⅵ類が6点を数えやや多い。このほか白磁壺、青白磁合子、緑釉陶器の破片各1点がある。図示した遺物は、1が糸切り土師杯で、2が内面体部にヘラ描き花文をもつ緑釉陶器で皿状の器形か。3は分厚い底部の白磁鉢である。4は唐津皿で見込に目跡がつく。

51号土坑　C区検出遺構である。性格は明確でない。出土遺物の数量は付表に示すとおりである。白磁碗Ⅵ類が9点と多く、そのほか青白磁碗2点、小碗1点などの破片がある。

53号土坑（Fig.115・117）　B区で検出された井戸である。67号土坑(井戸)を切る。長軸3.5mの大きな掘り方をもち、本体部は径1mの正円形をなす。木桶組と思われるが、遺存していない。出土遺物の総数量は付表に示す。図示した遺物は1が糸切り土師小皿、2・5が白磁皿

で５の見込には印花文を刻している。３は青磁の碗であるが、畳付部だけ露胎で以外はオリーブ色を帯びた半透明釉がかかる。類例が少なく産地、所属時期等は不明である。４は同安窯系青磁碗。６は越州窯系青磁碗でオリーブ色の釉を施した良質のものである。

54号土坑（Fig.118・119）　B区検出の井戸で、４号・５号甕棺墓を切っている。2.3×1.95ｍの楕円形の掘り方をもち、井戸本体部は径0.75mの正円形をなす。木桶組と思われる。遺物は少なく、図示したように、B群の四耳壺(3)や蓋(2)、準A群の四耳壺(1)などの陶器が出土している。

56号土坑（Fig.118・119）　B区検出土坑である。長軸３ｍの大きな掘り方をもつが、半分が鋼矢板に切られて全体形は明確でない。一側に小ピットがある。遺物は少なく、口径12cm、器高２cmの糸切り土師杯、陶器準A群に属するものと思われる壺破片が出土している。

61号土坑（Fig.118・119）　B区検出の井戸である。径2.75ｍのほぼ円形をなし、浅い掘り方をもつ。一部鋼矢板に切られている。本体部は径０.６ｍの小さな円形で、木桶組の痕跡が認められる。遺物は少ない。

63号土坑（Fig. 119）　B区で検出された長軸1.8ｍ、幅1.1ｍの長方形土坑である。深さ20cmと浅い。ここでは土師高台付碗（１～３）、ヘラ切り杯（４）、高台杯小皿（５・６）が完形で出土し、土坑墓であろうと思われる。10世紀代に位置づけられる。博多ではこの頃の遺物は僅少である。

64号土坑（Fig.118・119）B区検出の井戸である。最大径２.８ｍの不整円形をなすが、一端は鋼矢板に切られている。本体は径０.７ｍの円形をなす。遺物は少ないが白磁Ⅳ類が６点で目立つ。図示した遺物は１が土師小皿で糸切り、２が瓦器碗、３が白磁Ⅳ類、４が内外無文の同安系青磁碗である。

67号土坑（Fig.118・120）　B区検出の井戸である。同一掘り方内に２基の本体部があるが、調査段階では判別できず、一括している。いずれも木桶組の痕跡をとどめている。遺物の数量は付表に示すとおりで、図示した遺物は、１が糸切り土師小皿、２が青白磁小壺、３が口縁を水平に引き出す白釉鉄絵の鉢、４が高麗的な青灰色釉をかけた青磁碗、５が龍泉系青磁皿、６が淡オリーブ色の釉をかけた青磁瓶、７が天目碗で底部に墨書をもつが判読できない。

71号土坑（Fig. 120）　A区検出の遺構である。溝状をなし、主軸を東西にとる。遺物は混在し多様の白磁碗が見られる（１～５）。

73号土坑　A区検出の径1.25ｍの円形プランをもつ土坑で廃棄物処理用と思われ、小破片が付表に示すとおり多数出土している。深さ70cmを計る。

83号土坑　A区検出の長円形をなす土坑である。一部を鋼矢板に切られる。幅１.４ｍ、深さ０.９ｍの規模をもつ。付表に示すように多くの遺物が見られるが破片であり、廃棄物処理用か。

85号土坑　A区検出の径1.0ｍの円形土坑で、深さ0.3ｍと浅い。付表に示すとおり様々な遺物があるが混在しており、廃棄物処理用土坑であろう。

遺構外出土の遺物

1、ヘラ切底の土師皿、墨書がある。2、土師器の高台付皿。3、瓦器碗である。4は須恵質の皿もしくは蓋と思われるが、類例のない形で、あるいは近世のものであろうか。5は須恵器杯で底に墨書がある。6も須恵質の大壺の口縁である。7～11は青白磁であるが、11はいくぶん軟質な感じである。壺の口頸部であろうか。12は白磁香炉で、13～15に示した白磁碗Ⅱ類と胎土も釉もよく似ている。16～28は白磁碗であるが、28は半球形の体部で口縁外反、高い高台がつくもので今後類例が増す見込のもの。29～41は白磁皿であるが、34はⅦ類のスタンプ文様の皿の破片で、「元」かと読みとれる文字が見えている。42～47、74は白磁の壺であるが、比較的にしっかりした造作のものが大きな破片で残っていた点印象的である。48～53は龍泉窯系の青磁である。53は器外に片切彫の線条文が施され、器内壁にも櫛による刺突文があるが、あるいは龍泉窯系の少し古いタイプのものかも知れない。釉層は薄く、茶オリーブがかった釉である。48、49はⅠ類で、49の文字は通常あまりない逆版である。50はⅢ類、51、52は高台を釉で包み外底面を露胎にするものでⅤ類に近いものである。59も龍泉窯青磁で、双層碗もしくは孔明碗の上面である。この下に高台がなく底部に穴のあいた腰深の鉢が貼合わされるもので、鉢の外面には通常櫛目文入りの蓮弁文がめぐらされる。Ⅰ類の碗と同時期のものである。54～57は同安窯系の碗である。54は灰白色のやや粗い胎にオリーブを帯びた透明ガラス質の釉がかかる明るい色調の碗。57はかなり大形の鉢もしくは皿で、胎土は肌色を呈し、濃い蜂蜜色の氷裂のある釉がかかる。釉はやや厚い。58は焼けすぎで釉質は定かでないが、外面下半露胎の青磁で、上記龍泉、同安以外の窯系のものであろう。60は越州窯系青磁の小壺、灰味の強い釉色で、10、11世紀のものと思われる。同じ窯系に属すると思われる粗青磁碗1個もあるが、器全体に施釉し、畳付に硅砂を付けて重ね焼きしていて、内底に円く目土が付着している。釉色は灰オリーブ色で、見込を彫って茶溜りを作る。61は李朝の碗底部。灰褐色に乳濁をかけたような釉色。他に白色陶器碗と灰色磁碗の底部各1がある。又、良質の高麗青磁で器内面に印花文を施した碗片1もある。62、63は天目碗で同一個体と見られるもの。64は唐代湖南省長沙窯の黄磁貼花文褐斑水注の破片で、棕梠の貼花文の一部を付けて出土した。65は明代の赤絵。器形は不明だが、海老茶色で花文を描き、所々に褐色で輪郭をとる青緑もしくは黄緑色を帯びた小円を置いている。66～68は陶器A群に属する。67は黒褐釉の鉢、68は黄釉系の壺底部片である。A群では他に黄釉盤の数々と行平などがある。69は暗灰色の泥のように細密な土に、大小の黒ゴマが混じる胎土で、黄褐色の不透明な釉がかかるが、大部分は剝落している。70～73、75は陶器B群に属するものであるが、72の器形は珍らしい。76もB群かと思われるが、酸化焼成のせいか胎土は橙色、釉は茶褐色に発色している。又、74は白磁としておかしくない胎土、釉で、一応白磁に分類したが、作行はこのB群に類似している。77、78は黒褐釉のかかる陶器C群。他に

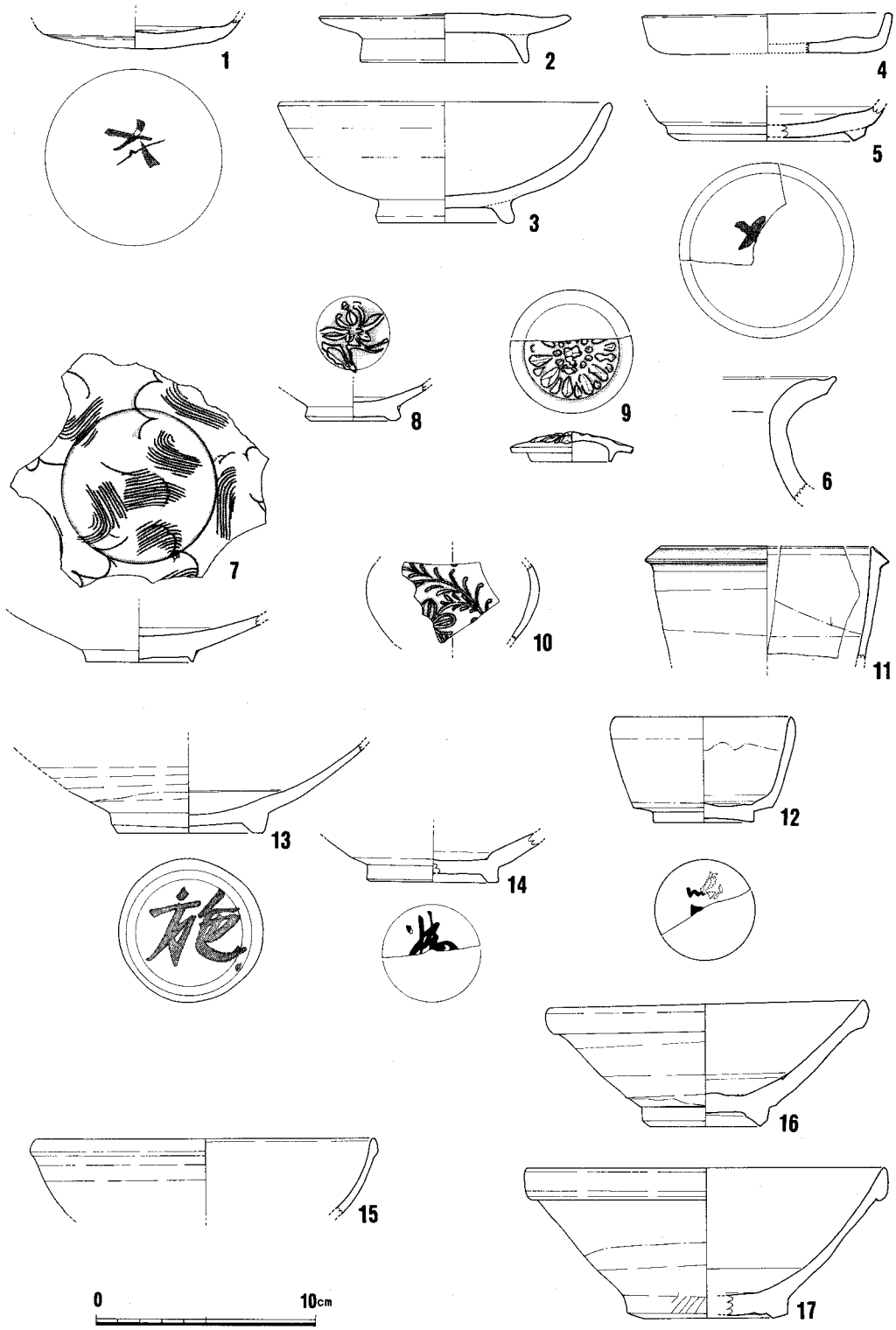


Fig. 121　遺構外出土遺物（１）

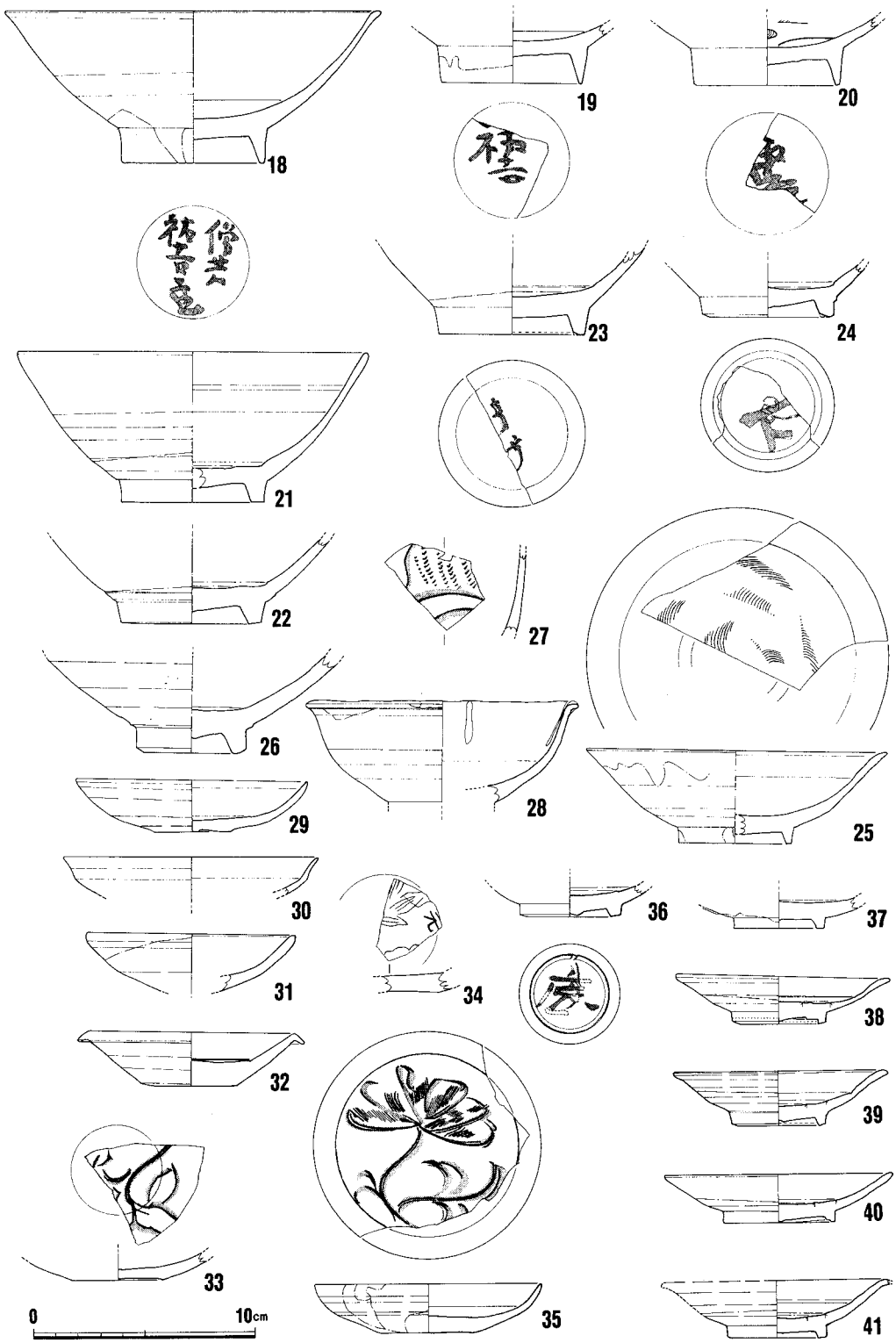


Fig. 122　　遺構外出土遺物(２)

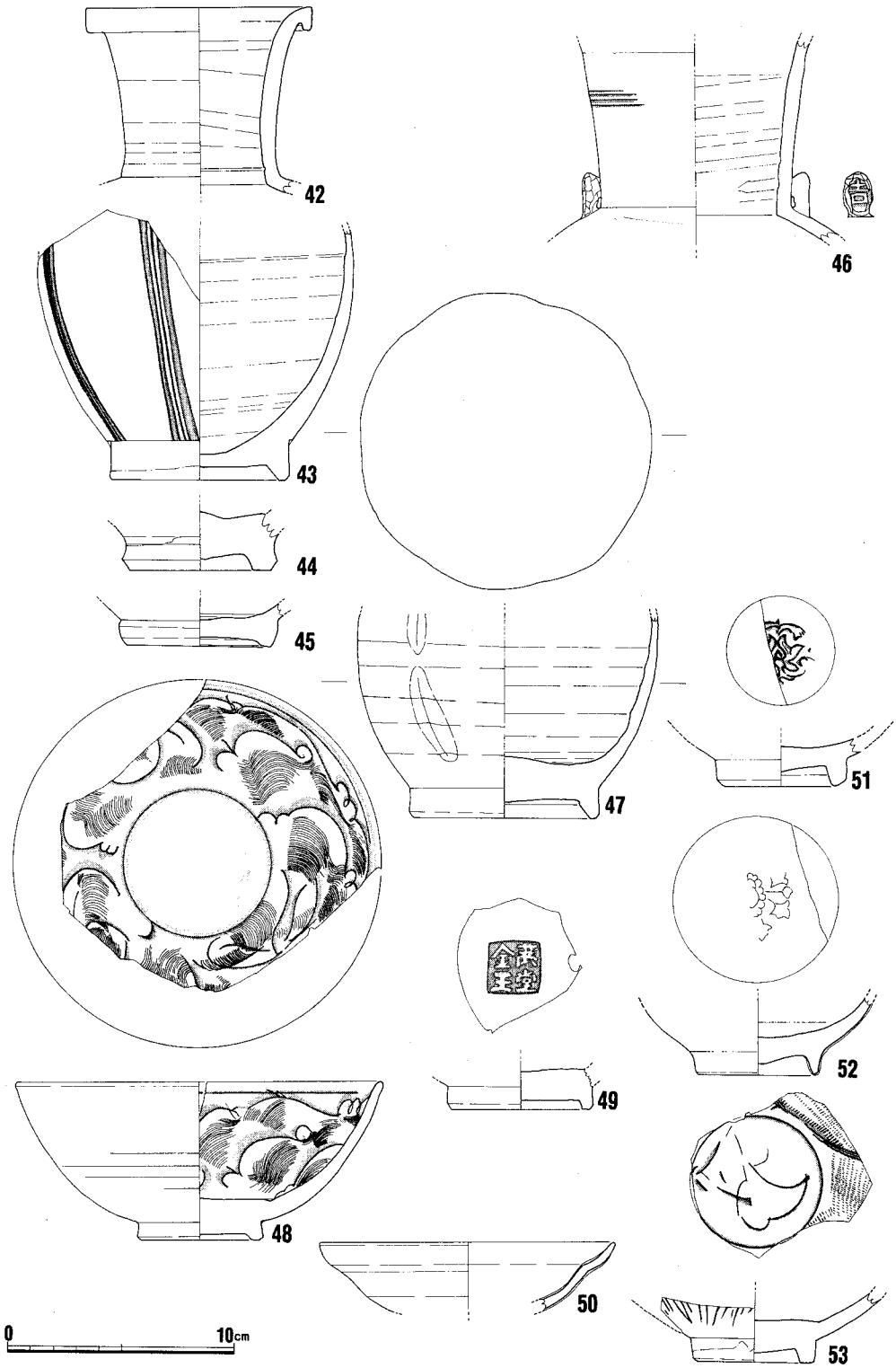


Fig. 123　遺構外出土遺物（３）

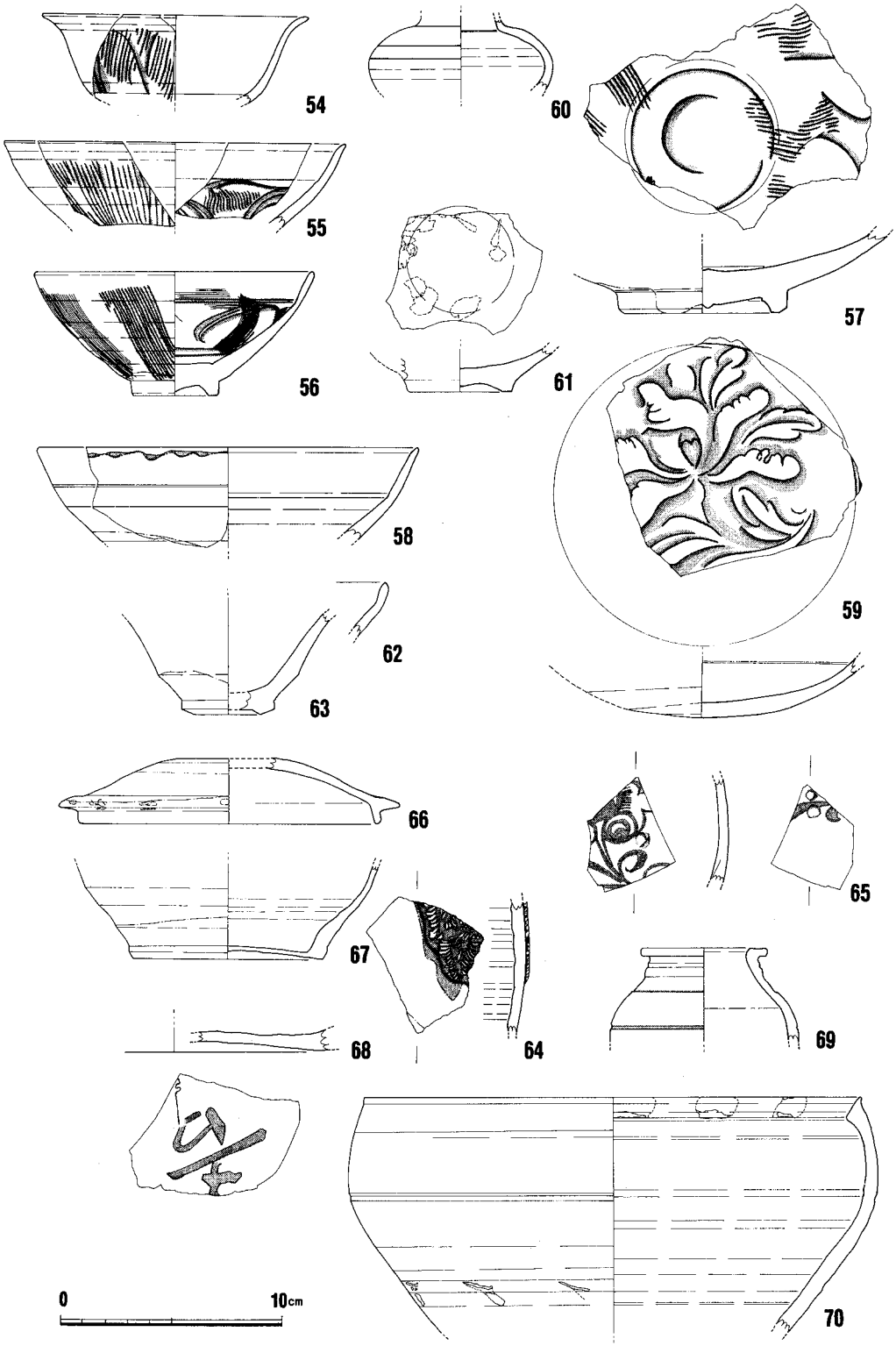


Fig. 124　　遺構外出土遺物（４）

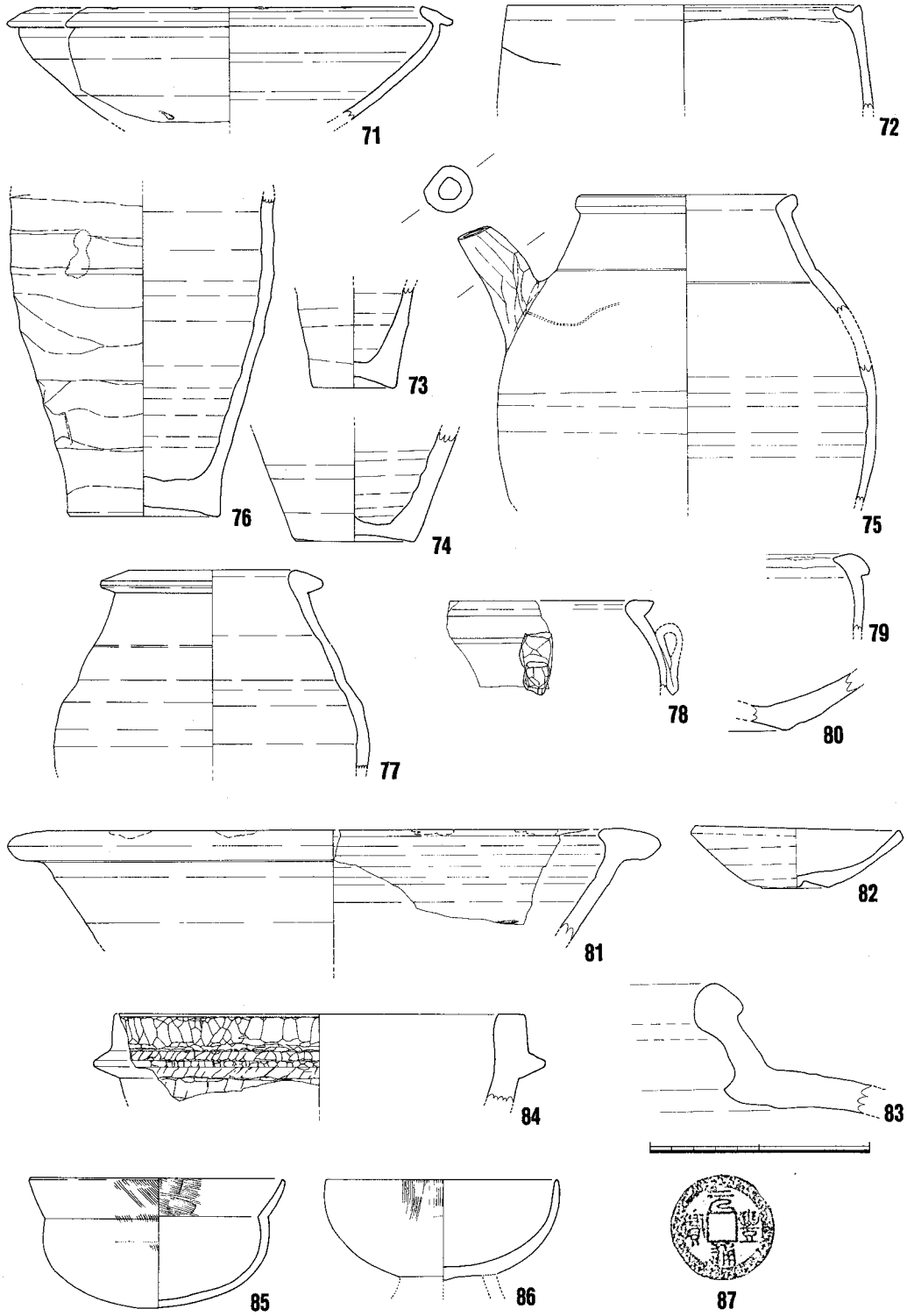


Fig. 125　遺構外出土遺物（５）

1号土坑(井戸)出土の四耳壺と相似の口縁部などがある。79、80は無釉のC群で3個体分がある。81は白釉鉄絵鉢。灰褐色のまじりの少ない土で、かなり小孔がみられるがよく焼きしまっている胎の上に、オリーブを帯びた灰色不透明の釉がかかる。表面に浅い氷裂があり、釉下に鉄絵が施される。口縁に硅砂が付着している。67号土坑の3と同類の陶器である。82は陶器の皿。83は大甕で胎土や釉色は群を構成するに至らない陶器のⅠ類とした無頸壺とよく似ている。84は滑石製石鍋、85、86は古式土師器、いうまでもなく国産品である。

以上図示したものを中心に述べたが、出土遺物の全体的な様相はあくまでも付表によって把握していかなければならない。何故ならば、図化できたものは、たまたま大きな破片として残ったものか、墨書のあったものというだけで、他に特別な意味を持っているわけではないからである。なお、古窯系として一括した遺物の大部分は常滑の大甕破片、焼き締めの擂鉢（窯不明）であるが、中に室町時代の備前大甕の破片が1個あった。又、近世以降の陶磁の中には、1630～40年代の伊万里染付、17世紀後半18世紀の佐世保周辺で焼かれた粗悪な染付が見られる。又、絵唐津の皿小片1もあった。中国産のものでは清朝の染付湯呑茶碗1個があることも報告しておきたい。

今回の整理にあたって、国産の陶磁器については、特に佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏に御教示をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

3）甕　棺　墓

発掘区の北半部で計６基の甕棺墓を検出した。前章で述べたように、この甕棺墓群は店屋町工区A・B・C調査区の甕棺墓群と一連のものである。６基の甕棺墓のうち比較的残存状態の良いものは、２・３・４号甕棺墓のみで、他は墓坑の形状、甕棺の埋置状況とも不明である。以下各甕棺墓について詳述する。

１号甕棺墓 (Fig. 128)　B区の東部で他の２～４号甕棺墓に隣接して検出した小児用甕棺墓である。墓坑の形状は不明。上甕は甕形土器を使用したもので、ほぼ水平な逆L字形の口縁部をもつ。体部外面に刷毛目を残したままである。下半部を欠失する。下甕は逆L字形の口縁部をもつ甕形土器を使用したもので、胴部中位に最大径をとり、その部分に２条の三角凸帯を４cmの間隔をもって貼付している。器面は丁寧ななでによる調整を施している。

２号甕棺墓 (Fig. 126・128)　発掘区東部に３号甕棺を切るように設置された小児用甕棺墓である。下甕部分と上甕上部は57号土坑によって破壊されている。墓坑の方位はほぼ東西をとる。上甕は上げ底の底部をもつ甕形土器で、体部全面に刷毛目を残している。口縁部の形状および凸帯の有無は不明である。

３号甕棺墓 (Fig. 126・127)　B区東部に位置し、墓坑の方位を南北にとる成人用甕棺墓である。54号土坑によって切られている。甕棺は長楕円形の墓坑にほぼ水平に埋置されている。上甕はT字形の口縁をもつ大型甕棺で、胴部中位よりやや下よりに一条の三角凸帯を貼付する。最大径は口縁部にある。全面丁寧ななで調整を施すが、口縁部下に僅かに刷毛目を残した部分が観察される。下甕はやや内傾するT字形の口縁をもつ大型甕棺である。胴部中位より下よりに一条の三角凸帯を貼付する。最大径は口縁部にある。全面丁寧ななで調整を施す。

４号甕棺墓 (Fig. 126・127)　B区東部の54号土坑を挟んで３号甕棺と併列するような位置にある成人用甕棺墓である。上甕は底部を欠失するが、水平なT字形の口縁をもつ大型甕棺で胴部中位に一条の三角凸帯を貼付する。胴部は口縁下約10cmのところで外に張りをもつが、最大径は口縁部に求められる。器面はすべてなでによる調整が施されている。下甕はやや外傾するT字形口縁をもつ大形甕棺で、胴部中位よりやや下よりに一条のM字形の凸帯を貼付する。器面の調整はすべてなでによる。最大径は口縁部にある。底部は平底である。

５号甕棺墓 (Fig. 128)　B区の北隅に位置するが、後世の攪乱により破壊が著しい。墓坑の形状、甕棺の埋置状況ともに不明である。小児用甕棺として使用された甕形土器一個体を検出した。土器は僅かに内傾する逆L字形の口縁をもち、口縁下４cmのところに一条の三角凸帯を貼付している。口縁部から凸帯周辺にかけては丁寧な横方向のなで調整が施されているが、それより下位の胴部外面には刷毛目を残したままである。底部を欠失する。

６号甕棺墓　B区の西隅中央部に位置するが、破壊が著しく、旧状を窺い知ることはできな

い。小児用甕棺に使用された甕形土器の胴部小片を採取したにすぎない。

出入口2出土甕棺墓

(Fig. 128)　祇園駅出入口2の調査に伴って出土した呑口式の小児用甕棺墓であるが、出土地点、発掘状況についても、整理不全のため不明であるので、甕棺に使用された土器の特徴についてのみ記述する。

上甕は鋤先状の口縁部をもつ壺形土器の頸部から口縁部にかけての部分を打ち欠いて使用したものである。胴部の最大径部分に一条、肩部に一条の三角凸帯を貼付している。底部は僅かに上げ底気味である。下甕には上甕と同タイプの壺形土器を使用している。上甕に比べやや小型である。頸部には8本単位のヘラによる暗文を8箇所に描いている。器面の調整は両者ともヘラによるものであるが、横方向を基本とし、底部、凸帯間は縦方向である。口縁部、凸帯部分は横方向の丁寧ななでを施している。器面の風化が激しく観察できないが、おそらく器表面には丹塗が行なわれていたものと考えられる。

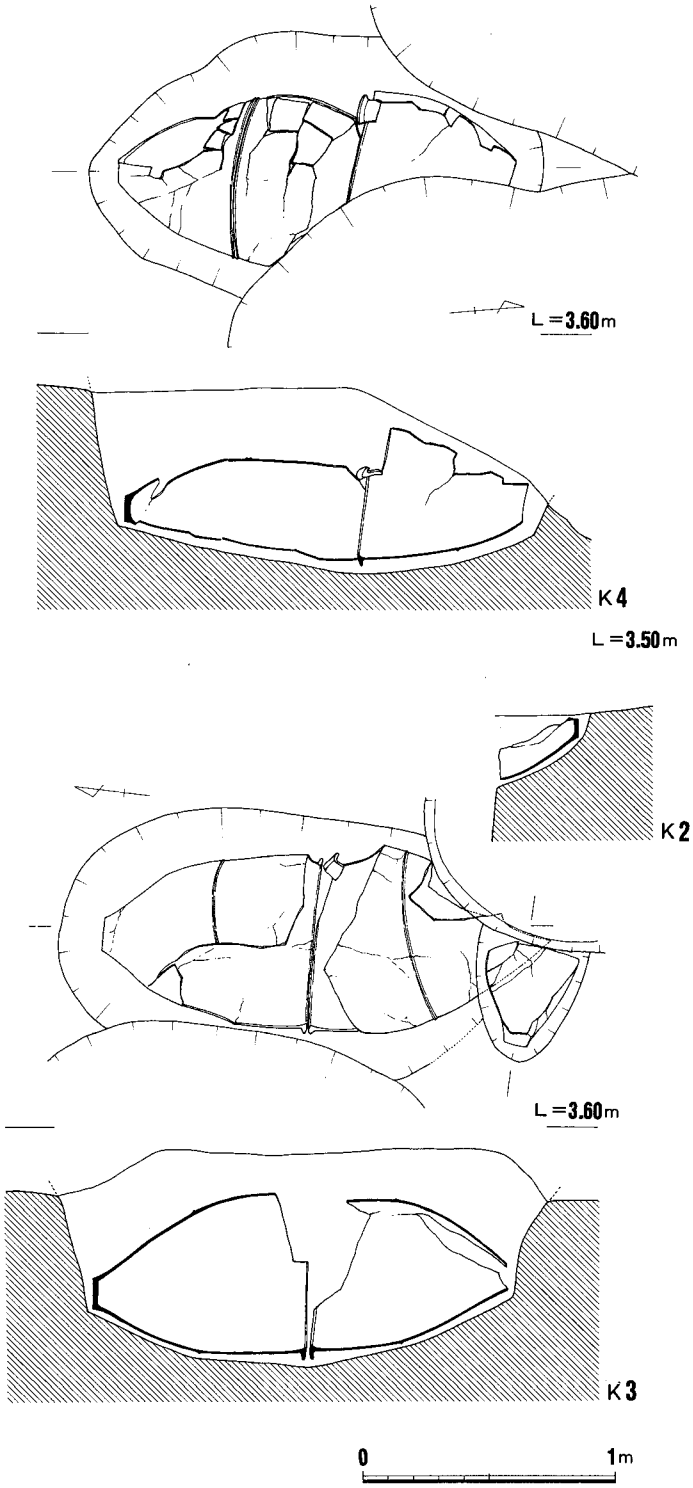


Fig. 126　甕棺墓出土状況実測図

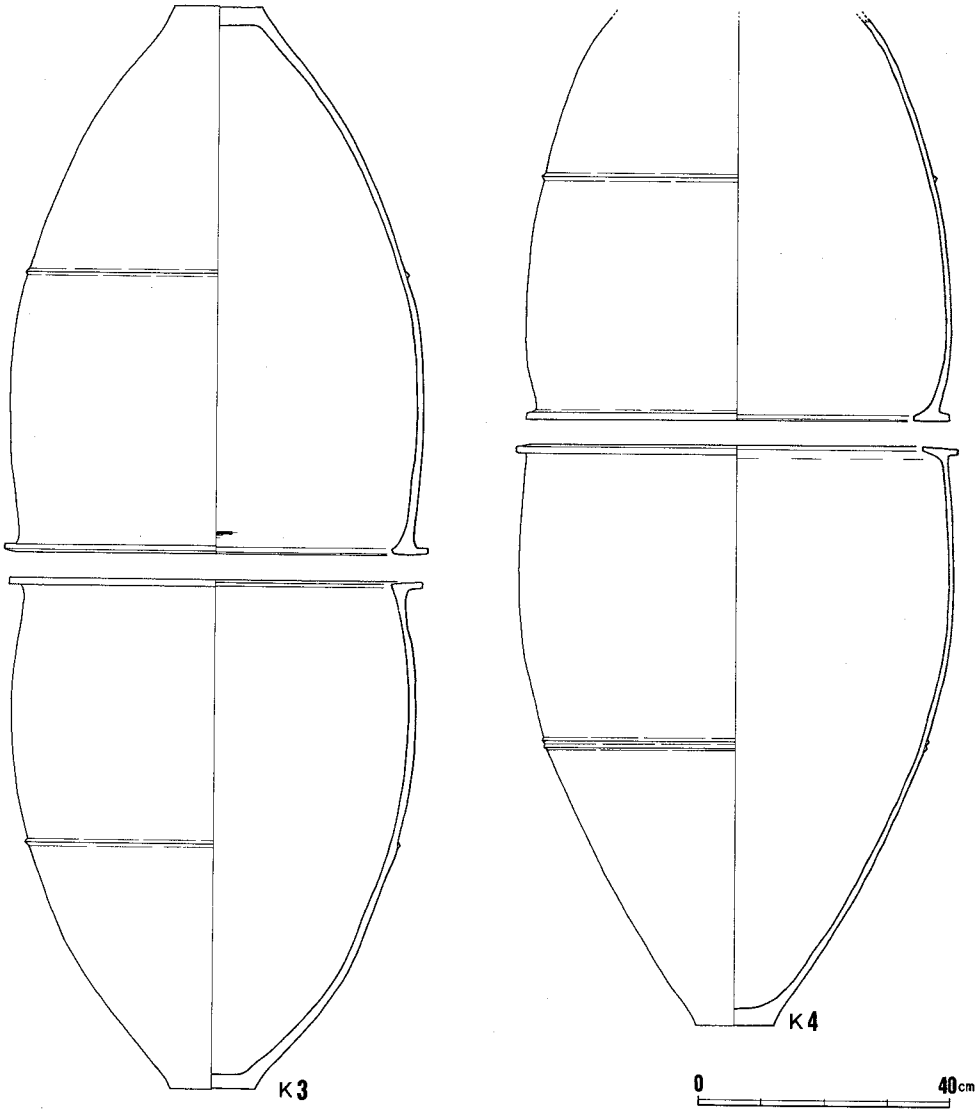


Fig. 127　甕棺実測図（１）

出入口３および２出土の甕棺は、その細めの逆Ｌ字形に近いＴ字形口縁と細い三角凸帯、張りの少ない胴部などの特徴から汲田タイプに比定される。これに伴なう小児用甕棺墓に使用される土器も中期前半期を中心としたもので、店屋町工区Ａ～Ｃ区も含めて、一帯の甕棺墓地は弥生中期前半に営まれたものと考えられる。ただし、祇園町Ｂ区11・12号甕棺は、口縁が内側に肥厚し、やや外傾する等の点から、時期的に新しい様相をもっており、時間的な幅を考える必要があろう。

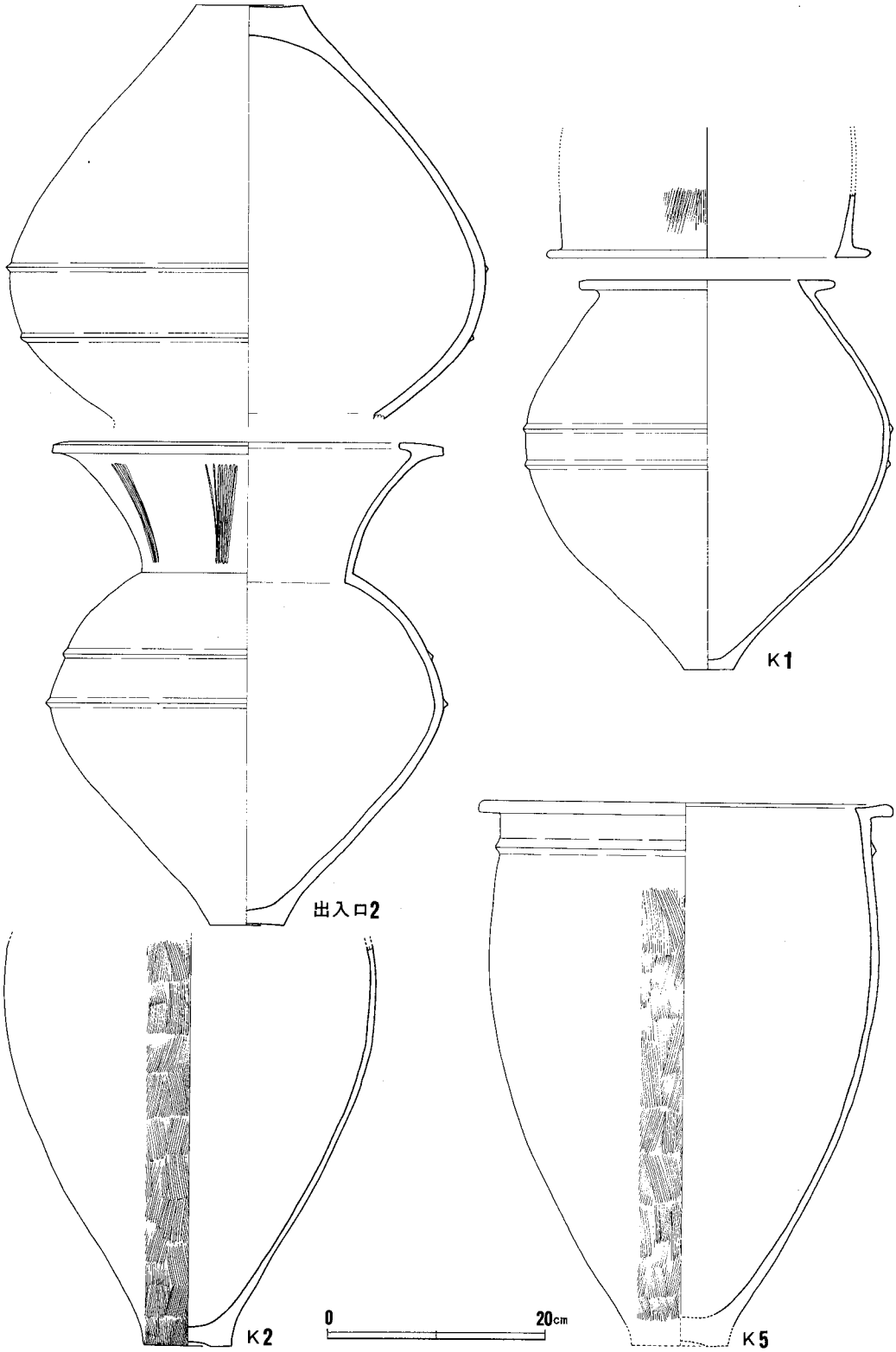


Fig. 128　甕棺実測図（2）

２．小　結

地下鉄１号線祇園駅出入口２・３区の調査については前項で概要を述べた。幅約４ｍといういわば、やや規模の大きなトレンチ調査という体で、溝、井戸等の遺構の広がりについて把握するのは困難なことであった。なお、調査区が主要幹線道路の交差点にあたり、交通の問題から夜間に調査せざるを得ないという悪条件から、土層識別、作業員、調査員の引継ぎ、遺構図の作成などに様々な問題を生み出し、必らずしも満足のできる調査とはいい難かった。しかしそれなりの成果は得られており、二・三まとめておくことにしたい。

投光器などの人工光下での調査であって、遺構の上層での切り合い関係は明確にできず、ある一定レベルまで掘り下げてから遺構を検出する方法をとったため、上層遺構部はほとんど包含層として一括に扱っている。遺構自体も井戸の掘り方が多く、下層から上層までの遺物が混在して出土しているのが多いが、しかしこれらの井戸の中で特筆しておかねばならないのは、１号土坑の出土遺物である。井戸本体の中に大量投棄されていたもので一括資料として重要であり、あとで詳述する。出土遺物の総数量については付表に記載したとおりであるが、ここではそれらの比率について触れておこう。近世以降と古墳時代以前の遺物を徐いた古代から中世にかけての容器類の総数は5,124点を数え、国産品は1,296点で25.3％と示される。夜間調査であり、土師皿類小破片の取り上げが不充分であったため、この数字については疑問が残される。国産品の80％強は土師皿類である。貿易陶磁の総量は 3,828 点であるが、朝鮮陶磁は15点で0.4％と少なく他は中国陶磁である。その内訳は白磁1,567点で41％、青磁756点で19.8％、青白磁93点で 2.4％、天目15点で 0.4％、染付６点で0.2％、陶器1,391点で36.5％となる。この中国陶磁におけるそれぞれの比率は、第２章で述べたＡ・Ｂ区や博多第４次調査における比率に極めて近似しており注目される。白磁では碗が1,280点、皿が190点、その他の器種97点で、それぞれ81％、12％、７％を占める。碗ではⅤ、Ⅵ、Ⅸ類が多い。青磁では龍泉系 476 点、同安系231点、越州系13点、その他29点で、それぞれ62.3％、30.8％、0.2％、 3.7％を占める。龍泉碗、皿の比率は 5.5：１である。碗ではⅠ－５、Ⅰ－６類が多い。これらの数値については今後経なければならない手続きが多く、現在のところ大きな目安であると考えている。

この地区で最も重要な遺物を出した１号土坑についてまとめておきたい。この土坑は、火事場整理のために埋めもどされた井戸であるが、この火事の被災家屋が単なる住居ではなく中国からの輸入陶磁器を扱う関係の店、もしくは倉庫だったという点で特殊である。

遺物の大部分は青磁で、ほとんどが販売される前の商品だったと思われるが、共伴した陶器の多くは、それ自体が商品であったというよりは、他の薬品、香料、茶といった商品の容器だったと思われる。しかし中には使用痕の顕著な捏鉢もあり、一家の日常の備品も一緒に廃棄されているようである。

主体をなすのは龍泉窯の碗と皿で、大部分同一時期とみて問題なく、いわゆる陽刻蓮弁碗に直接先行する形式のものである。年代は十二世紀の第三四半紀を中心に考えられるだろう。

この一括遺物は、圧倒的な数量によって大きな説得力をもっており、今後重要な標式的遺構となると思われるので、一応問題を整理しておきたい。

第一に共伴遺物という点からは次の諸点を指摘できる。

1．龍泉窯の碗が主でありながら、皿では同安窯系が大きな割合を占め、しかも同安窯系の碗はほとんどない。
2．白磁の碗、皿はなく、わずかに白磁四耳壺が見られる。
3．口ハゲで印花の青白磁がある。
4．すっぽん口の天目碗がある。これは上の青白磁とともに、出土はもっと遅いと思われていた。
5．広幅口縁の黄釉褐彩の鉢と細縁の盤が共存している。
6．陶器B群、いわゆる越州窯系の陶器は入っていない。

次に、集荷や流通の面から、幾つかの点が明らかとなった。

1．同じ龍泉窯の碗もしくは同安窯系の皿といっても、同一の窯で焼かれたものでなく、方々から寄せ集めている様子がある。
2．青白磁や天目の全体に占める比率は、輸入陶磁全体に占めるその比率と似ており、限られた、しかし確かな需要の存在を表わす。
3．陶器は大きく二種類の土、したがって二つの地方のもので占められている。
4．かなり大きな容器がたくさんあり、陶磁器以外の輸入品について考察をする手掛となる。
5．磁器、陶器共に福建省泉州を中心とするものと、浙江省江蘇省方面に出自を求めなければならないものが共存している。

この祇園駅出入口2・3区の1号土坑以外の出土遺物では、同形式の遺物は決して目立つものではない。何事もなければ、この1号土坑の青磁も各地に売り捌かれて平均以上の痕跡をこの地に残すこともなかったと考える時、いかに膨大な数量のものが、この博多の上を通り過ぎていったものかとの想い新たなものがある。

第4章　結　　語

これまで博多遺跡群における地下鉄1号線関係調査のうち、A・B区、および祇園駅出入口2・3区の調査結果についてその概要を述べて来た。ここではそれらを含めた博多遺跡群の調査に関する問題を提示することにして、結語としたい。

博多における遺物の量は付表でも示しているとおり膨大なもので、その種類も極めて多岐にわたる。それは博多の貿易都市としての性格に起因する。これらの整理報告にはそれなりの時間と予算が要求とされるが、限られた枠内では、遺物を分類し数量的に処理することも必要になる。今回は「博多出土貿易陶磁分類表」を作成し、それに基いて数量の算出にあたった。しかし破片数を示したものであるから、個体の大小等によって破片数はバラつきを見せるものであろうし、全体の構成比を正確に反映しているものとは思わない。今後の有効な手段を期待して、現状では大まかな目安として用いざるを得ない。また、数百年にも及ぶ遺物を一括して扱うやり方に批判もあろうが、博多では遺物量の多いことから、遺存状態の良好な遺構であってもかなりの遺物の混在することは常で、一時期の一括資料を得られることは少ない。それ故に現在のところ一時期に限っての遺物構成比を示すことは困難である。しかし一方、上呉服町周辺の包含層の3mにも及ぶ地域では遺物の混在はそれほど極端でなく、今後の整理の進展によっては時期別の構成比を示すことも可能になろう。また、博多での中世後期の遺物の少なさに奇異の念を抱く人が多いかもしれない。確かにそのような傾向は見えるが、上層部分を機械によって剝ぎとるという調査上の問題も一面にはある。限られた時間、予算では、近現代建物の基礎、攪乱層は、機械で剝ぎ取らざるを得ないのが現状なのである。文化財保護行政の今後の指導の充実が待たれるところである。

また、博多遺跡群と周辺遺跡との関係も今後究明されねばならない問題の一つである。福岡平野一帯では、中国陶磁をはじめとする中世遺物が、出土量の多寡はあるにせよ、殆んどの遺跡から検出されるといっても過言ではない。これら福岡平野に広く散在する中世遺跡の総合的な研究は、今までのところない。これら中世遺跡相互の関係、生産遺跡と消費遺跡の関係、荘園、集落、寺社等の関係、都市遺跡博多・大宰府と周辺村落との関係等、今後に残されている問題は多い。

最後に調査後の整理期間については、現在のところ充分でなく、報告書の作成には大部分が昼間の調査終業後、夜間をあてているというのが現状である。止むを得ずの緊急調査とはいえ記録保存のための整理報告期間を確保することも、調査の充実とともに重要なことの一つであろう。

Summary

This book, consisting of two volumes, is the first comprehensive work on the Hakata Sites having been excavated by Fukuoka City Board of Education; and this project for the excavations has been asked by Fukuoka City Transit Authority. The containts of the first volume are divided into two major parts: the first part, I) outline of the study on the archaeological sites in the subway line; II) outline of the excavations so far done at Hakata, the second part, I) naturalistic and historical environments of Hakata; II) result of the excavations at the so-called A and B areas of the subway line; III) result of the excavations at the so-called Entrances, nos. 2 and 3 of Gion subway station. The second volume deals with classification for the trade ceramices so far discovered at the Hakata Sites.

Hakata was the nearest harbor for Dazaifu and developed in cultural and commercial activities as an opened gate for foreigners from overseas; moreover, "Korokan" as a guest house was built for them. After the political system of the central goverment got ineffective, the trade itself was mainly done by private merchants rather than the goverment. As the result, the trading center moved from "Korokan" to today's Hakata district. Thus under the strong commercial activities in East China Sea, Hakata as an important harbor town became richer than ever before. In the Late Heian period, the Chinease merchants' community known as "宋人百堂" was founded in Hakata district: it indicates that Hakata at that time was so prosperious because we have found a huge amount of Chinease ceramices here. As we have already learned in the fourth and tenth campaigns of the excavations, the rates of the trade ceramices out of all vases so far found show 23.9 percent and 38.7 percent respectively, and this time shows 15.6 percent. These figures are much higher than figures so far reported at any other sites in Japan. These Chinease ceramices belong to the second half of the eleventh century through the end of the sixteenth century, and most of them are dated to the twelfth century. The amount of Chinease ceramices through the centuries changed due to how Hakata as a harbor played in her long history. These Chinease ceramices were fired in Zhejiang, Fujian, and Jiangxi Provinces, and they were shipped out of Ningbo and Quanzhou; furthermore, we see ceramices at a small percent from North or South

China, such as Shannxi, Hebei, and Gawngdong Provinces: ceramices from North China mainly belong to the second half of the eleventh century through the early twelfth century. We have evidences to be suggested the existence of "宋人百堂": Chinease ceramices with calligraphy, "王", "朱", "陳", and so forth may well indicate names which Chinease bore. We have furthermore forty-one specimens written "丁綱"; and these were found at the sites excavated during the fourth campaign, where are located near the latest excavation sites. "丁綱" represents "綱首" (captain or ship owner) of the family name "丁"; and this evidence most likely indicates that Mr. "丁" once lived here. We have another example later than the time of "宋人百堂": all vases appearing on four color pictures at the front page and figs. 92–106 were simultaneously dumped into a well. These are quite important specimens. These finds seem to have met fire: heat of the fire changed their graze, caused the vases to have been broken, and made their cracks on the surface. We were however able to restore these broken pieces as complete shapes of vases. The diversity of the vases is small. These facts more likely imply that these vases which lost their value for merchandise due to fire of a Chinease house or storage house were thrown into the well. These evidences represent the character of Hakata in those days.

It is only the beginning for the archaeological study on Hakata; and this time the work contains only part of the result of the excavations so far done at Hakata. Since further studies and analyses on the excavations are on progress, other important evidences will come to light soon. We hope that this book will help further studies on the Middle Age harbor town "Hakata."

简　介

这本书是福冈市教育委員会为福岡市交通局所委托进行发掘调查的「博多遺址群」之发掘调查报告书才一集。現将概要简述如次。Ⅰ—地下铁路线内遺址调查的概要　Ⅱ—有关博多的发掘调查概要。在Ⅱ中又細分为、才一章　博多的自然环境与历史环境、才二章　地下铁本体部A・B区的调查结果、才三章　祇园站出入口2・3的调查结果。另外、在附编中又对博多出土之貿易陶磁试加以分类。

在博多湾自从大宰府之外港鴻臚馆被設置以來、因而成为日本对外交流之门戶而发达起來了。律令体制衰退以后貿易主体转移至民间、貿易中心地也隨之由鴻臚馆迁移至現在的「博多部」。于是博多以环绕在东中国海一大经济圈中的重要港湾城市而繁栄昌盛起來了。到了平安时代末期、产生了被称为「宋人百堂」的中国商人居住区。这个时期貿易繁栄是由中国陶磁器的大量出土可見一般。

如前所报告、在博多才4次调查及才10次调查中进口陶磁器占着所有出土陶磁器比率的百分之二十三・九及三十八・七。其比率相当高。这次的发掘报告也占了百分之十五・六。这个数値比日本的其它进口陶磁出土遺址之比率都要高。这些中国陶磁大概是以公元12世纪为中心从11世纪后半到16世纪末。由其出土量也可反映出港湾貿易的盛衰。产地是以浙江省、福建省、江西省等地为中心、可能是由宁波、泉州装远过來的。也有陝西省、河北省、广东省等等的北方产及南方产的制品、但是其比率相当低。至于北方的陶磁器大部分是从11世纪后半到12世纪初叶的。

器物上还有一些留着墨书的。由此可見「宋人百堂」的存在、其中也可发現「王」「朱」「陳」等不少中国姓。与这次调查地点邻近的博多才4次调查地点出土了41件写着「丁綱」的陶磁器、这意味着「丁」姓的綱首（船長、船主）、因此可見曾有「丁」氏住在这里。

另外也有比「宋人百堂」时代较新之例子。如卷首彩色照片图版与载在Fig. 92～106的文物都被丢棄在井里、这些也是相当宝貴的資料。它们很可能遭遇火灾之类、由于火熱受到釉彩变化破坏的影响。然而大都修复成原來的样子。陶磁的种类很简单、大概是把中国商人的家中或仓庫里因火灾失去了商品价値的陶磁一起埋在井里的。这种情况充分说明了当时博多的特性。

博多的考古学研究刚就緒、这次调查报告只不过是至今调查成果之一部分而已。隨着今后的整理和研究之展开、很多新事情也很可能明确起來。这本书給想研究和了解中世港湾城市「博多」者提供了一些参考資料、这就是本书的目的。

写真図版

PLATES

※遺物写真に付した番号は挿図番号と一致する。
縮尺は不同である。

博多眺望　博多駅上空より

PL. 1

1．調査区遠景（正面は博多駅）

2．路線内試掘調査風景（1976年12月 東長寺前）

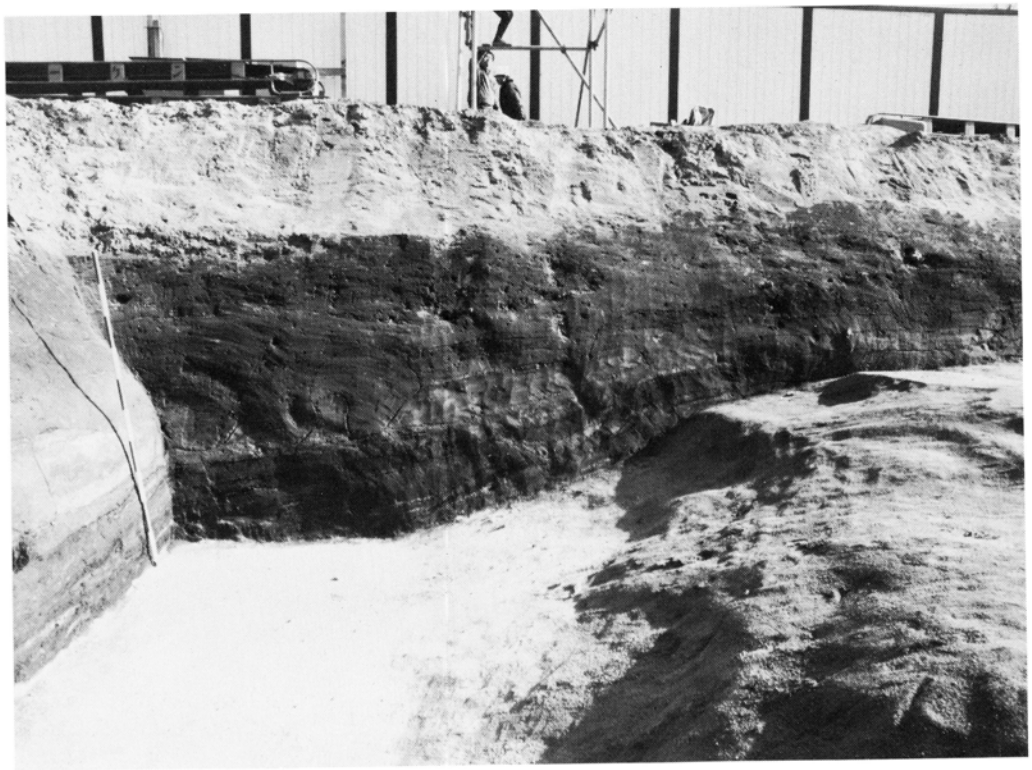
1．中間杭試掘調査風景（店屋町工区）

2．A－2区調査風景

1. B－I区調査風景

2. B－III区調査風景

1．A－1区北側土層断面（3号溝落込み部）



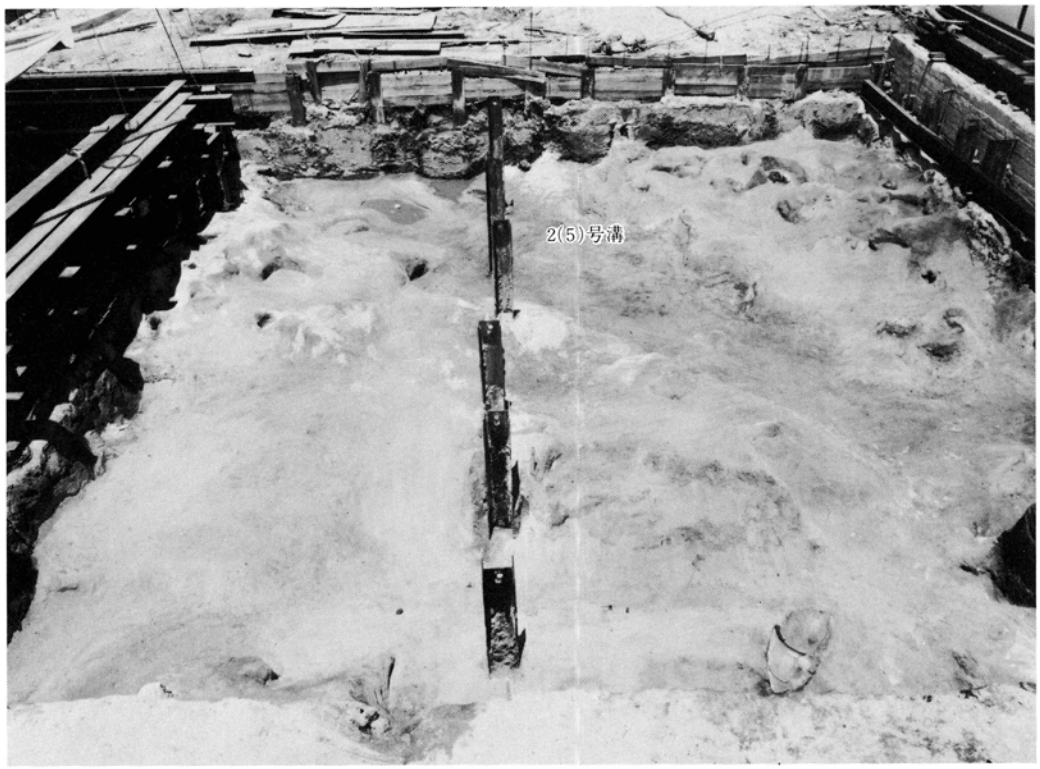
2．A－1区東側土層断面（3号溝落込み部）

1．A－1区遺構全景（東より）

2．A－2区遺構全景（東より）

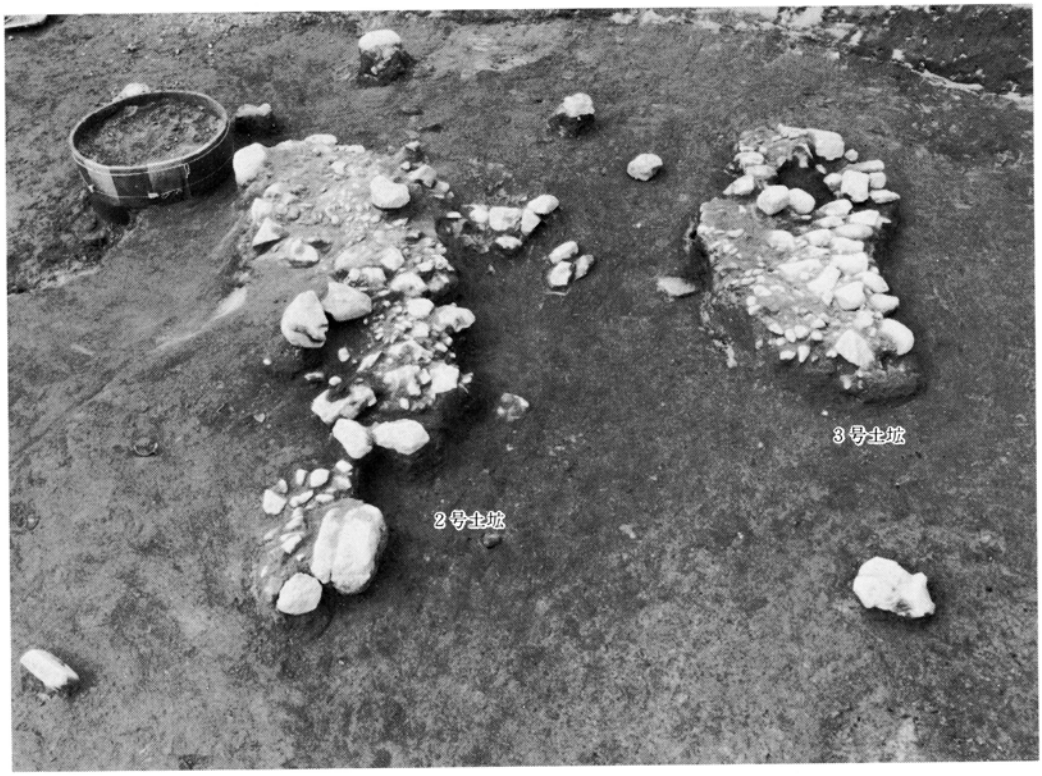
1．B－Ⅱ･Ⅲ区土層断面（東より）

2．B－Ⅱ区上部遺構全景（南より）

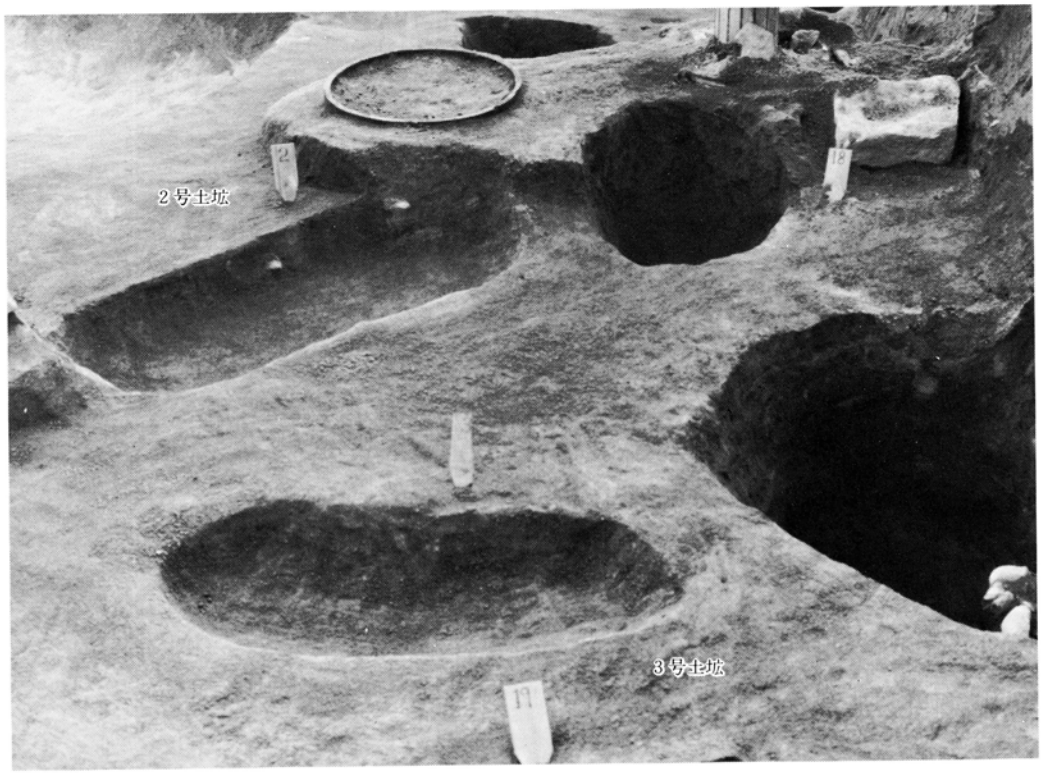


1．B－II・III区下部遺構全景（南より）

2．B－III区下部遺構（東より）



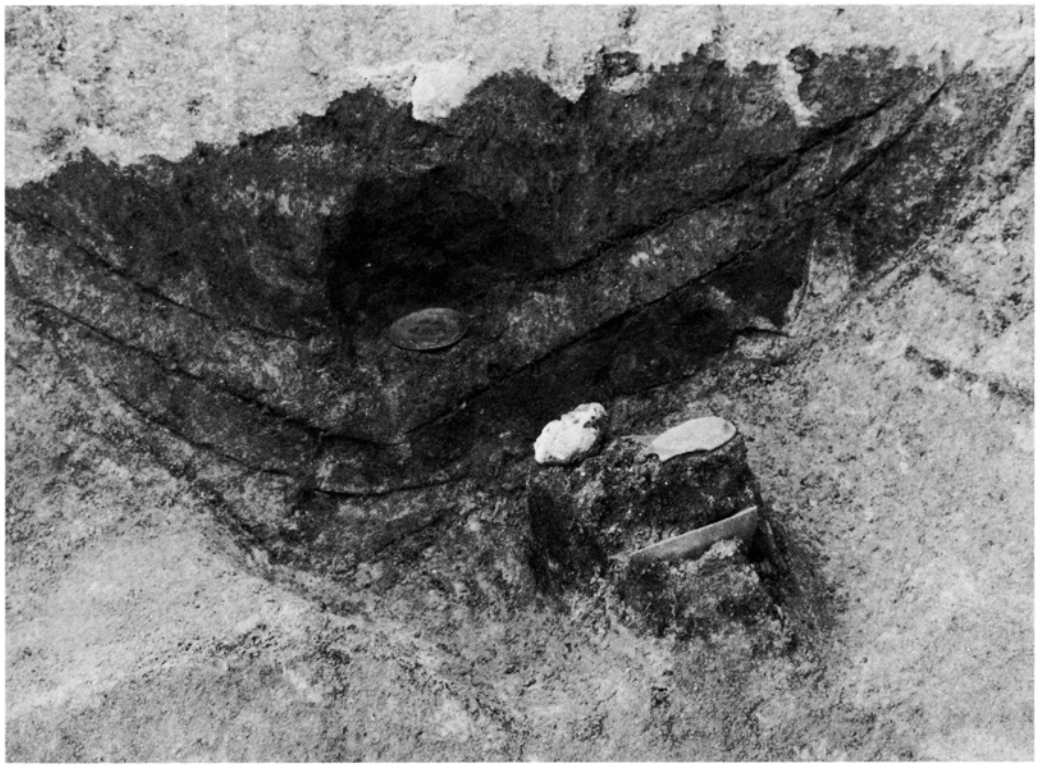
1．2・3号土坑上部石組（東より）



2．2・3号土坑下部遺構（北東より）

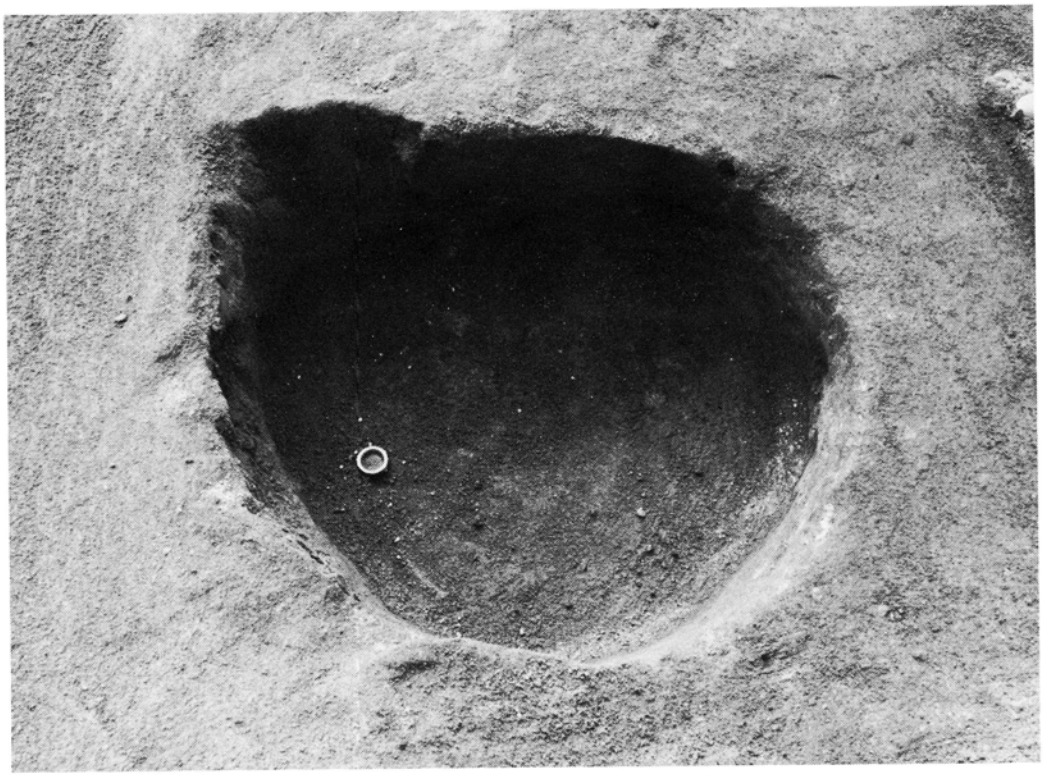
1. 2号土坑遺物出土状態

2. 21号土坑（火葬墓）遺物出土状態（西より）

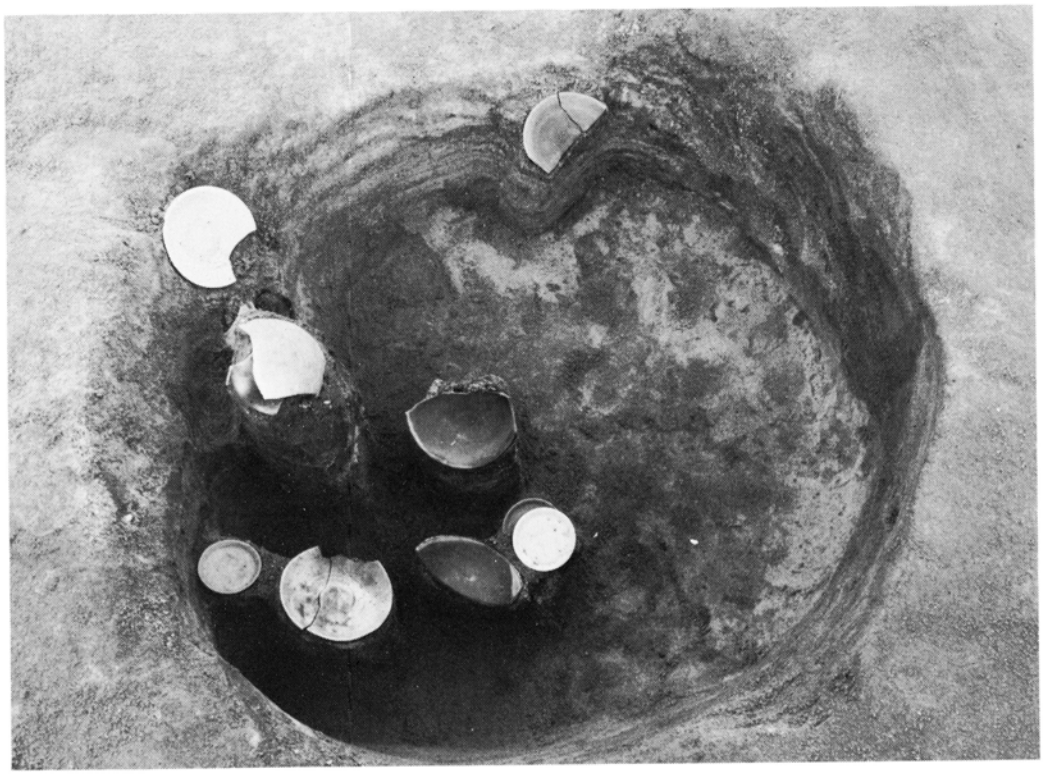


1．22号土坑（火葬墓）土層断面

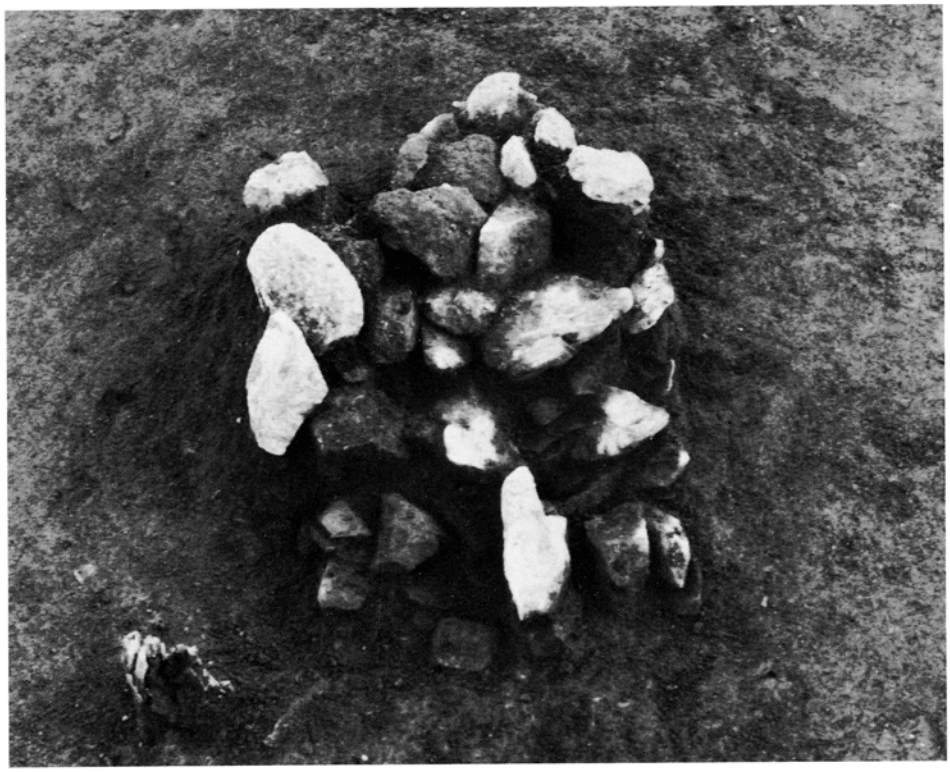
2．23号土坑（井戸掘方，北より）



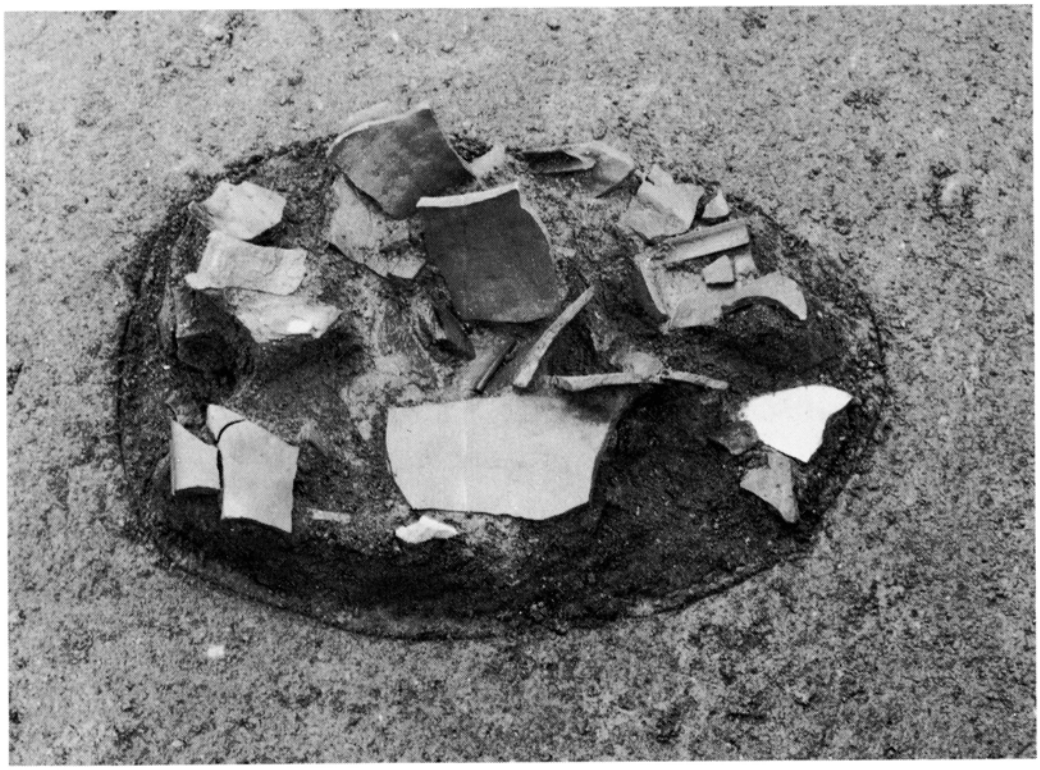
1．25号土坑遺物出土状態



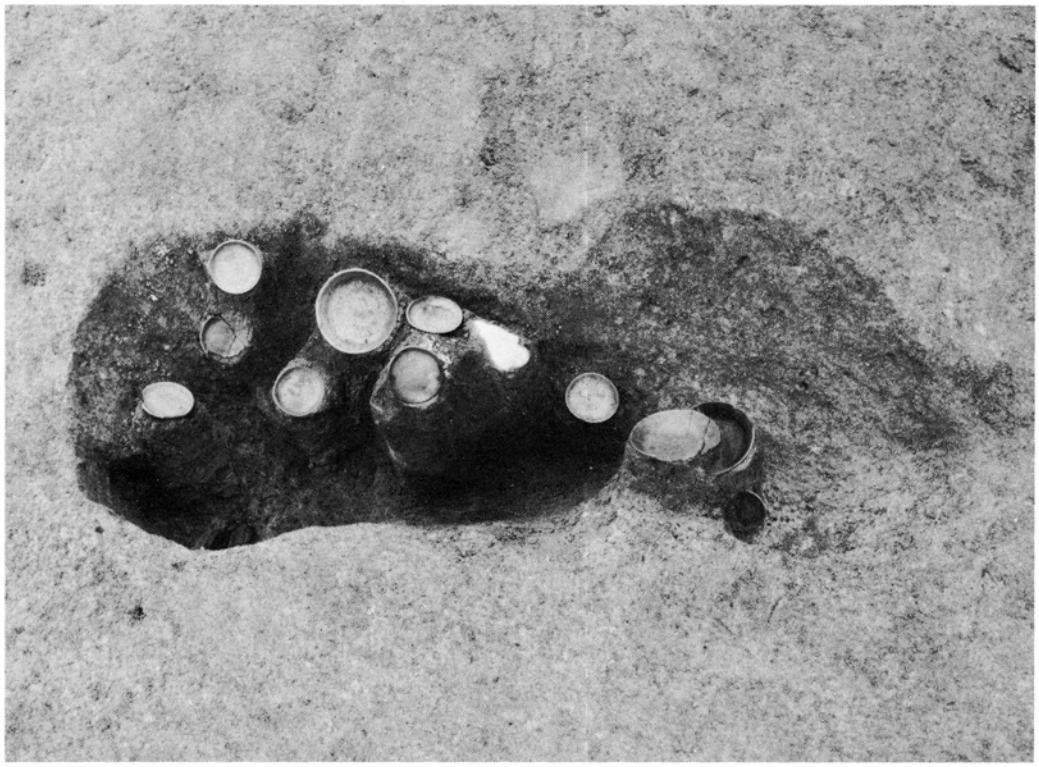
2．27号土坑遺物出土状態



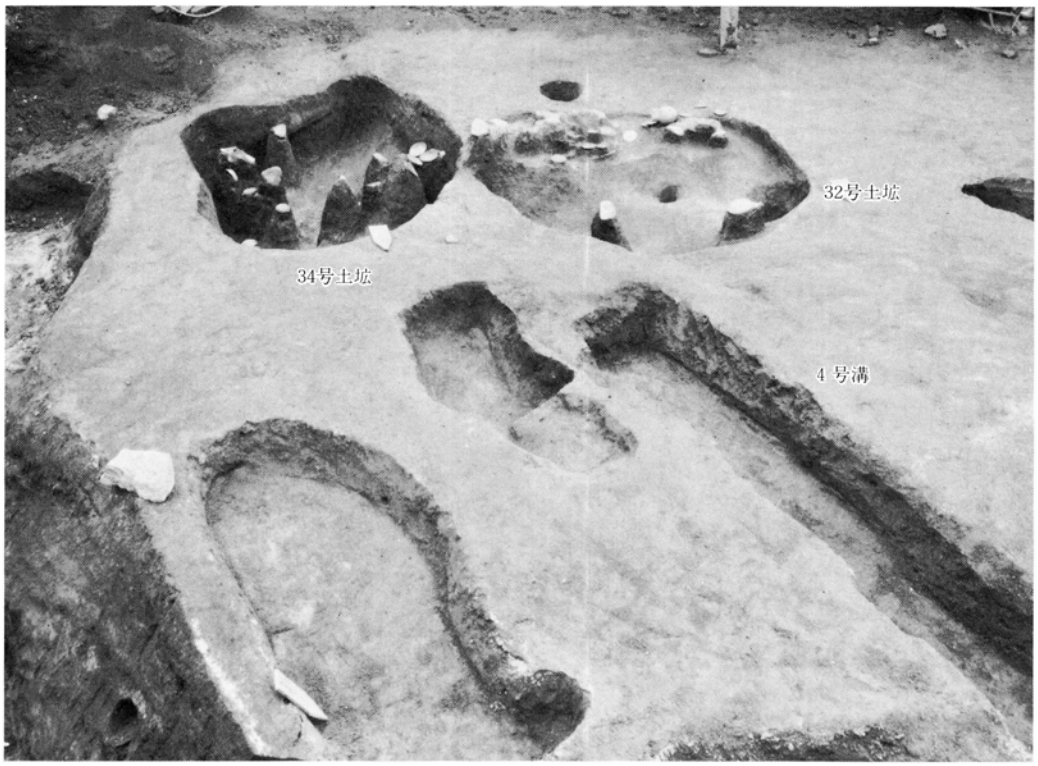
1．29号土坑上部石組



2．30号土坑遺物出土状態



1．31号土坑遺物出土状態



2．32･34号土坑，4号溝（西より）

1．32･34号土坑（北西より）

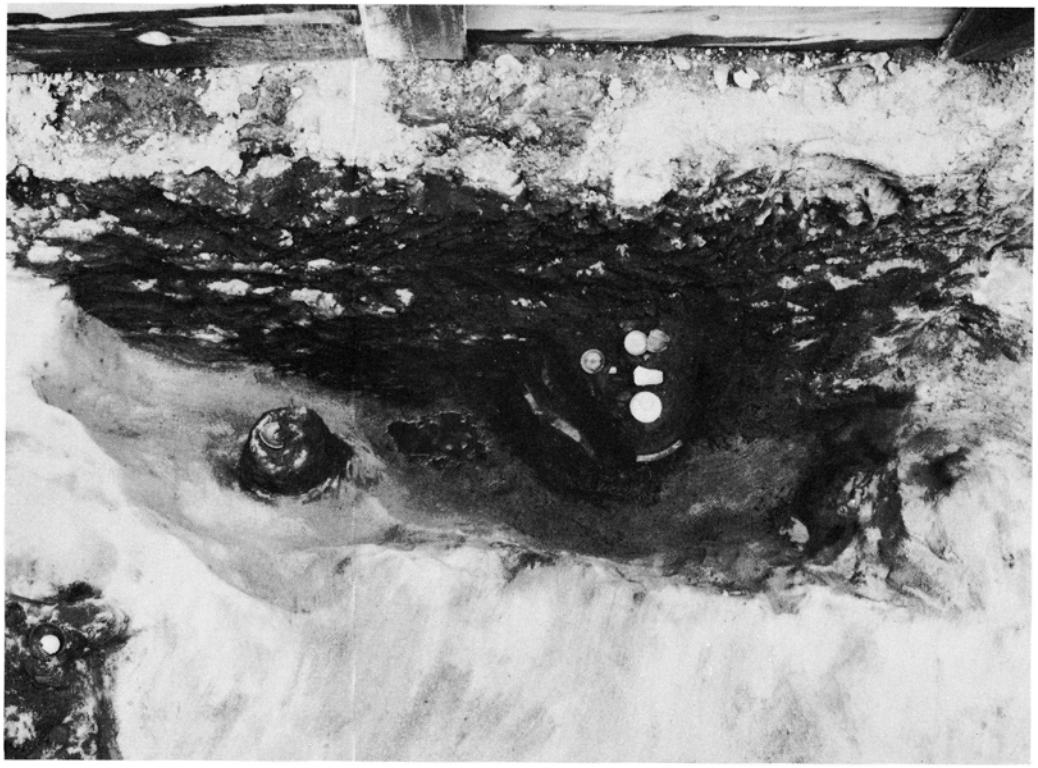
2．32号土坑遺物出土状態

1．76･77号土坑（南東より）

2．76号土坑

1．77号土坑

2．78号土坑遺物出土状態



1．84号土坑（井戸)遺物出土状態

2．84号土坑（井戸)主体部

1．82号土坑

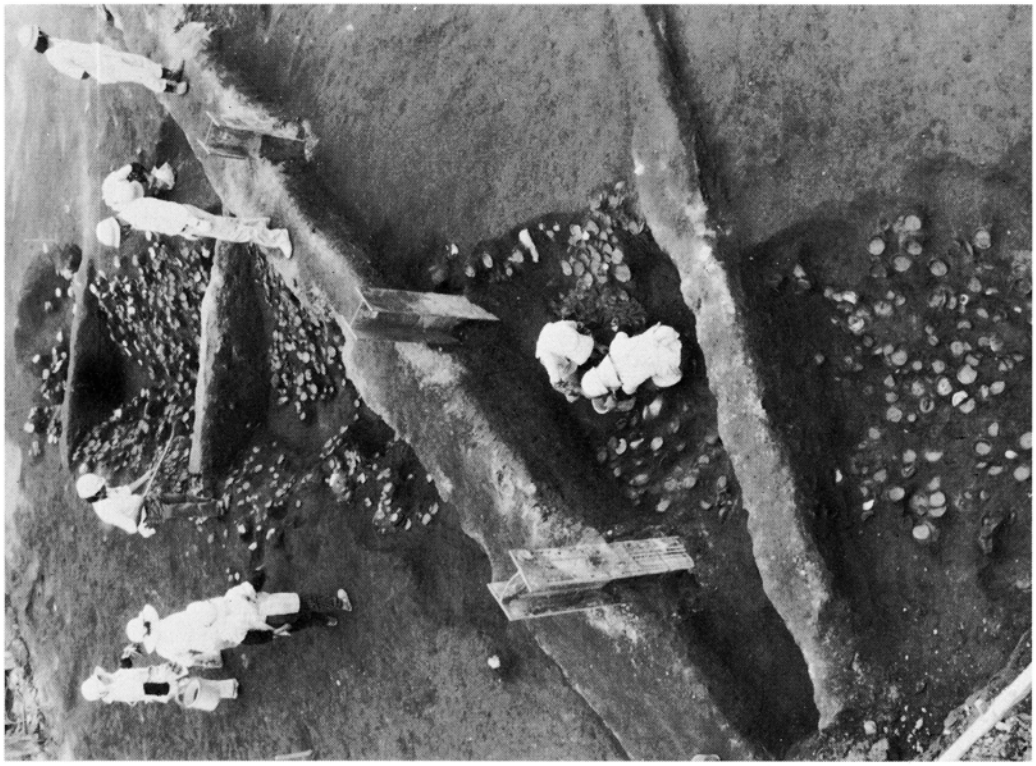
2．86号土坑

1. A—2区2号溝遺物出土状態（東より）

2. A—2区1・2号溝（完掘後、東より）

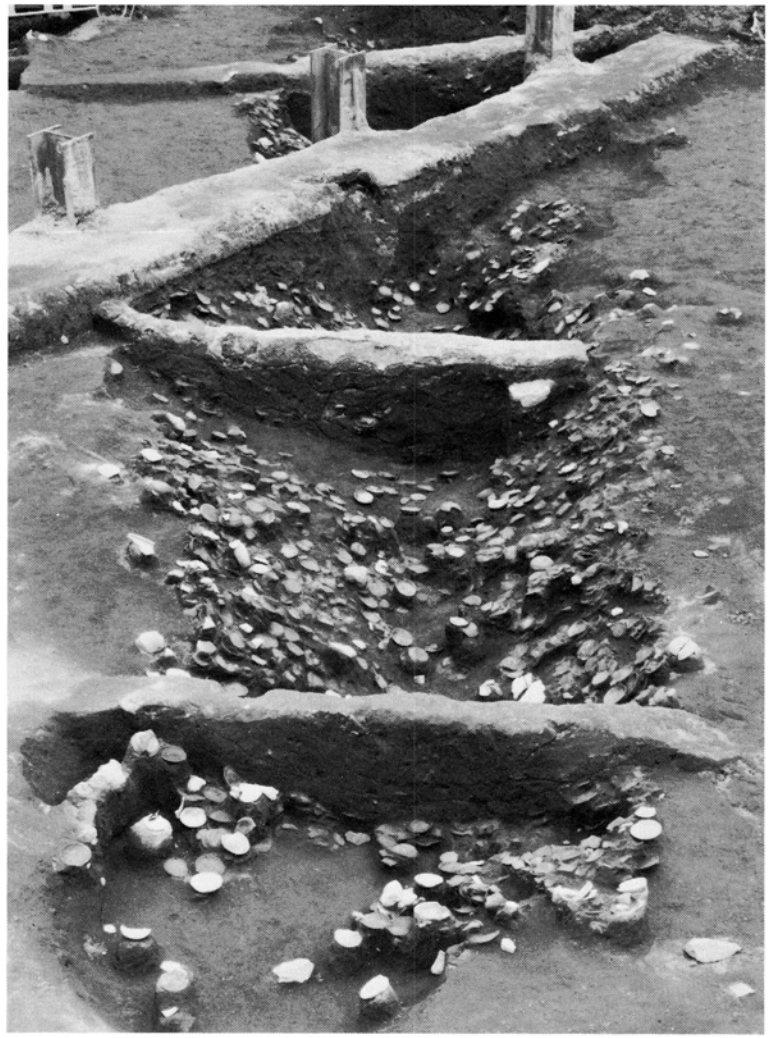
1. A—2区2号溝（上面）遺物出土状態（北西より）

2. A—2区2号溝遺物出土状態（北西より）



1．B区２号溝（５号溝）調査風景（西より）

2．２号溝（５号溝）調査風景



1. 2号溝（5号溝）全景（東より）

2. 2号溝（5号溝）全景（西より）

1．２号溝（５号溝）土層断面１と上部遺物出土状態

2．２号溝（５号溝）土層断面１（下部掘下げ後）

1．２号溝（５号溝)土層断面２と上部遺物出土状態

2．２号溝（５号溝)土層断面２（下部掘下げ後）

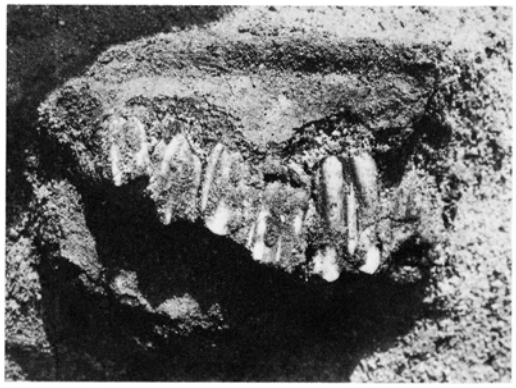
1．2号溝（5号溝）遺物出土状態

2．2号溝（5号溝）遺物出土状態

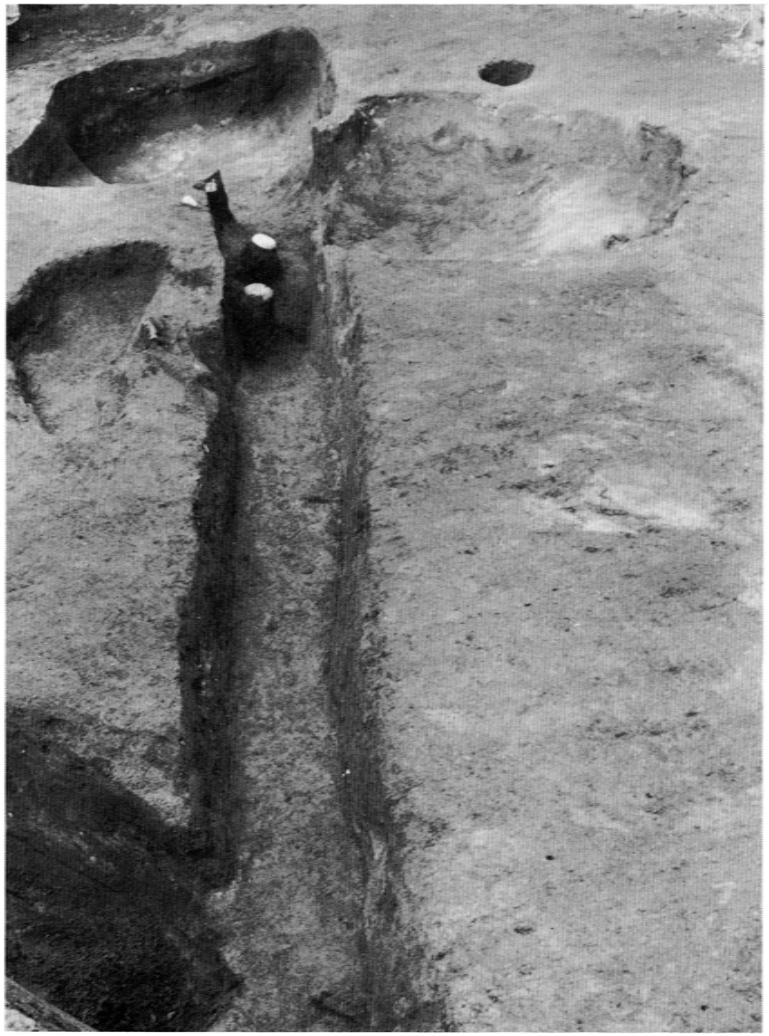
3．3号溝遺物出土状態

4．3号溝遺物出土状態

5．3号溝遺物出土状態



6．3号溝牛歯（左上顎骨）出土状態



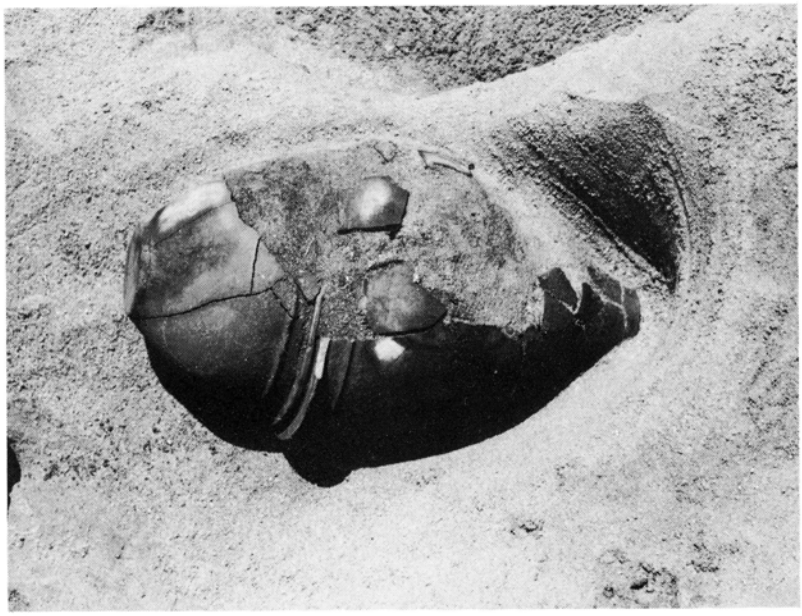
1. 4号溝（南より）

2. A—1区礎石列（東より）

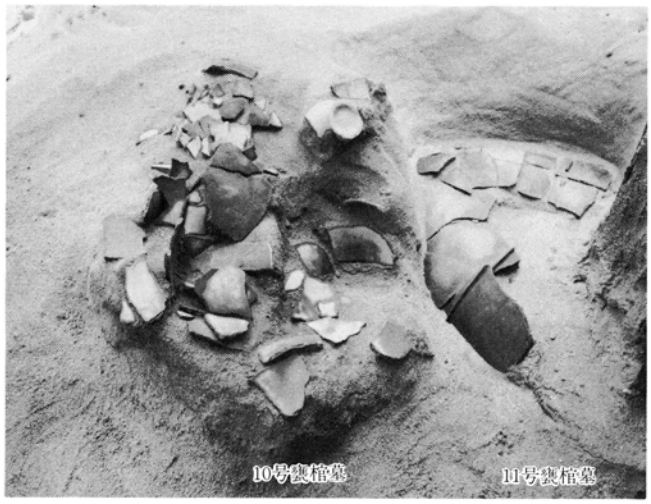
1. 2号甕棺墓と6号溝（北東より）

2. 1号甕棺墓

1．8号甕棺墓

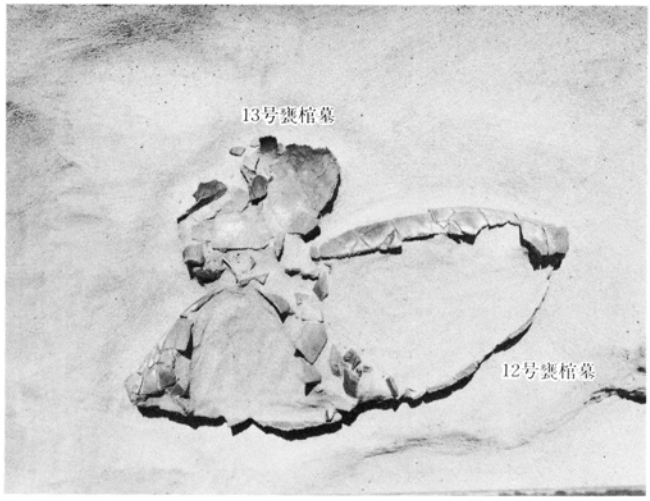


2．9号甕棺墓



1．10･11号甕棺墓

2．11号甕棺墓



3．12･13号甕棺墓

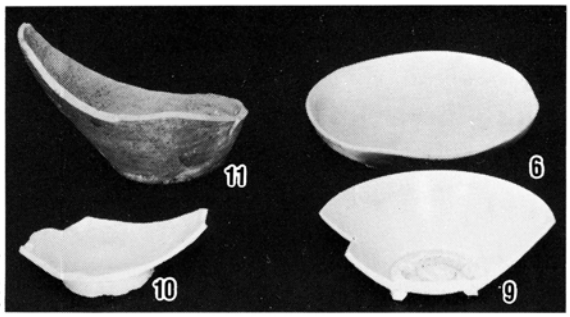
1．出入口２・３区夜間調査風景

2．出入口２・３区夜間調査風景

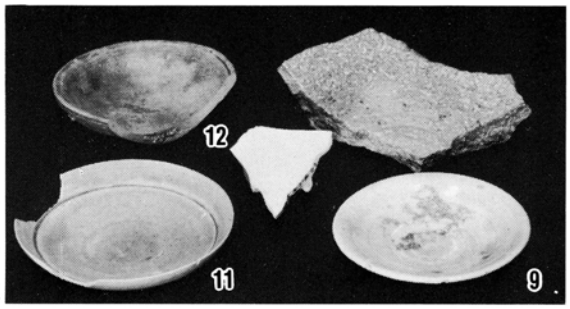
1. 出入口2・3区　35号土坑（石組井戸）

2. 出入口2・3区　35号土坑（石組井戸）内面

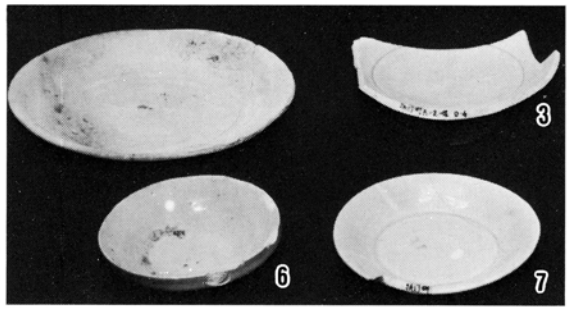
A区 遺構出土遺物



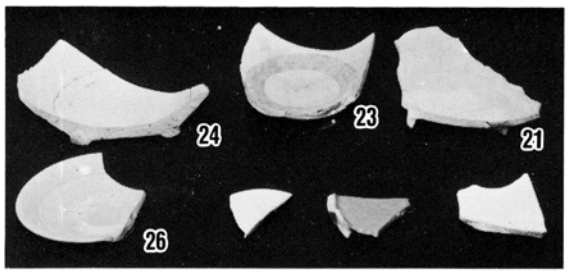
2号土坑



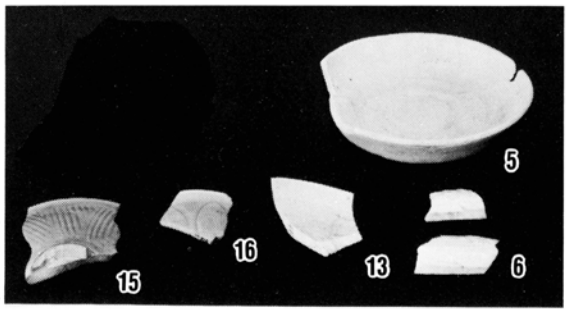
3号土坑



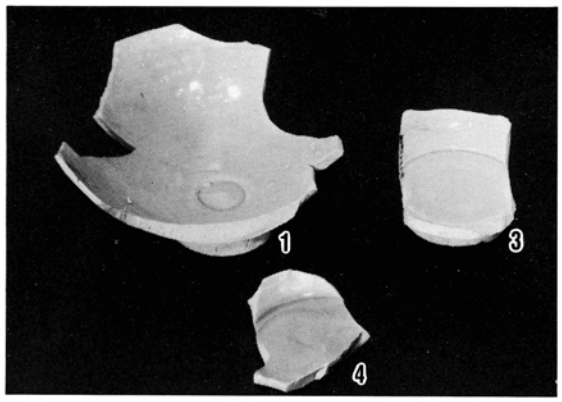
4号土坑



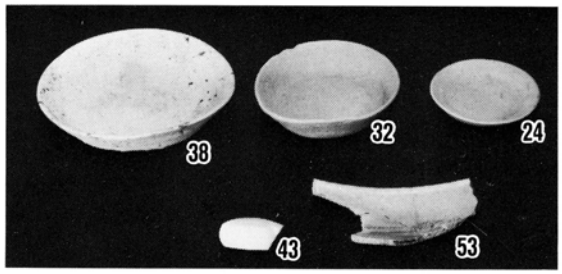
5号土坑



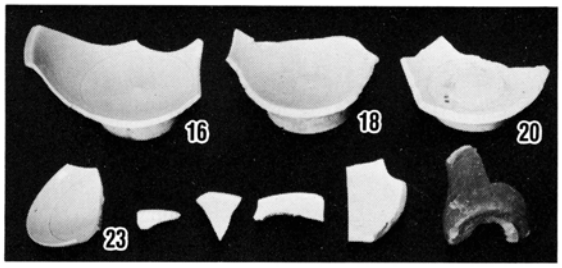
17号土坑



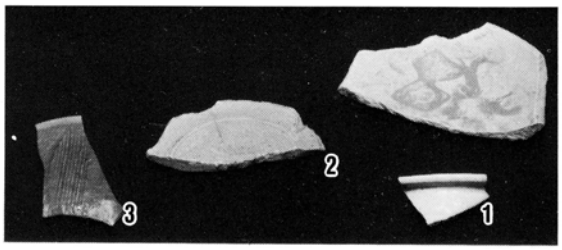
18号土坑



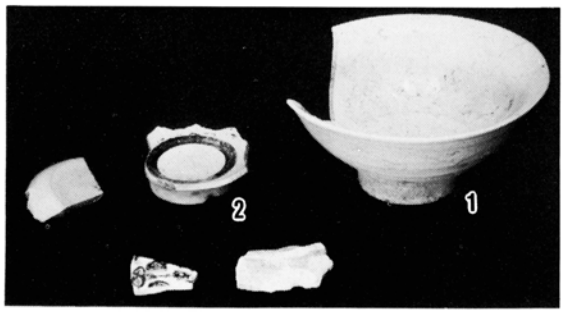
32号土坑



34号土坑



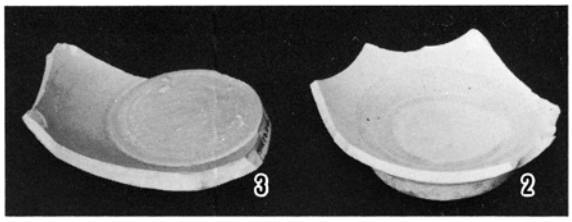
42号土坑

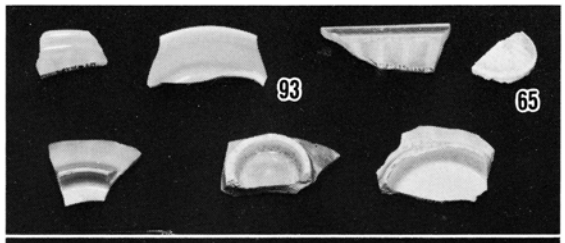


43号土坑

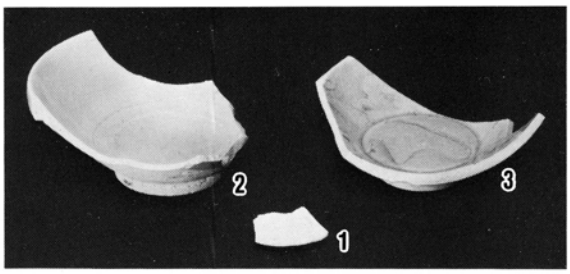
A・B区　遺構出土遺物

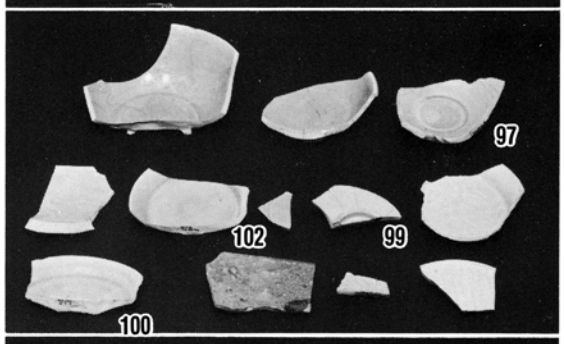
44号土坑



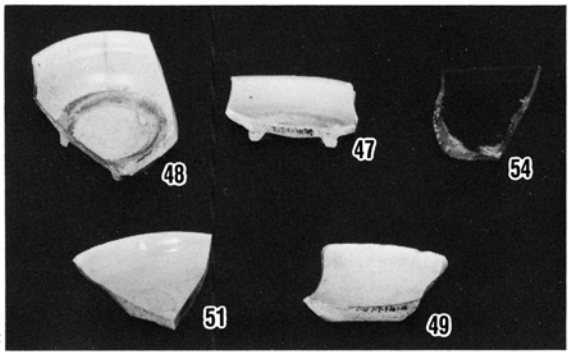


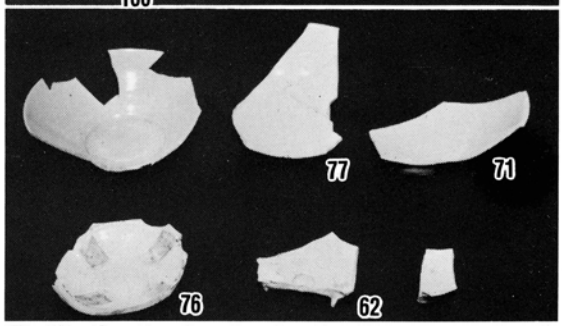
80号土坑

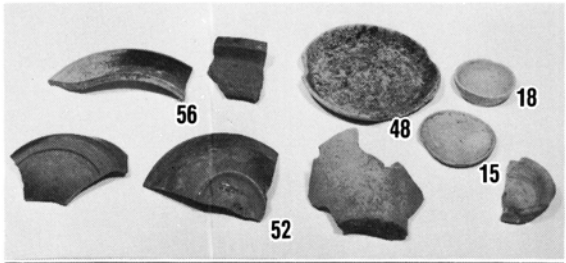


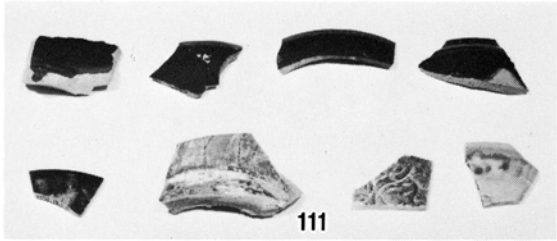


1号溝

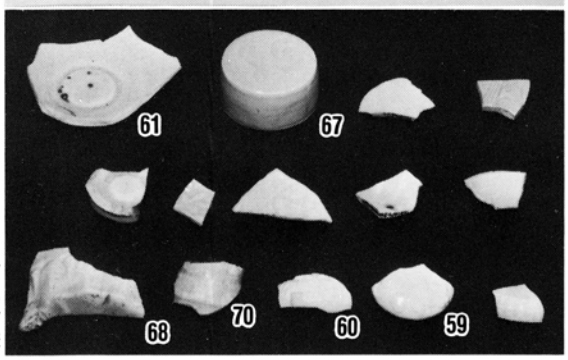


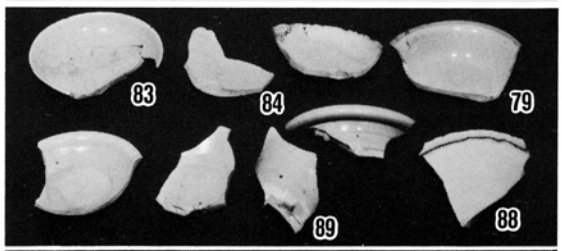


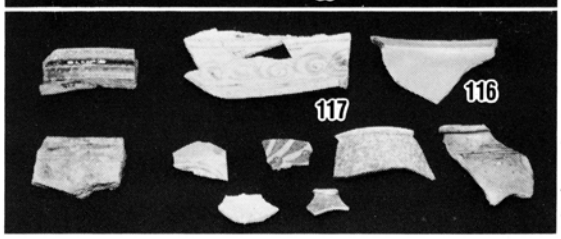




2号（5号）溝

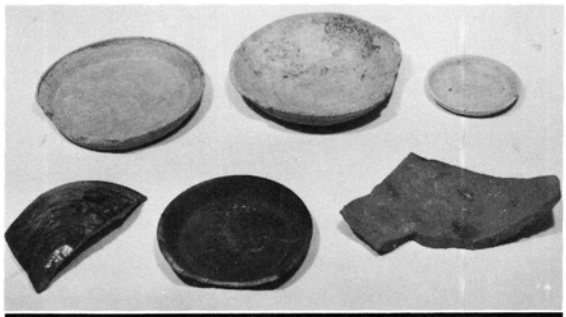


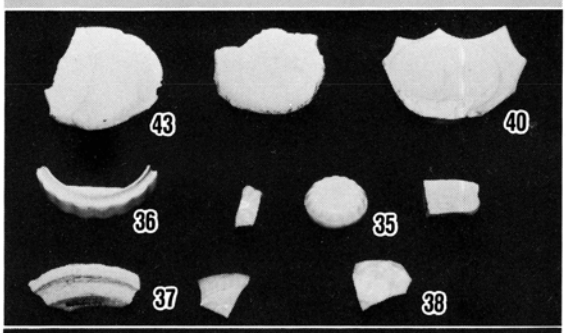


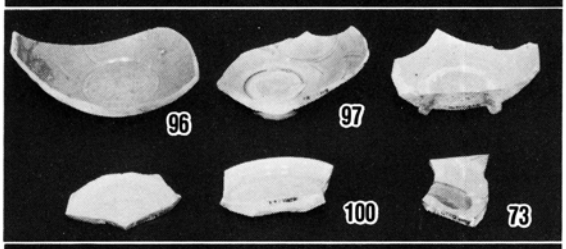


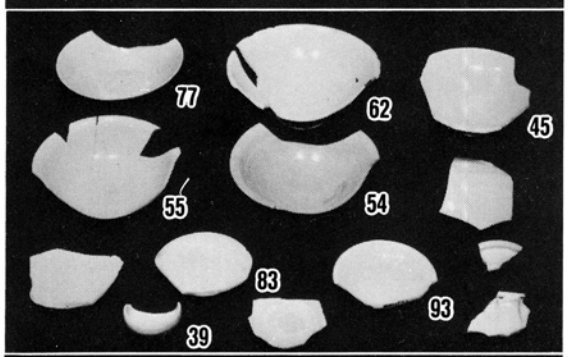
2号（5号）溝

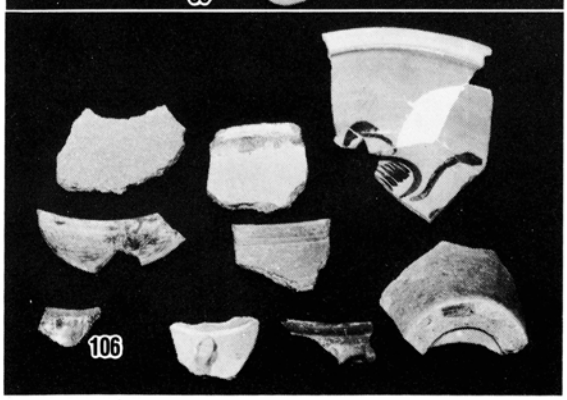
A・B区　遺構および遺構外出土の遺物



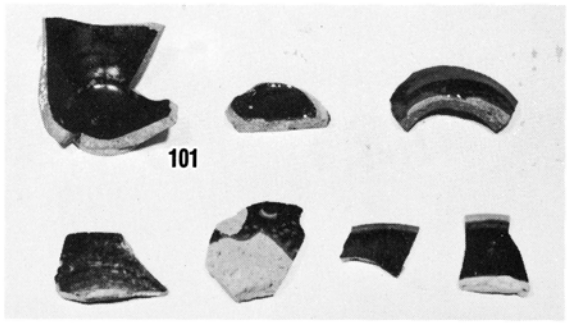




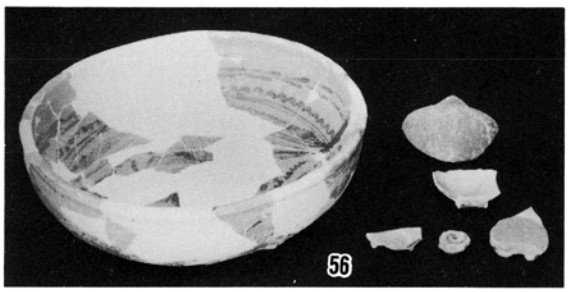




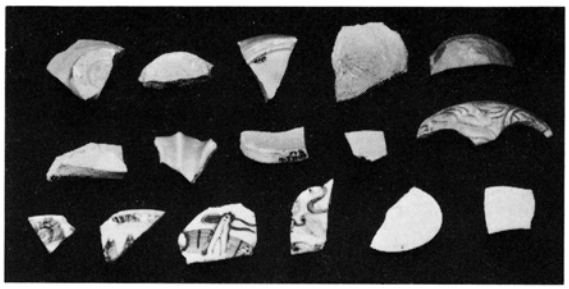
3号溝



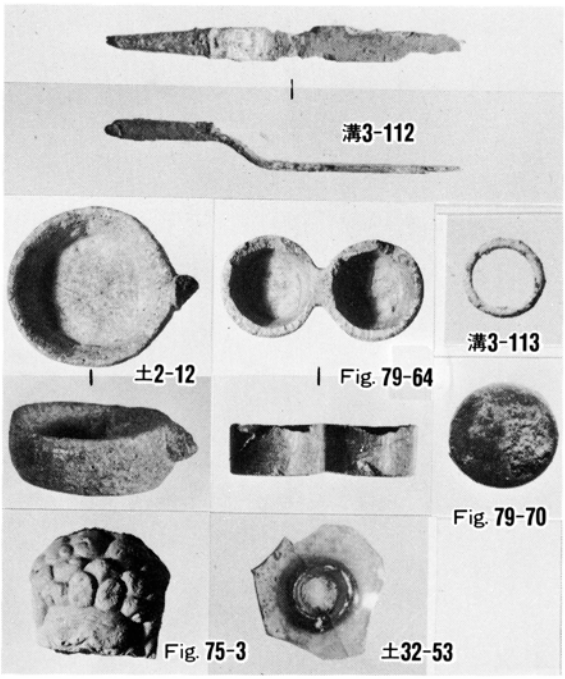
3号溝

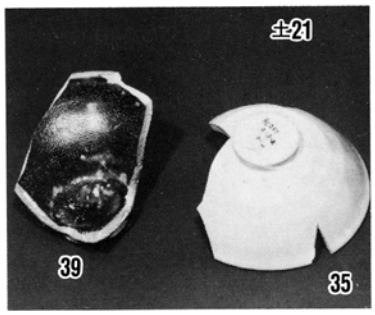


A区遺構外

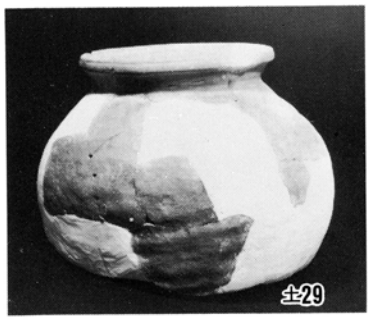


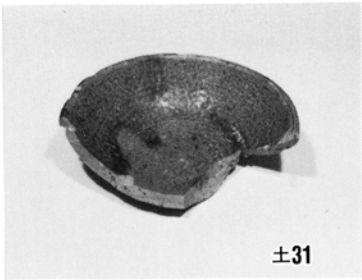
B区遺構外

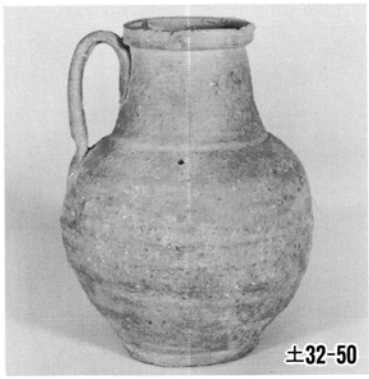


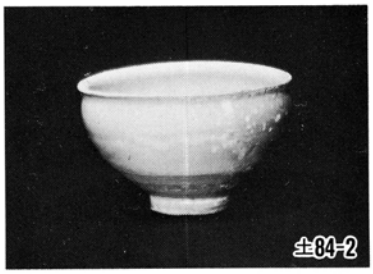

土21
39
35

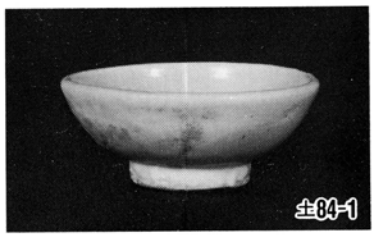
土21-43


土29

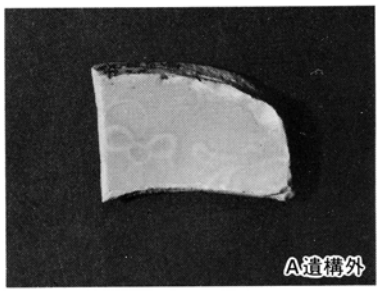

土31

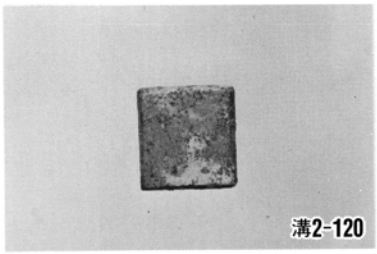

土32-50


土84-2


土84-1

溝3-103


A遺構外


溝2-120

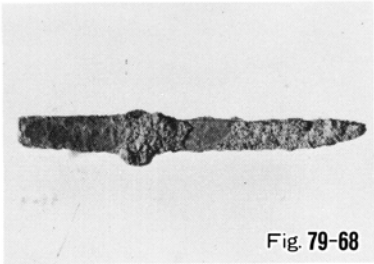


Fig. 79-68

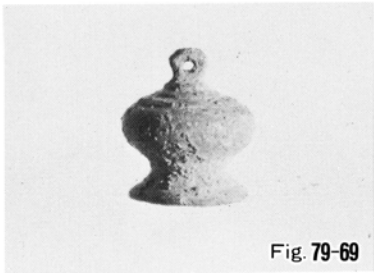
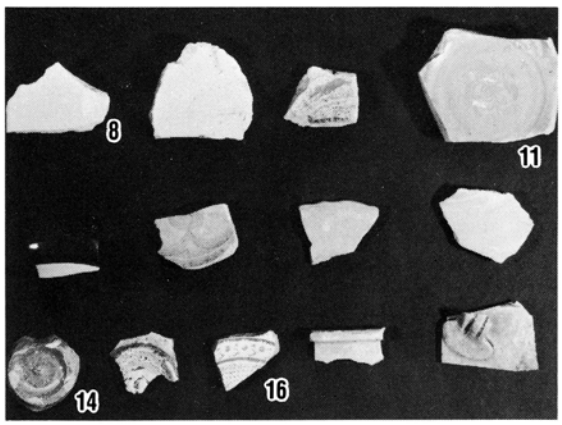


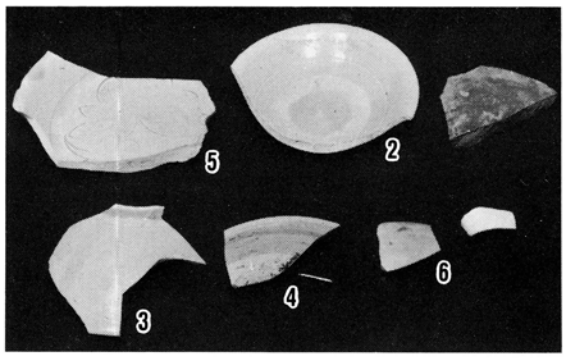
Fig. 79-69

溝3-111

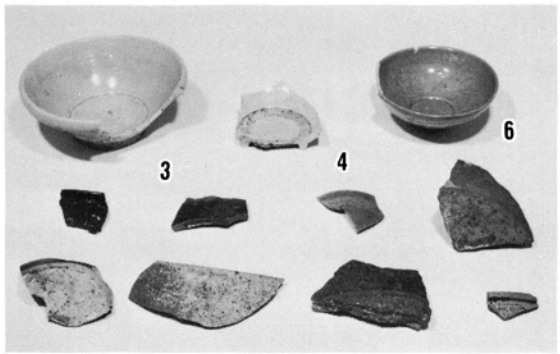
出入口2・3区　遺構出土遺物



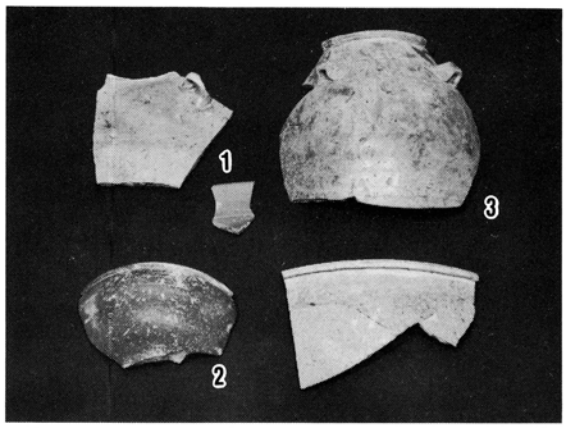
2号土坑（1号溝）



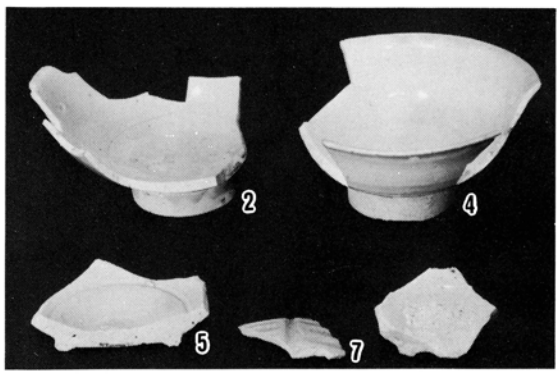
53号土坑



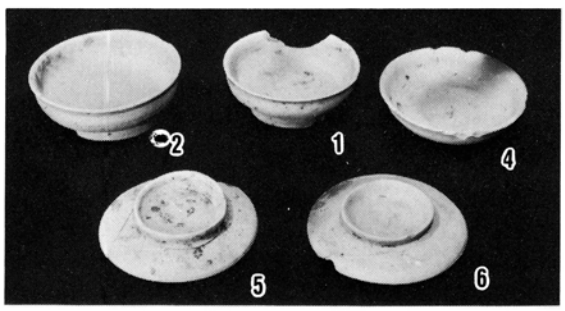
7号土坑



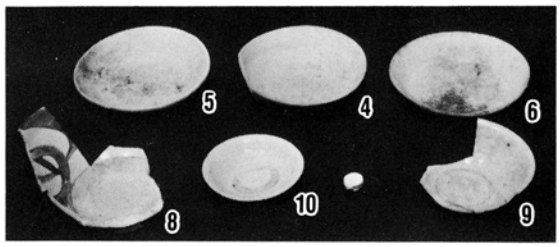
54号土坑



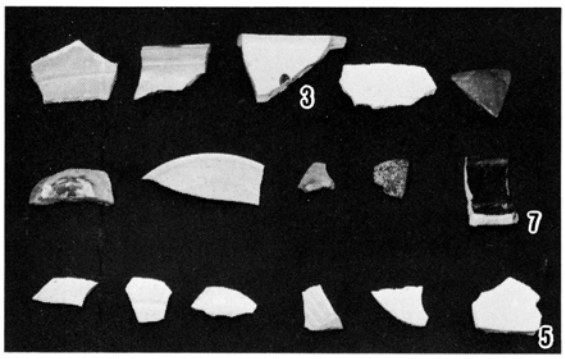
41号土坑



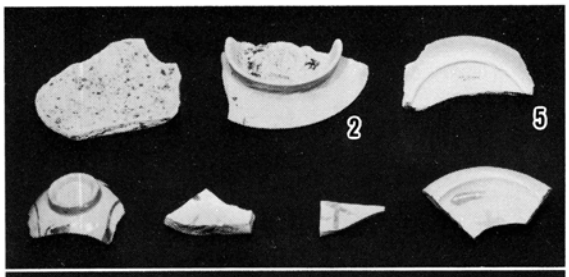
63号土坑

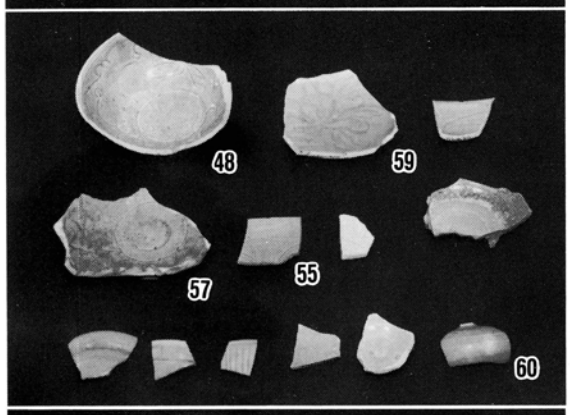


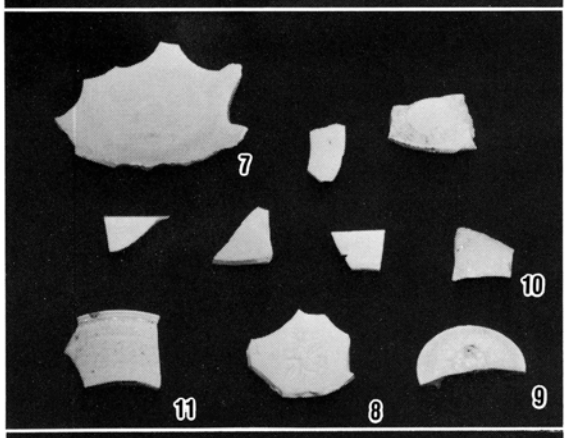
43号土坑

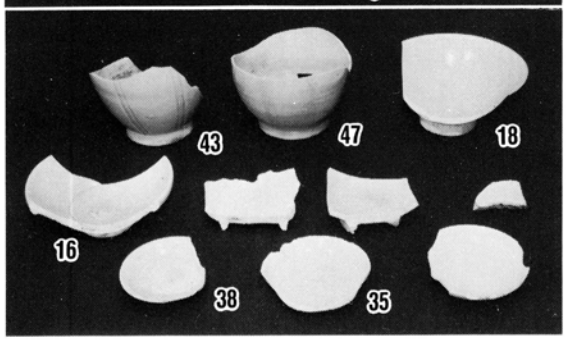


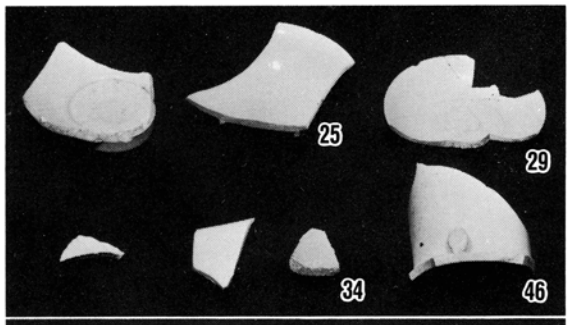
67号土坑

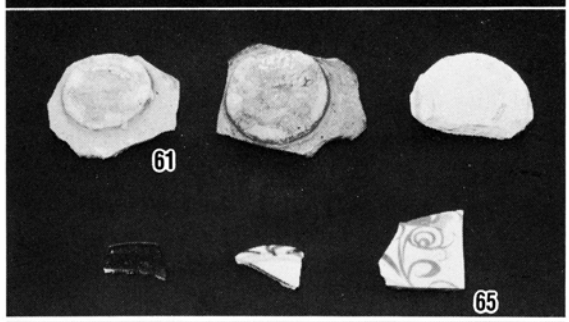

2
5

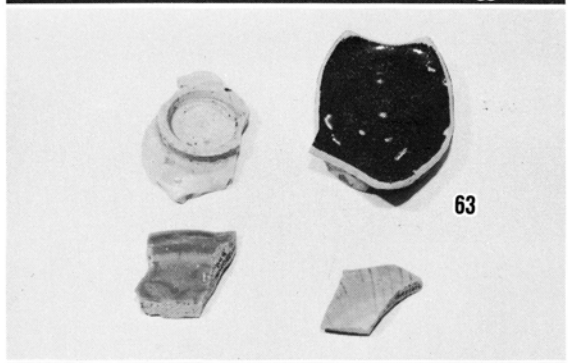

48
59
57
55
60

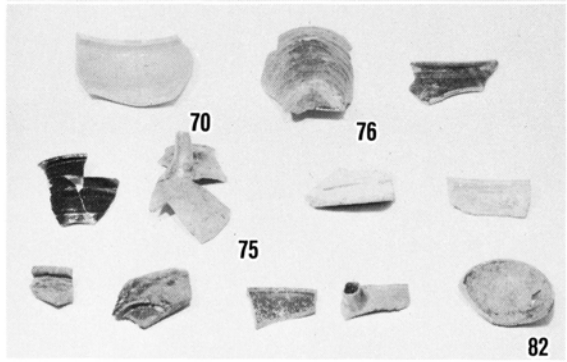

7
10
11
8
9


43
47
18
16
38
35

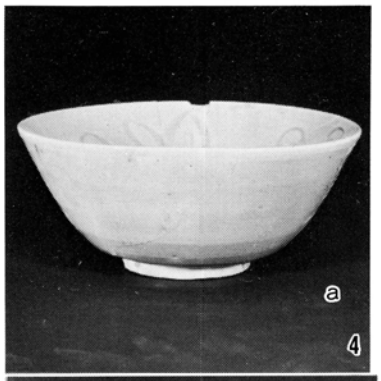

25
29
34
46

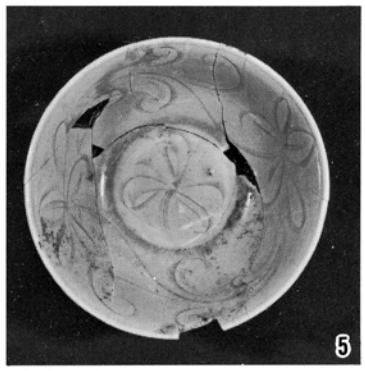

61
65

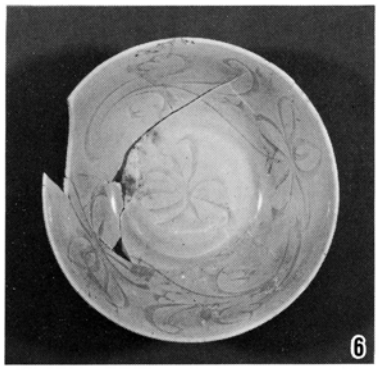

63

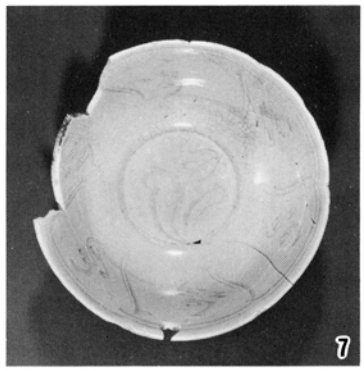

70
76
75
82

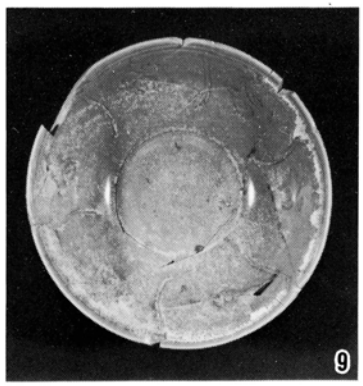
出入口2・3区　1号土坑（井戸）出土遺物(1)

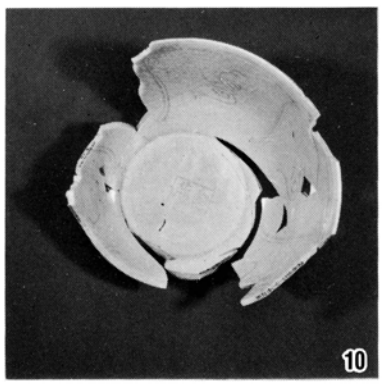




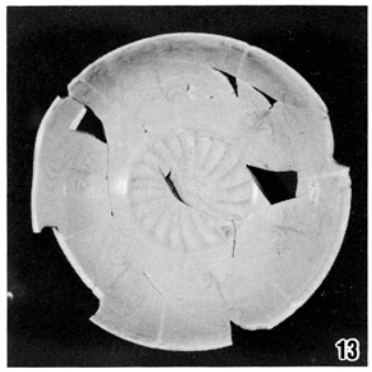


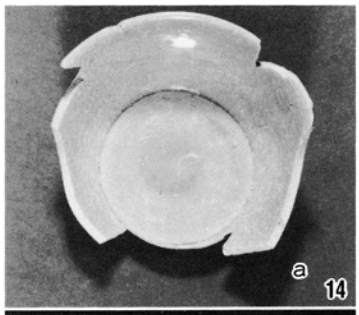


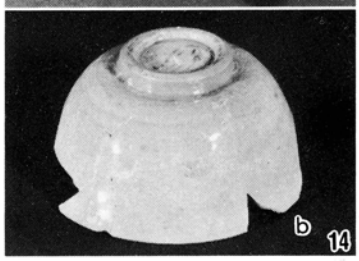


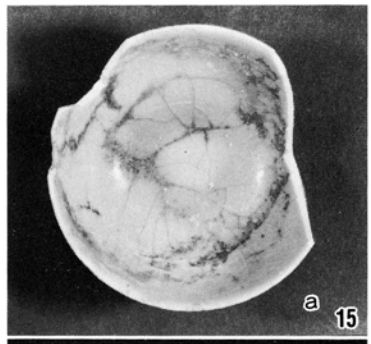


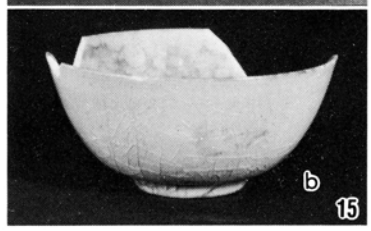
出入口2・3区　1号土坑（井戸）出土遺物(2)

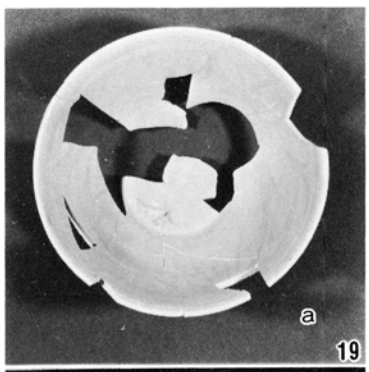


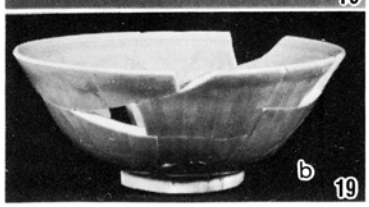


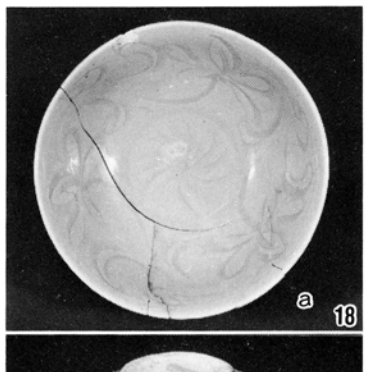


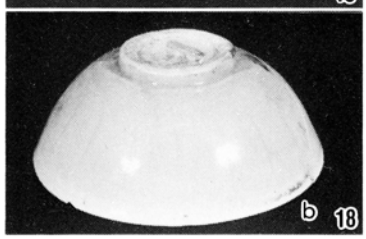


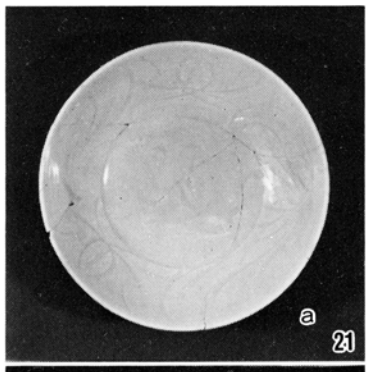




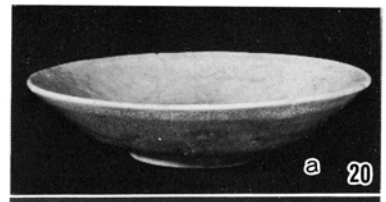


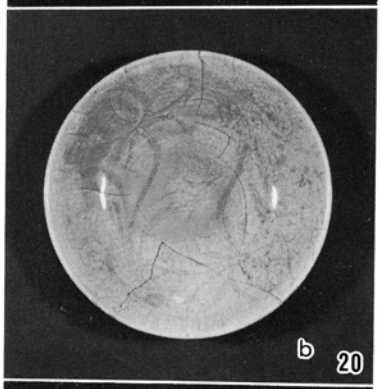


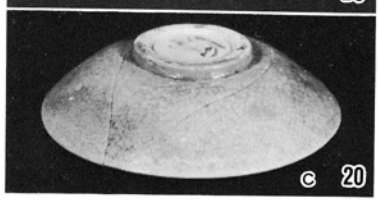


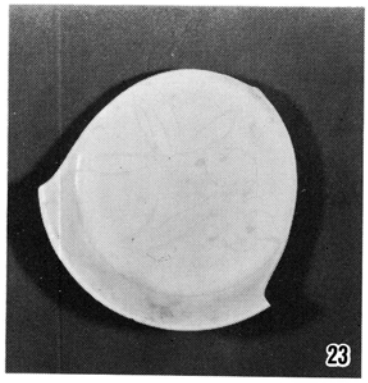


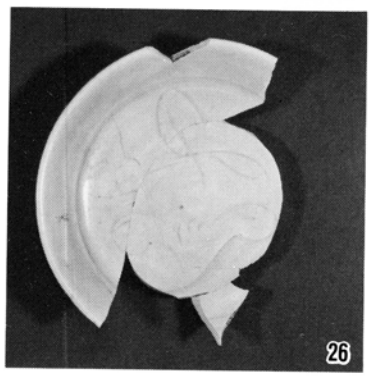
出入口2・3区　1号土坑（井戸）出土遺物(3)

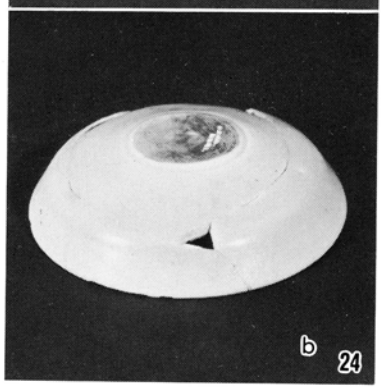


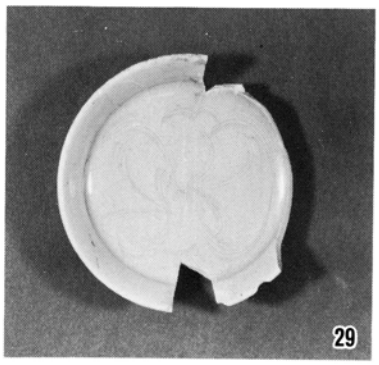


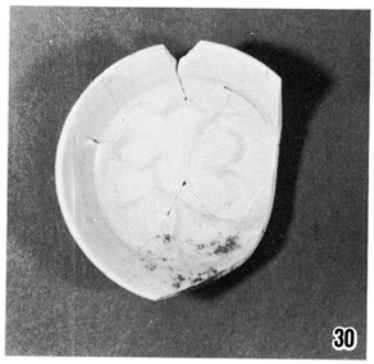


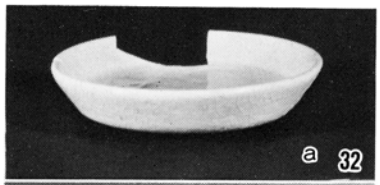


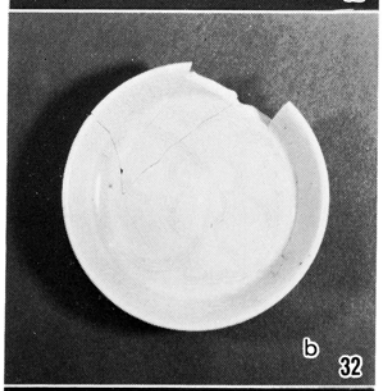


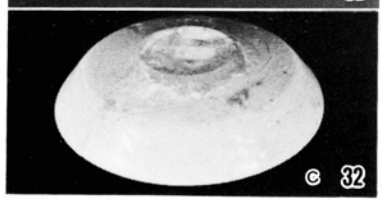


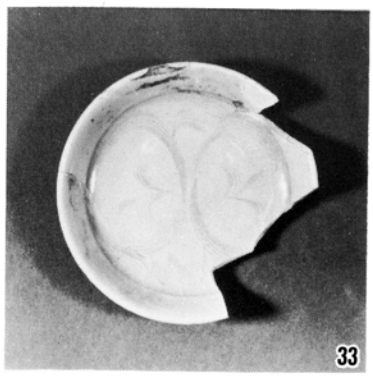


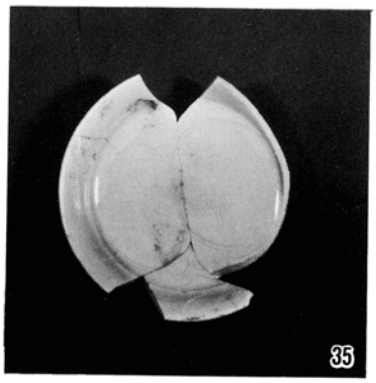




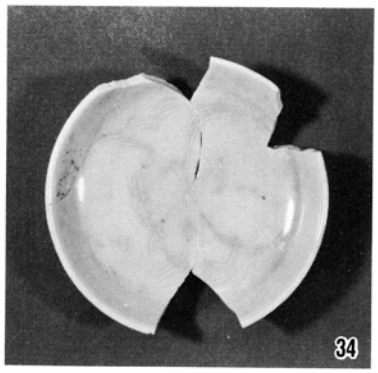


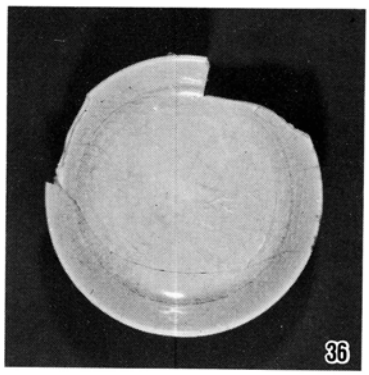


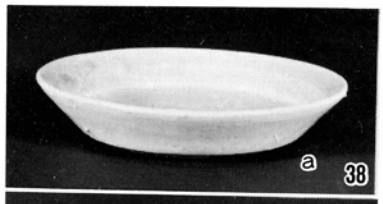


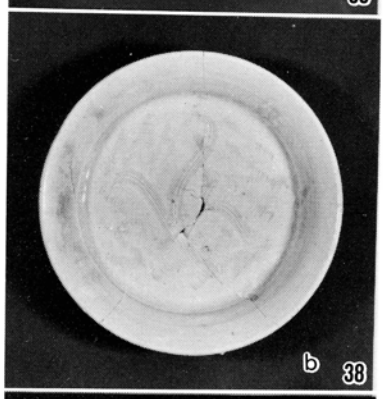


出入口A・B区　1号土坑（井戸）出土遺物(4)

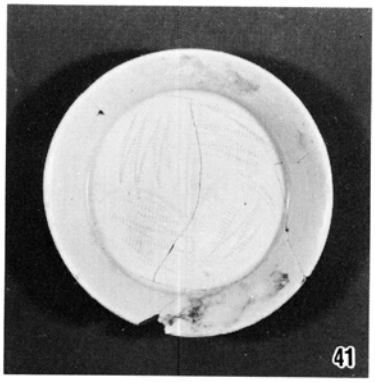

34

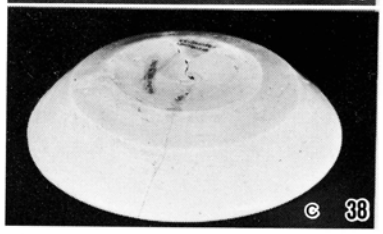

36

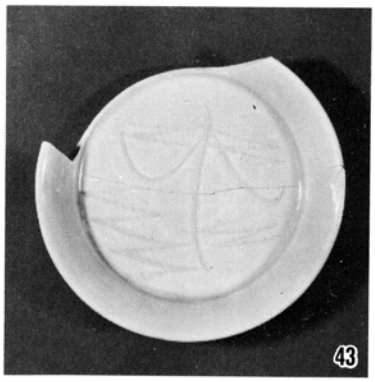

a 38

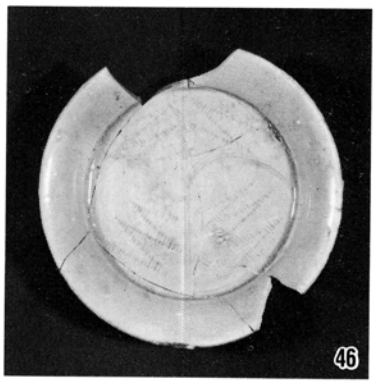

b 38

39

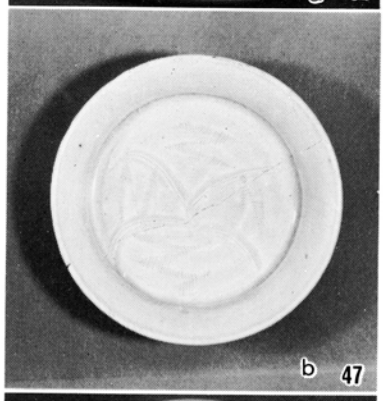

41

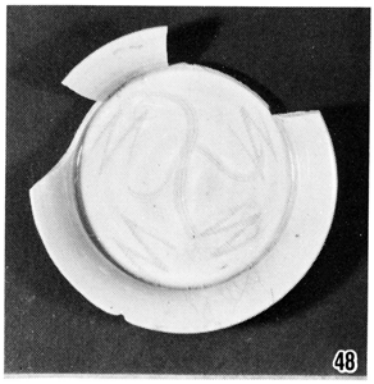

c 38

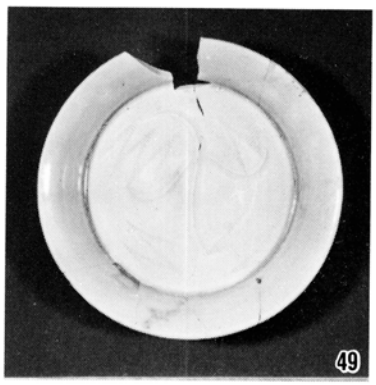

43

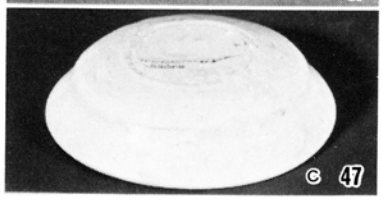

46

a 47

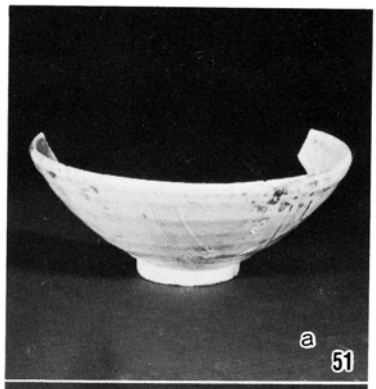

b 47

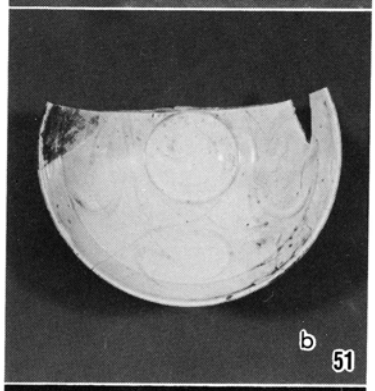

48

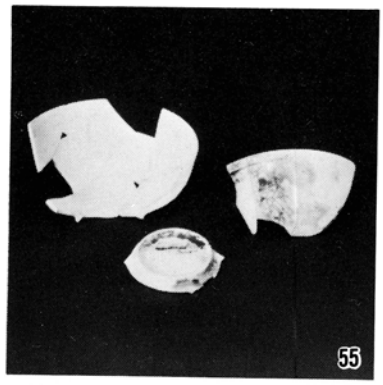

49

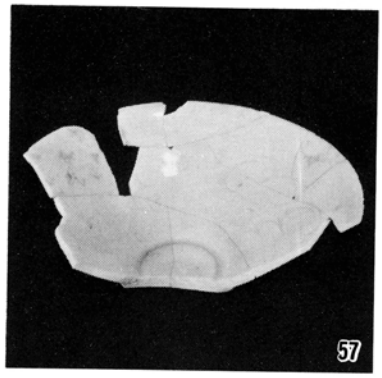

c 47

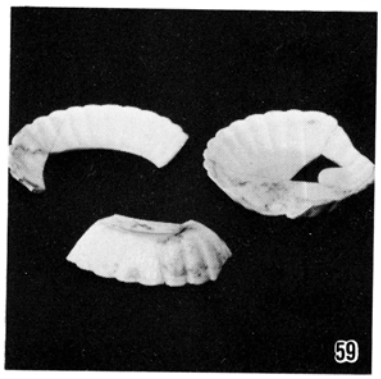
出入口2・3区　1号土坑（井戸）出土遺物(5)

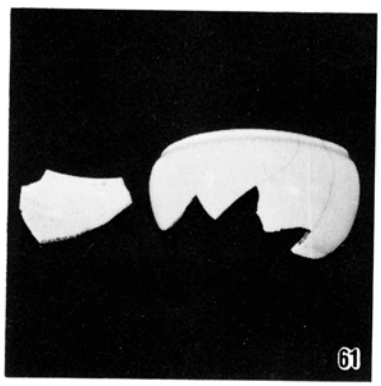


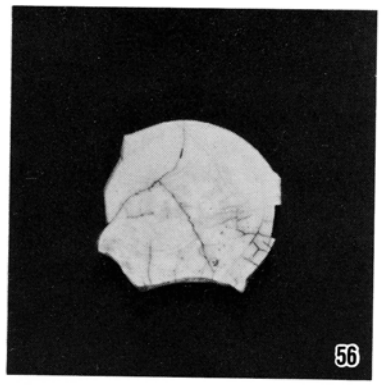


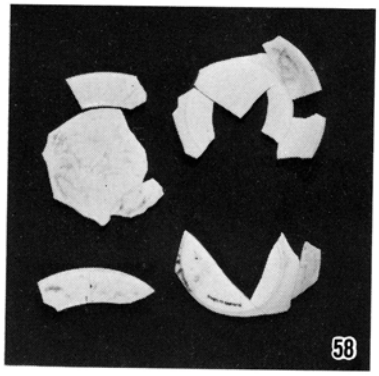


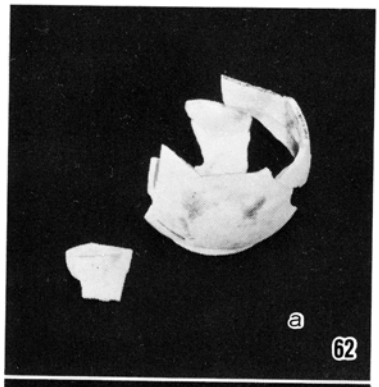


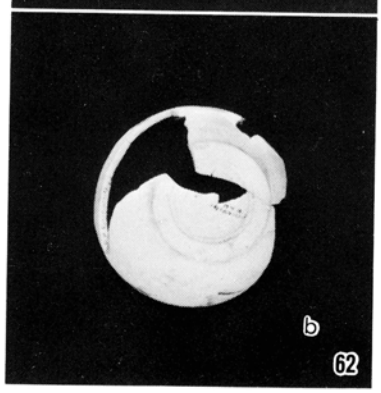






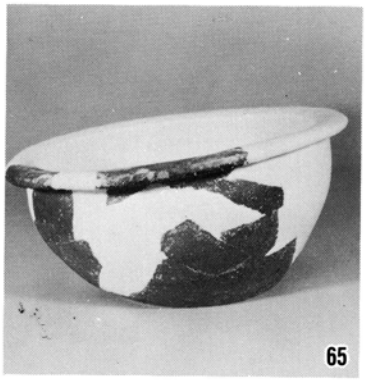






出入口2・3区　1号土坑（井戸）出土遺物(6)

63


65

71

74

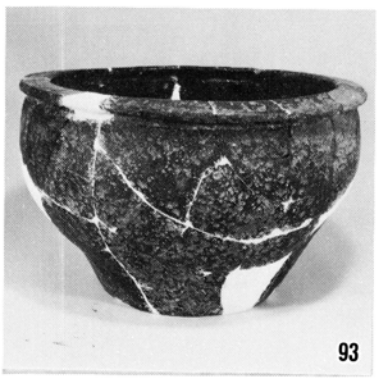
76

78

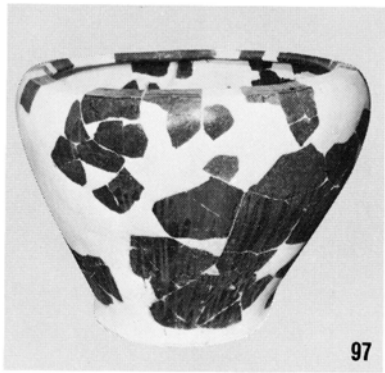
80

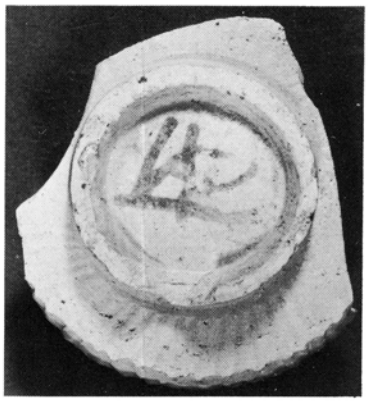
81

90


93

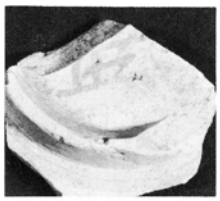
96


97

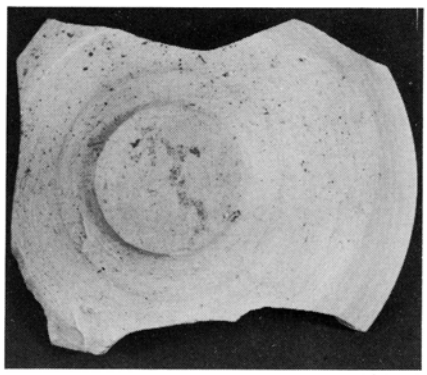


土7-4

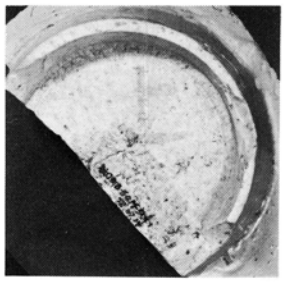
土17-7



土95

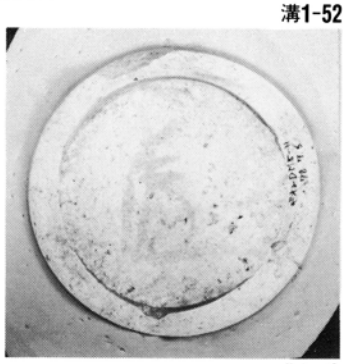


溝1-52

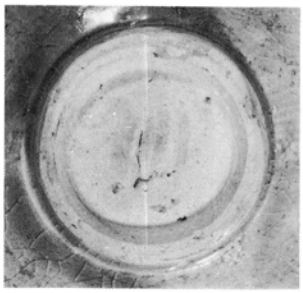


溝2-72

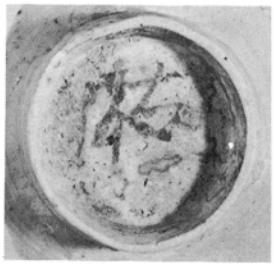
溝2-106



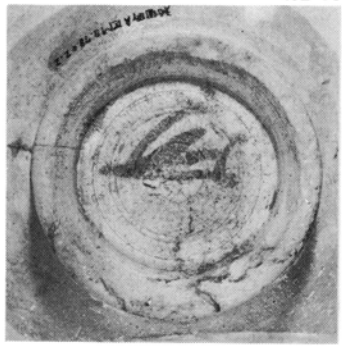
溝2-73



溝3-97

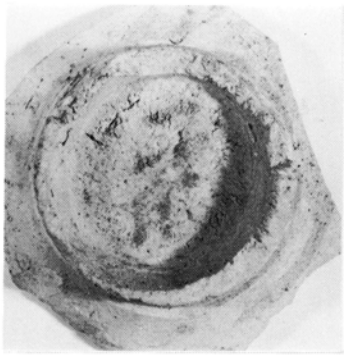


溝3-57

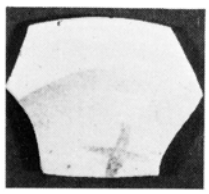


溝3-49

溝3-91



溝3-67



溝3-87

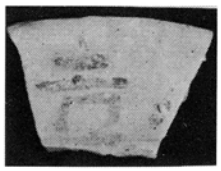


Fig. 75-1

Fig. 76-20

Fig. 77-44

Fig. 81-12

Fig. 82-26

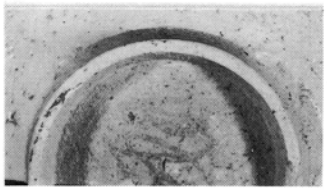


Fig. 75-15

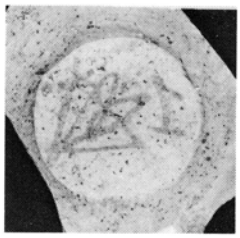


Fig. 76-27

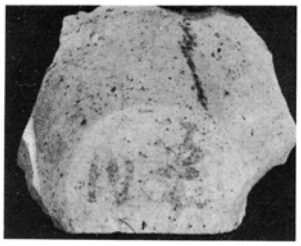


Fig. 77-46

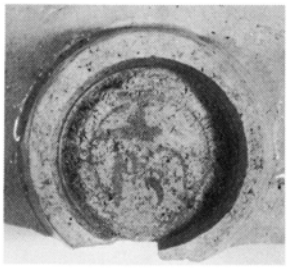


Fig. 81-15

Fig. 81-18

Fig. 76-25

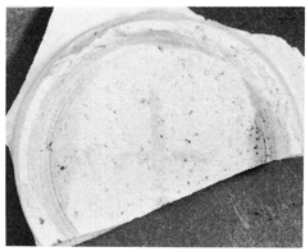


Fig. 75-17

Fig. 77-41

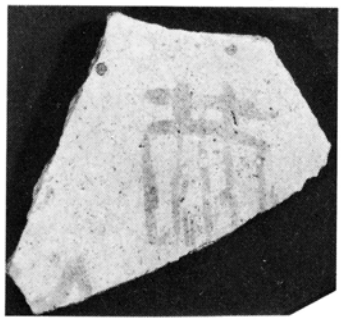


Fig. 77-53

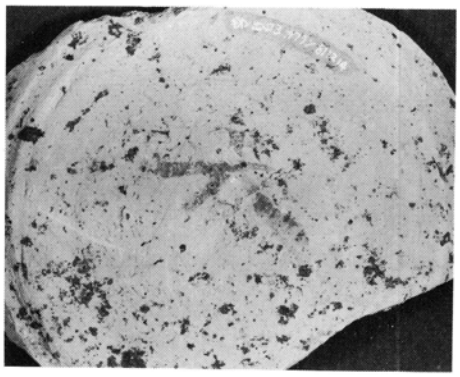


Fig. 121-1

Fig. 122-18

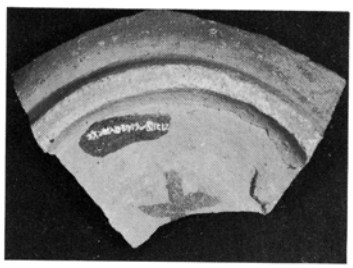


Fig. 121-5

Fig. 121-13

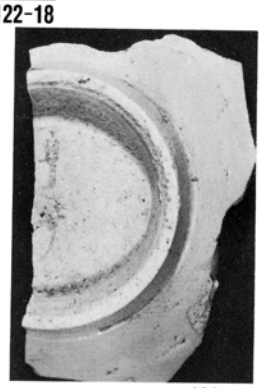


Fig. 122-23

Fig. 121-14

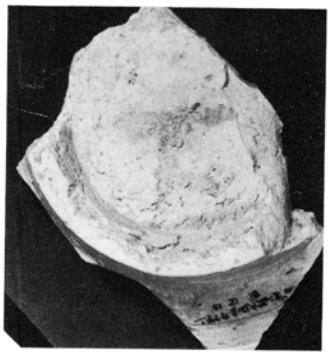


Fig. 122-24

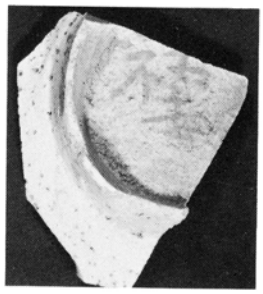


Fig. 122-19

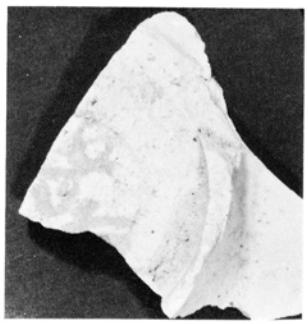
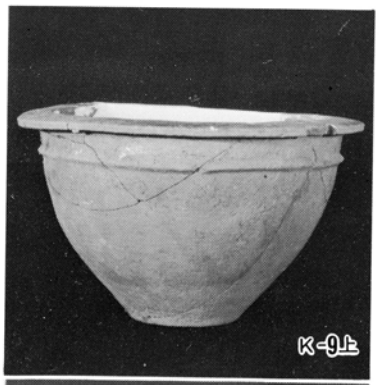
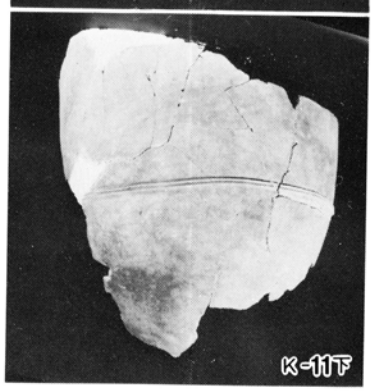


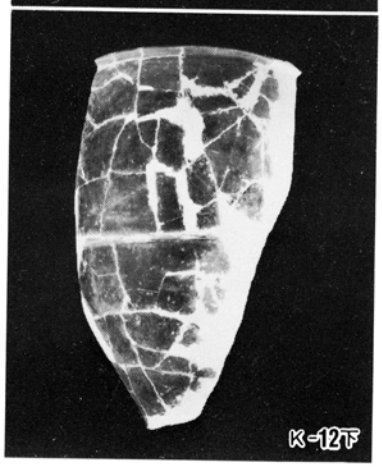
Fig. 122-20

±32-3

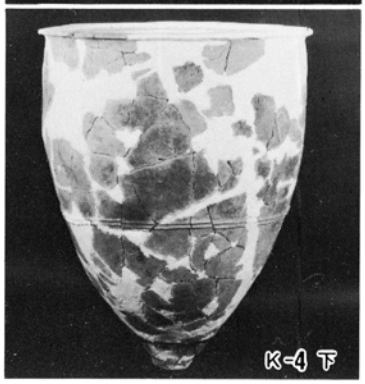
A・B区　出土甕棺







出入口2・3区　出土甕棺



福　岡　市
高速鉄道関係埋蔵文化財報告Ⅳ
博　　多
1984(昭和59)年3月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目7-23

印　刷　福　岡　印　刷　㈱
福岡市博多区東那珂1丁目10番15号

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ

福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集

1984

福岡市教育委員会